

それから

夏目漱石

青空文庫

一

誰か慌^{あわ}ただしく門前を馳^かけて行く足音がした時、代助^{だいすけ}の頭の中には、大きな俎^{まな}下^{ない}駄^たが空^{くう}から、ぶら下つていた。けれども、その俎^{まな}下^{ない}駄^たは、足音の遠^{とお}退^のくに従つて、すうと頭から抜け出して消えてしまった。そうして眼が覺めた。

枕^{まくら}元^{もと}を見ると、八重の椿^{つばき}が一輪^{いちりん}畳の上に落ちてゐる。代助は昨^{ゆう}夕^べ床の中で慥^{たし}かにこの花の落ちる音を聞いた。彼の耳には、それが護^ご謨^ま毬^{まり}を天井裏から投げ付けた程に響いた。夜が更^ふけて、四隣^{あたり}が静かな所^せ為^いかとも思つたが、念のため、右の手を心臓の上に載せて、肋^{あばら}のはずれに正しく中^{あた}る血の音を確かめながら眠^{ねむり}に就いた。

ぼんやりして、少^{しば}時^{らく}、赤ん坊の頭程もある大きな花の色を見詰めていた彼は、急に思ひ出した様に、寐^ねながら胸の上に手を当てて、又心臓の鼓動を検し始めた。寐^ねながら胸の脈を聴いてみるのは彼の近來の癖になつてゐる。動悸^{どうき}は相変らず落ち付いて確^{たしか}に打つてゐた。彼は胸に手を当てたまま、この鼓動の下^{もと}に、温^ぬかい紅^{くれな}い血潮の緩く流れる様を想像してみた。これが命であると考えた。自分は今流れる命を掌^{てのひら}で抑えているんだと考えた。そ

れから、この掌に^{こた}応える、時計の針に似た響は、自分を死に^{いざな}誘う警鐘の様なものであると考へた。この警鐘を聞くことなしに生きていられたなら、——血を盛る袋が、時を盛る袋の用を兼ねなかつたなら、如何に^{いか}自分は氣樂だろう。如何に自分は絶対に生を味わい得るだろう。けれども——代助は覺えずぞとした。彼は血潮によつて打たるる掛念^{けねん}のない、静かな心臓を想像するに堪えぬ程に、生きたがる男である。彼は時々寐ながら、左の乳の下に手を置いて、もし、此所^{ここ}を鉄槌^{かなづち}で一つ撲^ぶされたならと思ふ事がある。彼は健全に生きていながら、この生きているという大丈夫な事実を、殆んど奇蹟^{きせき}の如き僥倖^{ぎやうこう}とのみ自覺し出す事さえある。

彼は心臓から手を放して、枕元の新聞を取り上げた。夜具の中から両手を出して、大きく左右に開くと、左側に男が女を斬^きつてゐる絵があつた。彼はすぐ外の頁^{ページ}へ眼を移した。其所^{そこ}には学校騒動が大きな活字で出ている。代助は、しばらく、それを読んでゐたが、やがて、倦怠^{だる}そうな手から、はたりと新聞を夜具の上に落した。それから烟草^{たばこ}を一本吹かしながら、五寸ばかり布団^{ふだん}を摺^すり出して、畳の上の椿を取つて、引つ繰り返して、鼻の先へ持つて来た。口と口髭^{くちひげ}と鼻の大部分が全く隠れた。烟^{けむ}りは椿の弁^{はなびら}と蕊^{すい}に絡^{から}まって漂う程濃く出た。それを白い敷布の上に置くと、立ち上がつて風呂場へ行つた。

其所で叮嚀に齒を磨いた。彼は齒並の好いのを常に嬉しく思っている。肌を脱いで綺麗に胸と脊を摩擦した。彼の皮膚には濃かな一種の光沢がある。香油を塗り込んだあとを、よく拭き取った様に、肩を揺かしたり、腕を上げたりする度に、局所の脂肪が薄く漲つて見える。かれはそれにも満足である。次に黒い髪を分けた。油を塗けないでも面白い程自由になる。髭も髪同様に細くかつ初々しく、口の上を品よく蔽うている。代助はそのふつくらした頬を、両手で両三度撫でながら、鏡の前にわが顔を映していた。まるで女が御白粉を付ける時の手付と一般であつた。實際彼は必要があれば、御白粉さえ付けかねぬ程に、肉体に誇を置く人である。彼の尤も嫌うのは羅漢の様な骨格と相好で、鏡に向うたんびに、あんな顔に生れなくつて、まあ可かつたと思う位である。その代り人から御洒落と云われても、何の苦痛も感じ得ない。それ程彼は旧時代の日本を乗り超えている。約三十分の後彼は食卓に就いた。熱い紅茶を啜りながら焼麴麴に牛酪を付けていると、門野と云う書生が座敷から新聞を畳んで持つて来た。四つ折りにしたのを座布団の傍へ置きながら、

「先生、大変な事が始まりましたな」と仰山な声で話しかけた。この書生は代助を捕まえては、先生々と敬語を使う。代助も、はじめ一二度は苦笑して抗議を申し込んだが、え

へへへ、だって先生と、すぐ先生にしてしまうので、已^{やむ}を得ずそのままにして置いたのが、いつか習慣になって、今では、この男に限って、平氣に先生として通している。實際書生が代助の様な主人を呼ぶには、先生以外に別段適當な名称がないと云うことを、書生を置いてみて、代助も始めて悟つたのである。

「学校騒動の事じゃないか」と代助は落付いた顔をして麵麴を食っていた。

「だって痛快じゃありませんか」

「校長排斥がですか」

「ええ、到底辞職mondeshou」と嬉しがっている。

「校長が辞職でもすれば、君は何か儲^{もつ}かる事でもあるんですか」

「冗談云つちや不可^{いけ}ません。そう損得^{いけ}ずくで、痛快がられやしません」

代助はやっぱり麵麴を食っていた。

「君、あれは本当に校長が悪^{にく}らしくって排斥するの^{ほか}か、他に損得問題があつて排斥するの^{ほか}か知ってますか」と云いながら鉄瓶の湯を紅茶茶碗^{ちやわん}の中へ注^さした。

「知りませんな。何ですか、先生は御存じなんですか」

「僕も知らないさ。知らないけれども、今の人間が、得にならないと思つて、あんな騒動

をやるもんかね。ありや方便だよ、君」

「へえ、そんなもんですかな」と門野は稍真面目な顔をした。代助はそれぎり黙ってしまった。門野はこれより以上通じない男である。これより以上は、いくら行っても、へえそんなもんですかなで押し通して澄ましている。此方の云うことが応えるのだから、応えないのだからで要領を得ない。代助は、其所が漠然として、刺激が要らなくて好いと思つて書生に使っているのである。その代り、学校へも行かず、勉強もせず、一日ごろごろしている。君、ちつと、外国語でも研究しちやどうだななどと云う事がある。すると門野は何時でも、そうでしょうか、とか、そんなもんでしょうか、とか答えるだけである。決して為ましようという事は口にしない。又こう、怠惰なものでは、そう判然した答が出来ないのである。代助の方でも、門野を教育しに生れて来た訳でもないから、好加減にして放つて置く。幸い頭と違つて、身体の方は善く動くので、代助はそこを大いに重宝がついている。代助ばかりではない、従来からいる婆さんも門野の御蔭でこの頃は大変助かる様になった。その原因で婆さんと門野とは頗る仲が好い。主人の留守などには、よく二人で話をする。

「先生は一体何を為る気なんだろうね。小母さん」

「あの位になつていらつしやれば、何でも出来ますよ。心配するものはない」

「心配はせんがね。何か為たら好きそうなもんだと思うんだが」

「まあ奥様でも御貫おもらいになつてから、緩ゆるつくり、御役でも御探しなさる御積りなんでしょうよ」

「いい積りだなあ。僕も、あんな風に一いちんち日本を読んだり、音楽を聞きに行つたりして暮していたいな」

「御前さんが？」

「本は読まんでも好いいがね。ああ云う具合に遊んでいたいね」

「それはみんな、前世からの約束だから仕方がない」

「そんなものかな」

まずこう云う調子である。門野が代助の所へ引き移る二週間前には、この若い独身の主人と、この食いそ客との間に下しもの様な会話があつた。

「君は何方どつかの学校へ行つてゐるんですか」

「もとは行きましたがな。今は廃やめちいました」

「もと、何処どこへ行つたんです」

「何処^{しか}つて方々行きました。然^{しか}しどうも厭^あきつぽいもんだから」

「じき厭^{いや}になるんですか」

「まあ、そうですね」

「で、大して勉強する考えもないんですか」

「ええ、一寸^{ちよつと}有りませんな。それに近頃^{うち}家の都合が、あんまり好くないもんですから」

「家の婆^{おち}さんは、あなたの御母^{おつか}さんを知^しつてるんだってね」

「ええ、もと、直近^{じき}所に居^いたもんですから」

「御母^{おつか}さんはやつぱり……」

「やつぱりつまらない内職^{うちわざ}をしているんですが、どうも近頃^{うち}は不景氣^{ふけいき}で、余^あまり好くない様^{よう}です」

「好くない様^{よう}ですって、君、一所^{いしょ}に居^いるんじゃないですか」

「一所^{いしょ}に居^いることは居^いますが、つい面倒^{めんどう}だから聞^きいた事^{こと}もありません。何^{なん}でも能^よくこぼして^{して}る様^{よう}です」

「兄^{あに}さんは」

「兄^{あに}は郵便局^{ゆうびんきょく}の方^{かた}へ出^でています」

「家はそれだけですか」
うち

「まだ弟おとうとがいます。これは銀行の——まあ小使に少し毛の生えた位な所なんでしょう」

「すると遊あそんでるのは、君ばかりじゃないか」

「まあ、そんなもんですな」

「それで、家にいるときは、何をしているんです」

「まあ、大抵寐ねていますな。でなければ散歩でも為なますかな」

「外のものが、みんな稼かせいでるのに、君ばかり寐ねているのは苦痛くるしみじゃないですか」

「いえ、そうでもありませんな」

「家庭が余あまつ程円満えんまんなんですか」

「別段喧嘩けんかもしませんがな。妙なもんで」

「だって、御母さんや兄さんから云いつたら、一日も早く君に独立して貰もらいたいでしょうが
ね」

「そうかも知れませんな」

「君は余あまつ程気楽な性分と見える。それが本当の所なんですか」

「ええ、別に嘘うそを吐つく料簡りょうけんもありませんな」

「じゃ全くの呑氣屋のんきやなんだね」

「ええ、まあ呑氣屋いっくつて云うもんでしょか」

「兄さんは何歳いくつになるんです」

「こうつと、取つて六になりますか」

「すると、もう細君でも貰わなくちゃならないでしょう。兄さんの細君が出来ても、やっぱり今の様なにしている積りですか」

「その時に為なつてみなくっちゃ、自分でも見当が付きませんが、何しろ、どうか為るだろうと思つてます」

「その外に親類はないんですか」

「叔母が一人ありますがな。こいつは今、浜で運漕業うんそうをやつてます」

「叔母さんが？」

「叔母が遣やつてゐる訳でもないんでしょうが、まあ叔父ですな」

「其所へでも頼んで使つて貰つちや、どうです。運漕業なら大分人が要るでしょう」

「根なまけが怠惰もんですからな。大方断わるだろうと思つてゐるんです」

「そう自任していちや困る。実は君の御母さんが、家の婆さんに頼んで、君を僕の宅うちへ置

いてくれまいかという相談があるんですよ」

「ええ、何だかそんな事を云ってました」

「君自身は、一体どう云う気なんです」

「ええ、なるべく怠けない様にして……」

「家へ来る方が好いんですか」

「まあ、そうですね」

「然し寐て散歩するだけじゃ困る」

「そりや大丈夫です。身体の方は達者ですから。風呂でも何でも汲みま^くす」

「風呂は水道があるから汲まないでも可^いい」

「じゃ、掃除でもしましょう」

門野はこう云う条件で代助の書生になったのである。

代助はやがて食事を済まして、烟草を吹かし出した。今まで茶^{ちやだんす}筆^{ひや}筒^よの陰に、ぽつねんと膝^{ひざ}を抱えて柱に倚^より懸^ひつていた門野は、もう好い時分だと思つて、又主人に質問を掛けた。

「先生、今朝は心臓の具合はどうですか」

この間から代助の癖を知っているの、幾分か茶化した調子である。

「今日はまだ大丈夫だ」

「何だか明日にも危あやしくなりそうですな。どうも先生みた様に身体を気にしちや、——仕舞には本当の病氣に取っ付かれるかも知れませんよ」

「もう病氣ですよ」

門野は只へええと云ったぎり、代助の光沢つやの好い顔色や肉の豊かな肩のあたりを羽織の上から眺めている。代助はこんな場合になると何時いつでもこの青年を気の毒に思う。代助から見ると、この青年の頭は、牛の脳味噌で一杯詰っているとしか考えられないのである。

話をすると、平民の通る大通りを半町位しか付いて来ない。たまに横町へでも曲ると、すぐ迷まいご児になってしまう。論理の地盤たいばんを豎たてに切り下げた坑道などは、てんから足も踏み込めない。彼の神経系に至っては猶なおよ更粗末である。あたかも荒縄で組み立てられたるかの感が生ずる。代助はこの青年の生活状態を観察して、彼は必ひつき竟よう何の為に呼吸を敢てして存在するかを怪しむ事さえある。それでいて彼は平氣にのらくらしている。しかもこののらくらを以てもつ、暗に自分の態度と同一型に属するものと心得て、中々得意に振舞たがる。その上頑強一点張りの肉体を笠に着て、却かえつて主人の神経的な局所へ肉薄して来る。自分

の神経は、自分に特有なる細緻な思索力と、鋭敏な感応性に対して払う租税である。高尚な教育の彼岸に起る反響の苦痛である。天^{てん} 爵^{しゃく}的に貴族となつた報^{むくい}に受ける不文の刑罰である。これ等の犠牲に甘んずればこそ、自分は今の自分に為れた。否^{いな}、ある時はこれ等の犠牲そのものに、人生の意義をともに認める場合さえある。門野にはそんな事はまるで分らない。

「門野さん、郵便は来ていなかったかね」

「郵便ですか。こうつと。来ていました。端書と封書が。机の上に置きました。持つて来ますか」

「いや、僕^{あつち}が彼方^{あつち}へ行つても可い」

齒切れのわるい返事なので、門野はもう立つてしまった。そうして端書と郵便を持つて来た。端書は、今日二時東京着、ただちに表面へ投宿、取敢えず御報、明日午前会いたし、と薄墨の走り書の簡単極るもので、表に裏神保町^{じんぼうちょう}の宿屋の名と平岡常次郎^{ひらおかつねじろう}という差出人の姓名が、表と同じ乱暴さ加減で書いてある。

「もう来たのか、昨日着いたんだな」と独り言の様に云いながら、封書の方を取り上げると、これは親爺^{おやじ}の手蹟^てである。二三日前帰つて来た。急ぐ用事でもないが、色々話がある

るから、この手紙が着いたら来てくれると書いて、あとには京都の花がまだ早かったの、急行列車が一杯で窮屈だったなどという閑文字かんもじが数行列つらねてある。代助は封書を巻きながら、妙な顔をして、両方見較みくらべていた。

「君、電話を掛けてくれませんか。家へ」うち

「はあ、御宅へ。何て掛けます」

「今日は約束があつて、待ち合せる人があるから上がれないって。明日あしたか明後日あさってきつと伺

いますからつて」

「はあ。何方どなたに」

「親爺が旅行から歸つて来て、話があるから一寸来いって云うんだが、——何親爺を呼び出さないでも可いから、誰にでもそう云つてくれ給え」

「はあ」

門野は無雜作に出て行つた。代助は茶の間から、座敷を通つて書斎へ歸つた。見ると、奇麗に掃除が出来ている。落椿おちつばきも何所どこかへ掃き出されてしまった。代助は花瓶かへいの右手にある組み重ねの書棚の前へ行つて、上に載せた重い写真帖ちやうを取り上げて、立ちながら、金の留金を外して、一枚二枚と繰り始めたが、中頃まで来てびたりと手を留めた。其所そこに

は二十歳位の女の半身がある。代助は眼を俯せて凝と女の顔を見詰めていた。

二

着物でも着換えて、此方から平岡の宿を訪ね様かと思つてゐる所へ、折よく先方から遣つて来た。車をがらがらと門前まで乗り付けて、此所だ此所だと梶棒を下さした声は慥かに三年前分れた時そつくりである。玄関で、取次の婆さんを捕まえて、宿へ墓口を忘れて来たから、一寸二十銭貸してくれと云つた所などは、どうしても学校時代の平岡を思い出さずにはいられない。代助は玄関まで馳け出して行つて、手を執らぬばかりに旧友を座敷へ上げた。

「どうした。まあ緩くりするが好い」

「おや、椅子だね」と云いながら平岡は安楽椅子へ、どきりと身体を投げ掛けた。十五貫目以上もあると云うわが肉に、三文の価値を置いていない様な扱かい方に見えた。それから椅子の脊に坊主頭を靠たして、一寸部屋の中を見廻しながら、

「中々、好い家だね。思つたより好い」と賞めた。代助は黙つて巻蓑入の蓋を開けた。

「それから、以後どうだい」

「どうの、こうのつて、——まあ色々話すがね」

「もとは、よく手紙が来たから、様子が分つたが、近頃じや些ちつとも寄よこさないもんだから」

「いや何所どこも彼所かしこも御無沙汰で」と平岡は突然眼鏡を外して、脊広せびろの胸から皺しわだらけの手ハ

帛シケチを出して、眼をぱちぱちさせながら拭ふき始めた。学校時代からの近眼である。代助は凝とその様子を眺めていた。

「僕より君はどうだい」と云いながら、細い蔓つるを耳うしろの後へ絡からみつけに、両手で持つて行つた。

「僕は相変らずだよ」

「相変らずが一番好いな。あんまり相変るものだから」

そこで平岡は八の字を寄せて、庭の模様を眺め出したが、不意に語調を更かえて、

「やあ、桜がある。今漸ようやく咲き掛けた所だね。余程氣候が違ちがう」と云った。話の具合もとが何だか故もとの様にしんみりしない。代助も少し氣の抜けた風あつたに、

「向うは大分暖かいだろう」と序同然ついでの挨拶あいさつをした。すると、今度は寧むしろ法外に熱した具合で、

「うん、大分暖かい」と力の這入った返事があつた。あたかも自己の存在を急に意識して、はつと思つた調子である。代助は又平岡の顔を眺めた。平岡は卷蓑に火を点けた。その時婆さんが漸く急須に茶を淹れて持つて出た。今しがた鉄瓶に水を注してしまつたので、煮立てたに暇が入つて、つい遅くなつて済みませんと言訳をしながら、洋卓の上へ盆を載せた。二人は婆さんの喋舌てる間、紫檀の盆を見て黙つていた。婆さんは相手にされないで、独りで愛想笑いをして座敷を出た。

「ありや何だい」

「婆さんさ。雇つたんだ。飯を食わなくつちやならないから」

「御世辞が好いね」

代助は赤い唇の両端を、少し弓なりに下の方へ彎げて蔑む様に笑つた。

「今までこんな所へ奉公した事がないんだから仕方がない」

「君の家から誰か連れて来れば好いのに。大勢いるだろう」

「みんな若いのばかりだね」と代助は真面目に答えた。平岡はこの時始めて声を出して笑つた。

「若けりや猶結構じゃないか」

「とにかく家の奴は好くないよ」

「あの婆さんの外に誰かいるのかい」

「書生が一人いる」

門野は何時の間にか帰って、台所の方で婆さんと話をしていた。

「それぎりかい」

「それぎりだ。何故^{なぜ}」

「細君はまだ貰^{もら}わないのかい」

代助は心持赤い顔をしたが、すぐ尋常一般の極めて平凡な調子になった。

「妻^{さい}を貰^{もら}ったら、君の所へ通知^{はす}位する筈^{はず}じゃないか。それよりか君の」と云いかけて、ぴたりと已^やめた。

代助と平岡とは中学時代からの知り合で、殊^{こと}に学校を卒業して後^{のち}、一年間というものは、殆^{ほと}んど兄弟の様に親しく往来した。その時分は互に凡^{すべ}てを打ち明けて、互に力に為り合う様なことを云うのが、互に娯樂^{もつと}の尤もなるものであつた。この娯樂が變じて実行となつた事も少なくないので、彼等は双互^たの爲^{ため}に口にした凡ての言葉には、娯樂どころか、常に一種の犠牲を含んでいると確信していた。そうしてその犠牲を即座に払えば、娯樂の性質

が、忽然^{こつぜん}苦痛に變ずるものであると云う陳腐な事實にさえ気が付かずにいた。一年の後平岡は結婚した。同時に、自分の勤めてゐる銀行の、京坂^{けいはん}地方のある支店詰になった。代助は、出立^{しゅつたつ}の当時、新夫婦を新橋の停車場^{ステーション}に送つて、愉快^{うっちや}そうに、直歸^{じき}つて來給^{きたたま}えと平岡の手を握つた。平岡は、仕方がない、当分辛抱するさと打遣^{うちちや}る様に云つたが、その眼鏡の裏には得意の色が羨ましい位動いた。それを見た時、代助は急にこの友達を憎らしく思つた。家^{うち}へ歸つて、一日部屋へ這入つたなり考え込んでいた。嫂^{あによめ}を連れて音楽會へ行く筈の所を断わつて、大いに嫂に氣を揉^もました位である。

平岡からは断えず音便^{たより}があつた。安着の端書、向うで世帯^{しよたい}を持った報知、それが済むと、支店勤務の模様、自己将来の希望、色々あつた。手紙の來るたびに、代助は何時も丁寧な返事を出した。不思議な事に、代助が返事を書くときは、何時でも一種の不安に襲われる。たまには我慢するのが厭^{いや}になつて、途中で返事を已めてしまふ事がある。ただ平岡の方から、自分の過去の行為に對して、幾分か感謝の意を表して來る場合に限つて、安々と筆が動いて、比較的なだらかな返事が書けた。

そのうち段々手紙の遣り取りが疎遠^{そえん}になつて、月に二遍が、一遍になり、一遍が又二月、三月に跨^{また}がる様に間を置いて來ると、今度は手紙を書かない方が、却つて不安になつて、

何の意味もないのに、只この感じを駆逐する為に封筒の糊のりを湿す事があった。それが半年ばかり続くうちに、代助の頭も胸も段々組織が變つて来る様に感ぜられて来た。この變化に伴つて、平岡へは手紙を書いても書かなくつても、まるで苦痛を覚えない様になつてしまつた。現に代助が一戸を構えて以来、約一年余と云うものは、この春年賀状の交換のとき、序ついでを以て、今の住所を知らしただけである。

それでも、ある事情があつて、平岡の事はまるで忘れる訳には行ゆかなかつた。時々思ひ出す。そうして今頃はどうして暮しているだろうと、色々に想像してみる事がある。然しかしただ思い出すだけで、別段問ひ合せたり聞き合せたりする程に、氣を揉む勇氣も必要もなく、今日まで過して来た所へ、二週間前に突然平岡からの書信が届いたのである。その手紙には近々当地を引き上げて、御地へまかり越す積りである。但ただし本店からの命令で、榮転の意味を含んだ他動的の進退と思つてくれては困る。少し考があつて、急に職業替をする氣になつたから、着京の上は何分宜よろしく頼むとあつた。この何分宜しく頼むの頼むは本當の意味の頼むか、又は単に辞令上の頼むか不明だけれども、平岡の一身上に急劇な變化のあつたのは争あうべからざる事実である。代助はその時はつと思つた。

それで、逢あうや否いなやこの變動の一部始終を聞こうと待設けていたのだが、不幸にして話

が外れて容易に其所へ戻つて来ない。折を見て此方から持ち掛けると、まあ緩づくり話すとか何とか云つて、中々埒を開けない。代助は仕方なしに、仕舞に、

「久し振りだから、其所いらで飯でも食おう」と云い出した。平岡は、それでも、まだ、何れ緩くりを繰返したがるのを、無理に引張つて、近所の西洋料理へ上つた。

兩人は其所で大分飲んだ。飲む事と食う事は昔の通りだねと言つたのが始りで、硬い舌が段々弛んで来た。代助は面白そうに、二三日前自分の観に行つた、ニコライの復活祭の話をした。御祭が夜の十二時を相図に、世の中の寢鎮まる頃を見計つて始る。参詣人が

長い廊下を廻つて本堂へ歸つて来ると、何時の間にか幾千本の蠟燭が一度に点いている。法衣を着た坊主が行列して向うを通るときに、黒い影が、無地の壁へ非常に大きく映る。

——平岡は頬杖を突いて、眼鏡の奥の二重瞼を赤くしながら聞いていた。代助はそれから夜の二時頃広い御成街道を通つて、深夜の鉄軌が、暗い中を真直に渡っている上を、たつた一人上野の森まで来て、そうして電燈に照らされた花の中に這入つた。

「人気のない夜桜は好いもんだよ」と云つた。平岡は黙つて盃を干したが、一寸気の毒そうに口元を動かして、

「好いだろう、僕はまだ見た事がないが。——然し、そんな真似が出来る間はまだ氣樂な

んだよ。世の中へ出ると、中々それどころじゃない」と暗に相手の無経験を上から見た様な事を云った。代助にはその調子よりもその返事の内容が不合理に感ぜられた。彼は生活上世渡りの経験よりも、復活祭当夜の経験の方が、人生に於て有意義なものと考えている。其所でこんな答をした。

「僕は所謂^{いわゆる}処世上の経験程愚^ぐなものはないと思つてゐる。苦痛があるだけじゃないか」
平岡は酔つた眼を心持大きくした。

「大分考えが違つて来た様だね。——けれどもその苦痛が後から藥になるんだつて、もとは君の持説じゃなかったか」

「そりや不見識な青年が、流俗の諺^{ことわざ}に降参して、好加減^{いいかげん}な事を云つていた時分の持説だ。もう、とつくに撤回しちまつた」

「だつて、君だつて、もう大抵世の中へ出なくつちやなるまい。その時それじゃ困るよ」
「世の中へは昔から出ているさ。ことに君と分れてから、大變世の中が広がった様な気がする。ただ君の出ている世の中とは種類が違うだけだ」

「そんな事を云つて威張つたつて、今に降参するだけだよ」

「無論食うに困る様になれば、何時^{いつ}でも降参するさ。然し今日^{こんにち}に不自由のないものが、

何を苦しんで劣等な経験を管^なめるものか。印度人^{インド}が外套^{がいとう}を着て、冬の来た時の用心をすると同じ事だもの」

平岡の眉^{まゆ}の間に、一寸不快の色が閃^{ひら}めいた。赤い眼を据えてぶかぶか烟草^{たばこ}を吹かしている。代助は、ちと云い過ぎたと思つて、少し調子を穏やかにした。――

「僕の知つたものに、まるで音楽の解^{わか}らないものがある。学校の教師をして、一軒じゃ飯が食えないもんだから、三軒も四軒も懸^かけ持をやっているが、そりや氣の毒なもんで、下読をするのと、教場へ出て器械的に口を動かしているより外に全く暇がない。たまの日曜などは骨休めとか号して一日ぐうぐう寐^ねている。だから何所^{どこ}に音楽会があろうと、どんな名人が外国から来^きようと聞^ききに行く機会がない。つまり楽という一種の美しい世界にはまるで足を踏み込まないで死んでしまわなくつちやならない。僕から云わせると、これ程憐^{あわ}れな無経験はないと思う。麵^{パン}麴^{バク}に關係した経験は、切実かも知れないが、要するに劣等だよ。麵麴^{めんこく}を離れ水を離れた贅^{ぜいたく}沢な経験をしなくつちや人間の甲斐^{かい}はない。君は僕をまだ坊つちやんだと考^{かん}えてるらしいが、僕の住んでいる贅沢な世界では、君よりずっと年長者の積^{つみ}りだ」

平岡は卷^{まきた}蓑^{たばこ}の灰を、皿の上にはたきながら、沈んだ暗い調子で、

「うん、何時までもそう云う世界に住んでいられれば結構さ」と云った。その重い言葉の足が、富に対する一種の呪詛じゆそを引き摺ずつてゐる様に聴えた。

両人ふたりは酔つて、戸外おもてへ出た。酒の勢で変な議論をしたものだから、肝心の一身上の話はまだ少しも発展せずにいる。

「少し歩かないか」と代助が誘つた。平岡も口程忙がしくはないと見えて、生返事をしながら、一所に歩を運んで来た。通を曲つて横町へ出て、なるべく、話の為いい閑な場所しずかを選んで行くうちに、何時か緒口いとぐちが付いて、思うあたりへ談柄だんべいが落ちた。

平岡の云う所によると、赴任の当時彼は事務見習のため、地方の経済状況取調とりしらべのため、大分忙がしく働らいてみた。出来得るならば、学理的に実地の応用を研究しようと思つた位であつたが、地位がそれ程高くないので、已やむを得ず、自分の計画は計画として未来の試験用に頭の中に入れて置いた。尤も始めのうちは色々支店長に建築した事もあるが、支店長は冷然として、何時も取り合ひなかつた。むずかしい理窟りくつなどを持ち出すと甚だ御機嫌が悪い。青二才に何が分るものと云う様な風をする。その癖自分は一實際何も分つていないらしい。平岡から見ると、その相手にしない所が、相手にするに足らないからではなくつて、寧ろ相手にするのが怖いからの様に思われた。其所に平岡の癪しゃくはあつた。衝突

しかけた事も一度や二度ではない。

けれども、時日を経過するに従つて、肝癰が何時となく薄らいできて、次第に自分の頭が、周囲の空気と融和する様になった。又なるべくは、融和する様に力めた。それにつれて、支店長の自分に対する態度も段々變つて来た。時々は向うから相談をかける事さえある。すると学校を出たての平岡でないから、先方に解らない、かつ都合のわるいことはなるべく云わない様にして置く。

「無暗に御世辞を使つたり、胡麻を摺るのとは違うが」と平岡はわざわざ斷つた。代助は真面目な顔をして、「そりや無論そうだろう」と答えた。

支店長は平岡の未來の事に就て、色々心配してくれた。近いうちに本店に歸る番に中つているから、その時は一所に來給えなどと冗談半分に約束までした。その頃は事務にも慣れるし、信用も厚くなるし、實際も殖えるし、勉強をする暇が自然となくなつて、又勉強が却つて實務の妨をする様に感ぜられて來た。

支店長が、自分に万事を打ち明ける如く、自分は自分の部下の関という男を信任して、色々と相談相手にしておつた。ところがこの男がある芸妓と関係つて、何時の間にか會計に穴を明けた。それが曝露したので、本人は無論解雇しなければならぬが、ある事

情からして、放つて置くと、支店長にまで多少の煩^{わづらい}が及んで来そうだったから、其所で自分が責^{せめ}を引いて辞職を申し出た。

平岡の語る所は、ざつとこうであるが、代助には彼が支店長から因果を含められて、所決を促がされた様にも聞えた。それは平岡の話しの末に「会社員なんてものは、上になればなる程^{うま}旨い事が出来るものでね。実は関なんて、あれつばかりの金を使い込んで、すぐ免職になるのは気の毒な位なものさ」という句があつたのから推したのである。

「じや支店長は一番旨い事をしている訳だね」と代助が聞いた。

「或はそんなものかも知れない」と平岡は言葉を濁してしまった。

「それでその男の使い込んだ金はどうした」

「千に足らない金だったから、僕が出して置いた」

「よく有ったね。君も大分旨い事をしたと見える」

平岡は苦い顔をして、じろりと代助を見た。

「旨い事をしたと仮定しても、皆使^{みんな}つてしまっている。生活^{くらし}にさえ足りない位だ。その金は借りたんだよ」

「そうか」と代助は落ち付き払つて受けた。代助はどんな時でも平生の調子を失わない男

である。そうしてその調子には低く明らかなうちに一種の丸味が出ている。

「支店長から借りて埋めて置いた」

「何故支店長がじかにその関とか何とか云う男に貸して遣らないのかな」

平岡は何とも答えなかった。代助も押しては聞かなかった。二人は無言のまましばらくの間並んで歩いて行つた。

代助は平岡が語つたより外に、まだ何かあるに違ないと鑑定した。けれども彼はもう一歩進んで飽^あまでその真相を研究する程の権利を有^もつていないことを自覺している。又そんな好奇心を引き起すには、實際あまり都会化し過ぎていた。二十世紀の日本に生息する彼は、三十になるか、ならないのに既に nil 《ニル》 admirari 《アドミラリ》の域に達してしまつた。彼の思想は、人間の暗黒面に出逢つて喫^{びつ}驚する程の山^や出^{まだし}ではなかつた。彼の神経は斯^か様に陳腐な秘密を嗅^かいで嬉^{うれ}しがる様に退屈を感じてはいなかつた。否、これより幾倍か快よい刺激でさえ、感受するを甘んぜざる位、一面から云えば、困^{こん}憊^{ぱい}していた。代助は平岡のそれとは殆^{ほとん}ど縁故のない自家特有の世界の中で、もうこれ程に進化——進化の裏面を見ると、何時でも退化であるのは、古今を通じて悲しむべき現象だが——していたのである。それを平岡は全く知らない。代助をもって、依然として旧態を改めざる

三年前の初心（ぜんうぶ）と見ているらしい。こう云う御坊っちゃんに、洗い浚（やしら）い自分の弱点を打ち明けては、徒ら（いたずら）に馬糞（まぐそ）を投げて、御嬢さまを驚ろかせると同結果に陥（や）り易い。余計な事をして愛想を尽かされるよりは黙っている方が安全だ。——代助には平岡の腹がこう取れた。それで平岡が自分に返事もせずに無言で歩いて行くのが、何となく馬鹿らしく見えた。平岡が代助を子供視する程度に於て、あるいはそれ以上の程度に於て、代助は平岡を子供視し始めたのである。けれども両人（ふたり）が十五六間過ぎて、又話を遣り出した時は、どちらにも、そんな痕迹（こんせき）は更になかった。最初に口を切ったのは代助であつた。

「それで、これから先どうする積りかね」

「さあ」

「やつぱり今までの経験もあるんだから、同じ職業が可（い）いかも知れないね」

「さあ。事情次第だが。実は緩（ゆる）くり君に相談してみようと思つていたんだが。どうだろう、君の兄さんの会社の方に口はあるまいか」

「うん、頼んでみよう、二三日内（うちうち）に家へ行く用があるから。然しどうかな」

「もし、実業の方が駄目なら、どつち新聞へでも這入（はい）ろうかと思う」

「それも好（い）いだろう」

両人は又電車の通る通へ出た。平岡は向うから来た電車の軒を見ていたが、突然これに乗って帰ると云い出した。代助はそうかと答えたまま、留めもしない、と云って直分れもしなかった。赤い棒の立っている停留所まで歩いて来た。そこで、

「三千代みちよさんはどうした」と聞いた。

「難ありがと有う、まあ相変らずだ。君に宜しく云っていた。実は今日連れて来ようと思ったんだけれども、何だか汽車に揺れたんで頭が悪いというから宿屋へ置いて来た」

電車が二人の前で留まった。平岡は二三歩早足に行きかけたが、代助から注意されて已めた。彼の乗るべき車はまだ着かなかったのである。

「子供は惜しい事をしたね」

「うん。可哀想かわいそうな事をした。その節は又御叮嚀ていねいに難有う。どうせ死ぬ位なら生れない方が好かった」

「その後はどうだい。まだ後は出来ないか」

「うん、未だまにも何にも、もう駄目だろう。身体からだがあんまり好くないものだからね」

「こんなに動く時は子供のない方が却って便利で可いかも知れない」

「それもそうさ。一層君いつその様に一人身なら、猶なほの事、気楽で可いかも知れない」

「一人身になるさ」

「冗談云つてら——それよりか、妻が頻りに、君はもう奥さんを持つたろうか、未だだろ
うかつて気にしていたぜ」

ところへ電車が来た。

三

代助の父は長井得ながいとくといつて、御維新ごいつしんのとき、戦争に出た経験のある位な老人であるが、今でも至極達者に生きている。役人を已めてから、実業界に這入はいつて、何かにかしているうちに、自然と金が貯たまつて、この十四五年來は大分だいぶんの財産家になった。

誠吾と云う兄がある。学校を卒業してすぐ、父の關係している会社へ出たので、今では其所そこで重要な地位を占める様になった。梅子うめこという夫人に、二人の子供が出来た。兄は誠せ太郎いたろうと云つて十五になる。妹は縫いもとぬいといつて三つ違である。

誠吾の外に姉がまだ一人あるが、これはある外交官に嫁いで、今は夫と共に西洋にいる。誠吾とこの姉の間にもう一人、それからこの姉と代助の間にも、まだ一人兄弟があつたけ

れども、それは二人とも早く死んでしまった。母も死んでしまった。

代助の一家はこれだけの人数から出来上つている。そのうちで外へ出ているものは、西洋に行った姉と、近頃一戸を構えた代助ばかりだから、本家には大小合せて五人残る訳になる。

代助は月に一度は必ず本家へ金を貰いに行く。代助は親の金とも、兄の金ともつかぬものを使つて生きている。月に一度の外にも、退屈になれば出掛けて行く。そうして子供に調戲つたり、書生と五目並べをしたり、嫂と芝居の評をしたりして帰つて来る。

代助はこの嫂を好いている。この嫂は、天保調と明治の現代調を、容赦なく継ぎ合せた様な一種の人物である。わざわざ仏蘭西にいる義妹に注文して、むずかしい名のつく、頗る高価な織物を取寄せて、それを四五人で裁つて、帯に仕立てて着てみたり何かする。後で、それは日本から輸出したものだと言う事が分つて大笑いになった。三越陳列所へ行つて、それを調べて来たものは代助である。それから西洋の音楽が好きで、よく代助に誘い出されて聞に行く。そうかと思うと易断に非常な興味を有っている。石龍子と尾島某を大いに崇拜する。代助も二三度御相伴に、俾で易者の許まで食付いて行つた事がある。

誠太郎と云う子は近頃ベースボールに熱中している。代助が行って時々球を投げてやる事がある。彼は妙な希望を持った子供である。毎年夏の初めに、多くの焼芋屋が俄然として氷水屋に変化するとき、第一番に馳けつけて、汗も出ないのに、氷菓を食うものは誠太郎である。氷菓がないときには、氷水で我慢する。そうして得意になって帰つて来る。近頃では、もし相撲の常設館が出来たら、一番先へ這入ってみたいと云っている。叔父さん誰か相撲を知りませんかと代助に聞いた事がある。

縫という娘は、何か云うと、好くつてよ、知らないわと答える。そうして日に何遍となくリボンを掛け易える。近頃はヴァイオリンの稽古に行く。帰つて来ると、鋸の目立ての様な声を出して御浚いをする。ただし人が見ていると決して遣らない。室を締め切つて、きいきい云わせるのだから、親は可なり上手だと思つてゐる。代助だけが時々そつと戸を明けるので、好くつてよ、知らないわと叱られる。

兄は大抵不在勝である。ことに忙がしい時になると、家で食うのは朝食位なもので、あとは、どうして暮しているのか、二人の子供には全く分らない。同程度に於て代助にも分らない。これは分らない方が好ましいので、必要のない限りは、兄の日々の戸外生活に就て決して研究しないのである。

代助は二人の子供に大変人望がある。嫂にも可なりある。兄には、あるんだか、ないんだか分らない。たまに兄と弟が顔おととを合せると、ただ浮世話をする。双方とも普通の顔で、大いに平気で遣つている。陳腐に慣れ抜いた様子である。

代助の尤も応えるのは親爺おやじである。好い年をして、若い妾めかけを持つてゐるが、それは構わない。

代助から云うと寧ろ賛成な位なもので、彼は妾を置く余裕のないものに限つて、蓄ちくししょう妾の攻撃をするんだと考えてゐる。親爺は又大分のやかまし屋である。子供のうちは

心魂に徹して困却した事がある。しかし成人の今日では、それにも別段辟へきえき易する必要を

認めない。ただ応えるのは、自分の青年時代と、代助の現今とを混同して、両方共大した

変りはないと信じてゐる事である。それだから、自分の昔し世に処した時の心掛けでもつ

て、代助も遣らなくつては、嘘うそだという論理になる。尤も代助の方では、何が嘘ですかと

聞き返した事がない。だから決して喧嘩けんかにはならない。代助は子供の頃非常な肝癪かんしゃく持

で、十八九の時分親爺と組打をした事が一二返へんある位だが、成長して学校を卒業して、し

ばらくすると、この肝癪がぱたりと已んでしまった。それから以後ついぞ怒つた試しがな

い。親爺はこれを自分の薫育くんいくの効果と信じてひそかに誇つてゐる。

實際を云うと親爺の所謂いわゆる薫育は、この父子の間に纏てんめん綿する暖かい情味を次第に冷却

せしめただけである。少なくとも代助はそう思っている。ところが親爺の腹のなかでは、それが全く反対あべこべに解釈されてしまった。何をしようと血肉の親子である。子が親に対する天賦てんぷの情じょう合あいが、子を取扱う方法の如何いかんに因よつて変る筈はずがない。教育の為ためめ、少しの無理はしようとも、その結果は決して骨肉の恩愛に影響を及ぼすものではない。儒教の感化を受けた親爺は、固くこう信じていた。自分が代助に存在を与えたという単純な事実が、あらゆる不快苦痛に対して、永久愛情の保証になると考えた親爺は、その信念をもって、ぐんぐん押して行つた。そうして自分に冷淡な一個の息子を作り上げた。尤も代助の卒業前後からはその待遇法も大分變つて来て、ある点から云えば、驚ろく程寛大になつた所もある。然しかしそれは代助が生れ落ちるや否いなや、この親爺が代助に向つて作つたプログラムの一部分の遂行に過ぎないので、代助の心意の推移を見抜いた適宜の処置ではなかつたのである。自分の教育が代助に及ぼした悪結果に至つては、今に至つて全く気が付かずにいる。親爺は戦争に出たのを頗すこぶる自慢にする。稍ややもすると、御前などはまだ戦争をした事がないから、度胸が据らなくなつて不可いかんと一概にけなしてしまう。あたかも度胸が人間至上な能力であるかの如き言草である。代助はこれを聞かせられるたんびに厭いやな心持がする。胆力は命の遣り取りの劇はげしい、親爺の若い頃の様な野蛮時代にあつてこそ、生存に必要な資

格かも知れないが、文明の今日から云えば、古風な弓術撃劍の類と大差はない道具と、代助は心得ている。否、胆力とは両立し得ないで、しかも胆力以上に難有^{ありがた}がつて然るべき能力が沢山ある様に考えられる。御父さんから又胆力の講釈を聞いた。御父さんの様に云うと、世の中で石地藏が一番偉いことになってしまふ様だねと云つて、嫂と笑つた事がある。こう云う代助は無論臆病^{おくびよう}である。又臆病で耻^はずかしいという気は心から起らない。ある場合には臆病を以て自任したくなる位である。子供の時、親爺の使^し喚^{そう}で、夜中にわざわざ青山の墓地まで出掛けた事がある。気味のわるいのを我慢して一時間も居たら、たまらなくなつて、蒼青^{まつさお}な顔をして家へ歸つて来た。その折は自分でも残念に思つた。あくる朝親爺に笑われたときは、親爺が憎らしかつた。親爺の云う所によると、彼と同時代の少年は、胆力修養の爲め、夜半に結束して、たった一人、御城の北一里にある劔^{つるぎ}が峯^{みね}の天頂^{つぺん}まで登つて、其所の辻堂^{つじどう}で夜明^{よあかし}をして、日の出を拝んで歸つてくる習慣であつたそうだ。今の若いものとは心得方からして違ふと親爺が批評した。

こんな事を真面目^{まじめ}に口にした、又今でも口にしかねまじき親爺は氣の毒なものだと、代助は考える。彼は地震が嫌^{きら}である。瞬間の動揺でも胸に波が打つ。あるときは書齋で凝^{じつ}と坐つていて、何かの拍子に、ああ地震が遠くから寄せて来るなと感ずる事がある。すると、

尻の下に敷いている坐蒲団も、畳も、乃至床板も明らかに震える様に思われる。彼はこれが自分の本来だと信じている。親爺の如きは、神経未熟の野人か、然らずんば己れを偽わる愚者としか代助には受け取れないのである。

代助は今この親爺と対坐している。廂の長い小さな部屋なので、居ながら庭を見ると、廂の先で庭が仕切られた様な感がある。少なくとも空は広く見えない。その代り静かで、落ち付いて、尻の据り具合が好い。

親爺は刻み烟草を吹かすので、手のある長い烟草盆を前へ引き付けて、時々灰吹をぽんぽんと叩く。それが静かな庭へ響いて好い音がする。代助の方は金の吸口を四五本手焙の中へ並べた。もう鼻から烟を出すのが厭になつたので、腕組をして親爺の顔を眺めている。その顔には年の割に肉が多い。それでいて頬は瘦けている。濃い眉の下に眼の皮が弛んで見える。髭は真白と云わんよりは、寧ろ黄色である。そうして、話をするときに相手の膝頭と顔とを半々に見較べる癖がある。その時の眼の動かし方で、白眼が一寸ちらついて、相手に妙な心持をさせる。

老人は今こんな事を云っている。――

「そう人間は自分だけを考えるべきではない。世の中もある。国家もある。少しは人の為

に何かしなくつては心持のわるいものだ。御前だつて、そう、ぶらぶらしていて心持の好い筈はなからう。そりや、下等社会の無教育のものなら格別だが、最高の教育を受けたものが、決して遊んでいて面白い理由がない。学んだものは、実地に応用して始めて趣味が出るものだからな」

「そうです」と代助は答えている。親爺から説法されるたんびに、代助は返答に窮するから好加減な事を云う習慣になつてゐる。代助に云わせると、親爺の考えは、万事中途半端に、或物を独り勝手に断定してから出立するんだから、毫も根本的の意義を有してゐない。しかのみならず、今利他本位でやつてるかと思つて、何時の間にか利己本位に變つてゐる。言葉だけは滾々として、勿体らしく出るが、要するに端倪すべからざる空談である。それを基礎から打ち崩して懸かるのは大変な難事業だし、又必竟出来ない相談だから、始めよりなるべく触らない様にしてゐる。ところが親爺の方では代助を以て無論自己の太陽系に属すべきものと心得てゐるので、自己は飽までも代助の軌道を支配する権利があると信じて押して来る。そこで代助も己を得ず親爺という老太陽の周囲を、行儀よく回転する様に見せてゐる。

「それは実業が厭なら厭で好い。何も金を儲けるだけが日本の為になるとも限るまいから。

金は取らんでも構わない。金の為にとやかく云うとなると、御前も心持がわるかろう。金は今まで通り己が補助して遣る。おれも、もう何時死ぬか分らないし、死にや金を持って行く訳にも行かないし。月々御前の生計位どうでもしてやる。だから奮発して何か為るが好い。国民の義務としてするが好い。もう三十だろう」

「そうです」

「三十になつて遊民として、のらくらしているのは、如何にも不体裁だな」

代助は決してのらくらしているとは思わない。ただ職業の為に汚されない内容の多い時間を有する、上人種と自分を考えているだけである。親爺がこんな事を云うたびに、実は気の毒になる。親爺の幼稚な頭脳には、かく有意義に月日を利用しつつある結果が、自己の思想情操の上に、結晶して吹き出しているのが、全く映らないのである。仕方がないから、真面目な顔をして、

「ええ、困ります」と答えた。老人は頭から代助を小僧視している上に、その返事が何時でも幼氣を失わ^{おさなげ}ない、簡単な、世帯離れをした文句だものだから、馬鹿にするうちにも、どうも坊ちゃん^{おさなげ}は成人しても仕様が^{しやたい}ない、困ったものだ^{しやたい}と云う気になる。そうかと思うと、代助の口調が如何にも平気で、冷静で、はにかまず、もじ付かず、尋常極まつてい

るので、此奴は手の付け様がないという気にもなる。

「身体は丈夫だね」

「二三年このかた風邪を引いた事ありません」

「頭も悪い方じゃないだろう。学校の成績も可なりだったんじゃないか」

「まあそうです」

「それで遊んでいるのは勿体ない。あの何とか云ったね、そら御前の所へ善く話しに来た男があるだろう。己も一二度逢ったことがある」

「平岡ですか」

「そう平岡。あの人などは、あまり出来の可い方じゃなかったそうだが、卒業すると、すぐ何処かへ行つたじゃないか」

「その代り失敗て、もう帰つて来ました」

老人は苦笑を禁じ得なかった。

「どうして」と聞いた。

「つまり食う為に働らくからでしょう」

老人にはこの意味が善く解らなかつた。

「何か面白い事でも遣ったのかな」と聞き返した。

「その場合々々で当然の事を遣るんでしょうけれども、その当然がやつぱり失敗しくじりになるんでしょう」

「はああ」と気の乗らない返事をしたが、やがて調子を易かえて、説き出した。

「若い人がよく失敗しくじるというが、全く誠実と熱心が足りないからだ。己も多年の経験で、この年になるまで遣つて来たが、どうしてもこの二つがないと成功しないね」

「誠実と熱心があるために、却かえつて遣り損うこともあるでしょう」

「いや、先まずないな」

親爺の頭の上に、誠者まこと天之道也てんのみちなりと云う額が麗々と掛けてある。先代の旧藩主に書いて貰もらったとか云つて、親爺は尤も珍重している。代助はこの額が甚だ嫌きらである。第一字が嫌いやだ。その上文句が気に喰わない。誠は天の道なりの後へ、人の道にあらざと附け加えた様な心持がする。

その昔し藩の財政が疲弊して、始末が付かなくなった時、整理の任に當った長井は、藩侯に縁故のある町人を二三人呼び集めて、刀を脱いでその前に頭を下げて、彼等に一時の融通を頼んだ事がある。固もとより返せるか、返せないか、分らなかつたんだから、分らない

と真直に自白して、それがためにその時成功した。その因縁でこの額を藩主に書いて貰ったのである。爾来^{じらい}長井は何時でも、これを自分の居間に掛けて朝^{ちよう}夕^{せき}眺めている。代助はこの額の由来を何遍聞かされたか知れない。

今から十五六年前^{ぜん}に、旧藩主の家で、月々の支出が嵩^{かさ}んできて、折角持ち直した経済が又崩れ出した時にも、長井は前年の手腕によって、再度の整理を委託された。その時長井は自分で風呂の薪^{まき}を焚^たいてみて、実際の消費高と帳面づらの消費高との差違から調べにかかったが、終日終夜この事だけに精魂を打ち込んだ結果は、約一カ月内に立派な方法を立て得るに至った。それより以後藩主の家では比較的豊かな生計^{くらし}をしている。

こう云う過去の歴史を持つていて、この過去の歴史以外には、一歩も踏み出して考える事を敢てしない長井は、何によらず、誠実と熱心へ持つて行^ゆきたがる。

「御前は、どう云うものか、誠実と熱心が欠けている様だ。それじゃ不可^{いか}ん。だから何にも出来ないんだ」

「誠実も熱心もあるんですが、ただ人事上に応用出来ないんです」

「どう云う訳で」

代助は又返答に窮した。代助の考えによると、誠実だろうが、熱心だろうが、自分が出

来合の奴を胸に蓄わえているんじゃないかって、石と鉄と触れて火花の出る様に、相手次第で摩擦の具合がうまく行けば、当事者二人の間に起るべき現象である。自分の有する性質と云うよりは寧ろ精神の交換作用である。だから相手が悪くっては起り様がない。

「御父さんは論語だの、王陽明だのという、金の延金を呑んでいらっしやるから、そういう事を仰しやるんでしょう」

「金の延金とは」

代助はしばらく黙っていたが、漸やく、

「延金のまま出て来るんです」と云った。長井は、書物癖のある、偏屈な、世慣れない若輩のいいたがる不得要領の警句として、好奇心のあるにも拘わらず、取り合う事を敢てしなかった。

それから約四十分程して、老人は着物を着換えて、袴を穿いて、俥に乗って、何処かへ出て行った。代助も玄関まで送って出たが、又引き返して客間の戸を開けて中へ這入った。これは近頃になって建て増した西洋作りで、内部の装飾その他の大部分は、代助の意匠に本づいて、専門家へ注文して出来上ったものである。ことに欄間の周囲に張った模様画は、自分の知り合いのさる画家に頼んで、色々相談の揚句に成ったものだから、特更興味が

深い。代助は立ちながら、画卷物を展開した様な、横長の色彩を眺めていたが、どう云うものか、この前来て見た時よりは、痛く見劣りがする。これでは頼もしくもないと思いながら、猶局なほ部々々に眼を付けて吟味していると、突然あに嫂よめが這入って来た。

「おや、此所ここにいらつしやるの」と云ったが、「一寸其所ちよいとそこらに私の櫛わたくしが落ちていなくつて」と聞いた。櫛ソーフアは長椅子の足の所にあつた。昨日縫子に貸して遣つたら、何所どこかへ失なくなしてしまつたんで、探しに來たんだそうである。両手で頭を抑える様にして、櫛を束髪そくはつの根方へ押し付けて、上眼で代助を見ながら、

「相変らず茫ぼんやり乎やしてるじやありませんか」と調戲からかつた。

「御父さんから御談義を聞かされちまつた」

「また？ 能く叱しかられるのね。御歸りそうそう々々、随分氣が利きかないわね。然しかし貴方あなたもあんまり、好よかないわ。些ちつとも御父さんの云う通りになさらないんだもの」

「御父さんの前で議論なんかしやしませんよ。万事控え目に大人しくしてるんです」

「だから猶始末が悪いのよ。何か云うと、へいへいって、そうして、些とも云う事を聞かないんだもの」

代助は苦笑して黙ってしまった。梅子うめこは代助の方へ向いて、椅子いすへ腰を卸した。脊せいのす

らりとした、色の浅黒い、眉の濃い、唇の薄い女である。

「まあ、御掛けなさい。少し話し相手になつて上げるから」

代助はやつぱり立つたまま、嫂の姿を見守つていた。

「今日は妙な半襟を掛けてますね」

「これ？」

梅子は顎^{あご}を縮めて、八の字を寄せて、自分の襦袢^{じゆばん}の襟を見ようとした。

「此間^{こないだ}買ったの」

「好い色だ」

「まあ、そんな事は、どうでも可いから、其所^{そこ}へ御掛けなさいよ」

代助は嫂の真正面へ腰を卸した。

「へえ掛けました」

「一体今日は何を叱られたんです」

「何を叱られたんだか、あんまり要領を得ない。然し御父さんの国家社会^{ため}の為に尽すには驚ろいた。何でも十八の年から今日までのべつに尽してるんだってね」

「それだから、あの位に御成りになつたんじゃないやありませんか」

「国家社会の為に尽して、金が御父さん位儲^{もう}かるなら、僕も尽しても好い」

「だから遊んでないで、御尽しなさいな。貴方は寐^ねていて御金を取ろうとするから狡猾^{こうかつ}よ」

「御金を取ろうとした事は、まだ有りません」

「取ろうとしなくても、使うから同じじやありませんか」

「兄さんが何とか云ってましたか」

「兄さんは呆^{あき}れてるから、何とも云やしません」

「随分猛烈だな。然し御父さんより兄さんの方が偉いですね」

「どうして。――あら悪^{にく}らしい、又あんな御世辞を使つて。貴方はそれが悪いのよ。真面目な顔をして他^{ひと}を茶化^{ちや}すから」

「そんなもんでしょうか」

「そんなもんではようかつて、他^{ひと}の事じやあるまいし。少しや考えて御覧なさいな」

「どうも此所へ来ると、まるで門野と同じ様になつちまうから困る」

「門野つて何です」

「なに宅^{うち}にいる書生ですがね。人に何か云われると、きっとそんなもんではようか、とか、

そうでしょうか、とか答えるんです」

「あの人が？ 余つ程妙なのね」

代助は一寸話を已めて、梅子の肩越に、窓掛の間から、奇麗な空を透かす様に見ていた。遠くに大きな樹が一本ある。薄茶色の芽を全体に吹いて、柔らかい梢の端が天に接する所は、糠雨で暈されたかの如くに霞んでいる。

「好い気候になりましたね。何所か御花見にでも行きましょうか」

「行きましょう。行くから仰しやい」

「何を」

「御父さまから云われた事を」

「云われた事は色々あるんですが、秩序立てて繰り返すのは困るですよ。頭が悪いんだから」

「まだ空つとぼけていらつしやる。ちゃんと知つてますよ」

「じゃ、伺いましょうか」

梅子は少しつんとした。

「貴方は近頃余つ程減らず口が達者におなりね」

「何、姉さんが辟易へきえきする程じゃない。——時に今日は大変静かですね。どうしました、子供達は」

「子供は学校です」

十六七の小間使が戸を開けて顔を出した。あの、旦那様が、奥様に一寸電話口まで取り次いだなり、黙って梅子の返事を待っている。梅子はすぐ立った。代助も立った。つづいて客間を出ようとすると、梅子は振り向いた。

「あなたは、其所に居らっしゃい。少し話があるから」

代助には嫂のこう云う命令的の言葉が何時いつでも面白く感ぜられる。御ご緩ゆつくりと見送った

まま、又腰を掛けて、再び例の画を眺め出した。しばらくすると、その色が壁の上に塗り付けてあるのでなくって、自分の眼球めだまの中から飛び出して、壁の上へ行つて、べたべた喰くつ付く様に見えて来た。仕舞には眼球から色を出す具合一つで、向うにある人物樹木が、此方こちらの思い通りに変化出来る様になった。代助はかくして、下手な箇所々々を悉く塗り更かえて、とうとう自分の想像し得る限りの尤も美しい色彩に包囲されて、恍惚こうこつと坐っていた。所へ梅子が帰って来たので、忽ちたちま当り前の自分に戻ってしまった。

梅子の用事と云うのを改まって聞いてみると、又例の縁談の事であった。代助は学校を

卒業する前から、梅子の御蔭^{おかげ}で写真実物色々な細君の候補者に接した。けれども、何^いずれも不合格者ばかりであつた。始めのうちは体裁の好い迷口上で断わつていたが、二年程前から、急に凶迂^{ずう}々々しくなつて、きつと相手にけちを付ける。口と顎^{あご}の角度が悪いとか、眼の長さが顔の幅に比例しないとか、耳の位置が間違つてるとか、必ず妙な非難を持つて来る。それが悉く尋常な言草でないので、仕舞には梅子も少々考え出した。これは必^{ひつきよ}竟^う世話を焼き過ぎるから、付け上つて、人を困らせるのだろう。当分打遣^{うつちや}つて置いて、向うから頼み出させるに若^しくはない。と決心して、それから縁談の事をついぞ口になくなつた。ところが本人は一向困つた様子もなく、依然として海のものとも、山のものとも見当が付かない態度で今日まで暮して来た。

其所^{おやじ}へ親爺が甚だ因縁の深いある候補者を見付けて、旅行先から歸つた。梅子は代助の来る二三日前に、その話を親爺から聞かされたので、今日の会談は必ずそれだろうと推^{すい}したのである。然し代助は實際老人から結婚問題に付いては、この日何にも聞かなかつたのである。老人は或はそれを披露する気で、呼んだのかも知れないが、代助の態度を見て、もう少し控えて置く方が得策だという料簡^{りようけん}を起した結果、故意^{わざ}と話題を避けたとも取れる。

この候補者に対して代助は一種特殊な關係を有つていた。候補者の姓は知っている。けれども名は知らない。年齢、容貌、教育、性質に至つては全く知らない。何故その女が候補者に立つたと云う因縁になると又能く知っている。

代助の父には一人の兄があつた。直記と云つて、父とはたった一つ違いの年上だが、父よりは小柄なうえに、顔付眼鼻立が非常に似ていたものだから、知らない人には往々双子と間違えられた。その折は父も得とは云わなかつた。誠之進という幼名で通つていた。

直記と誠之進とは外貌のよく似ていた如く、氣質も本当の兄弟であつた。両方に差支のあるときは特別、都合さえ付けば、同じ所に食つ付き合つて、同じ事をして暮らしていた。稽古も同時同刻に往き返りをする。読書にも一つ燈火を分つた位親しかつた。

丁度直記の十八の秋であつた。ある時二人は城下外の等覺寺という寺へ親の使に行つた。これは藩主の菩提寺で、そこにいる楚水という坊さんが、二人の親とは昵近なので、用の手紙を、この楚水さんに渡しに行つたのである。用は囲碁の招待、か何かで返事にも及ばない程簡略なものであつたが、楚水さんに留められて、色々話しているうちに遅くなって、日の暮れる一時間程前に漸く寺を出た。その日は何か祭のある折で、市中は大部分雑沓していた。二人は群集のなかを急いで帰る拍子に、ある横町を曲ろうとする角で、

川向いの方限りの某（ほうぎ なにがし）というものに突き当たった。この某と二人とは、かねてから仲が悪かった。その時某は大分酒気を帯びていたと見えて、二言三言いい争ううちに刀を抜いて、いきなり斬り付けた。斬り付けられた方は兄であつた。已（やむ）を得ずこれも腰の物を抜いて立向つたが、相手は平生から極めて評判のわるい乱暴ものだけあつて、酩酊（めいてい）しているにも拘（か）わらず、強かつた。黙つていれば兄の方が負ける。そこで弟も刀を抜いた。そうして二人で滅茶苦茶に相手を斬り殺してしまつた。

その頃の習慣として、侍が侍を殺せば、殺した方が切腹をしなければならぬ。兄弟はその覺悟で家へ歸つて來た。父も二人を並べて置いて順々に自分で介錯（かいしゃく）をする氣であつた。ところが母が生憎祭で知己の家へ呼ばれて留守である。父は二人に切腹をさせる前、もう一遍母に逢（あ）わしてやりたいと云う人情から、すぐ母を迎（むか）いにやつた。そうして母の来る間、二人に訓戒を加えたり、或は切腹する座敷の用意をさせたりなるべく愚図々々してゐた。

母の客に行つていた所は、その遠縁にあたる高木という勢力家であつたので、大變都合が好かつた。と云うのは、その頃は世の中の動き掛けた當時で、侍の掟（おきて）も昔の様には嚴重に行われなかつた。殊更（ことさら）殺された相手は評判の悪い無頼の青年であつた。ので高木は母

とともに長井の家へ来て、何分の沙汰が公おもてむき向からあるまでは、当分そのままにして、手を着けずに置くようにと、父を諭さとした。

高木はそれから奔走を始めた。そうして第一に家老を説き付けた。それから家老を通して藩主を説き付けた。殺された某の親は又、存外訳の解わかった人で、平生から倅せがれの行跡の良くないのを苦に病んでいたのみならず、斬り付けた当時も、此方こつちから狼藉ろうぜきをしかけたと同然であるという事が明瞭めいりょうになったので、兄弟を寛大に処分する運動に就ては別段の苦情を持ち出さなかった。兄弟はしばらく一間ひとまの内に閉じ籠こもって、謹慎の意を表して後、二人とも人知れず家いえを捨てた。

三年の後兄は京都で浪士に殺された。四年目に天下が明治となった。又五六年してから、誠之進は両親を国元から東京へ呼び寄せた。そうして妻を迎えて、得という一字名になった。その時は自分の命を助けてくれた高木はもう死んで、養子の代になっていた。東京へ出て仕官の方法でも講じたらと思つて色々勧めてみたが応じなかった。この養子に子供が二人あつて、男の方は京都へ出て同志社へ這入はいつた。其所を卒業してから、長らく亜米利加アメリカに居おつたそうだが、今では神戸で実業に従事して、相当の資産家になっている。女の方は県下の多額納税者の所へ嫁に行った。代助の細君の候補者というのはこの多額納税者の娘

である。

「大変込み入ってるのね。私^{わたし}驚いちゃった」と嫂が代助に云った。

「御父さんから何返も聞いてるじやありませんか」

「だって、何時^{いつ}もは御嫁の話が出ないから、好い加減に聞いているのよ」

「佐川にそんな娘があつたのかな。僕も些^ちつとも知らなかった」

「御貰^{おもらい}なさいよ」

「賛成なんですか」

「賛成ですとも。因縁つきじゃありませんか」

「先祖の拵^{こし}らえた因縁よりも、まだ自分の拵^{こし}えた因縁で貰う方が貰い好い様だな」

「おや、そんなものがあるの」

代助は苦笑して答えなかった。

四

代助は今読み切ったばかりの薄い洋書を机の上に開けたまま、両^{りょう}肱^{ひじ}を突いて茫^{ぼん}乎^{やり}

考えた。代助の頭は最後の幕で一杯になっている。——遠くの向うに寒そうな樹が立っている後に、二つの小さな角燈が音もなく揺めいて見えた。絞首台は其所にある。刑人は暗い所に立った。木履を片足失くした、寒いと一人が云うと、何を？ と一人が聞き直した。木履を失くなくて寒いと前のものが同じ事を繰り返した。Mは何処にいと誰か聞いた。此所にいと誰か答えた。樹の間に大きな、白い様な、平たいものが見える。湿っぽい風が其所から吹いて来る。海だとGが云った。しばらくすると、宣告文を書いた紙と、宣告文を持った、白い手——手套を穿めない——を角燈が照らした。読上げんでも可からうという声がした。その声は震えていた。やがて角燈が消えた。……もう只一人になったとKが云った。そうして溜息を吐いた。Sも死んでしまった。Wも死んでしまった。Mも死んでしまった。只一人になってしまった。……

海から日が上った。彼等は死骸を一つの車に積み込んだ。そうして引き出した。長くなつた頸、飛び出した眼、唇の上に咲いた、怖ろしい花の様な血の泡に濡れた舌を積み込んで元の路へ引き返した。……

代助はアンドレーフの「七刑人」の最後の模様を、此所まで頭の中で繰り返してみても、ぞつと肩を縮めた。こう云う時に、彼が尤も痛切に感ずるのは、万一自分がこんな場に臨

んだら、どうしたら宜^よかろうという心配である。考えると到底死ねそうもない。と云つて、無理にも殺されるんだから、如何^{いか}にも残酷である。彼は生の慾^{よく}望^{ぼう}と死の圧迫の間に、わが身を想像して、未練に両方に往^いつたり来たりする苦悶^{くもん}を心に描き出しながら凝^{じつ}と坐つていると、脊中^{せなな}一面の皮が毛穴ごとにむずむずして殆ど堪らなくなる。

彼の父は十七のとき、家中^{かちゆう}の一人を斬り殺して、それが為^ため切腹をする覺悟をしたと自分で常に人に語っている。父の考では伯父の介錯を自分がして、自分の介錯を祖父^{じじ}に頼^{たの}む筈^{はず}であつたそうだが、能^よくそんな真似^{まね}が出来るものである。父が過去を語る度に、代助は父をえらいと思うより、不愉快な人間だと思う。そうでなければ嘔吐^{うそつき}だと思ふ。嘔吐の方がまだ余つ程父らしい気がする。

父ばかりではない。祖父^{じじ}に就ても、こんな話がある。祖父が若い時分、擊劍の同門の何とかいう男が、あまり技芸に達していた所から、他の嫉妬^{ねたみ}を受けて、ある夜繩^{なわ}手道^{てみち}を城下へ歸る途中で、誰かに斬り殺された。その時第一に馳^かけ付けたものは祖父であつた。左の手に提^{ちよう}灯^{ちん}を翳^かして、右の手に拔身^{ぬきみ}を持つて、その拔身で死骸^{たが}を叩きながら、軍平^{しつ}確^{かく}かりしろ、創^{きず}は浅いぞと云つたそうである。

伯父が京都で殺された時は、頭巾を着た人間にどやどやと、旅宿^{やどや}へ踏み込まれて、伯父

は二階の廂ひさしから飛び下りる途端、庭石に爪つまず付いて倒れる所を上から、容赦なく遣やられた為に、顔なますが膾なまの様になつたそうである。殺される十日程前、夜中やちゆう、合羽かつぱを着て、傘に雪を除よけながら、足駄うしろがけで、四条から三条へ歸つた事がある。その時旅宿やどの二丁程手前で、突然うしろ後から長井直記どのと呼び懸けられた。伯父は振り向きもせず、やはり傘を差したまま、旅宿やどの戸口まで来て、格子こうしを開けて中へ這入はいつた。そうして格子をぴしやりと締めて、中うちから、長井直記は拙者だ。何御用なにか。と聞いたそうである。

代助はこんな話を聞く度に、勇ましいと云う氣持よりも、まず怖い方が先に立つ。度胸を買つてやる前に、腥なまぐさい臭においが鼻柱はなばしらを抜ける様ように応こたえる。

もし死が可能であるならば、それは発作の絶高頂に達した一瞬にあるだろうとは、代助のかねて期待する所であつた。ところが、彼は決して発作性の男でない。手も顫ふるえる、足も顫ふるえる。声の顫える事や、心臓の飛び上がる事は始終ある。けれども、激する事は近来殆んどない。激すると云う心的状態は、死に近づき得る自然の階段で、激するたびに死に易やすくなるのは眼に見えているから、時には好奇心で、せめて、その近所まで押し寄せてみたいと思う事もあるが、全く駄目である。代助はこの頃の自己を解剖するたびに、五六年前の自己と、まるで違つてゐるのに驚ろかずにはいられなかつた。

代助は机の上の書物を伏せると立ち上がった。縁側の硝子戸ガラスドを細目に開けた間から暖かい陽気な風が吹き込んで来た。そうして鉢植のアマランスの赤い弁はなびらをふらふらと揺うごかした。日は大きな花の上に落ちてゐる。代助は曲こんで、花の中を覗のぞき込んだ。やがて、ひよろ長い雄蕊ゆうずいの頂きから、花粉を取って、雌蕊しすいの先へ持つて来て、丹念に塗り付けた。

「蟻ありでも付きましたか」と門野が玄関の方から出て来た。袴はかまを穿はいている。代助は曲んだまま顔を上げた。

「もう行つて来たの」

「ええ、行つて来ました。何だそうです。明日御引移りになるそうです。今日これから上がろうと思つてた所だと仰おつしかったです」

「誰が？ 平岡が？」

「ええ。——どうも何ですな。大分御忙がしい様ですな。先生た余つ程違つてますね。——蟻なら種油を御注おつぎなさい。そうして苦しがつて、穴から出て来る所を一々殺すんです。何なら殺しましょうか」

「蟻じゃない。こうして、天氣の好いい時に、花粉を取って、雌蕊へ塗り付けて置くと、今に実が結なるんです。暇だから植木屋から聞いた通り、遣つてる所だ」

「なある程。どうも重宝な世の中になりましたね。——然し盆栽は好いもんだ。奇麗で、
楽しみになつて」

代助は面倒臭いから返事をせずに黙っていた。やがて、

「悪戯も好加減に休すかな」と云いながら立ち上がって、縁側へ据付の、籐の安樂椅子に腰を掛けた。それぎりぽかんと何か考え込んでゐる。門野はつまらなくなったから、自分の玄関傍の三畳敷へ引き取った。障子を開けて這入ろうとすると、又縁側へ呼び返された。

「平岡が今日来ると云つたつて」

「ええ、来る様な御話しでした」

「じや待つていよう」

代助は外出を見合せた。実は平岡の事がこの間から大分氣に掛つてゐる。

平岡はこの前、代助を訪問した当時、既に落ち付いていられない身分であつた。彼自身の代助に語つた所によると、地位の心当りが二三力所あるから、差し当りその方面へ運動してみる積りなんだそうだが、その二三力所が今どうなつてゐるか、代助は殆んど知らない。代助の方から神保町の宿を訪ねた事が二返あるが、一度は留守であつた。一度は居つ

たには居った。が、洋服を着たまま、部屋の敷居の上に立つて、何か急^{せわ}しい調子で、細君を極^きめ付けていた。――案内なしに廊下を伝つて、平岡の部屋の横へ出た代助には、突然ながら、たしかにそう取れた。その時平岡は一寸^{ちよつと}振り向いて、やあ君かと云った。その顔にも容子^{ようす}にも、少しも快よきそうな所は見えなかった。部屋の内^{なか}から顔を出した細君は代助を見て、蒼白^{あおしろ}い頬をぼつと赤くした。代助は何となく席に就き悪^{にく}くなった。まあ這入れと申し訳に云うのを聞き流して、いや別段用じやない。どうしているかと思つて一寸来てみただけだ。出掛けるなら一所に出ようと、此方^{こつち}から誘う様にして表へ出てしまった。その時平岡は、早く家を探して落ち付きたいが、あんまり忙しいんで、どうする事も出来ない、たまに宿のものが教えてくれるかと思うと、まだ人が立ち退かなかつたり、あるいは今壁を塗つてる最中だつたりする。などと、電車へ乗つて分れるまで諸事苦情ずくめであつた。代助も氣の毒になつて、そんなら家^{いえ}は、宅^{うち}の書生に探させよう。なに不景氣だから、大分空いてるのがある筈だ。と請合つて歸つた。

それから約束通り門野を探しに出した。出すや否^{いな}や、門野はすぐ恰^{かつ}好^{こう}なのを見付けて来た。門野に案内をさせて平岡夫婦に見せると、大抵可^よかろうと云う事で分れたそうだが、家主^{いえぬし}の方へ責任もあるし、又其所が氣に入らなければ外を探す者もあるからと云うので、

借りるか借りないか判然はつきりした所を、門野に、もう一遍確かめさせたのである。

「君、家主の方へは借りるって、断わって来たんだろうね」

「ええ、帰りに寄って、明日引越すからって、云って来ました」

代助は椅子に腰を掛けたまま、新らしく二度の世帯しやたいを東京に持つ、夫婦の未来を考えた。平岡は三年前ぜん新橋で分れた時とは、もう大分変っている。彼の経歴は処世はしごの階子段だんを一二段で踏み外したと同じ事である。まだ高い所へ上のぼっていないが、幸さいと云えば云う様なものの、世間の眼に映ずる程、身体からだに打撲を受けていないのみで、その実精神状態には既に狂いが出来ている。始めて逢あった時、代助はすぐそう思った。けれども、三年間に起った自分の方の変化を打算してみても、或は此方こちの心が向うに反響を起したのではなからうかと訂正した。が、その後平岡の旅宿りよしゆくへ尋ねて行つて、座敷へも這入らないで一所に外へ出た時の、容子から言語動作を眼の前に浮べてみると、どうしても又最初の判断に戻らなければならなくなった。平岡はその時顔の中心に一種の神経を寄せていた。風が吹いても、砂が飛んでも、強い刺激を受けそうな眉まゆと眉の継目を、憚はばらず、ぴくつかせていた。そうして、口にする事が、内容の如何いかんに関わらず、如何いかにも急せしく、かつ切なそうに、代助の耳に響いた。代助には、平岡の凡すべてが、あたかも肺の強くない人の、重苦しい

葛湯くずゆの中を片息で泳いでいる様に取りれた。

「あんなに、焦あせって」と、電車へ乗って飛んで行く平岡の姿を見送った代助は、口の内うちでつぶやいた。そうして旅館に残されている細君の事を考えた。

代助はこの細君を捕つかまえて、かつて奥さんと云った事がない。何時でも三千代さん三千代さんと、結婚しない前の通りに、本名を呼んでいる。代助は平岡に分れてから又引き返して、旅館へ行つて、三千代さんに逢つて話しをしようかと思つた。けれども、何だか行ゆけなかった。足を停めて思案しても、今の自分には、行くのが悪いと云う意味はちつとも見出みいだせなかった。けれども、気が咎とがめて行いかれなかった。勇気を出せば行かれると思つた。ただ代助にはこれだけの勇気を出すのが苦痛であつた。それで家へ歸つた。その代り歸つても、落ち付かない様な、物足りない様な、妙な心持がした。ので、又外へ出て酒を飲んだ。代助は酒をいくらでも飲む男である。ことにその晩はしたたかに飲んだ。

「あの時は、どうかしていたんだ」と代助は椅子に倚よりながら、比較的冷やかな自己で、自己の影を批判した。

「何か御用ですか」と門野が又出て来た。袴を脱いで、足袋を脱いで、団子の様な素足を出している。代助は黙つて門野の顔を見た。門野も代助の顔を見て、一寸の間突立ってい

た。

「おや、御呼になつたんじやないのですか。おや、おや」と云つて引込んで行つた。代助は別段可笑しいとも思わなかつた。

「小母さん、御呼びになつたんじやないとき。どうも変だと思つた。だから手も何も鳴らないつて云うのに」という言葉が茶の間の方で聞えた。それから門野と婆さんの笑う声が出た。

その時、待ち設けている御客が来た。取次に出た門野は意外な顔をして這入つて来た。そうして、その顔を代助の傍まで持つて来て、先生、奥さんですと囁やく様に云つた。代助は黙つて椅子を離れて座敷へ這入つた。

平岡の細君は、色の白い割に髪ほそおもての黒い、細ほそおもて面まへに眉毛まゆえの判然はつきり映る女である。一寸見ると何所どことなく淋しい感じの起る所が、古版の浮世絵に似ている。帰京後は色光沢つやがことに可よくないようだ。始めて旅宿で逢つた時、代助は少し驚いた位である。汽車で長く揺られた疲れが、まだ回復しないのかと思つて、聞いてみたら、そうじやない、始終こうなんだと云われた時は、氣の毒になつた。

三千代は東京を出て一年目に産をした。生れた子供はじき死んだが、それから心臓を痛

めたと見えて、とかく具合がわるい。始めのうちは、ただ、ぶらぶらしていたが、どうしても、はかばかしく癒なおらないので、仕舞に医者に見て貰もらったら、能よくは分らないが、ことに依よると何とかいうむずかしい名の心臓病かも知れないと云った。もしそうだとすれば、心臓から動脈へ出る血が、少しずつ、後戻りをする難症だから、根治は覺おぼつか束ないと宣告されたので、平岡も驚ろいて、出来るだけ養生に手を尽した所せい為か、一年ばかりするうちに、好いい案排あんばいに、元気がめつきりよくなった。色光沢も殆ほとんど元の様に冴さえ々ざえして見える日が多いので、当人も喜こんでいると、帰る一カ月ばかり前から、又血色が悪くなり出した。然し医者の話によると、今度のは心臓の為ためではない。心臓は、それ程丈夫にもならないが、決して前よりは悪くなっていない。弁の作用に故障があるものとは、今は決して認められないという診断であつた。——これは三千代が直じかに代助に話した所である。代助はその時三千代の顔を見て、やつぱり何か心配の為じやないかしらと思つた。

三千代は美くしい線を奇麗に重ねた鮮ふたえまぶたかな二重瞼ふたえまぶたを持つてゐる。眼の恰好は細長い方であるが、瞳ひとみを据しつえて凝じつと物を見るときに、それが何かの具合で大変大きく見える。代助はこれを黒眼の働はたらきと判断していた。三千代が細君にならない前、代助はよく、三千代のこう云う眼遣めづかいを見た。そうして今でも善く覚えてゐる。三千代の顔を頭の中に浮べよう

とすると、顔の輪廓^{りんかく}が、まだ出来上らないうちに、この黒い、湿^{うる}んだ様に暈^{ぼか}された眼が、ぼつと出て来る。

廊下伝いに座敷へ案内された三千代は今代助の前に腰を掛けた。そうして奇麗な手を膝^{ひざ}の上に置^かねた。下にした手にも指輪を穿^はめている。上にした手にも指輪を穿^はめている。上のは細い金の枠に比較的大きな真珠を盛った当世風のもので、三年前^{ぜん}結婚の御祝として代助から贈られたものである。

三千代は顔を上げた。代助は、突然例の眼を認めて、思わず瞬^{またたき}を一つした。

汽車で着いた明日平岡^{あくるひ}と一所に来る筈^{はず}であつたけれども、つい気分が悪いので、来損^{きそく}なつてしまつて、それから一人でなくつては来る機会がないので、つい出ずにいたが、今日は丁度、と云いかけて、句を切つて、それから急に思い出した様に、この間来てくれた時は、平岡が出掛^{でかけ}際^{ぎわ}だつたものだから、大変失礼して済まなかつたという様な詫^{わび}をして、「待つていらつしやれば可^よかつたのに」と女らしく愛想^{あいそ}をつけ加えた。けれどもその調子は沈^もんでいた。尤もこれはこの女の持調子^{もちぢょうし}で、代助は却^{かえ}つてその昔を憶^{おも}ひ出した。

「だつて、大変忙しそうだつたから」

「ええ、忙しい事は忙しいんですけど——好^いいじゃありませんか。居らしたつて。

あんまり他人行儀ですわ」

代助は、あの時、夫婦の間に何があつたか聞いてみようと思つたけれども、まず已めにした。例なら調戲いづも からかい半分に、あなたは何か叱しかられて、顔を赤くしていましたね、どんな悪い事をしたんですか位言いかねない間柄なのであるが、代助には三千代の愛あい嬌きやうが、後からその場を取り繕う様に、いたましく聞えたので、冗談を云い募る元氣も一寸出なかつた。代助は烟草たばこへ火を点つけて、吸口を啣くわえたまま、椅子の脊せに頭を持たせて、寛くわろいだ様に、「久し振りだから、何か御馳走しましょうか」と聞いた。そうして心のうちで、自分のこ
う云う態度が、幾分かこの女の慰藉いしやになる様に感じた。三千代は、

「今日は沢山。そう緩ゆつくりしちやいられないの」と云つて、昔の金齒を一寸見せた。

「まあ、可いいでしよう」

代助は両手を頭の後へ持つて行つて、指と指を組み合せて三千代を見た。三千代はこ
んで帯の間から小さな時計を出した。代助が真珠の指輪をこの女に贈ものにする時、平岡
はこの時計を妻に買つて遣やつたのである。代助は、一つ店で別々の品物を買つた後、平岡
と連れ立つて其所そこの敷居を跨またぎながら互に顔を見合せて笑つた事を記憶している。

「おや、もう三時過ぎね。まだ二時位かと思つてたら。——少し寄り道をしていたものだ

から」と独り言の様に説明を加えた。

「そんなに急ぐんですか」

「ええ、なりたけ早く帰りたいの」

代助は頭から手を放して、烟草の灰をはたき落した。

「三年のうちに大分世帯染しやたいしじみちまった。仕方がない」

代助は笑つてこう云つた。けれどもその調子には何処どこかに苦い所があつた。

「あら、だつて、明日引越すんじゃないやありませんか」

三千代の声は、この時急に生々と聞えた。代助は引越の事をまるで忘れていたが、相手の快よさそうな調子に釣り込まれて、此方こつちからも他愛なく追窮した。

「じや引越してから緩くり来れば可いのに」

「でも」と云つた三千代は少し挨拶あいさつに困つた色を、額の所へあらわして、一寸下を見たが、やがて頬を上げた。それが薄赤く染まつていた。

「実は私わたくし少し御願があつて上がったの」

疳かんの鋭どい代助は、三千代の言葉を聞くや否や、すぐその用事の何であるかを悟つた。

実は平岡が東京へ着いた時から、いつかこの問題に出逢う事だろうと思つて、半意識はんいしきの

下で覚悟していたのである。

「何ですか、遠慮なく仰しやい」

「少し御金の工面が出来なくって？」

三千代の言葉はまるで子供の様に無邪気であるけれども、両方の頬はやっぱり赤くなっている。代助は、この女にこんな氣耻きはずかしい思いをさせる、平岡の今の境遇を、甚だ氣の毒に思つた。

段々聞いてみると、明日引越をする費用や、新しく世帯を持つ為めの金が入用なのではなかつた。支店の方を引き上げる時、向うへ置き去りにして来た借金が三口とかあるうちに、その一口を是非片付けなくてはならないのだそうである。東京へ着いたら一週間うちに、どうしてもすると云う堅い約束をして来た上に、少し訳があつて、他の様ほかに放つて置けない性質たちのものだから、平岡も着いた明日あくるひから心配して、所々奔走しよしよしているけれども、まだ出来そうな様子が見えないので、已を得ず三千代に云い付けて代助の所に頼よこみに寄したと云う事が分つた。

「支店長から借りたと云う奴ですか」

「いいえ。その方は何時いつまで延ばして置いても構わないんですが、此方の方をどうかしな

いと困るのよ。東京で運動する方に響いて来るんだから」

代助はなるほどそんな事があるのかと思った。金高かねだかを聞くと五百円と少しばかりである。代助はなんだその位と腹の中で考えたが、実際自分は一文もない。代助は、自分が金に不自由しない様でいて、その実大いに不自由している男だと気が付いた。

「何でまた、そんなに借金をしたんですか」

「だから私考いえると厭いやになるのよ。私も病氣をしたので、悪いには悪いけれども」

「病氣の時の費用なんですか」

「じゃないのよ。薬代なんか知れたもんですわ」

三千代はそれ以上を語らなかつた。代助もそれ以上を聞く勇氣がなかつた。ただ蒼白あおしろい三千代の顔を眺めて、その中うちに、漠然たる未来の不安を感じた。

五

翌日朝早く門野は荷車を三台雇つて、新橋の停車場まで平岡の荷物を受取りに行つた。実は疾とうから着いていたのだけれども、宅うちがまだ極きまらないので、今日までそのままにして

あつたのである。往復の時間と、向うで荷物を積み込む時間を勘定してみると、どうしても半日仕事である。早く行^ゆかなけりや、間に合わないよと代助は寐床^{ねどこ}を出るとすぐ注意した。門野は例の調子で、なに訳はありませんと答えた。この男は、時間の考などは、あまりない方だから、こう簡便な返事が出来たんだが、代助から説明を聞いて始めてなるほどと云う顔をした。それから荷物を平岡の宅^{うち}へ届けた上に、万事奇麗に片付くまで手伝をするんだと云われた時は、ええ承知しました、なに大丈夫ですと気軽に引き受けて出て行^いつた。

それから十一時過まで代助は読書していた。が不図ダヌンチオと云う人が、自分の家^{いえ}の部屋を、青色と赤色に分つて装飾していると云う話を思い出した。ダヌンチオの主意は、生活の二大情調の発現は、この二色^{ふたいろ}に外ならんと云う点に存するらしい。だから何でも興奮を要する部屋、即ち音楽室とか書齋とか云うものは、なるべく赤く塗り立てる。又寝室とか、休息室とか、凡^{すべ}て精神の安静を要する所は青に近い色で飾り付をする。と云うのが、心理学者の説を応用した、詩人の好奇心の満足と見える。

代助は何故^{なぜ}ダヌンチオの様な刺激を受け易^{やす}い人に、奮興^{ふんこう}色^{しよく}とも見倣^{みな}し得べき程強烈な赤の必要があるだろうと不思議に感じた。代助自身は稲荷^{いなり}の鳥居を見ても余り好い心持

はしない。出来得るならば、自分の頭だけでも可いから、緑のなかに漂わして安らかに眠りたい位である。いつかの展覧会に青木と云う人が海の底に立っている脊の高い女を画いた。代助は多くの出品のうちで、あれだけが好い気持ちに出来ていると思った。つまり、自分もああ云う沈んだ落ち付いた情調に居りたかったからである。

代助は縁側へ出て、庭から先にはびこる一面の青いものを見た。花はいつしか散って、今は新芽若葉の初期である。はなやかな緑がぱつと顔に吹き付けた様な心持ちがした。眼を醒す刺激の底に何所か沈んだ調子のあるのを嬉しく思いながら、鳥打帽を被って、銘仙の不断着のまま門を出た。

平岡の新宅へ来て見ると、門が開いて、がらんとしているだけで、荷物の着いた様子もなければ、平岡夫婦の来ている気色も見えない。ただ車夫体の男が一人縁側に腰を懸けて烟草を呑んでいた。聞いてみると、先刻一返御出になりましたが、この案排じゃ、どうせ午過だろうって又御帰りになりましたという答である。

「旦那と奥さんと一所に来たかい」

「ええ御一所です」

「そうして一所に帰ったかい」

「ええ御一所に御帰りになりました」

「荷物もそのうち着くだろう。御苦労さま」と云つて、又通りへ出た。

神田へ来たが、平岡の旅宿へ寄る氣はしなかつた。けれども二人の事が何だか氣に掛る。ことに細君の事が氣に掛る。ので一寸顔を出した。夫婦は膳を並べて飯を食つていた。下女が盆を持つて、敷居に尻を向けている。その後から、声を懸けた。

平岡は驚ろいた様に代助を見た。その眼が血ばしっている。二三日能く眠らない所為だと云う。三千代は仰山なもの云い方だと云つて笑つた。代助は氣の毒にも思つたが、

又安心もした。留めるのを外へ出て、飯を食つて、髪を刈つて、九段の上へ一寸寄つて、又歸りに新宅へ行つてみた。三千代は手拭を姉さん被りにして、友禪の長襦袢をさらりと出して、襷がけで荷物の世話を焼いていた。旅宿で世話をしてくれたと云う下女も来ている。平岡は縁側で行李の紐を解いていたが、代助を見て、笑いながら、少し手伝わないかと云つた。門野は袴を脱いで、尻を端折つて、重ね簞笥を車夫と一所に座敷へ抱え込みながら、先生どうです、この服装は、笑つちや不可ませんよと云つた。

翌日、代助が朝食の膳に向つて、例の如く紅茶を呑んでいると、門野が、洗い立ての顔を光らして茶の間へ這入つて来た。

「昨夕は何時御帰りでした。つい疲れちまって、仮寐をしていたものだから、些とも気が付きませんでした。——寐ている所を御覧になったんですか、先生も随分人が悪いな。全体何時頃なんです、御帰りになったのは。それまで何所へ行っていていらした」と平生の調子で苦もなく饒舌立た。代助は真面目で、

「君、すっかり片付まで居てくれたんでしようね」と聞いた。

「ええ、すっかり片付けちまりました。その代り、どうも骨が折れましたぜ。何しろ、我々の引越と違って、大きな物が色々あるんだから。奥さんが座敷の真中へ立って、茫然、こう周囲を見回していた様子したら、——随分可笑なものでした」

「少し身体の具合が悪いんだからね」

「どうもそうらしいですね。色が何だか可くなくと思った。平岡さんとは大違いだ。あの人の体格は好いですね。昨夕一所に湯に入って驚ろいた」

代助はやがて書斎へ帰って、手紙を二三本書いた。一本は朝鮮の統監府に居る友人宛で、先達て送ってくれた高麗焼の礼状である。一本は仏蘭西に居る姉婿宛で、タナグラの安いを見付けてくれという依頼である。

昼過散歩の出掛けに、門野の室を覗いたら又引繰り返って、ぐうぐう寐ていた。代助は

門野の無邪気な鼻の穴を見て羨ましくなった。実を云うと、自分は昨夕寐つかれないで大変難義したのである。例に依つて、枕の傍へ置いた袂時計が、大変大きな音を出す。それが気になったので、手を延ばして、時計を枕の下へ押し込んだ。けれども音は依然として頭の中へ響いて来る。その音を聞きながら、つい、うとうとする間に、凡ての外の意識は、全く暗窖の裡に降下した。が、ただ独り夜を縫うミシンの針だけが刻み足に頭の中を断えず通つていた事を自覚していた。ところがその音が何時かりんりんという虫の音に變つて、奇麗な玄関の傍の植込みの奥で鳴いている様になった。——代助は昨夕の夢を此所まで辿つて来て、睡眠と覚醒との間を繋ぐ一種の糸を発見した様な心持がした。

代助は、何事によらず一度気にかかり出すと、何処までも気にかかる男であつた。しかも自分でその馬鹿気さ加減の程度を明らかに見積るだけの脳力があるので、自分の気にかかり方が猶眼に付いてならない事があつた。三四年前、平生の自分が如何にして夢に入るか云う問題を解決しようと試みた事があつた。夜、蒲団へ這入つて、好い案排にうとうとし掛けると、ああ此所だ、こうして眠るんだなと思つてはつとする。すると、その瞬間に眼が冴えてしまう。しばらくして、又眠りかけると、又、そら此所だと思う。代助は殆んど毎晩の様にこの好奇心に苦しめられて、同じ事を二遍も三遍も繰り返した。仕舞には

自分ながら辟易へきえきした。どうかして、この苦痛を逃れようと思った。のみならず、つくづく自分は愚物であると考えた。自分の不明瞭ふめいりような意識を、自分の明瞭な意識に訴えて、同時に回顧しようとするのは、ジェームスの云った通り、暗闇を検査する為に蠟燭ろうそくを点したり、独楽こまの運動を吟味する為に独楽を抑える様なもので、生涯寐られっこない訳になる。と解わかっているが晩になると又はつと思う。

この困難は約一年ばかりで何時の間にか漸く遠退ようやとのおいた。代助は昨夕の夢とこの困難とを比較してみても、妙に感じた。正氣の自己の一部分を切り放して、そのままの姿として、知らぬ間に夢の中へ譲り渡す方が趣があると思つたからである。同時に、この作用は氣狂きちがいになる時の状態と似ていへせぬかと考え付いた。代助は今まで、自分は激昂げきこうしないから氣狂にはなれないと信じていたのである。

それから二三日は、代助も門野も平岡の消息を聞かずに過ごした。四日目の午過に代助は麻布あさぶのある家いえへ園遊会に呼ばれて行つた。御客は男女なんによを合せて、大分来たが、正實と云うのは、英国の国会議員とか実業家とかいう、無暗むやみに脊の高い男と、それから鼻眼鏡をかけたその細君とであつた。これは中々の美人で、日本などへ来るには勿体もったいない位な容色きさくだが、何処で買つたものか、岐阜出来の絵日傘を得意に差していた。

尤もその日は大変な好い天気で、広い芝生の上にフロックで立っていると、もう夏が来たという感じが、肩から脊中へ掛けて著るしく起った位、空が真蒼に透き通っていた。英国の紳士は顔をしかめて空を見て、実に美しくいと云った。すると細君がすぐ、ラッヴレイと答えた。非常に瘡の高い声で尤も力を入れた挨拶の仕様であつたので、代助は英国の御世辞は、また格別のものだと思つた。

代助も二言三言この細君から話しかけられた。が三分と経たないうちに、遣り切れなくなつて、すぐ退却した。あとは、日本服を着て、わざと島田に結つた令嬢と、長らく紐育で商業に従事していたと云う某が引き受けた。この某は英語を喋舌る天才を以て自ら任ずる男で、欠かさず英語会へ出席して、日本人と英語の会話を遣つて、それから英語で卓上演説をするのを、何よりの楽しみにしている。何か云つては、あとでも可笑しそうに、げらげら笑う癖がある。英国人が時によると怪訝な顔をしている。代助はあれだけは已めたら可からうと思つた。令嬢も中々旨い。これは米国婦人を家庭教師に雇つて、英語を使う事を研究した、ある物持ちの娘である。代助は、顔より言葉の方が達者だと考えながら、つくづく感心して聞いていた。

代助が此所へ呼ばれたのは、個人的に此所の主人や、この英国人夫婦に関係があるから

ではない。全く自分の父と兄との社交的勢力の余波で、招待状が廻って来たのである。だから、万遍なく方々へ行つて、好い加減に頭を下げて、ぶらぶらしていた。その中に兄も居た。

「やあ、来たな」と云つたまま、帽子に手も掛けない。

「どうも、好い天気ですね」

「ああ。結構だ」

代助も脊の低い方ではないが、兄は一層高く出来ている。その上この五六年来次第に肥満して来たので、中々立派に見える。

「どうです、彼方あつちへ行つて、ちと外国人と話でもしちや」

「いや、真平まっぴらだ」と云つて兄は苦笑いをした。そうして大きな腹にぶら下がっている金鎖を指の先で弄いじくつた。

「どうも外国人は調子が可いいですね。少し可よすぎる位だ。ああ賞められると、天気の方でも是非好くならなくつちやなくなる」

「そんなに天気を賞めていたのかい。へえ。少し暑過ぎるじゃないか」

「私にも暑過ぎる」

誠吾と代助は申し合せた様に、白い手巾ハンケチを出して額ふを拭いた。兩人共重い絹帽シルクハットを被かぶっている。

兄弟は芝生の外れの木蔭こかげまで来て留とどつた。近所には誰もいない。向うの方で余興か何か始まっている。それを、誠吾は、宅うちにしていると同じ様な顔をして、遠くから眺めた。

「兄の様になると、宅うちにいても、客に來ても同じ心持ちなんだろう。こう世の中に慣れ切つてしまつても、楽しみがなくなつて、つまらないものだろう」と思いながら代助は誠吾の様子を見ていた。

「今日は御父さんはどうしました」

「御父さんは詩の会だ」

誠吾は相變らず普通の顔で答えたが、代助の方は多少可笑しかった。

「姉さんは」

「御客の接待掛りだ」

また嫂あによめが後で不平を云う事だろうと考えると、代助は又可笑しくなつた。

代助は、誠吾の始終忙しがつている様子を知っている。又その忙しさの過半は、こう云う会合から出来上がつているという事実も心得ている。そうして、別に厭いやな顔もせず、一

口の不平も零さず、不規則に酒を飲んだり、物を食ったり、女を相手にしたり、していながら、何時いつ見ても疲れた態たいもなく、噪さわぐ気色もなく、物外に平然として、年々肥満してくる技倆ぎりょうに敬服している。

誠吾が待合へ這入ったり、料理茶屋へ上ったり、晩餐ばんさんに出たり、午餐に呼ばれたり、倶楽部クラブに行ったり、新橋に人を送ったり、横浜に人を迎えたり、大磯おおいそへ御機嫌伺いに行ったり、朝から晩まで多勢の集まる所へ顔を出して、得意にも見えなければ、失意にも思われない様子は、こう云う生活に慣れ抜いて、海月くらげが海に漂いながら、塩水を辛く感じ得ない様なものだろうと代助は考えている。

其所そこが代助には難有ありがたい。と云うのは、誠吾は父と異ちがつて、嘗かつて小むずかしい説法などを代助に向つて遣つた事がない。主義だとか、主張だとか、人生觀だとか云う窮屈なものは、てんで、これっぽかりも口にしないんだから、有あるんだか、無いなんだか、殆んど要領を得ない。その代り、この窮屈な主義だとか、主張だとか、人生觀だとかいうものを積極的に打ち壊して懸ためしつた試もない。実に平凡で好い。

だが面白くはない。話し相手としては、兄よりも嫂の方が、代助に取つて遙はるかに興味がある。兄に逢あうときつとどうだいと云う。以太利イタリーに地震があつたじゃないかと云う。土耳トル

其の天子が廃されたじやないかと云う。その外、向う島の花はもう駄目になった、横浜にある外国船の船底に大蛇が飼つてあつた、誰が鉄道で轢かれた、じやないかと云う。みんな新聞に出た事ばかりである。その代り、当らず障らずの材料はいくらでも持つてゐる。いつまで経つても種が尽きる様子が見えない。

そうかと思うと。時にトルストイと云う人は、もう死んだのかねなどと妙な事を聞く事がある。今日の小説家では誰が一番偉いのかねと聞く事もある。要するに文芸にはまるで無頓着でかつ驚ろくべき無識であるが、尊敬と軽蔑以上に立つて平気で聞くんだから、代助も返事がし易い。

こう云う兄と差し向いで話をしていると、刺激の乏しい代りには、灰汁がなくなつて、氣樂で好い。ただ朝から晩まで出歩いてゐるから滅多に捕まえる事が出来ない。嫂でも、誠太郎でも、縫子でも、兄が終日宅に居て、三度の食事を家族と共に欠かさず食うと、却つて珍らしがる位である。

だから木蔭に立つて、兄と肩を比べた時、代助は丁度好い機会だと思つた。

「兄さん、貴方に少し話があるんだが。何時か暇はありませんか」

「暇」と繰り返した誠吾は、何にも説明せずに笑つて見せた。

「明日の朝はどうです」
あした

「明日の朝は浜まで行つて来なくつちやならない」

「午からは」
ひる

「午からは、会社の方に居る事はあるが、少し相談があるから、来ても緩くり話しちやいられない」

「じゃ晩なら宜かろう」
よ

「晩は帝国ホテルだ。あの西洋人夫婦を明日の晩帝国ホテルへ呼ぶ事になつてゐるから駄目だ」

代助は口を尖がらかして、兄を凝と見た。そうして二人で笑い出した。

「そんなに急ぐなら、今日じゃ、どうだ。今日なら可い。久し振りで一所に飯でも食おうか」

代助は賛成した。ところが倶楽部へでも行くかと思ひの外、誠吾は鰻が可かろうと云ひ出した。

「絹帽で鰻屋へ行くのは始めてだな」と代助は逡巡した。
シルクハット
しゅんじゅん

「何構うものか」

二人は園遊会を辞して、車に乗って、金杉橋の袂にある鰻屋へ上った。

其所は河が流れて、柳があつて、古風な家であつた。黒くなつた床柱の傍の違ひ棚に、絹帽シルクハットを引繰返しに、二つ並べて置いて見て、代助は妙だなと云つた。然し明け放した

二階の間に、たつた二人で胡坐あぐらをかいているのは、園遊会より却て楽であつた。

二人は好い心持に酒を飲んだ。兄は飲んで、食つて、世間話をすればその外に用はないと云う態度であつた。代助も、うっかりすると、肝心の事件を忘れそうな勢であつた。が下女が三本の鉋子ちようしを置いて行つた時に、始めて用談に取り掛つた。代助の用談と云うのは、言うまでもなく、この間三千代から頼まれた金策の件である。

実を云うと、代助は今日までまだ誠吾に無心を云つた事がない。尤も学校を出た時少々芸者買をし過ぎて、その尻を兄になすり付けた覚おぼえはある。その時兄は叱しかるかと思ひの外、そうか、困り者だな、親爺おやじには内々で置けと云つて嫂を通して、奇麗に借金を払つてくれた。そうして代助には一口の小言も云わなかつた。代助はその時から、兄に恐縮おにきしてしまつた。その後小遣に困る事はよくあるが、困るたんびに嫂を痛めて事を済ましていた。従つてこう云う事件に關して兄との交渉は、まあ初対面の様なものである。

代助から見ると、誠吾は蔓つるのない薬缶やかんと同じことで、何処どこから手を出して好いか分らな

い。然しそこが代助には興味があつた。

代助は世間話の体^{てい}にして、平岡夫婦の経歴をそろそろ話し始めた。誠吾は面倒な顔色もせず、へえへえと拍子を取る様に、飲みながら、聞いている。段々進んで三千代が金を借りに来た一段になつても、やっぱりへえへえと合槌^{あいづち}を打つだけである。代助は、仕方なしに、

「で、私も気の毒だから、どうにか心配してみようつて受合つたんですがね」と云つた。

「へえ。そうかい」

「どうでしょう」

「御前金^{おまい}が出来るのかい」

「私^{わたし}や一文も出来やしません。借りるんです」

「誰から」

代助は始めから此所へ落す積りだつたんだから、判然^{はつきり}した調子で、

「貴方から借りて置こうと思うんです」と云つて、改めて誠吾の顔を見た。兄はやっぱり普通の顔をしていた。そうして、平氣に、

「そりや、御廃^{およ}しよ」と答えた。

誠吾の理由を聞いてみると、義理や人情に關係がないばかりではない、返す返さないと言ふ損得にも關係がなかった。ただ、そんな場合には放つて置けば自おのずからどうかなるものだと言ふ單純な断定であつた。

誠吾はこの断定を証明する為ために、色々な例を挙げた。誠吾の門内に藤野と言ふ男が長屋を借りて住んでいる。その藤野が近頃遠縁のものの息子を頼まれて宅うちへ置いた。ところがその子が徴兵検査で急に国へ歸らなければならなくなつたが、前以て国から送つてある学資も旅費も藤野が使い込んでいると云うので、一時の繰り合せを頼みに來た事がある。無論誠吾が直じかに逢つたのではないが、妻さいに云い付けて断らした。それでもその子は期日までに国へ歸つて差支なく検査を済ましている。それからこの藤野の親類の何とか云う男は、自分の持つてゐる貸家の敷金を、つい使つてしまつて、借家人が明日引越すといふ間際まぎわになつても、まだ調達が出來ないとか云つて、やつぱり藤野から泣き付いて來た事がある。然しこれも断らした。それでも別に不都合はなく敷金は返せている。――まだその外にもあつたが、まあこんな種類の例ばかりであつた。

「そりや、姉さんが蔭へ廻つて恵んでゐるに違ない。ハハハハ。兄さんも余つ程呑氣のんきだなあ」と代助は大きな声を出して笑つた。

「何、そんな事があるものか」

誠吾はやはり当り前の顔をしていた。そうして前にある猪口ちよくを取って口へ持つて行つた。

六

その日誠吾は中々金を貸して遣やろうと云わなかつた。代助も三千代が氣の毒だとか、可か哀わい想そうだとか云う泣言は、なるべく避ける様にした。自分が三千代に対してこそ、そう云う心持もあるが、何も知らない兄を、其所そこまで連れて行くのには一通りでは駄目だと思うし、と云つて、無暗むやみにセンチメンタルな文句を口にすれば、兄には馬鹿にされる、ばかりではない、かねて自分を愚弄ぐろうする様な氣がするので、やつぱり平生の代助の通り、のらくらした所を、彼方あつちへ行つたり此方こつちへ来たりして、飲んでいた。飲みながらも、親爺おやじの所いわゆ謂る熱誠が足りないとは、此所ここの事だなど考えた。けれども、代助は泣いて人を動かそうとする程、低級趣味のものではないと自信している。凡およそ何が氣障きざだつて、思わせ振りの、涙や、煩悶はんもんや、真面目まじめや、熱誠ほど氣障きざなものはないと自覺している。兄にはその辺の消息がよく解わかつてゐる。だからこの手で遣り損ないでもしようものなら、生涯自分の価値

を落す事になる。と気が付いていた。

代助は飲むに従つて、段々金を遠ざかつて来た。ただ互が差し向いであるが為めに、旨く飲めたと云う自覚を、互に持ち得る様な話をした。が茶漬を食う段になって、思い出した様に、金は借りなくつても好いから、平岡を何処か使つて遣つてくれないかと頼んだ。

「いや、そう云う人間は御免蒙る。のみならずこの不景氣じゃ仕様がな」と云つて誠吾はさくさく飯を掻き込んでいた。

明日眼が覚めた時、代助は床の中でまず第一番にこう考えた。

「兄を動かすのは、同じ仲間の実業家でなくつちや駄目だ。単に兄弟の好だけではどうする事も出来ない」

こう考えた様なものの、別に兄を不人情と思う気は起らなかった。寧ろその方が当然であると思つた。この兄が自分の放蕩費を苦情も云わずに弁償してくれた事があるんだから可笑しい。そんなら自分が今ここで平岡の為に判を押して、連借でもしたら、どうするだろう。やつぱりあの時の様に奇麗に片付けてくれるだろうか。兄は其所まで考えていて、断わつたんだらうか。或は自分がそんな無理な事はしないものと初から安心して貸さないのかしらん。

代助自身の今の傾向から云うと、到底人の為に判なぞを押しそうにもない。自分もそう思っている。けれども、兄が其所を見抜いて金を貸さないとすると、一寸意外な連帯をして、兄がどんな態度に変わるか、試験してみたくもある。――其所まで来て、代助は自分ながら、あんまり性質が能くはないと心のうちで苦笑した。

けれども、唯一つ慥な事がある。平岡は早晚借用証書を携えて、自分の判を取りにくるに違ない。

こう考えながら、代助は床を出た。門野は茶の間で、胡坐をかいて新聞を読んでいたが、髪を濡らして湯殿から帰って来る代助を見るや否や、急に坐三昧を直して、新聞を畳んで坐蒲団の傍へ押し遣りながら、

「どうも『煤烟』は大変な事になりましたな」と大きな声で云った。

「君読んでるんですか」

「ええ、毎朝読んでます」

「面白いですか」

「面白い様ですな。どうも」

「どんな所が」

「どんな所がつて、そう改たまつて聞かれちゃ困りますが。何じやありませんか、一体に、
 こう、現代的の不安が出ている様じやありませんか」

「そうして、肉の臭いにおがしやしないか」

「しますな。大いに」

代助は黙つてしまつた。

紅茶ぢやわん茶碗まを持つた儘、書齋へ引き取つて、椅子いすへ腰を懸けて、茫然ぼんやり庭を眺めていると、瘤こぶだらけの柘榴ざくろの枯枝と、灰色の幹の根方に、暗緑と暗紅を混ぜ合わせた様な若い芽が、一面に吹き出している。代助の眼にはそれがぱつと映じただけで、すぐ刺激を失つてしまつた。

代助の頭には今具体的な何物をも留めていなかった。あたかも戸外の天氣の様に、それが静かに凝じつと働らいていた。が、その底には微塵みじんの如き本体の分らぬものが無数に押し合つていた。乾酪チーズの中で、いくら虫が動いても、乾酪が元の位置にある間は、気が付かないと同じ事で、代助もこの微震には殆んど自覚を有していなかった。ただ、それが生理的に反射して来る度に、椅子の上で、少しずつ身体からだの位置を変えなければならなかつた。

代助は近頃流行語の様に人が使う、現代的とか不安とか云う言葉を、あまり口にした事

がない。それは、自分が現代的であるのは、云わずと知れていると考えたのと、もう一つは、現代的であるがために、必ずしも、不安になる必要がないと、自分だけで信じていたからである。

代助は露西亞文学に出て来る不安を、天候の具合と、政治の圧迫で解釈していた。仏蘭西文学に出てくる不安を、有夫姦の多いためと見ていた。ダヌンチオによって代表される以太利文学の不安を、無制限の墮落から出る自己欠損の感と判断していた。だから日本の文学者が、好んで不安と云う側からのみ社会を描き出すのを、舶来の唐物の様に見做した。

理智的に物を疑う方の不安は、学校時代に、有ったにはあつたが、ある所まで進行して、びたりと留つて、それから逆戻りをしてしまった。丁度天へ向つて石を抛げた様なものである。代助は今では、なまじい石などを抛げなければ可かつたと思つてゐる。禪坊さんの所謂大疑現前などと云う境界は、代助のまだ踏み込んだ事のない未知国であつた。代助は、そう真率性急に万事を疑うには、あまりに利口に生れ過ぎた男であつた。

代助は門野の賞めた「煤烟」を読んでいる。今日は紅茶茶碗の傍に新聞を置いたなり、開けて見る気にならない。ダヌンチオの主人公は、みんな金に不自由のない男だから、贅

沢いたくの結果ああ云う悪戯いたずらをしても無理とは思えないが、「煤烟」の主人公に至つては、そんな余地のない程に貧しい人である。それを彼所あそこまで押して行くには、全く情愛の力でなくつちや出来る筈はずのものでない。ところが、要吉という人物にも、朋子ともこという女にも、誠の愛で、已やむなく社会の外に押し流されて行く様子が見えない。彼等を動かす内面の力は何であろうと考えると、代助は不審である。ああいう境遇に居て、ああ云う事を断行し得る主人公は、恐らく不安じやあるまい。これを断行するに躊躇ちゅうちよする自分の方にこそ寧ろ不安の分子があつて然るべき筈だ。代助は独りで考えるたびに、自分は特殊人オリジナルだと思ふ。けれども要吉の特殊人オリジナルたるに至つては、自分より遙はるかに上手うわてであると承認した。それでこの間までは好奇心に駆られて「煤烟」を読んでいたが、昨今になって、あまりに、自分と要吉の間に懸隔がある様に思われ出したので、眼を通さない事がよくある。

代助は椅子の上で、時々身を動かした。そうして、自分では飽くまで落ち付いていると思つていた。やがて、紅茶を呑のんでしまつて、例の通り読書に取りかかった。約二時間ばかりは故障なく進行したが、ある頁ページの中頃まで来て急に休やめて頬杖ほおづえを突いた。そうして、傍にあつた新聞を取つて、「煤烟」を読んだ。呼吸の合わない事は同じ事である。それから外の雑報を読んだ。大隈伯おおくまが高等商業の紛擾ふんじょうに関して、大いに騒動しつつある生

徒側の味方をしている。それが中々強い言葉で出ている。代助はこう云う記事を読むと、これは大隈伯が早稲田へ生徒を呼び寄せる為の方便だと解釈する。代助は新聞を放り出した。

午過になつてから、代助は自分が落ち付いていないと云う事を、漸く自覚し出した。腹のなかに小さな皺が無数に出来て、その皺が絶えず、相互の位地と、形状とを変えて、一面に揺れている様な氣持がする。代助は時々こう云う情調の支配を受ける事がある。そうして、この種の経験を、今日まで、単なる生理上の現象としてのみ取り扱つておつた。代助は昨日兄と一所に鰻を食つたのを少し後悔した。散歩がてらに、平岡の所へ行つてみようかと思ひ出したが、散歩が目的か、平岡が目的か、自分には判然たる區別がなかった。婆さんに着物を出さして、着換えようとしている所へ、甥の誠太郎が来た。帽子を手に持ったまま、恰好の好い円い頭を、代助の前へ出して、腰を掛けた。

「もう学校は引けたのかい。早過ぎるじゃないか」

「ちつとも早かない」と云つて、笑いながら、代助の顔を見ている。代助は手を敲いて婆さんと呼んで、

「誠太郎、チョコレートを飲むかい」と聞いた。

「飲む」

代助はチョコレートを二杯命じて置いて誠太郎に調戲からかいだした。

「誠太郎、御前はベースボールばかり遣るもんだから、この頃手が大変大きくなったよ。頭より手の方が大きいよ」

誠太郎はにこにこして、右の手で、円い頭をぐるぐる撫なでた。実際大きな手を持つてゐる。

「叔父さんは、昨日御父さんから奢おごつて貰もらったんですってね」

「ああ、御馳走ごちそうになったよ。御蔭おかげで今日は腹具合が悪くつて不可いけない」

「又神経だ」

「神経じゃない本当だよ。全たく兄さんの所為せいだ」

「だって御父さんはそう云つてましたよ」

「何て」

「明日学校の帰りに代助の所へ廻つて何か御馳走して貰えつて」

「へええ、昨日の御礼にかい」

「ええ、今日は己が奢つたから、明日は向うの番だつて」

「それで、わざわざ遣つて来たのかい」

「ええ」

「兄^{あにき}の子だけあつて、中々抜けないな。だから今チョコレートを飲まして遣るから好いじゃないか」

「チョコレートなんぞ」

「飲まないかい」

「飲む事は飲むけれども」

誠太郎の注文を能く聞いてみると、相撲が始まったら、回^{えこういん}向院へ連れて行つて、正面の最上等の所で見物させろというのであつた。代助は快よく引き受けた。すると誠太郎は嬉^{うれ}しそうな顔をして、突然、

「叔父さんはのらくらしているけれども實際偉いんですつてね」と云つた。代助もこれには一寸呆^{あき}れた。仕方なしに、

「偉いのは知れ切つてゐるじゃないか」と答えた。

「だって、僕は昨^{ゆうべ}夕始めて御父さんから聞いたんですもの」と云う弁解があつた。

誠太郎の云う所によると、昨夕兄が宅へ歸つてから、父と嫂^{あによめ}と三人して、代助の合評を

したらしい。子供のいう事だから、能く分らないが、比較的頭が可いので、能く断片的にその時の言葉を覚えてゐる。父は代助を、どうも見込がなさそうだと評したのでそうだ。

兄はこれに対して、ああ遣つていても、あれで中々解つた所がある。当分放つて置くが可い。放つて置いても大丈夫だ、間違はない。いずれその内に何か遣るだろうと弁護したのでそうだ。すると嫂がそれに賛成して、一週間ばかり前占者に見てもらつたら、この人はきつと人の上に立つに違ないと判断したから大丈夫だと主張したのでそうだ。

代助はうん、それから、と云つて、始終面白そうに聞いていたが、占者の所へ来たら、本当に可笑しくなつた。やがて着物を着換えて、誠太郎を送りながら表へ出て、自分は平岡の家を訪ねた。

平岡の家は、この十数年来の物価騰貴に伴れて、中流社会が次第々々に切り詰められて行く有様を、住宅の上に善く代表した、尤も粗悪な見苦しき構えであつた。とくに代助にはそう見えた。

門と玄関の間が一間位しかない。勝手口もその通りである。そうして裏にも、横にも同じ様な窮屈な家が建てられていた。東京市の貧弱なる膨脹に付け込んで、最低度の資本家が、なけなしの元手を二割及至三割の高利に廻そうと目論で、あたじけなく拵え上げた、

生存競争の記念であつた。

今日の東京市、ことに場末の東京市には、至る所にこの種の家が散点している、のみならず、梅雨に入つた蚤の如く、日毎に、格外の増加律を以て殖えつつある。代助はかつて、これを敗亡の発展と名づけた。そうして、これを目下の日本を代表する最好の象徴とした。

彼等のあるものは、石油缶の底を継ぎ合わせた四角な鱗で蔽われている。彼等の一つを借りて、夜中に柱の割れる音で眼を醒まさないものは一人もない。彼等の戸には必ず節穴がある。彼等の襖は必ず狂いが出ると極っている。資本を頭の中へ注ぎ込んで、月々その頭から利息を取つて生活しようと云う人間は、みんなこういう所を借りて立て籠っている。平岡もその一人であつた。

代助は垣根の前を通るとき、先ずその屋根に眼が付いた。そうして、どす黒い瓦の色が妙に彼の心を刺激した。代助にはこの光のない土の板が、いくらでも水を吸い込む様に思われた。玄関前に、この間引越のときに解いた菰包の藁屑がまだ零れていた。座敷へ通ると、平岡は机の前へ坐つて、長い手紙を書き掛けている所であつた。三千代は次の部屋で筆筒の環をかたかた鳴らしていた。傍に大きな行李が開けてあつて、中から奇麗な

長襦袢ながじゆばんの袖そでが半分出かかっていた。

平岡が、失敬だがちよつと待つてくれと云つた間に、代助は行李と長襦袢と、時々行李の中へ落ちる織ほそい手とを見ていた。襖は明けたまま閉たて切る様子もなかった。が三千代の顔は陰になつて見えなかった。

やがて、平岡は筆を机の上へ抛なげ付ける様にして、座を直した。何だか込み入つた事を懸命に書いていたと見えて、耳を赤くしていた。眼も赤くしていた。

「どうだい。この間は色々難ありがと有う。その後一寸礼に行こうと思つて、まだ行かない」

平岡の言葉は言訳と云わんより寧むしろ挑戦の調子を帯びている様に聞こえた。襯衣シャツも股ももひ引きも着けずきにすぐ胡坐あぐらをかいた。襟を正しく合せないので、胸毛が少し出ている。

「まだ落ち付かないだろう」と代助が聞いた。

「落ち付くどころか、この分じや生涯落ち付きそうもない」と、いそがしそうに烟草たばこを吹かし出した。

代助は平岡が何故なぜこんな態度で自分に応接するか能く心得ていた。決して自分に中あたるのじやない、つまり世間に中いるのである、否いな己いれに中いっているんだと思つて、却かえつて気の毒になつた。けれども代助の様な神経には、この調子が甚だ不愉快に響いた。ただ腹が立た

ないだけである。

「宅うちの都合は、どうだい。間取の具合は可よさそうじゃないか」

「うん、まあ、悪くつても仕方がない。気に入った家へ這はい入ろうと思えば、株でも遣やるより外に仕様がなかろう。この頃東京に出来る立派な家はみんな株屋が拵つづえるんだって云うじゃないか」

「そうかも知れない。その代り、ああ云う立派な家が一軒立つと、その蔭に、どの位沢山な家が潰つぶれているか知れやしない」

「だから猶なほ住み好いだらう」

平岡はこう云つて大いに笑つた。其所そこへ三千代が出て来た。先達せんだつてはと、軽く代助に挨拶あいさつをして、手に持った赤いフランネルのくるくると巻いたのを、坐ると共に、前へ置いて、代助に見せた。

「何ですか、それは」

「赤ん坊ほの着物なの。拵つづえたまま、つい、まだ、解ほどかずにあつたのを、今行李の底を見たら有つたから、出して来たんです」と云いながら、附紐つけひもを解いて筒袖を左右に開いた。

「いら」

「まだ、そんなものを仕舞つといたのか。早く壊して雑巾にでもしてしまえ」

三千代は小供の着物を膝ひざの上に乗せたまま、返事もせずしばらく俯向うつむいて眺めていたが、
「貴方あなたのと同じに拵えたのよ」と云つて夫の方を見た。

「これか」

平岡は紺かすりの衿あわせの下へ、ネルを重ねて、素肌に着ていた。

「これはもう不可いかん。暑くて駄目だ」

代助は始めて、昔の平岡を当まのあたり面に見た。

「衿の下にネルを重ねちやもう暑い。襦袢じゆばんにすると可い」

「うん、面倒だから着ているが」

「洗濯をするから御脱ぎなさいと云つても、中々脱がないのよ」

「いや、もう脱ぐ、己も少々厭いやになった」

話は死んだ小供の事をとうとう離れてしまった。そうして、来た時よりは幾分か空気に

暖あたたかみ味ゆつく

が出来た。平岡は久し振りに一杯飲もうと云い出した。三千代も支度をするから、
緩りして行つてくれと頼む様に留めて、次の間へ立った。代助はその後姿を見て、どうか
して金を拵えてやりたいと思つた。

「君何所か奉公口の見当は付いたか」と聞いた。

「うん、まあ、ある様な無い様なもんだ。無ければ当分遊ぶだけの事だ。緩くり探しているうちにはどうかなるだろう」

云う事は落ち付いているが、代助が聞くと却つて焦つて探している様にしか取れない。

代助は、昨日兄と自分の間に起つた問答の結果を、平岡に知らせようと思つていたのだが、この一言を聞いて、しばらく見合わせる事にした。何だか、構えている向うの体面を、わざと此方から毀損する様な気がしたからである。その上金の事に付いては平岡からはまだ一言の相談も受けた事もない。だから表向挨拶をする必要もないのである。ただ、

こうして黙つていれば、平岡からは、内心で、冷淡な奴だと悪く思われるに極つてゐる。

けれども今の代助はそう云う非難に対して、殆んど無感覚である。又実際自分はそう熱烈な人間じゃないと考へている。三四年前の自分になつて、今の自分を批判してみれば、自分は、墮落しているかも知れない。けれども今の自分から三四年前の自分を回顧してみると、慥かに、自己の道念を誇張して、得意に使い回していた。鍍金を金に通用させようとする切ない工面より、真鍮を真鍮で通して、真鍮相当の侮蔑を我慢する方が楽である。と今は考へている。

代助が真鍮を以て甘んずる様になったのは、不意に大きな狂瀾きょうらんに捲き込まれて、驚ろきの余り、心機一転の結果を来たしたという様な、小説じみた歴史を有もっている為ためではない。全く彼れ自身に特有な思索と觀察の力によつて、次第々々に鍍金を自分で剥はがして来たに過ぎない。代助はこの鍍金の大半をもつて、親爺おやじが捺摺なすり付けたものと信じている。その時分は親爺が金に見えた。多くの先輩が金に見えた。相当の教育を受けたものは、みな金に見えた。だから自分の鍍金が辛つらかった。早く金になりたいと焦つてみた。ところが、他のものほかの地金じがねへ、自分の眼光がじかに打ぶつかる様になつて以後は、それが急に馬鹿な尽力の様に思われ出した。

代助は同時にこう考えた。自分が三四年の間に、これまで変化したんだから、同じ三四年の間に、平岡も、かれ自身の経験の範囲内で大分変化しているだろう。昔しの自分なら、なるべく平岡によく思われたい心から、こんな場合には兄と喧嘩けんかをしても、父と口論くわんをしても、平岡の為に計つたろう、又その計つた通りを平岡の所へ来て事々しく吹聴ふいちょうしたろうが、それを予期するのは、やっぱり昔の平岡で、今の彼はさ程に友達を重くは見ていない。

それで肝心の話は一二言いちにげんで已やめて、あとは色々な雑談に時を過すごすうちに酒が出た。

三千代が徳利の尻しりを持って御酌をした。

平岡は酔うに従つて、段々口が多くなつて来た。この男はいくら酔つても、中々平生を離れない事がある。かと思ふと、大変に元氣づいて、調子に一種の悦樂を帯びて来る。そうなる、普通の酒家以上に、能く弁よずる上に、時としては比較的眞面目まじめな問題を持ち出して、相手と議論を上下しようかして楽し氣に見える。代助はその昔し、麦酒ビールの壘びんを互の間に并べて、よく平岡と戦つた事を覚えてゐる。代助に取つて不思議とも思われるのは、平岡がこう云う状態に陥つた時が、一番平岡と議論がしやすいと云う自覺であつた。又酒を呑ので本音を吐こうか、と平岡の方からよく云つたものだ。今日こんにちの二人の境界はその時分とは、大分離れて来た。そうして、その離れて、近づく路みちを見出し悪い事實を、双方共に腹の中で心得こころえている。東京へ着いた翌日あくるひ、三年振りで邂逅かいこうした二人は、その時既に、二人ともに何時いつか互の傍を立退いていたことを発見した。

ところが今日は妙である。酒に親しめば親しむ程、平岡が昔の調子を出して来た。旨いうまい局所へ酒が回つて、刻下の経済や、目前の生活や、又それに伴う苦痛やら、不平やら、心の底の騒がしさやらを全然麻痺まひしてしまつた様に見える。平岡の談話は一躍して高い平面に飛び上がった。

「僕は失敗したさ。けれども失敗しても働らいている。又これからも働らく積りだ。君は僕の失敗したのを見て笑っている。——笑わないたって、要するに笑つてると同じ事に帰着するんだから構わない。いいか、君は笑っている。笑っているが、その君は何も為^しないじゃないか。君は世の中を、有^{あり}のままで受け取る男だ。言葉を換えて云うと、意志を發展させる事の出来ない男だろう。意志がないと云うのは嘘^{うそ}だ。人間だもの。その証拠には、始終物足りないに違ない。僕は僕の意志を現実社会に働き掛けて、その現実社会が、僕の意志の為に、幾分でも、僕の思い通りになったと云う確証を握らなくっちゃ、生きていけないね。そこに僕と云うものの存在の価値を認めるんだ。君はただ考えている。考えてるだけだから、頭の中の世界と、頭の外の世界を別々に建^{こんりゆう}立^たてて生きている。この大不調和を忍んでいる所が、既に無形の大失敗じゃないか。何故と云って見^み給^{たま}え。僕のはその不調和を外へ出したままで、君のは内に押し込んで置くだけの話だから、外面に押し掛けただけ、僕の方が本当の失敗の度は少ないかも知れない。でも僕は君に笑われている。そうして僕は君を笑う事が出来ない。いや笑いたいんだが、世間から見ると、笑っちゃ不可^いないんだろう」

「何笑つても構わない。君が僕を笑う前に、僕は既に自分を笑っているんだから」

「そりや、嘘だ。ねえ三千代」

三千代は先刻さつきから黙つて坐つていたが、夫から不意に相談を受けた時、にこりと笑つて、代助を見た。

「本当でしょう、三千代さん」と云いながら、代助は盃さかずきを出して、酒を受けた。

「そりや嘘だ。おれの細君が、いくら弁護したつて、嘘だ。尤も君もつとは人を笑つても、自分を笑つても、両方共頭の中で遣る人だから、嘘か本当かその辺はしかと分らないが……」

「冗談云つちや不可ない」

「冗談じゃない。全く本氣の沙汰であります。そりや昔の君はそうじゃ無かつた。昔の君はそうじゃ無かつたが、今の君は大分違つてるよ。ねえ三千代。長井は誰が見たつて、大得意じゃないか」

「何だか先刻さつきから、傍そばで伺がつてると、貴方の方が余つ程御得意の様よ」

平岡は大きな声を出してハハハと笑つた。三千代は爛徳利かんどくりを持つて次の間へ立つた。

平岡は膳さかなの上の肴さかなを二口三口、箸はしで突つついて、下を向いたまま、むしやむしや云わしていたが、やがて、どろんとした眼を上げて、云つた。――

「今日は久し振りに好い心持に酔つた。なあ君。――君はあんまり好い心持にならないね。」

どうも怪しからん。僕が昔の平岡常次郎になつてゐるのに、君が昔の長井代助にならないのは怪しからん。是非なり給え。そうして、大いに遣つてくれ給え。僕もこれから遣る。から君も遣つてくれ給え」

代助はこの言葉のうちに、今の自己を昔に返そうとする真率な又無邪気な一種の努力を認めた。そうして、それに動かされた。けれども一方では、一昨日おととい、食つた麵麩パンを今返せと強請ねだられる様な気がした。

「君は酒を呑むと、言葉だけ酔払つても、頭は大抵確かな男だから、僕も云うがね」
「それだ。それでこそ長井君だ」

代助は急に云うのが厭になつた。

「君、頭は確たしかかい」と聞いた。

「確だとも。君さえ確なら此方こつちは何時でも確だ」と云つて、ちゃんと代助の顔を見た。實際自分の云う通りの男である。そこで代助が云つた。――

「君はさつきから、働らない働らないと云つて、大分僕を攻撃したが、僕は黙つていた。攻撃される通り僕は働らない積りだから黙つていた」

「何故働かない」

「何故働かないって、そりや僕が悪いんじゃない。つまり世の中が悪いのだ。もつと、大袈裟おげさに云うと、日本対西洋の關係が駄目だから働かないのだ。第一、日本程借金を拵こしらえて、貧乏震いをしている国はありやしない。この借金が君、何時になつたら返せると思うか。そりや外債位は返せるだろう。けれども、そればかりが借金じゃありやしない。日本は西洋から借金でもしなければ、到底立ち行ゆかない国だ。それでいて、一等国を以て任じている。そうして、無理にも一等国の仲間入をしようとする。だから、あらゆる方面に向つて、奥行を削つて、一等国だけの間口を張つちまつた。なまじい張れるから、なお悲惨なものだ。牛と競争をする蛙かえると同じ事で、もう君、腹が裂けるよ。その影響はみんな我々個人の上に反射しているから見給え。こう西洋の圧迫を受けている国民は、頭に余裕がないから、碌ろくな仕事は出来ない。悉く切り詰めた教育で、そうして目の廻る程き使われるから、揃そろつて神経衰弱になつちまう。話をして見給え大抵は馬鹿だから。自分の事と、自分の今日の、只今の事より外に、何も考えてやしない。考えられない程疲労しているんだから仕方がない。精神の困憊こんぱいと、身体しんたいの衰弱とは不幸にして伴なっている。のみならず、道德の敗退も一所に來ている。日本国中何所を見渡したって、輝いてる断面は一寸四方も無いじゃないか。悉く暗黒だ。その間に立つて僕一人が、何と云つたって、何を為たつて、

仕様がないう。僕は元来怠けものだ。いや、君と一所に往来している時分から怠けものだ。あの時は強いて景気をつけていたから、君には有為多望の様に見えたんだろう。そりや今だって、日本の社会が精神的、徳義的、身体的に、大体の上に於て健全なら、僕は依然として有為多望なのさ。そうなれば遣る事はいくらでもあるからね。そうして僕の怠惰性に打ち勝つだけの刺激もまたいくらでも出来て来るだろうと思う。然しこれじゃ駄目だ。今の様なら僕は寧ろ自分だけになっている。そうして、君の所謂有のままの世界を、有のままで受取つて、その中僕に尤も適したものに接触を保つて満足する。進んで外の人を、此方の考え通りにするなんて、到底出来た話じゃありやしないもの——」

代助は一息を継いだ。ちよつと。そうして、一寸窮屈そうに控えている三千代の方を見て、御世辞を遣つた。

「三千代さん。どうです、私の考は。随分呑氣で宜いでしよう。賛成しませんか」

「何だか厭世の様な呑氣の様な妙なね。私よく分らないわ。けれども、少し胡麻化していらつしやる様よ」

「へええ。何処ん所を」

「何処ん所つて、ねえ貴方」と三千代は夫を見た。平岡は股の上へ肱を乗せて、肱の上へ

顎あごを載せて黙っていたが、何にも云わずに盃を代助の前に出した。代助も黙って受けた。三千代は又酌をした。

代助は盃へ唇を付けながら、これから先はもう云う必要がないと感じた。元来が平岡を自分の様に考え直させる為の弁論でもなし、又平岡から意見されに來た訪問でもない。二人はいつまで立つても、二人として離れていなければならぬ運命を有もっているんだと、始めから心付ているから、議論は能い加減に引き上げて、三千代の仲間入りの出来る様な、普通の社交上の題目に談話を持って来ようと試みた。

けれども、平岡は酔うとしつこくなる男であつた。胸毛の奥まで赤くなった胸を突き出して、こう云つた。

「そいつは面白い。大いに面白い。僕みた様に局部に當つて、現実と悪闘しているものは、そんな事を考える余地がない。日本が貧弱だつて、弱虫だつて、働らいてるうちは、忘れているからね。世の中が墮落したつて、世の中の墮落に気が付かないで、その中うちに活動するんだからね。君の様な暇ひま人じんから見れば日本の貧乏や、僕等の墮落が気になるかも知れないが、それはこの社会に用のない傍觀者にして始めて口にすべき事だ。つまり自分の顔を鏡で見る余裕があるから、そうなるんだ。忙がしい時は、自分の顔の事なんか、誰だつ

て忘れているじゃないか」

平岡は饒舌しゃべつてゐるうち、自然とこの比喩ひゆに打ぶつかつて、大いなる味方を得た様な心持がしたので、其所そこで得意に一段落をつけた。代助は仕方なしに薄笑いをした。すると平岡はすぐ後を附加えた。

「君は金に不自由しないから不可いけない。生活に困らないから、働らく気にならないんだ。要するに坊ちゃんだから、品の好い様なことばかり云つていて、――」

代助は少々平岡が小憎らしくなつたので、突然中途で相手を遮さえぎつた。

「働らくのも可いいが、働らくなら、生活以上の働はたらきでなくつちや名誉にならない。あらゆる神聖な労力は、みんな麵麩パンを離れている」

平岡は不思議に不愉快な眼をして、代助の顔を窺うかがつた。そうして、

「何故なぜ」と聞いた。

「何故つて、生活の為めの労力は、労力の為めの労力でないもの」

「そんな論理学の命題みた様なものは分らないな。もう少し實際的の人間に通じる様な言葉で云つてくれ」

「つまり食う為めの職業は、誠実にや出来悪にくいと云う意味さ」

「僕の考えとはまるで反対だね。食う為めだから、猛烈に働らく気になるんだろう」

「猛烈には働らせるかも知れないが誠実には働らき悪いよ。食う為の働らきと云うと、つまり食うのと、働らくのと何方が目的だと思う」

「無論食う方さ」

「それ見給え。食う方が目的で働らく方が方便なら、食い易い様に、働らき方を合せて行くのが当然だろう。そうすりや、何を働らいたって、又どう働らいたって、構わない、只麵麴が得られれば好いと云う事に帰着してしまふじやないか。労力の内容も方向も乃至順序も悉く他から制^{せい}肘^{ちゆう}される以上は、その労力は墮落の労力だ」

「まだ理論的だね、どうも。それで一向差^さ支^しないじやないか」

「では極上品な例で説明してやろう。古臭い話だが、ある本でこんな事を読んだ覚えがある。織田信長が、ある有名な料理人を抱えたところが、始めて、その料理人の拵えたものを食ってみると頗る不味かつたんで、大変小言を云ったそうだ。料理人の方では最上の料理を食わして、叱られたものだから、その次からは二流もしくは三流の料理を主人にあてがって、始終褒められたそうだ。この料理人を見給え。生活の為に働らく事は抜目のない男だろうが、自分の技芸たる料理その物のために働らく点から云えば、頗る不誠実じやな

いか、墮落料理人じゃないか」

「だってそうしなければ解雇されるんだから仕方があるまい」

「だからさ。衣食に不自由のない人が、云わば、物数奇ものずきにやる働らきでなくつちや、真面目な仕事は出来るものじゃないんだよ」

「そうすると、君の様な身分のもでなくつちや、神聖の労力は出来ない訳だ。じや益遣ますまする義務がある。なあ三千代」

「本当ですわ」

「何だか話が、元へ戻っちまった。これだから議論は不可ないよ」と云って、代助は頭を掻かいた。議論はそれで、とうとう御仕舞になった。

七

代助は風呂へ這入はいった。

「先生、どうです、御爛は。もう少し燃もさせましょうか」と門野が突然入り口から顔を出した。門野はこう云う事には能よく気の付く男である。代助は、凝じっと湯に浸つかったまま、

「結構」と答えた。すると、門野が、

「ですか」と云い棄てて、茶の間の方へ引き返した。代助は門野の返事のし具合に、いたく興味を有^もつて、独りにやにやと笑った。代助には人の感じ得ない事を感じる神経がある。それが為^{ため}時々苦しい思もする。ある時、友達の御親爺^{おやじ}さんが死んで、葬式の供に立つたが、不図その友達が装束を着て、青竹を突いて、柩^{ひつぎ}のあとへ付いて行く姿を見て可笑^{おか}しくなつて困つた事がある。又ある時は、自分の父から御談義を聞いている最中に、何の気もなく父の顔を見たら、急に吹き出さなくなつて弱り抜いた事がある。自宅に風呂を買わない時分には、つい近所の銭湯に行つたが、其所^{そこ}に一人の骨^{こつかく}格^{たく}の遅^{おく}ましい三助がいた。これが行くたんびに、奥から飛び出して来て、流ししようと云つては脊中^{せなか}を擦^{こす}る。代助は其奴^{そいつ}に体をごしごし遣^やられる度に、どうしても、埃及人^{エジプトじん}に遣^やられている様な気がした。いくら思い返しても日本人とは思えなかった。

まだ不思議な事がある。この間、ある書物を読んだら、ウエバーと云う生理学者は自分の心臓の鼓動を、増したり、減したり、随意に変化させたと書いてあつたので、平生から鼓動を試験する癖のある代助は、ために遣^やつてみたくなって、一日に二三回位怖^{こわ}々^{ごわ}ながら試しているうちに、どうやら、ウエバーと同じ様になりそうなので、急に驚^{おど}ろいて已^や

めにした。

湯のなかに、静かに浸っていた代助は、何の気なしに右の手を左の胸の上へ持つて行つたが、どんどんと云う命の音を二三度聞くや否や、忽ちウエバーを思い出して、すぐ流しへ下りた。そうして、其所に胡坐をかいたまま、茫然と、自分の足を見詰めていた。するとその足が変になり始めた。どうも自分の胴から生えているんでなくて、自分とは全く無関係のものが、其所に無作法に横わつてゐる様に思われて来た。そうなると、今までは気が付かなかつたが、実に見るに堪えない程醜くいものである。毛が不揃に延びて、青い筋が所々に蔓つて、如何にも不思議な動物である。

代助は又湯に這入つて、平岡の云つた通り、全く暇があり過ぎるので、こんな事まで考えるのかと思つた。湯から出て、鏡に自分の姿を写した時、又平岡の言葉を思い出した。幅の厚い西洋髪剃で、顎と頬を剃る段になつて、その鋭い刃が、鏡の裏で閃く色が、一種むず痒い様な氣持を起さした。これが烈しくなると、高い塔の上から、遙かの下を見下すのと同じになるのだと意識しながら、漸く剃り終つた。

茶の間を抜けようとする拍子に、

「どうも先生は旨いよ」と門野が婆さんに話していた。

「何が旨いんだ」と代助は立ちながら、門野を見た。門野は、
「やあ、もう御上りですか。早いですな」と答えた。この挨拶では、もう一遍、何が旨いんだと聞かれもしくなつたので、そのまま書斎へ帰つて、椅子に腰を掛けて休息していた。

休息しながら、こう頭が妙な方面に鋭どく働き出しちや、身体の毒だから、些と旅行でしようかと思つてみた。一つは近来持ち上つた結婚問題を避けるに都合が好いとも考えた。すると又平岡の事が妙に気に掛つて、転地する計画をすぐ打ち消してしまつた。それを能く煎じ詰めてみると、平岡の事が気に掛るのではない、やっぱり三千代の事が気にかかるのである。代助は其所まで押して来ても、別段不徳義とは感じなかつた。寧ろ愉快な心持がした。

代助が三千代と知り合になつたのは、今から四五年前の事で、代助がまだ学生の頃であつた。代助は長井家の関係から、当時交際社会の表面にあらわれて出た、若い女の顔も名も、沢山に知つていた。けれども三千代はその方面の婦人ではなかつた。色合から云うと、もつと地味で、氣持から云うと、もう少し沈んでいた。その頃、代助の学友に菅沼と云うのがあつて、代助とも平岡とも、親しく附合つていた。三千代はその妹である。

この菅沼は東京近県のもので、学生になった二年目の春、修業の為と号して、国から妹を連れて来ると同時に、今までの下宿を引き払って、二人して家を持った。その時妹は国の高等女学校を卒業したばかりで、年は慥十八とか云う話であったが、派手な半襟を掛けて、肩をしていた。そうして程なくある女学校へ通い始めた。

菅沼の家は谷中の清水町で、庭のない代りに、縁側へ出ると、上野の森の古い杉が高く見えた。それがまた、錆た鉄の様に、頗る異い色をしていた。その一本は殆ど枯れ掛かつて、上の方には丸裸の骨ばかり残った所に、夕方になると鳥が沢山集まって鳴いていた。隣には若い画家が住んでいた。車もあまり通らない細い横町で、至極閑静な住居であった。代助は其所へ能く遊びに行った。始めて三千代に逢った時、三千代はただ御辞儀をしただけで引込んでしまった。代助は上野の森を評して帰って来た。二返行つても、三返行つても、三千代はただ御茶を持つて出るだけであつた。その癖狭い家だから、隣の室にいるより外はなかつた。代助は菅沼と話しながら、隣の室に三千代がいて、自分の話を聴いているという自覚を去る訳に行かなかつた。

三千代と口を利き出したのは、どんな機会であつたか、今では代助の記憶に残っていない。残っていない程、瑣末な尋常の出来事から起つたのだろう。詩や小説に厭いた代助に

は、それが却^{かえ}つて面白かった。けれども一旦口を利き出してからは、やっぱり詩や小説と同じ様に、二人はすぐ心安くなつてしまつた。

平岡も、代助の様に、よく菅沼の家へ遊びに来た。あるときは二人連れ立つて、来た事もある。そうして、代助と前後して、三千代と懇意になつた。三千代は兄とこの二人に食^くついで、時々池^{いけ}の端^{はた}などを散歩した事がある。

四^{よつたり}人はこの関係で約二年足らず過ぎた。すると菅沼の卒業する年の春、菅沼の母と云うのが、田舎から遊びに出て来て、しばらく清水町に泊つていた。この母は年に一二度ずつは上京して、子供の家に五六日^{ごろうんち}寐起^{ねおき}する例になつていたんだが、その時は帰る前日から熱が出だして、全く動けなくなつた。それが一週間の後^{チフス}窒扶斯と判明したので、すぐ大学病院へ入れた。三千代は看護の為附添として一所に病院に移つた。病人の経過は、一時^{やや}稍佳良であつたが、中途からぶり返して、とうとう死んでしまつた。そればかりではない。窒扶斯が、見舞に来た兄に伝染して、これも程なく亡^なくなつた。国にはただ父親が一人残つた。

それが母の死んだ時も、菅沼の死んだ時も出て来て、始末をしたので、生前に関係の深かつた代助とも平岡とも知り合になつた。三千代を連れて国へ帰る時は、娘とともに二人

の下宿を別々に訪ねて、暇いとまご乞かたがた旁礼を述べた。

その年の秋、平岡は三千代と結婚した。そうしてその間に立ったものは代助であつた。尤も表向きは郷里の先輩を頼んで、媒酌人として式に連なつて貰つたのだが、身体を動かして、三千代の方を纏めたものは代助であつた。

結婚して間もなく二人は東京を去つた。国に居た父は思わざるある事情の為に余儀なくされて、これもまた北海道へ行つてしまった。三千代は何方かと云えば、今心細い境遇に居る。どうかして、この東京に落付いていられる様にして遣りたい気がする。代助はもう一返嫂あによめに相談して、この間の金を調達する工面を試してみようかと思つた。又三千代に逢つて、もう少し立ち入つた事情を委しく聞いてみようかと思つた。

けれども、平岡へ行つたところで、三千代が無暗むやみに洗ぎい浚ざらい饒舌しゃべり散らす女ではなし、よしんばどうして、そんな金が要る様になつたかの事情を、詳しく聞き得たにしようで、夫婦の腹の中なんぞは容易に探られる訳のものではない。——代助の心の底を能く見詰めていると、彼の本当に知りたい点は、却つて此所に在ると、自から承認しなければならなくなる。だから正直を云うと、何故に金が入用であるかと研究する必要は、もう既に通り越していたのである。実は外面の事情は聞いても聞かなくつても、三千代に金を貸し

て満足させたい方であつた。けれども三千代の歡心を買う目的を以て、その手段として金を^{こしち}拵える気はまるでなかつた。代助は三千代に対して、それ程政略的な料簡を起す余裕を有つていなかつたのである。

その上平岡の留守へ行き^ゆ中^あてて、今日までの事情を、特に經濟の点に關してだけでも、充分聞き出すのは困難である。平岡が家^{うち}にいる以上は、詳しい話の出来ないのは知れ切つている。出来ても、それを一から十まで真に受ける訳には行かない。平岡は世間的な色々の動機から、代助に見栄を張つている。見栄のいらぬ所でも一種の考から沈黙を守つてゐる。

代助は、ともかくもまず嫂に相談してみようと決心した。そうして、自分ながら甚だ覺^おぼつか束^{づか}ないとは思つた。今まで嫂にちびちび、無心を吹き掛けた事は何度もあるが、こう短兵急に痛め付けるのは始めてである。然^{しか}し梅子は自分の自由になる資産をいくらか持つてゐるから、或は出来ないとも限らない。それで駄目なら、又高利でも借りるのだが、代助はまだ其所までには氣が進んでいなかつた。ただ早晚平岡から表向きに、連帶責任を強いられて、それを断わり切れない位なら、一層^{いっそう}此方^{こつち}から進んで、直接に三千代を喜ばしてやる方が遙かに愉快だという取捨の念だけは殆んど理窟^{りくつ}を離れて、頭の中に潜んでいた。

生暖かい風の吹く日であつた。曇つた天氣が何時までも無精に空に引掛つて、中々暮れそうにない四時過から家を出て、兄の宅まで電車で行つた。青山御所の少し手前まで来ると、電車の左側を父と兄が綱曳で急がして通つた。挨拶をする暇もないうちに擦れ違つたから、向うは元より氣が付かずに過ぎ去つた。代助は次の停留所で下りた。

兄の家の門を這入ると、客間でピアノの音がした。代助は一寸砂利の上に立ち留つたが、すぐ左へ切れて勝手口の方へ廻つた。其所には格子の外に、ヘクターと云う英国産の大きな犬が、大きな口を革紐で縛られて臥ていた。代助の足音を聞くや否や、ヘクターは毛の長い耳を振つて、斑な顔を急に上げた。そうして尾を揺かした。

入口の書生部屋を覗き込んで、敷居の上に立ちながら、二言三言愛嬌を云つた後、すぐ西洋間の方へ来て、戸を開けると、嫂がピアノの前に腰を掛けて両手を動かしていた。その傍に縫子が袖の長い着物を着て、例の髪を肩まで掛けて立っていた。代助は縫子の髪を見るたんびに、ブランコに乗つた縫子の姿を思い出す。黒い髪と、淡紅色のリボンと、それから黄色い縮緬の帯が、一時に風に吹かれて空に流れる様を、鮮かに頭の中に刻み込んでゐる。

母子は同時に振り向いた。

「おや」

縫子の方は、黙って馳^かけて来た。そうして、代助の手をぐいぐい引張った。代助はピアノの傍まで来た。

「如何なる名人が鳴らしているのかと思った」

梅子は何にも云わずに、額に八の字を寄せて、笑いながら手を振り振り、代助の言葉を遮^{さえ}ぎった。そうして、向うからこう云った。

「代さん、此所ん所を一寸遣つて見せて下さい」

代助は黙つて嫂と入れ替った。譜を見ながら、両方の指をしばらく奇麗に働かした後、「こうだろう」と云つて、すぐ席を離れた。

それから三十分程の間、母子して交^{かわ}る交^{がわ}る楽器の前に坐つては、一つ所を復習していたが、やがて梅子が、

「もう廃^よしましょう。彼方^{あつち}へ行つて、御飯でも食^{たべ}ましょう。叔父さんもいらつしやい」と云いながら立つた。部屋のなかはもう薄暗くなっていた。代助は先刻^{さつき}から、ピアノの音を聞いて、嫂や姪^{めい}の白い手の動く様子を見て、そうして時々は例の欄間の画を眺めて、三千代の事も、金を借りる事も殆んど忘れていた。部屋を出る時、振り返ったら、紺^{こん}青^{じょう}の

波が摧^{くだ}けて、白く吹き返す所だけが、暗い中に判然^{はつきり}見えた。代助はこの大濤^{おなみ}の上に黄^こ金色^{がねいろ}の雲の峰を一面に描^かかした。そうして、その雲の峰をよく見ると、真裸^{まはだか}な女^{によしよ}性の巨人が、髪を乱し、身を躍^うらして、一団となつて、暴れ狂^あつてゐる様に、旨く輪^{りんか}廓^くを取らした。代助はヴァルキルを雲に見立てた積りでこの図を注文したのである。彼はこの雲の峰だか、又巨大な女性だか、殆んど見分けの付かない、偉な塊を脳中に髣髴^{ほうふ}して、ひそかに嬉^{うれ}しがつていた。がさて出来上つて、壁の中へ嵌^はめ込んでみると、想像したよりは不味^{まず}かつた。梅子と共に部屋を出た時は、このヴァルキルは殆んど見えなかつた。紺青の波は固^{もと}より見えなかつた。ただ白い泡の大きな塊が薄白く見えた。

居間にはもう電燈が点^ついていた。代助は其所で、梅子と共に晩食を済ました。子供二人も卓を共にした。誠太郎に兄の部屋からマニラを一本取つて来さして、それを吹かしながら、雑談をした。やがて、子供は明日^{あした}の下読をする時間だと云うので、母から注意を受けて、自分の部屋へ引き取つたので、後は差し向^{むかい}になつた。

代助は突然例の話を持ち出すのも、変なものだと思つて、関係のない所からそろそろ進行を始めた。先^まず父と兄が綱^{つな}曳^びで車を急^きがして何所^{どこ}へ行つたのだとか、この間は兄さんに御馳走^{ごちそう}になつたとか、あなたは何故^{なぜ}麻布の園遊会へ来なかつたのだとか、御父さんの漢詩

は大抵法螺^{ほら}だとか、色々聞いたり答えたりしているうちに、一つ新しい事実を発見した。それは外でもない。父と兄が、近来目に立つ様に、忙しそうに奔走し始めて、この四五日^{しごんち}は碌々^{ろくろく}寐^ねるひもない位だと云う報知である。全体何が始つたんですと、代助は平気な顔で聞いてみた。すると、嫂も普通の調子で、そうですね、何か始つたんでしょう。御父さんも、兄さんも私^{わたし}には何にも仰^{おつ}しやらないから、知らないけれどもと答えて、代さんは、それよりかこの間の御嫁さんをと云い掛けている所へ、書生が這入つて来た。

今夜も遅くなる、もし、誰と誰が来たら何とか屋へ来る様に云つてくれと云う電話を伝えたまま、書生は再び出て行つた。代助は又結婚問題に話が戻ると面倒だから、時に姉さん、些^{ちつと}御願があつて来たんだが、とすぐ切り出してしまった。

梅子は代助の云う事を素直に聞いていた。代助は凡て^{すべ}を話すに約十分ばかり費やした。最後に、

「だから思い切つて貸して下さい」と云つた。すると梅子は真面目な顔をして、

「そうね。けれども全体何時返す気なの」と思いも寄らぬ事を問い返した。代助は顎^{あご}の先を指で撮^{つま}んだまま、じつと嫂の気色を窺^{うかが}つた。梅子は益真面目な顔をして、又こう云つた。「皮肉じゃないのよ。怒つちや不可^{いけ}ませんよ」

代助は無論怒つてはいなかった。ただ姉弟きょうだいからこういう質問を受けようと予期して
 いなかっただけである。今更返す気だの、貰う積りだのと布衍ふえんすればする程馬鹿になるば
 かりだから、甘んじて打撃を受けていただけである。梅子は漸やく手に余る弟おとうとを取つて抑
 えた様な気がしたので、後が大変云い易やすかった。――

「代さん、あなたは不断から私を馬鹿にして御出おいでなさる。――いいえ、厭味いやみを云うんじや
 ない、本当の事なんですもの、仕方がない。そうでしょう」

「困りますね、そう真剣に詰問きつもんされちゃ」

「善よござんすよ。胡魔化ごまかさないでも。ちゃんと分つてるんだから。だから正直にそうだと
 云つて御しまいなさい。そうでないと、後が話せないから」

代助は黙つてにやにや笑つていた。

「でしよう。そら御覧なさい。けれども、それが当り前よ。ちつとも構やしません。いく
 ら私わたしが威張つたつて、貴方あなたに敵かないっこないのは無論ですもの。私と貴方とは今まで通りの
 関係で、御互いに満足なんだから、文句はありやしません。そりやそれで好いとして、貴
 方は御父さんも馬鹿にしていらつしやるのね」

代助は嫂の態度の真率な所が氣に入つた。それで、

「ええ、少しは馬鹿にしています」と答えた。すると梅子はさも愉快そうにハハハハと笑った。そうして云った。

「兄さんも馬鹿にしていらつしやる」

「兄さんですか。兄さんは大いに尊敬している」

「嘘うそを仰うしやい。序ついでだから、みんな打ち散ふけて御ましまいなさい」

「そりや、或点では馬鹿にしない事もない」

「それ御覧なさい。あなたは一ことごと家族中悉く馬鹿にしていらいつしやる」

「どうも恐れ入りました」

「そんな言訳はどうでも好いんですよ。貴方から見れば、みんな馬鹿にされる資格があるんだから」

「もう、廢よそうじやありませんか。今日は中々きびしいですね」

「本当なのよ。それで差支ないんですよ。喧嘩けんかも何も起らないんだから。けれどもね、そんなに偉い貴方が、何故私なんぞから、御金を借りる必要があるの。可笑おかしいじゃありませんか。いえ、揚足を取ると思うと、腹が立つでしょう。そんなじやありません。それ程偉い貴方でも、御金がないと、私みた様なものに頭を下げなけりやなくなる」

「だから先きから頭を下げているんです」

「まだ本気で聞いていらつしやらないのね」

「これが私の本気な所なんです」

「じゃ、それも貴方の偉い所かも知れない。然し誰も御金を貸し手がなくなつて、今の御友達を救つて上げる事が出来なかつたら、どうなさる。いくら偉くつても駄目じゃありませんか。無能力な事は車屋と同なしですもの」

代助は今まで嫂がこれ程適切な異見を自分に向つて加え得ようとは思わなかつた。実は金の工面を思い立つてから、自分でもこの弱点を冥々^{めいめい}の裡に感じていたのである。

「全く車屋ですね。だから姉さんに頼むんです」

「仕方がないのね、貴方は。あんまり、偉過ぎて。一人で御金を御取んなさいな。本当の車屋なら貸して上げない事もないけれども、貴方には厭よ。だって余りじやありませんか。月々兄さんや御父さんの厄介になつた上に、人の分まで自分に引受けて、貸してやろうつて云うんだから。誰も出したくはないじやありませんか」

梅子の云う所は実に尤^{もつと}ものである。然し代助はこの尤を通り越して、気が付かず^{もつと}にいた。振り返つてみると、後の方に姉と兄と父がかたまつていた。自分も後戻りをして、世間並

にならなければならぬと感じた。家を出る時、嫂から無心を断わられるだろうとは氣遣った。けれどもそれが為めに、大いに働らいて、自から金を取らねばならぬという決心は決して起し得なかつた。代助はこの事件をそれ程重くは見えていなかったのである。

梅子は、この機会を利用して、色々の方面から代助を刺激しようと力めた。ところが代助には梅子の腹がよく解つていた。解れば解る程激する氣にならなかつた。そのうち話題は金を離れて、再び結婚に戻つて来た。代助は最近の候補者に就て、この間から親爺に二度程悩まされている。親爺の論理は何時間聞いても昔し風に甚だ義理堅いものであつたが、その代り今度はさ程権柄けんべいづくでもなかつた。自分の命の親に当る人の血統を受けたものと縁組をするのは結構な事であるから、貰つてくれと云うのである。そうすれば幾分か恩が返せると云うのである。要するに代助から見ると、何が結構なのか、何が恩返しに当るのか、まるで筋の立たない主張であつた。尤も候補者自身に就ては、代助も格別の苦情は持つていなかった。だから父の云う事の当否は論弁の限にあらずとして、貰えば貰つても構わなかつた。代助はこの二三年来、凡ての物に対して重きを置かない習慣になつた如く、結婚に対しても、あまり重きを置く必要を認めていなかった。佐川の娘というのは只写真で知っているばかりであるが、それだけでも沢山な様な氣がした。——尤も写真は十分美

くしかつた。——従つて、貰うとなれば、そう面倒な条件を持ち出す考も何もなかつた。ただ、貰いましょうと云う確答が出なかつただけである。

その不明^{ふめい}晰^{せき}な態度を、父に評させると、まるで要領を得ていない鈍物同様の挨拶^{あいさつ}振になる。結婚を生死の間に横^{よこ}わる一大要件と見倣^{みな}して、あるゆる他の出来事を、これに従属させる考えの嫂から云わせると、不可思議になる。

「だって、貴方だって、生涯一人でいる気でもないでしょう。そう我^{わが}儘^{まま}を云わないで、好い加減な所で極めてしまつたらどうです」と梅子は少し焦^しれたそうに云つた。

生涯一人でいるか、或は妾^{めかけ}を置いて暮すか、或は芸者と關係をつけるか、代助自身にも明^{めい}瞭^{りょう}な計画はまるでなかつた。只、今の彼は結婚というものに対して、他の独身者の様に、あまり興味を持てなかつた事は慥^{たしか}である。これは、彼の性情が、一図に物に向つて集注し得ないのと、彼の頭が普通以上に鋭どくつて、しかもその鋭さが、日本現代の社会状況のために、幻^{イリュージョン}像 打破の方面に向つて、今日まで多く費やされたのと、それから最後には、比較的金錢に不自由がないので、ある種類の女を大分多く知っているのとの三力条に、帰着するのである。が代助は其所^{そこ}まで解剖して考える必要は認めていなかった。ただ結婚に興味がないと云う、自己に明かな事実を握つて、それに応じて未来を自然に延

ばして行く気でいた。だから、結婚を必要事件と、初手から断定して、何時かこれを成立させようと喘^{あせ}る努力を、不自然であり、不合理であり、かつあまりに俗臭を帯びたものと解釈した。

代助は固^{もと}よりこんな哲^{フィロソフィー}理を嫂に向つて講釈する気はなかった。が、段々押し詰られると、苦し紛れに、

「だが、姉さん、僕はどうしても嫁を貰わなければならないのかね」と聞く事がある。代助は無論真面目に聞く積りだけれども、嫂の方では呆^{あき}れてしまう。そうして、自分を茶にするのだと取る。梅子はその晩代助に向つて、平生^{いつも}の手續を繰り返した後で、こんな事を云った。

「妙なのね、そんなに厭がるのは。——厭なんじゃないって、口では仰しやるけれども、貰わなければ、厭^{おん}なのと同^{おん}なしじゃありませんか。それじゃ誰か好きなのがあるんでしょ。その方の名^{おん}を仰^{おん}やい」

代助は今まで嫁の候補者としては、ただの一人^{いちにん}も好いた女を頭の中に指名していた覚えがなかった。が、今こう云われた時、どう云う訳か、不意に三千代という名が心に浮かんだ。つづいて、だから先刻^{さつき}云った金を貸して下さい、という文句^{おのず}が自^{おの}から頭の中で出来上

った。——けれども代助はただ苦笑して嫂の前に坐っていた。

八

代助が嫂あによめに失敗して帰った夜は、大分更ふけていた。彼は辛うじて青山の通りで、最後の電車を捕つかまえた位である。それにも拘かわらず彼の話している間には、父も兄も帰って来なかった。尤もその間に梅子は電話口へ二返呼しかばれた。然し、嫂の様子に別段変った所もないので、代助は此方こつちから進んで何にも聞かなかった。

その夜は雨あめもよい、催もよの空が、地面と同じ様な色に見えた。停留所の赤い柱の傍そばに、たった一人立って電車を待ち合あわしていると、遠い向うから小さい火の玉があらわれて、それが一直線に暗い中を上下うへしたに揺れつつ代助の方に近ちかづいて来るのが非常に淋しく感ぜられた。乗り込んで見ると、誰も居なかつた。黒い着物を着た車掌と運転手の間に挟まれて、一種の音に埋うづまって動いて行くと、動いている車の外は真暗である。代助は一人明るい中に腰を掛けて、どこまでも電車に乗って、終ついに下りる機会が来ないまで引つ張り廻される様な気がした。

神樂坂^{かぐろざか}へかかると、寂^{ひつ}りとした路^{みち}が左右の二階家に挟^{はさ}まれて、細長く前^{まえ}を塞^{ふさ}いでいた。中途^{ちゅう}まで上^{のぼ}つて来たら、それが急に鳴り出した。代助は風^{かぜ}が家の棟^{むね}に当^{あた}る事と思つて、立ち留^{とど}まつて暗い軒を見上げながら、屋根から空をぐるりと見廻すうちに、忽^{たちま}ち一種の恐怖に襲^{おそ}われた。戸と障子と硝子^{ガラス}の打ち合う音が、見る見る烈^{はげ}しくなつて、ああ地震だと気が付いた時は、代助の足は立ちながら半ば竦^{すく}んでいた。その時代助は左右の二階家が坂を埋むべく、双方から倒れて来る様に感じた。すると、突然右側の潜^{くぐ}り戸をがらりと開けて、小供を抱いた一人の男が、地震だ地震だ、大きな地震だと云つて出て来た。代助はその男の声を聞いて漸^{ようや}く安心した。

家へ着いたら、婆^{ばあ}さんも門野も大いに地震の噂^{うわさ}をした。けれども、代助は、二人とも自分程には感じなかつたろうと考えた。寐^ねてから、又三千代の依頼をどう所置しようかと思案してみた。然し分別を凝らすまでには至らなかつた。父と兄の近來の多忙は何事だろうと推^{すい}してみた。結婚は愚図々々にして置こうと了^{りようけん}簡^{かん}を極めた。そうして眠^いに入^いつた。

その明日^{あくるひ}の新聞に始めて日糖事件なるものがあらわれた。砂糖を製造する会社の重役が、会社の金を使用して代議士の何名かを買収したと云う報知である。門野は例の如く重役や代議士の拘引されるのを痛快だ痛快だと評していたが、代助にはそれ程痛快にも思えなかつた。

った。が、二三日するうちに取り調べを受けるものの数が大分多くなつて来て、世間ではこれを大疑獄の様に囃し立てる様になつた。ある新聞ではこれを英国に対する検挙と称した。その説明には、英国大使が日糖株を買い込んで、損をして、苦情を鳴らし出したので、日本政府も英国へ対する申訳に手を下したのだとあつた。

日糖事件の起る少し前、東洋汽船という会社は、一割二分の配当をした後の半期に、八十万円の欠損を報告した事があつた。それを代助は記憶していた。その時の新聞がこの報告を評して信を置くに足らんと云つた事も記憶していた。

代助は自分の父と兄の關係してゐる会社に就ては何事も知らなかつた。けれども、いづどんな事が起るまいものでもないとは常から考えていた。そうして、父も兄もあらゆる点に於て神聖であるとは信じていなかった。もしやかましい吟味をされたなら、両方共拘引に価する資格が出来はしまいかとまで疑つていた。それ程でなくつても、父と兄の財産が、彼等の脳力と手腕だけで、誰が見ても尤と認める様に、作り上げられたとは肯わなかつた。明治の初年に横浜へ移住奨励のため、政府が移住者に土地を与えた事がある。その時ただ貰つた地面の御蔭で、今は非常な金満家になつたものがある。けれどもこれは寧ろ天の与えた偶然である。父と兄の如きは、この自己にのみ幸福なる偶然を、人為的にかつ政略的

に、暖室むろを造つて、拵こしらえ上げたんだろうと代助は鑑定していた。

代助はこう云う考で、新聞記事に対しては別に驚ろきもしなかった。父と兄の会社に就ても心配をする程正直ではなかった。ただ三千代の事だけが多少気に掛つた。けれども、徒手てぶちで行くのが面白くないんで、そのうちの事と腹の中で料簡さだを定めて、日々読書にちにちに耽ふけつて四五日しごんち過した。不思議な事にその後例の金の件に就いては、平岡からも三千代からも何とも云つて来なかつた。代助は心のうちに、あるいは三千代が又一人で返事を聞きに来る事もあるだろうと、実は心待に待つていたのだが、その甲斐かいはなかつた。

仕舞にアンニユイを感じ出した。何処どこか遊びに行く所はあるまいかと、娯楽案内を捜して、芝居でも見ようと云う氣を起した。神楽坂から外濠そとぼり線へ乗つて、御茶の水まで来るうちに氣が變つて、森川町にいる寺尾という同窓の友達を尋ねる事にした。この男は学校を出ると、教師は厭いやだから文学を職業とすると云い出して、他のものの留めるにも拘らず、危険な商売をやり始めた。やり始めてから三年になるが、未だいまに名声も上らず、窮々せま云つて原稿生活を持続している。自分の関係のある雑誌に、何でも好いから書けと逼るので、代助は一度面白いものを寄草した事がある。それは一カ月の間雑誌屋の店頭さくらに曝さらされたぎり、永久人間世界から何処かへ、運命の為に持つて行かれてしまった。それぎり代助は

筆を執る事を御免蒙^{ごうむ}った。寺尾は逢^あうたんびに、もつと書け書けと勧める。そうして、己^{おれ}を見ろと云うのが口癖であつた。けれども外の人に聞くと、寺尾ももう陥落するだろうと云う評判であつた。大麥露西亞^{ロシヤ}ものが好^{すき}で、ことに人が名前を知らない作家が好で、けなしの錢を工面しては新刊物を買うのが道楽であつた。あまり氣^{きえん}が高かつた時、代助が、文学者も恐露病に罹^{かか}つてゐるうちはまだ駄目だ。一旦日露戦争を経過したものでないと話せない^{ひやかし}と冷評返した事がある。すると寺尾は真面目^{まじめ}な顔をして、戦争は何時^{いつ}でもするが、日露戦争後の日本の様に往生しちやつまらんじやないか。やつぱり恐露病に罹^{ひきよう}つてゐる方が卑怯^{ひきよう}でも安全だ、と答えてやつぱり露西亞文学を鼓吹してゐた。

玄関から座敷へ通つて見ると、寺尾は真中へ一閑張^{いっかんばり}の机を据えて、頭痛がすると云つて鉢巻をして、腕まくりで、帝国文学の原稿を書いてゐた。邪魔ならまた来ると云うと、帰らんでもいい、もう今朝から五五、二円五十錢だけ稼いだからと云う挨拶であつた。やがて鉢巻を外して、話を始めた。始めるが早いか、今の日本の作家と評家を眼の玉の飛び出る程痛快に罵倒^{ばとう}し始めた。代助はそれを面白く聞いてゐた。然し腹の中では、寺尾の事を誰も賞めない^{ひと}ので、その対抗運動として、自分の方では他^{ひと}を貶^{けな}すんだらうと思つた。ちと、そう云う意見を發表したら好いじやないかと勧めると、そうは行かないよと笑つてい

る。何故なげと聞き返しても答えない。しばらくして、そりや君の様に気楽に暮せる身分なら随分云つてみせるが——何しろ食うんだからね。どうせ真面目な商売じゃないさ。と云つた。代助は、それで結構だ、確かに遣りたまえと奨励した。すると寺尾は、いや些ちつとも結構じゃない。どうかして、真面目になりたいと思つてゐる。どうだ、君ちつと金を貸して僕を真面目にする見はないかと聞いた。いや、君が今の様な事をして、それで真面目だと思ふ様になつたら、その時貸してやろうと調戲からかつて、代助は表へ出た。

本郷の通りまで来たが倦アンニユイ怠うちの感は依然として故の通りである。何処をどう歩いても物足りない。と云つて、人の宅うちを訪ねる気はもう出ない。自分を検査してみると、身体全体が、大きな胃病の様な心持がした。四丁目から又電車へ乗つて、今度は伝通院でんずういん前まで来た。車中で揺られるたびに、五尺何寸かある大きな胃囊いぶくろの中で、腐つたものが、波を打つ感じがあつた。三時過ぎにぼんやり宅うちへ歸つた。玄関で門野が、

「先刻御宅から御使でした。手紙は書斎の机の上に載せて置きました。受取は一寸私ちよつわたくしが書いて渡して置きました」と云つた。

手紙は古風な状箱の中にあつた。その赤塗の表には名宛なあても何も書かないで、真鍮しんちゆうの環に通した觀世かんじん燃よりの封じ目に黒い墨を着けてあつた。代助は机の上を一目見て、この手

紙の主は嫂だとすぐ悟った。嫂にはこう云う旧式な趣味があつて、それが時々思わぬ方角へ出てくる。代助は鈇はさみの先で觀世撚の結目をつつきながら、面倒な手数てかずだと思つた。

けれども中にあつた手紙は、状箱とは正反對に簡単な、言文一致で用を済していた。この間わざわざ来てくれた時は、御依頼おたのみ通り取り計いかねて、御氣の毒をした。後から考えてみると、その時色々無遠慮な失礼を云つた事が氣にかかる。どうか悪く取つて下さるな。その代り御金を上げる。尤ももつとみんなと云う訳には行かない。二百円だけ都合して上げる。からそれをすぐ御友達の所へ届けて御上げなさい。これは兄さんには内所だからその積りでいなくつては不可いけない。奥さんの事も宿題にするとという約束だから、よく考えて返事をなさい。

手紙の中に巻き込めて、二百円の小切手が這入はいつていた。代助は、しばらく、それを眺めてゐるうちに、梅子に濟まない様な氣がして来た。この間の晩、歸りがけに、向うから、じゃ御金は要らないのと聞いた。貸してくれと切り込んで頼んだ時は、ああ手痛てきびしく跳ね付けて置きながら、いざ断念して歸る段になると、却かえつて断わつた方から、掛念けねんがつて駄目を押して出た。代助はそこに女によし性しょうの美しくさと弱さを見た。そうしてその弱さに付け入る勇氣を失つた。この美しい弱点を弄もてあそぶに堪えなかつたからである。ええ要りませ

ん、どうかなるでしょうと云つて分れた。それを梅子は冷かな挨拶と思つたに違ない。その冷かな言葉が、梅子の平生の思い切つた動作の裏に、何処にか引つ掛つていて、とうとうこの手紙になつたのだろうと代助は判断した。

代助はすぐ返事を書いた。そうして出来るだけ暖かい言葉を使つて感謝の意を表した。

代助がこう云う気分になる事は兄に対してもない。父に対してもない。世間一般に対しては固^{もと}よりない。近來は梅子に対してもあまり起らなかつたのである。

代助はすぐ三千代の所へ出掛けようかと考えた。実を云うと、二百円は代助に取つて中途半端な額^{たか}であつた。これだけくれるなら、一層^{いっそう}思い切つて、此方^{こつち}の強請^{ねだ}つた通りにして、満足を買えばいいにと云う氣も出た。が、それは代助の頭が梅子を離れて三千代の方へ向いた時の事であつた。その上、女は如何^{いか}に思い切つた女でも、感情上中途半端なものであると信じている代助には、それが別段不平にも思えなかつた。否女^{いな}のこう云う態度の方が、却つて男性の断然たる処置よりも、同情の弾力性を示している点に於^{おい}て、快よいものと考えていた。だから、もし二百円を自分に贈つたものが、梅子でなくつて、父であつたとすれば、代助は、それを経済的中途半端と解釈して、却つて不愉快な感に打たれたかも知れないのである。

代助は晩食ばんめしも食わずに、すぐ又表へ出た。五軒町から江戸川の縁へりを伝つて、河を向うへ越した時は、先刻散歩さんぽからの帰りの様に精神の困憊こんはいを感じていなかった。坂を上つて伝通院の横へ出ると、細く高い烟突えんとつが、寺と寺の間から、汚ない烟けむを、雲の多い空に吐いていた。代助はそれを見て、貧弱な工業が、生存せいそんの為に無理に吐く呼吸いきを見苦しいものと思つた。そうしてその近くに住む平岡と、この烟突とを暗々の裏うちに連想せずにはいられなかつた。こう云う場合には、同情の念より美醜の念が先に立つのが、代助の常であつた。代助はこの瞬間に、三千代の事を殆んど忘れてしまった位、空に散る憐れな石炭けむりの烟に刺激された。

平岡の玄関くつぬぎの沓すそ脱には女の穿はく重ね草履が脱ぎ棄ててあつた。格子こうしを開けると、奥の方から三千代が裾すそを鳴らして出て来た。その時上り口の二畳は殆んど暗かつた。三千代はその暗い中に坐つて挨拶あいさつをした。始めは誰が来たのか、よく分らなかつたらしかつたが、代助の声を聞くや否や、何方かと思つたら……と寧ろ低い声で云つた。代助は判然はつきり見えない三千代の姿を、常よりは美しく眺めた。

平岡は不在であつた。それを聞いた時、代助は話して易い様やすな、又話して悪い様にくな変な気がした。けれども三千代の方は常の通り落ち付いていた。洋燈ランブも点けないで、暗い

室^{へや}を閉て切つたまま二人で坐つていた。三千代は下女も留守だと云つた。自分も先刻^{さつき}其所^{そこ}まで用^{よう}達^{たし}に出て、今帰つて夕食^{ゆうめし}を済ましたばかりだと云つた。やがて平岡の話が出た。予期した通り、平岡は相変らず奔走している。が、この一週間程は、あんまり外へ出なくなつた。疲れたと云つて、よく宅^{うち}に寐^ねている。でなければ酒を飲む。人が尋ねて来れば猶^{なほ}飲む。そうして善く怒る。さかんに人を罵倒する。のだそうである。

「昔と違つて気が荒くなつて困るわ」と云つて、三千代は暗に同情を求める様子であつた。代助は黙つていた。下女が帰つて来て、勝手口でがたがた音をさせた。しばらくすると、胡摩竹^{ごまだけ}の台の着いた洋燈^{ランブ}を持つて出た。襖^{ふすま}を締める時、代助の顔を偷^{ぬす}む様に見て行つた。代助は懷^{ふところ}から例の小切手を出した。二つに折れたのをそのまま三千代の前に置いて、奥さん、と呼び掛けた。代助が三千代を奥さんと呼んだのは始めてであつた。

「先^{せん}達^{だつ}て御頼の金ですがね」

三千代は何にも答えなかつた。ただ眼を挙げて代助を見た。

「実は、直^{すぐ}にもと思つたんだけど、此方^{こつち}の都合が付かなかつたものだから、遂^{つい}遅くなつたんだが、どうですか、もう始末は付きましたか」と聞いた。

その時三千代は急に心細そうな低い声になつた。そうして怨^{えん}ずる様に、

「未^{まだ}ですわ。だって、片付く訳が無いじゃありませんか」と云ったまま、眼を睜^{みは}つて凝^{じつ}と代助を見ていた。代助は折れた小切手を取り上げて二つに開いた。

「これだけじゃ駄目ですか」

三千代は手を伸ばして小切手を受取った。

「難^{ありがと}有^とう。平岡が喜びますわ」と静かに小切手を畳の上に置いた。

代助は金を借りて来た由来を、極^{ごく}ざつと説明して、自分はこういう呑^{のん}気な身分の様に見えるけれども、何か必要があつて、自分以外の事に、手を出そうとすると、まるで無能力になるんだから、そこは悪く思つてくれない様にと言訳を付け加えた。

「それは、私^{わたくし}も承知していますわ。けれども、困^こつて、どうする事も出来ないものだから、つい無理を御願^ごして」と三千代は気の毒そうに詫^わびを述べた。代助はそこで念を押した。

「それだけで、どうか始末が付きますか。もしどうしても付かなければ、もう一遍工面してみらんだが」

「もう一遍工面するつて」

「判を押して高い利のつく御金を借りるんです」

「あら、そんな事を」と三千代はすぐ打ち消す様に云った。「それこそ大變よ。貴^{あなた}方」

代助は平岡の今苦しめられているのも、その起りは、性質の悪い金を借り始めたのが転々して崇たつていているんだと云う事を聞いた。平岡は、あの地で、最初のうちは、非常な勤勉家として通つていたのだが、三千代が産後心臓が悪くなつて、ぶらぶらし出すと、遊び始めたのである。それも初めのうちは、それ程烈しくもなかったもので、三千代はただ交際つきあい上やむ己を得ないんだらうと諦めていたが、仕舞にはそれが段々高じて、程度がなくなるばかりなので三千代も心配をする。すれば身体が悪くなる。なれば放蕩ほうとうが猶募る。不親切なんじゃない。私が悪いんですと三千代はわざわざ断わった。けれども又淋しい顔をして、せめて小供でも生きていてくれたらさぞ可よかつたろうと、つくづく考えた事もありましたと自白した。

代助は経済問題の裏面に潜んでいる、夫婦の關係をあらまし推察し得た様な気がしたので、あまり多く此方こつちから問うのを控えた。歸りがけに、

「そんなに弱つちや不可いない。昔の様に元氣に御成んなさい。そうして些ちつと遊びに御出おいでなさい」と勇氣をつけた。

「本当ほんとね」と三千代は笑った。彼等は互の昔を互の顔の上に認めた。平岡はどうとう歸つて来なかつた。

中二日置いて、突然平岡が来た。その日は乾いた風が朗らかな天を吹いて、蒼いものが
 眼に映る、常よりは暑い天気であつた。朝の新聞に菖蒲の案内が出ていた。代助の買つ
 た大きな鉢植の君子蘭はとうとう縁側で散つてしまった。その代り脇差程も幅のある
 緑の葉が、茎を押し分けて長く延びて来た。古い葉は黒ずんだまま、日に光っている。そ
 の一枚が何かの拍子に半分から折れて、茎を去る五寸ばかりの所で、急に鋭く下つたのが、
 代助には見苦しく見えた。代助は鋏を持つて縁に出た。そうしてその葉を折れ込んだ手前
 から、剪つて棄てた。時に厚い切り口が、急に煮染む様に見えて、しばらく眺めているう
 ちに、ぼたりと縁に音がした。切口に集つたのは緑色の濃い重い汁であつた。代助はその
 香を嗅ぐと思つて、乱れる葉の中に鼻を突つ込んだ。縁側の滴はそのままに置いていた。
 立ち上がつて、袂から手帛を出して、鋏の刃を拭いている所へ、門野が平岡さんが御出
 ですと報せて来たのである。代助はその時平岡の事も三千代の事も、まるで頭の中に考え
 ていなかった。只不思議な緑色の液体に支配されて、比較的世間に関係のない情調の下に
 動いていた。それが平岡の名を聞くや否や、すぐ消えてしまった。そうして、何だか逢い
 たくない様な氣持がした。

「此方へ御通し申しましょうか」と門野から催促された時、代助はうんと云つて、座敷へ

這^{はい}入った。あとから席に導かれた平岡を見ると、もう夏の洋服を着ていた。襟も白襯^{シヤツ}衣も新らしい上に、流行の編^{あみ}襟^{えり}飾^{かざり}を掛けて、浪人とは誰にも受け取れない位、ハイカラに取り繕^とろつていた。

話してみると、平岡の事情は、依然として発展していなかった。もう近頃は運動しても当分駄目だから、毎日こうして遊んで歩く。それでなければ、宅^{うち}に寐^ねているんだと云つて、大きな声を出して笑つてみせた。代助もそれが可^よかろうと答えたなり、後は当らず障^{さわ}らずの世間話に時間を潰^{つぶ}していた。けれども自然に出る世間話というよりも、寧^{むし}ろある問題を回避する為の世間話だから、両方共に緊張を腹の底に感じていた。

平岡は三千代の事も、金の事も口へ出さなかった。従つて三日前代助が彼の留守宅を訪問した事に就ても何も語らなかつた。代助も始めのうちには、わざと、その点に触れないで澄^いしていたが、何時^{いつ}まで経^たつても、平岡の方で余^よ所^そ々々しく構えているので、却つて不安になつた。

「実は二三^{にさんち}日前君の所へ行つたが、君は留守だつたね」と云い出した。

「うん。そうだったそうだね。その節は又難^{ありがと}有^う。御蔭^{おかげ}さまで。——なに、君を煩^{わづら}わさないでもどうかなつたんだが、彼奴^{あいつ}があまり心配し過ぎて、つい君に迷惑を掛けて済まな

い」と冷淡な礼を云った。それから、

「僕も実は御礼に來た様なものだが、本当の御礼には、いずれ本人が出るだろうから」とまるで三千代と自分を別物にした言分であつた。代助はただ、

「そんな面倒な事をする必要があるものか」と答えた。話はこれで切れた。が又両方に共通で、しかも、両方のあまり興味を持たない方面に摺り滑つて行つた。すると、平岡が突然、

「僕はことによると、もう実業は已めるかも知れない。實際内幕を知れば知る程厭になる。その上此方へ來て、少し運動をしてみても、つくづく勇氣がなくなつた」と心底かららしい告白をした。代助は、一口、

「それは、そうだろう」と答えた。平岡はあまりこの返事の冷淡なのに驚ろいた様子であつた。が、又あとを付けた。

「先達でも一寸話したんだが、新聞へでも這入ろうかと思つてる」

「口があるのかい」と代助が聞き返した。

「今、一つある。多分出来そうだ」

來た時は、運動しても駄目だから遊んでいると云うし、今は新聞に口があるから出よう

と云うし、少し要領を欠いているが、追窮するのも面倒だと思つて、代助は、

「それも面白からう」と賛成の意を表して置いた。

平岡の帰りを玄關まで見送つた時、代助はしばらく、障子に身を寄せて、敷居の上に立つていた。門野も御附合に平岡の後姿を眺めていた。が、すぐ口を出した。

「平岡さんは思つたよりハイカラですな。あの服装^{なり}じゃ、少し宅^{うち}の方が御粗末過ぎる様です」

「それでもないさ。近頃はみんな、あんなものだろう」と代助は立ちながら答えた。

「全^{なり}たく、服装^{なり}だけじゃ分らない世の中になりましたからね。何処^{どこ}の紳士かと思うと、どうも変ちきりんな家^{うち}へ這入^{はい}てますからね」と門野はすぐあとを付けた。

代助は返事も為^しずに書齋へ引き返した。縁側に垂れた君子蘭の緑^{したたり}の滴^{したたり}がどろどろになつて、干上り掛つていた。代助はわざと、書齋と座敷の仕切を立て切つて、一人室^{へや}のうちへ這入つた。来客に接した後しばらくは、独坐^{ふけ}に耽^{ふけ}るが代助の癖であつた。ことに今日の様に調子の狂う時は、格別その必要を感じた。

平岡はどうとう自分と離れてしまった。逢^あうたんびに、遠くについて応対する様な気がする。実を云うと、平岡ばかりではない。誰に逢つてもそんな気がする。現代の社会は孤立

した人間の集合体に過ぎなかった。大地は自然に続いていていなければならない、その上に家を建てたら、忽ち切れ切れになつてしまつた。家の中にいる人間もまた切れ切れになつてしまつた。文明は我等をして孤立せしむるものと、代助は解釈した。

代助と接近していた時分の平岡は、人に泣いて貰う事を喜ぶ人であつた。今でもそうかも知れない。が、些ともそんな顔をしないから、解らない。否、力めて、人の同情を斥ける様に振舞つてゐる。孤立しても世は渡つてみせるという我慢か、又はこれが現代社会に本来の面目だと云う悟りか、何方かに帰着する。

平岡に接近していた時分の代助は、人の為に泣く事の好きな男であつた。それが次第々々に泣けなくなつた。泣かない方が現代的だからと云うのではなかつた。事實は寧ろこれを逆にして、泣かないから現代的だと言いたかつた。泰西の文明の圧迫を受けて、その重荷の下に唸る、劇烈な生存競争場裏に立つ人で、真によく人の為に泣き得るものに、代助は未だ曾て出逢わなかつた。

代助は今の平岡に対して、隔離の感よりも寧ろ嫌惡の念を催うした。そうして向うにも自己同様の念が萌していると判じた。昔しの代助も、時々わが胸のうちに、こう云う影を認めて驚ろいた事があつた。その時は非常に悲しかった。今はその悲しみも殆んど薄く剥

がれてしまった。だから自分で黒い影を凝^{じつ}と見詰めてみる。そうして、これが真^{まこと}だと思ふ。己を得ないと思う。ただそれだけになった。

こう云う意味の孤独の底に陥^はつて煩悶^{はんもん}するには、代助の頭はあまりに判然^{はつきり}し過ぎていた。彼はこの境遇を以て、現代人の踏むべき必然の運命と考えたからである。従つて、自分と平岡の隔離は、今の自分の眼^{まなこ}に訴えてみて、尋常一般の経路を、ある点まで進行した結果に過ぎないと見倣^{みな}した。けれども、同時に、兩人^{ふたり}の間に横たわる一種の特別な事情の為、この隔離が世間並よりも早く到着したと云う事を自覺せずにはいられなかった。それは三千代の結婚であつた。三千代を平岡に周旋したものは元來が自分であつた。それを當時に悔^くる様な薄弱な頭脳ではなかった。今日に至つて振り返つてみても、自分の所作は過去を照らす鮮かな名譽であつた。けれども三年経過するうちに自然は自然に特有な結果を、彼等^{にん}二人の前に突き付けた。彼等は自己の満足と光輝を棄てて、その前に頭を下げなければならなかった。そうして平岡は、ちらりちらりと何故^{なぜ}三千代を貰ったかと思うようになった。代助は何処かしらで、何故三千代を周旋したかと云う声を聞いた。

代助は書齋に閉じ籠^{こも}つて一日考えに沈んでいた。晩食の時、門野が、

「先生今日は一日御勉強ですな。どうです、些^ちと御散歩になりませんか。今夜は寅^{とら}毘^び沙^{しゃ}

ですぜ。演芸館で支那人の留学生が芝居を演つてます。どんな事を演る積りですか、行つて御覧なすつたらどうです。支那人てえ奴は、臆面がないから、何でも遣る気だから呑気なものだ。……」と一人で喋舌つた。

九

代助は又父から呼ばれた。代助にはその用事が大抵分つていた。代助は不断からなるべく父を避けて会わない様にしていた。この頃になつては猶更奥へ寄り付かなかつた。逢うと、丁寧な言葉を使つて応対しているにも拘わらず、腹の中では、父を侮辱している様な気がしてならなかつたからである。

代助は人類の一人として、互を腹の中で侮辱する事なしには、互に接触を敢てし得ぬ、現代の社会を、二十世紀の墮落と呼んでいた。そうして、これを、近來急に膨張した生活慾の高圧力が道義慾の崩壊を促がしたものと解釈していた。又これをこれ等新旧両慾の衝突と見做していた。最後に、この生活慾の目醒しい発展を、歐洲から押し寄せた海嘯と心得ていた。

この二つの因^{フアクター}数は、何処^{どこ}かで平衡を得なければならぬ。けれども、貧弱な日本が、歐洲の最強国と、財力に於^{おい}て肩を較^{なら}べる日の来るまでは、この平衡は日本に於て得られないものと代助は信じていた。そうして、かかる日は、到底日本の上を照らさないものと諦^{あきら}めていた。だからこの窮地に陥った日本紳士の多数は、日毎^{ひごと}に法律に触れない程度に於て、もしくはただ頭の中に於て、罪惡を犯さなければならぬ。そうして、相手が今如何^{いか}なる罪惡を犯しつつあるかを、互に黙知しつつ、談笑しなければならぬ。代助は人類の一人として、かかる侮辱を加うるにも、又加えらるるにも堪えなかつた。

代助の父の場合は、一般に比べると、稍^{やや}特殊の傾向を帯びるだけに複雑であつた。彼は維新前の武士に固有な道義本位の教育を受けた。この教育は情意行為の標準を、自己以外の遠い所に据えて、事実の發展によつて証明せらるべき手近な真^{まこと}を、眼中に置かない無理なものであつた。にも拘わらず、父は習慣に囚^{とら}えられて、未だにこの教育に執着している。そうして、一方には、劇烈な生活慾に冒され易^{やす}い実業に従事した。父は實際に於て年々この生活慾の為に腐蝕^{ふしょく}されつつ今日に至つた。だから昔の自分と、今の自分の間には、大きな相違のあるべき筈^{はず}である。それを父は自認していなかつた。昔の自分が、普通りの心得で、今の事業をこれまでに成し遂げたとばかり公言する。けれども封建時代にのみ通用

すべき教育の範圍を狭める事なしに、現代の生活慾を時々刻々に充たして行ける訳がないと代助は考えた。もし双方をそのままに存在させようとすれば、これを敢てする個人は、矛盾の為に大苦痛を受けなければならない。もし内心にこの苦痛を受けながら、ただ苦痛の自覚だけ明らかで、何の為の苦痛だか分別が付かないならば、それは頭腦の鈍い劣等な人種である。代助は父に対する毎に、父は自己を隠蔽する偽君子か、もしくは分別の足らない愚物か、何方かでなくてはならない様な氣がした。そうして、そう云う氣がするのが厭でならなかった。

と云つて、父は代助の手際で、どうする事も出来ない男であつた。代助には明らかに、それが分つていた。だから代助は未だ曾て父を矛盾の極端まで追い詰めた事がなかった。代助は凡ての道德の出发点は社会的事実より外にないと信じていた。始めから頭の中に硬張つた道德を据え付けて、その道德から逆に社会的事実を發展させようとする程、本末を誤つた話はないと信じていた。従つて日本の学校でやる、講釈の倫理教育は、無意義のものと考えた。彼等は学校で昔し風の道德を教授している。それでなければ一般歐洲人に適切な道德を呑み込ませている。この劇烈なる生活慾に襲われた不幸な国民から見れば、迂遠の空談に過ぎない。この迂遠な教育を受けたものは、他日社会を眼前に見る時、

昔の講釈を思い出して笑ってしまう。でなければ馬鹿にされた様な気がする。代助に至つては、学校のみならず、現に自分の父から、尤も厳格で、尤も通用しない徳義上の教育を受けた。それがため、一時非常な矛盾の苦痛を、頭の中に起した。代助はそれを恨めしく思っている位であつた。

代助はこの前梅子に礼を云いに行つた時、梅子から一寸奥へ行つて、挨拶をしていらつしやいと注意された。代助は笑いながら御父さんはいるんですかと空とぼけた。いらつしやるわと云う確答を得た時でも、今日はちと急ぐから廃そうと歸つて来た。

今日はわざわざその為に来たのだから、否でも応でも父に逢わなければならない。相変らず、内玄関の方から廻つて座敷へ来ると、珍らしく兄の誠吾が胡坐をかいて、酒を呑でいた。梅子も傍に坐つていた。兄は代助を見て、

「どうだ、一盃遣らないか」と、前にあつた葡萄酒の壺を持って振つて見せた。中にはまだ余程這入つていた。梅子は手を敲いて洋盞を取り寄せた。

「当てて御覧なさい。どの位古いんだか」と一杯注いだ。

「代助に分るものか」と云つて、誠吾は弟の唇のあたりを眺めていた。代助は一口飲んで盃を下へ下した。肴の代りに薄いウエーファーが菓子皿にあつた。

「旨い^{うま}ですね」と云った。

「だから時代を当てて御覧なさいよ」

「時代があるんですか。偉いものを買い込んだもんだね。歸りに一本貰つて行こう」

「御生^{おあいにく}憎様、もうこれぎりなの。到来物よ」と云つて梅子は縁側へ出て、膝^{ひざ}の上に落ちたウエーファアの粉^こを払^{はた}いた。

「兄さん、今日はどうしたんです。大変氣樂そうですね」と代助が聞いた。

「今日は休養だ。この間中はどうも忙し過ぎて降参したから」と誠吾は火の消えた葉巻を口^{くわ}に啣^{くわ}えた。代助は自分の傍にあつた燐寸^{マツチ}を擦つて遣つた。

「代さん貴方^{あなた}こそ氣樂じゃありませんか」と云いながら梅子が縁側から歸つて来た。

「姉さん歌舞伎座へ行きましたか。まだなら、行つて御覧なさい。面白いから」

「貴方もう行つたの、驚ろいた。貴方も余つ程怠けものね」

「怠けものは可^よくない。勉強の方向が違うんだから」

「押の強い事ばかり云つて。人の氣も知らないで」と梅子は誠吾の方を見た。誠吾は赤い脛^{まぶた}をして、ぽかんと葉巻の烟^{けむ}を吹いていた。

「ねえ、貴方」と梅子が催促した。誠吾はうるさそうに葉巻を指^{また}の股へ移して、

「今のうち沢山勉強して貰って置いて、今に此方が貧乏したら、救って貰う方が好いじゃないか」と云った。梅子は、

「代さん、あなた役者になれて」と聞いた、代助は何にも云わずに、洋盞を姉の前に出した。梅子も黙って葡萄酒の壺を取り上げた。

「兄さん、この間中は何だか大変忙しかったんだってね」と代助は前へ戻って聞いた。

「いや、もう大弱りだ」と云いながら、誠吾は寐転んでしまった。

「何か日糖事件に関係でもあったんですか」と代助が聞いた。

「日糖事件に関係はないが、忙しかった」

兄の答は何時でもこの程度以上に明瞭になった事がない。実は明瞭に話したくないんだろうけれども、代助の耳には、それが本来の無頓着で、話すのが臆怯なためと聞える。だから代助はいつでも樂にその返事の中に這入っていた。

「日糖もつまらない事になったが、ああなる前にどうか方法はないんでしょうかね」

「そうさなあ。實際世の中の事は、何がどうなるんだか分らないからな。——梅、今日は直木に云い付けて、ヘクターを少し運動させなくっちゃ不可いよ。ああ大食をして寐てばかりいちゃ毒だ」と誠吾は眠そうな臉を指でしきりに擦った。代助は、

「愈奥へ行つて御父さんに叱られて来るかな」と云いながら又洋盞を嫂の前へ出した。梅子は笑つて酒を注いだ。

「嫁の事か」と誠吾が聞いた。

「まあ、そうだろうと思うんです」

「貰つて置くがいい。そう老人に心配さしたつて仕様があるものか」と云つたが、今度はもつと判然した語勢で、

「氣を付けないと不可よ。少し低氣圧が来ているから」と注意した。代助は立ち掛けながら、

「まさかこの間中の奔走からきた低氣圧じゃありませんまいね」と念を押した。兄は寐転んだまま、

「何とも云えないよ。こう見えて、我々も日糖の重役と同じ様に、何時拘引されるかわからない身体なんだから」と云つた。

「馬鹿な事を仰しやるなよ」と梅子が窘めた。

「やつぱり僕ののらくらが持ち来たした低氣圧なんだろう」と代助は笑いながら立つた。廊下伝いに中庭を越して、奥へ来て見ると、父は唐机の前へ坐つて、唐本を見てい

た。父は詩が好きで、閑ひまがあると折々支那人の詩集を読んでいる。然しかし時によると、それが尤も機嫌のわるい索引になる事があつた。そう云うときは、いかに神経のふつくら出来上つた兄でも、なるべく近寄らない事にしていた。是非顔を合せなければならぬ場合には、誠太郎か、縫子か、何方どっちか引張ひっぱて父の前へ出る手段を取っていた。代助も縁側まで来て、そこに気が付いたが、それ程の必要もあるまいと思つて、座敷を一つ通り越して、父の居間に這入つた。

父はまず眼鏡を外した。それを読み掛けた書物の上に置くと、代助の方に向き直つた。そうして、ただ一言、

「来たか」と云つた。その語調は平常よりも却かえつて穩おだな位であつた。代助は膝ひざの上に手を置きながら、兄が真面目まじめな顔をして、自分を担かいだんじやなかうかと考えた。代助はそこで又苦い茶を飲ませられて、しばらく雑談に時を移した。今年は芍薬しゃくやくの出が早いとか、茶摘歌を聞いていると眠くなる時候だとか、何所どことかに、大きな藤があつて、その花の長さが四尺足らずあるとか、話は好加減いかげんな方角へ大分長く延びて行つた。代助は又その方が勝手なので、いつまでも延ばす様にと、後から後を付けて行つた。父も仕舞には持て余して、とうとう、時に今日御前を呼んだのはと云い出した。

代助はそれから後は、一言も口を利かなくなつた。只謹んで親爺の云うことを聴いていた。父も代助からかう云う態度に出られると、長い間自分一人で、講義でもする様に、述べて行かなくてはならなかつた。然しその半分以上は、過去を繰返すだけであつた。が代助はそれを、始めて聞くと同程度の注意を払つて聞いていた。

父の長談義のうちに、代助は二三の新しい点も認めた。その一つは、御前は一体これからさきどうする料簡りようけんなんだと云う真面目な質問であつた。代助は今まで父からの注文ばかり受けていた。だから、その注文を曖昧あいまいに外す事に慣れていた。けれども、かう云う大質問になると、そう口から出任せに答えられない。無暗むやみな事を云えば、すぐ父を怒らしてしまふからである。と云つて正直を告白すると、二三年間父の頭を教育した上でなくつては、通じない理窟りくつになる。代助はこの大質問に應じて、自分の未来を明瞭に道破いひやぶるだけの考も何も有もつていながかつた。彼はそれが自分に取つて尤もな所だと思つていた。けれども父に、その通りを話して、なるほどと納得させるまでには、大變な時間がかかる。或は生涯通じつこないかも知れない。父の氣に入る様にするのは、何でも、国家の為とか、天下の為とか、景氣の好い事を、しかも結婚と両立しない様な事を、述べて置けば済むのであるが、代助は如何に、自己を侮辱する氣になつても、こればかりは馬鹿氣でいて、口

へ出す勇氣がなかった。そこで已^{やむ}を得ないから、実は色々計画もあるが、いずれ秩序立てて来て、御相談をする積りであると答えた。答えた後で、実に滑稽^{こっけい}だと思ったが仕方がなかった。

代助は次に、独立の出来るだけの財産が欲しくはないかと聞かれた。代助は無論欲しいと答えた。すると、父が、では佐川の娘を貰^{もら}ったら好かろうと云う条件を付けた。その財産は佐川の娘が持つて来るのか、又は父がくれるのか甚だ曖昧であつた。代助は少しその点に向つて進んでみたが、遂^{つい}に要領を得なかつた。けれども、それを突き留める必要がないと考へて已めた。

次に、一層^{いっそう}洋行する気はないかと云われた。代助は好いでしょうと云つて賛成した。けれども、これにも、やっぱり結婚が先決問題として出て来た。

「そんなに佐川の娘を貰う必要があるんですか」と代助が仕舞に聞いた。すると父の顔が赤くなつた。

代助は父を怒らせる気は少しもなかつたのである。彼の近頃の主義として、人と喧嘩^{けんか}するのは、人間の墮落の一範^{はん}疇^{ちゆう}になつていた。喧嘩^{けんか}の一部分として、人を怒らせるのは、怒らせる事自身よりは、怒つた人の顔色が、如何に不愉快にわが眼に映ずるか云う

点に於て、大切なわが生命を傷ける打撃に外ならぬと心得ていた。彼は罪惡に就ても彼れ自身に特有な考を有っていた。けれども、それが為ために、自然のままに振舞いさえすれば、罰を免かれ得るとは信じていなかった。人を斬きつたものの受くる罰は、斬られた人の肉から出る血潮であると固く信じていた。迸ほとばしる血の色を見て、清い心の迷乱を引き起さないものはあるまいと感ずるからである。代助はそれ程神経の鋭い男であつた。だから顔の色を赤くした父を見た時、妙に不快になつた。けれどもこの罪を二重に償うために、父の云う通りにしようと言ふ氣は些ちつとも起らなかった。彼は、一方に於て、自己の腦力に、非常な尊敬を払う男であつたからである。

その時父は頗すこぶる熱した語氣で、先まず自分の年を取っている事、子供の未來が心配になる事、子供に嫁を持たせるのは親の義務であると云う事、嫁の資格その他に就ては、本人よりも親の方が遙はるかに周到な注意を払っていると云う事、他の親切ひとは、その當時にこそ余計な御世話に見えるが、後になると、もう一遍うるさく干渉して貰いたい時機が来るものであるという事を、非常に叮嚀ていねいに説いた。代助は慎重な態度で、聴いていた。けれども、父の言葉が切れた時も、依然として許諾の意を表ひょうさなかつた。すると父はわざと抑えた調子で、

「じゃ、佐川は已めるさ。そうして誰でも御前の好きなのを貰ったら好いだろう。誰か貰いたいのがあるのか」と云った。これは嫂の質問と同様であるが、代助は梅子に対する様に、ただ苦笑ばかりしてはいられなかった。

「別にそんな貰いたいのありません」と明らかな返事をした。すると父は急に肝かんの発した様な声で、

「じゃ、少しは此方こつちの事を考えてくれたら好かろう。何もそう自分の事ばかり思っていないでも」と急調子に云った。代助は、突然父が代助を離れて、彼自身の利害に飛び移ったのに驚ろかされた。けれどもその驚ろきは、論理なき急劇の変化の上に注がれただけであつた。

「貴方あなたにそれ程御都合が好い事があるなら、もう一遍考えてみましょう」と答えた。

父は益機嫌ますますをわるくした。代助は人と応対している時、どうしても論理を離れる事の出来ない場合がある。それが為め、よく人から、相手を遣り込めるのを目的とする様に受取られる。實際を云うと、彼程人を遣り込める事の嫌いな男はないのである。

「何も己おれの都合ばかりで、嫁を貰えと云つてやしない」と父は前の言葉を訂正した。「そんなに理窟を云うなら、参考の為、云つて聞かせるが、御前はもう三十だろう、三十にな

つて、普通のものが結婚をしなければ、世間では何と思うか大抵分るだろう。そりや今は昔と違うから、独身も本人の随意だけれども、独身の為に親や兄弟が迷惑したり、果は自分の名誉に關係する様な事が出来たりしたらどうする氣だ」

代助はただ茫然として父の顔を見ていた。父はどの点に向つて、自分を刺した積りだか、代助には殆んど分らなかつたからである。しばらくして、

「そりや私のことだから少しは道樂もしますが……」と云いかけた。父はすぐそれを遮ぎつた。

「そんな事じゃない」

二人はそれぎりしばらく口を利かずにいた。父はこの沈黙を以て代助に向つて与えた打撃の結果と信じた。やがて、言葉のを和らげて、

「まあ、よく考えて御覽」と云つた。代助ははあと答えて、父の室を退ぞいた。座敷へ来て兄を探したが見えなかつた。嫂はと尋ねたら、客間だと下女が教えたので、行つて戸を明けて見ると、縫子のピヤノの先生が来ていた。代助は先生に一寸挨拶をして、梅子を戸口まで呼び出した。

「あなたは僕の事を何か御父さんに讒訴しやしないか」

梅子はハハハハと笑った。そうして、

「まあ御這入んなさいよ。丁度好い所だから」と云つて、代助を樂器の傍まで引張つて行つた。

十

蟻ありの座敷へ上がる時候になつた。代助は大きな鉢へ水を張つて、その中に真白な鈴蘭すずらんを茎ごと漬けた。簇むらがる細かい花が、濃い模様の縁ふちを隠した。鉢を動かすと、花が零れるこぼ。代助はそれを大きな字引の上に載せた。そうして、その傍に枕まくらを置いて仰向けに倒れた。黒い頭が丁度鉢の陰になつて、花から出る香においが、好い具合に鼻に通つたかよ。代助はその香においを嗅かぎながら仮寐うたたねをした。

代助は時々尋常な外界から法外に痛烈な刺激を受ける。それが劇はげしくなると、晴天から来る日光の反射にさえ堪え難くなることがあつた。そう云う時には、なるべく世間との交渉きはくを稀薄きはくにして、朝あでも午ひるでも構わず寐ひるる工夫をした。その手段には、極めて淡い、甘味かの軽い、花の香かをよく用いた。瞼まぶたを閉じて、瞳ひとみに落ちる光線を謝絶して、静かに鼻の穴だ

けで呼吸しているうちに、枕元の花が、次第に夢の方へ、躁ぐ意識を吹いて行く。これが成功すると、代助の神経が生れ代った様に落ち付いて、世間との連絡が、前よりは比較的快乐に取れる。

代助は父に呼ばれてから二三日の間、庭の隅に咲いた薔薇の花の赤いのを見るたびに、それが点々として眼を刺してならなかった。その時は、いつでも、手水鉢の傍にある、擬宝珠の葉に眼を移した。その葉には、放肆な白い縞が、三筋か四筋、長く乱れていた。代助が見るたびに、擬宝珠の葉は延びて行く様に思われた。そうして、それと共に白い縞も、自由に拘束なく、延びる様な気がした。石榴の花は、薔薇よりも派手にかつ重苦しく見えた。緑の間にちらりちらりと光って見える位、強い色を出していた。従ってこれも代助の今の気分には相応らなかつた。

彼の今の気分は、彼に時々起る如く、総体の上に一種の暗調を帯びていた。だから余りに明る過ぎるものに接すると、その矛盾に堪えがたかつた。擬宝珠の葉も長く見詰めていると、すぐ厭になる位であつた。

その上彼は、現代の日本に特有なる一種の不安に襲われ出した。その不安は人と人との間に信仰がない原因から起る野蛮程度の現象であつた。彼はこの心的現象のために甚しき

動揺を感じた。彼は神に信仰を置く事を喜ばぬ人であつた。又頭腦の人として、神に信仰を置く事の出来ぬ性質であつた。けれども、相互に信仰を有するものは、神に依頼するの必要がないと信じていた。相互が疑い合うときの苦しみを解脱する為めに、神は始めて存在の権利を有するものと解釈していた。だから、神のある国では、人が嘘を吐くものと極めた。然し今の日本は、神にも人にも信仰のない国柄であるという事を発見した。そうして、彼はこれを一に日本の経済事情に帰着せしめた。

四五日前、彼は拘摸と結託して悪事を働らいた刑事巡査の話新聞で読んだ。それが一人や二人ではなかつた。他の新聞の記す所によれば、もし嚴重に、それからそれへと、手を延ばしたら、東京は一時殆んど無警察の有様に陥るかも知れないのである。代助はその記事を読んだとき、ただ苦笑しただけであつた。そうして、生活の大難に対抗せねばならぬ薄給の刑事が、悪い事をするのは、實際尤もだと思つた。

代助が父に逢つて、結婚の相談を受けた時も、少しこれと同様の気がした。が、これはただ父に信仰がない所から起る、代助に取つて不幸な暗示に過ぎなかつた。そうして代助は自分の心のうちに、かかる忌むしい暗示を受けたのを、不徳義とは感じ得なかつた。それが事実となつて眼前にあらわれても、やはり父を尤もだと肯う積りだつたからである。

代助は平岡に対しても同様の感じを抱いていた。然し平岡に取っては、それが当然の事であると許していた。ただ平岡を好く気になれないだけであつた。代助は兄を愛していた。けれどもその兄に対してもやはり信仰は有^もち得なかつた。嫂は実意のある女であつた。然し嫂は、直接生活の難関に当らないだけ、それだけ兄よりも近付き易^{やす}いのだと考えていた。代助は平生から、この位に世の中を打遣^{うちや}つていた。だから、非常な神経質であるにも拘^{かか}わらず、不安の念に襲われる事は少なかつた。そうして、自分でもそれを自覚していた。それが、どう云う具合か急に揺^{うご}き出した。代助はこれを生理上の変化から起るのだらうと察した。そこである人が北海道から採^ねつて来たと云つてくれた鈴蘭の束を解いて、それを悉^{こしごと}く水の中に浸して、その下に寐^ねたのである。

一時間の後、代助は大きな黒い眼を開いた。その眼は、しばらくの間一つ所に留まつて全く動かなかつた。手も足も寐^ねていた時の姿勢を少しも崩さずに、まるで死人のその様であつた。その時一匹の黒い蟻が、ネルの襟を伝^つわつて、代助の咽喉^{のど}に落ちた。代助はすぐ右の手を動かして咽喉を抑えた。そうして、額に皺^{しわ}を寄せて、指の股^{また}に挟^{はさ}んだ小さな動物を、鼻の上まで持つて来て眺めた。その時蟻はもう死んでいた。代助は人指^{ひとさし}指の先に着いた黒いものを、親指の爪^{つめ}で向うへ弾^{はじ}いた。そうして起き上がった。

膝ひざの周圍まわりに、まだ三四匹は這つていたのを、薄うすい象牙ぞうげの紙ペーパー小刀ナイフで打ち殺した。それから手を叩たたいて人を呼んだ。

「御目醒おめざめですか」と云つて、門野が出て来た。

「御茶でも入れて来ましようか」と聞いた。代助は、はだかつた胸を搔かき合せながら、「君、僕の寐ねていたうちに、誰か来やしなかつたかね」と、静かな調子で尋ねた。

「ええ、御出おいででした。平岡の奥さんが。よく御存じですな」と門野は平氣に答えた。

「何故なぜ起きなかつたんだ」

「余あんまり能よく御休やすみでしたからな」

「だつて御客なら仕方がないじゃないか」

代助の語勢は少し強くなつた。

「ですがな。平岡の奥さんの方で、起きない方が好いいて、仰おつしやつたもんですからな」

「それで、奥さんは歸つてしまつたのか」

「なに歸つてしまつたと云う訳でもないんです。一寸ちよつと神樂坂に買物があるから、それを

済まして又来るからつて、云われるもんですからな」

「じゃ又来るんだね」

「そうです。実は御目覚になるまで待つていようかって、この座敷まで上つて来られたんですが、先生の顔を見て、あんまり善く寐ているもんだから、こいつは、容易に起きそうもないと思つたんでしよう」

「また出て行つたのかい」

「ええ、まあそうです」

代助は笑いながら、両手で寐起の顔を撫でた。そうして風呂場へ顔を洗いに行つた。頭を濡らして、縁側まで歸つて来て、庭を眺めていると、前よりは気分が大分晴々した。曇つた空を燕が二羽飛んでいる様が大いに愉快に見えた。

代助はこの前平岡の訪問を受けてから、心待に後から三千代の来るのを待つていた。けれども、平岡の言葉は遂に事実として現れて来なかつた。特別の事情があつて、三千代がわざと来ないのか、又は平岡が始めから御世辞を使ったのか、疑問であるが、それがため、代助は心の何処かに空虚を感じていた。然し彼はこの空虚な感じを、一つの経験として日常生活に見出したまでで、その原因をどうするの、こうするのと云う気はあまりなかつた。この経験自身の奥を覗き込むと、それ以上に暗い影がちらついている様に思つたからである。

それで彼は進んで平岡を訪問するのを避けていた。散歩のとき彼の足は多く江戸川の方角に向いた。桜の散る時分には、夕暮の風に吹かれて、四つの橋を此方から向うへ渡り、向うから又此方へ渡り返して、長い堤を縫う様に歩いた。がその桜はとくに散てしまつて、今は緑蔭の時節になつた。代助は時々橋の真中に立つて、欄干に頬杖を突いて、茂る葉の中を、真直に通つてゐる、水の光を眺め尽して見る。それからその光の細くなつた先の方に、高く聳える目白台の森を見上てみる。けれども橋を向うへ渡つて、小石川の坂を上る事はやめにして帰る様になつた。ある時彼は大曲の所で、電車を下る平岡の影を半町程手前から認めた。彼は慥にそうに違ないと思つた。そうして、すぐ揚場の方へ引き返した。

彼は平岡の安否を気にかけていた。まだ坐食の不安な境遇に居るに違ないとは思ふけれども、或はどの方面かへ、生活の行路を切り開く手掛りが出来たかも知れないとも想像してみた。けれども、それを確める為に、平岡の後を追う気にはなれなかつた。彼は平岡に面するときの、原因不明な一種の不快を予想する様になつた。と云つて、ただ三千代の為にのみ、平岡の位地を心配する程、平岡を悪んでもいなかつた。平岡の為に、やはり平岡の成功を祈る心はあつたのである。

こんな風に、代助は空虚なるわが心の一角を抱いて今日に至った。いま先方門野さきがたを呼んで括くくり枕を取り寄せて、午寐ひるねを貪むさぼった時は、あまりに澆はつらつ澆たる宇宙の刺激に堪えなくなつた頭を、出来るならば、蒼あお色の付いた、深い水の中に沈めたい位に思つた。それ程彼は命を鋭く感じ過ぎた。従つて熱い頭を枕へ着けた時は、平岡も三千代も、彼に取つて殆んど存在していなかつた。彼は幸にして涼しい心持に寐た。けれどもその穏やかな眠ねむりのうち、誰かすうと来て、又すうと出て行つた様な心持がした。眼を醒まして起き上がった。その感じがまだ残つていて、頭から拭ぬぐい去る事が出来なかつた。それで門野を呼んで、寐ている間に誰か来はしないかと聞いたのである。

代助は両手を額に当てて、高い空を面白そうに切つて廻る燕の運動を縁側から眺めていたが、やがて、それが眼めま苦しくなつたので、室の中に這はい入つた。けれども、三千代が又訪ねて来ると云う目前の予期が、既に気分きぶんの平調を冒しているので、思索も読書も殆んど手に着かなかつた。代助は仕舞に本棚の中から、大きな画が帖ちようを出して来て、膝の上に広げて、繰り始めた。けれども、それも、只指の先で順々に開けて行くだけであつた。一つ画を半分とは味わつていられなかつた。やがてブランギンの所へ来た。代助は平生からこの装飾画家に多大の趣味を有つていた。彼の眼は常の如く輝を帯びて、一ひとたび度はその上に

落ちた。それは何処かの港の図であつた。背景に船と檣と帆を大きく描いて、その余つた所に、際立つて花やかな空の雲と、蒼黒い水の色をあらわした前に、裸体の労働者が四五人いた。代助はこれ等の男性の、山の如くに怒らした筋肉の張り具合や、彼等の肩から脊へかけて、肉塊と肉塊が落ち合つて、その間に渦の様な谷を作っている模様を見て、其所にしばらく肉の力の快感を認めたが、やがて、画帖を開けたまま、眼を放して耳を立てた。すると勝手の方で婆さんの声がした。それから牛乳配達が空罌を鳴らして急ぎ足に出て行つた。宅のうかが静かなので、鋭どい代助の聴神経には善く応えた。

代助はぼんやり壁を見詰めていた。門野をもう一返呼んで、三千代が又くる時間を、云い置いて行つたかどうか尋ねようと思つたが、あまり愚だから憚かつた。そればかりではない、人の細君が訪ねて来るのを、それ程待ち受ける趣意がないと考へた。又それ程待ち受ける位なら、此方から何時でも行つて話をすべきであると思へた。この矛盾の両面を双対に見た時、代助は急に自己の没論理に耻ぢざるを得なかつた。彼の腰は半ば椅子を離れた。けれども彼はこの没論理の根底に横わる色々の因数を自分で善く承知してゐた。そうして、今の自分に取つては、この没論理の状態が、唯一の事実であるから仕方ないと思つた。かつ、この事実と衝突する論理は、自己に無関係な命題を繋ぎ合はして出来上

った、自己の本体を蔑視^{べつし}する、形式に過ぎないと思った。そう思つて又椅子へ腰を卸した。それから三千代の来るまで、代助はどんな風に時を過したか、殆んど^{ほと}知らなかった。表に女の声がした時、彼は胸に一鼓動を感じた。彼は論理に於て^{おい}尤も強い代りに、心臓の作用に於て尤も弱い男であつた。彼が近来怒れなくなつたのは、全く頭の御蔭^{おかげ}で、腹を立てる程自分を馬鹿にすることを、理智が許さなくなつたからである。がその他の点に於ては、尋常以上に情緒の支配を受けるべく余儀なくされていた。取次に出た門野が足音を立てて、書齋の入口にあらわれた時、血色のいい代助の頬は^{かす}微かに光沢^{つや}を失つていた。門野は、「此方^{こつち}にしますか」と甚だ簡単に代助の意向を確めた。座敷へ案内するか、書齋で逢うかと聞くのが面倒だから、こう詰めてしまつたのである。代助はうんと云つて、入口に返事を待つていた門野を追い払う様に、自分で立つて行つて、縁側へ首を出した。三千代は縁側と玄關の継目の所に、此方^{こちら}を向いてためらつていた。

三千代の顔はこの前逢つた時よりは寧ろ^{むし}蒼白^{あおしろ}かつた。代助に眼と顎^{あご}で招かれて書齋の入口へ近寄つた時、代助は三千代の息を喘^はまして^はいることに気が付いた。

「どうかしましたか」と聞いた。

三千代は何にも答えずに室^{へや}の中に這入て來た。セルの单衣^{ひとえ}の下に襦袢^{じゆばん}を重ねて、手に

大きな白い百合の花を三本ばかり提げていた。その百合をいきなり洋卓の上に投げる様に置いて、その横にある椅子へ腰を卸した。そうして、結ったばかりの銀杏返を、構わず、椅子の脊に押し付けて、

「ああ苦しかった」と云いながら、代助の方を見て笑った。代助は手を叩いて水を取り寄せようとした。三千代は黙って洋卓の上を指した。其所には代助の食後の嗽をする硝子の洋盃があつた。中に水が二口ばかり残っていた。

「奇麗なんでしょう」と三千代が聞いた。

「此奴は先刻僕が飲んだんだから」と云つて、洋盃を取り上げたが、躊躇した。代助の坐っている所から、水を棄てようとすると、障子の外に硝子戸が一枚邪魔をしている。

門野は毎朝縁側の硝子戸を一二枚宛開けないで、元の通りに放つて置く癖があつた。代助は席を立て、縁へ出て、水を庭へ空けながら、門野を呼んだ。今いた門野は何処へ行つたか、容易に返事をしなかった。代助は少しまごついて、又三千代の所へ歸つて来て、

「今すぐ持つて来て上げる」と云いながら、折角空けた洋盃をそのまま洋卓の上に置いたなり、勝手の方へ出て行つた。茶の間を通ると、門野は無細工な手をして錫の茶壺から玉露を撮み出していた。代助の姿を見て、

「先生、今直しきです」と言訳をした。

「茶は後でも好い。水が要るんだ」と云つて、代助は自分で台所へ出た。

「はあ、そうですか。上がるんですか」と茶壺ツブを放り出して門野も付いて来た。二人で洋盃コを探したが一寸見付からなかった。婆さんはと聞くと、今御客さんの菓子を買に行つたという答であつた。

「菓子がなければ、早く買つて置けば可いのに」と代助は水道の栓ねじを振ゆつて湯呑ゆのみに水を溢あふらせながら云つた。

「つい、小母さんに、御客さんの来る事を云つて置かなかつたものですからな」と門野は氣の毒そうに頭を搔かいた。

「じゃ、君が菓子を買に行けば可いのに」と代助は勝手を出ながら、門野に当つた。門野はそれでも、まだ、返事をした。

「なに菓子の外にも、まだ色々買物があるつて云うもんですからな。足は悪し天氣は好くないし、廃よせば好いんですのに」

代助は振り向きもせず、書齋へ戻つた。敷居またを跨いで、中へ這入るや否いなや三千代の顔を見ると、三千代は先刻代助の置いて行つた洋盃を膝の上に両手で持っていた。その洋盃の

中には、代助が庭へ空けたと同じ位に水が這入っていた。代助は湯呑を持ったまま、ぼうぜ茫然として、三千代の前に立った。

「どうしたんです」と聞いた。三千代は例の通り落ち付いた調子で、

「難ありがと有う。もう沢山。今あれを飲んだの。あんまり奇麗だったから」と答えて、鈴蘭の

漬けてある鉢を顧みた。代助はこの大鉢の中に水を八分目程張って置いた。妻つま楊枝位な

細い茎の薄青い色が、水の中に揃そろっている間から、陶器やきものの模様が仄ほのかに浮いて見えた。

「何故なぜあんなものを飲んだんですか」と代助は呆あきれて聞いた。

「だって毒じゃないでしょう」と三千代は手に持った洋盃を代助の前へ出して、透かして見せた。

「毒でないったって、もし二日も三日も経たった水だったらどうするんです」

「いえ、先刻さつき来た時、あの傍まで顔を持って行つて嗅かいでみたの。その時、たった今その鉢へ水を入れて、桶おけから移したばかりだって、あの方が云ったんですもの。大丈夫だわ。

好においい香ね」

代助は黙つて椅子へ腰を卸した。果して詩の為に鉢の水を呑んだのか、又は生理上の作用に促がされて飲んだのか、追窮する勇氣も出なかった。よし前者とした所で、詩を銜てらつ

て、小説の真似なぞをした受売の所作とは認められなかったからである。そこで、ただ、
「気分はもう好くなりましたか」と聞いた。

三千代の頬に漸ようやく色が出て来た。袂たもとから手帛ハンケチを取り出して、口の辺あたりを拭きながら話を始めた。——大抵は伝通院前から電車へ乗って本郷まで買物に出るんだが、人に聞いてみると、本郷の方は神楽坂に比べて、どうしても一割か二割物が高いと云うので、この間から一二度此方こつちの方へ出て来てみた。この前も寄る筈はずであつたが、つい遅くなったので急いで帰った。今日はその積りで早く宅うちを出た。が、御息おやすみ中だったので、又通りまで行つて買物を済まして帰り掛けに寄る事にした。ところが天気模様が悪くなつて、藁わら店だなを上がり掛けるとぼつぼつ降り出した。傘を持つて来なかつたので、濡れまいと思つて、つい急ぎ過ぎたものだから、すぐ身体からだに障さわつて、息が苦しくなつて困つた。——
「けれども、慣れつこに為なてるんだから、驚ろきやしません」と云つて、代助を見て淋さみしい笑い方をした。

「心臓の方は、まだすっかり善くないんですか」と代助は気の毒そうな顔で尋ねた。
「すっかり善くなるなんて、生涯駄目ですわ」

意味の絶望な程、三千代の言葉は沈んでいながかつた。織ほそい指そらを反そして穿はめている指環を

見た。それから、手帛^{ハンケチ}を丸めて、又袂へ入れた。代助は眼を俯^ふせた女の額の、髪に連なる所を眺めていた。

すると、三千代は急に思い出した様に、この間の小切手の札を述べ出した。その時何だか少し頬を赤くした様に思われた。視感の鋭敏な代助にはそれが善く分った。彼はそれを、貸借に關した羞^{しゆう}耻^{うち}の血潮とのみ解釈した。そこで話をすぐ他所^{よそ}へ外^{そと}した。

先刻^{さつき}三千代が提^さげて這入て來た百合の花が、依然として洋卓^{テーブル}の上に載っている。甘た^かるい強い香^かが二人の間に立ちつつあつた。代助はこの重苦しい刺激を鼻の先に置くに堪えなかつた。けれども無断で、取り除^のける程、三千代に対して思い切つた振舞が出来なかつた。

「この花はどうしたんです。買て來たんですか」と聞いた。三千代は黙^{うなず}つて首肯^{うなず}いた。そうして、

「好^に香^{おい}でしょう」と云つて、自分の鼻を、弁^{はなびら}の傍^{そば}まで持つて來て、ふんと嗅^かいで見せた。代助は思わ^ず足を真直に踏ん張^はつて、身を後の方^そへ反^そらした。

「そう傍で嗅いじや不可^いない^け」

「あら何故」

「何故つて理由もないんだが、不可ない」

代助は少し眉をひそめた。^{まゆ}三千代は顔をもとの位地に戻した。

「貴方、この花、御嫌なの？」^{おきらい}

代助は椅子の足を斜に立てて、^{ななめ}身体を後へ伸したまま、^{からだ}答えをせずに、微笑して見せた。

「じゃ、買って来なくつても好かつたのに。つまらないわ、回り路をして。^{みち}御負に雨に降られ損なつて、息を切らして」^{そく}

雨は本当に降つて来た。^{あまだれ}雨滴が樋に集まつて、流れる音がざあと聞えた。代助は椅子から立ち上がった。眼の前にある百合の束を取り上げて、^{くく}根元を括つた濡藁を^{ぬれわら}撈り切つた。

「僕にくれたのか。そんなら早く活けよう」と云いながら、^{さつき}すぐ先刻の大鉢の中に投げ込んだ。茎が長すぎるので、根が水を跳ねて、飛び出しそうになる。代助は^{したた}滴る茎を又鉢から抜いた。そうして洋卓の引出から西洋鉢を出して、^{はさみ}ぷつりぷつりと半分程の長さに^き剪り詰めた。そうして、大きな花を、鈴蘭の簇^{むら}がる上に浮かした。

「さあこれで好い」と代助は鉢を洋卓の上に置いた。三千代はこの不思議に無作法に活けられた百合を、しばらく見ていたが、突然、

「あなた、何時いつからこの花が御嫌になったの」と妙な質問をかけた。

昔し三千代の兄がまだ生きていた時分、ある日何かのはずみに、長い百合を買って、代助が谷中やなかの家を訪ねた事があつた。その時彼は三千代に危あやしげな花瓶はないけの掃除をさして、自分で、大事そうに買って来た花を活けて、三千代にも、三千代の兄にも、床へ向直つて眺めさせた事があつた。三千代はそれを覚えていたのである。

「貴方だつて、鼻を着けて嗅いでいらしたじやありませんか」と云つた。代助はそんな事があつた様にも思つて、仕方なしに苦笑した。

そのうち雨は益ますます深くなつた。家を包んで遠い音が聴えた。門野が出て来て、少し寒い様ですな、硝子戸を閉めましようかと聞いた。硝子戸を引く間、二人は顔を揃えて庭の方を見ていた。青い木の葉が悉ことごとく濡れて、静かな湿り気が、硝子越に代助の頭に吹き込んで来た。世の中の浮いているものは残らず大地の上に落ち付いた様に見えた。代助は久し振りで吾に返つた心持がした。

「好いいい雨ですね」と云つた。

「些ちつとも好よかないわ、私わたし、草履わかしを穿はいて来たんですもの」

三千代は寧ろ恨めしそうに樋もから洩あまたれる雨点を眺めた。

「帰りには車を云い付けて上げるから可いでしょう。緩りなさい」

三千代はあまり緩り出来そうな様子も見えなかった。まともに、代助の方を見て、

「貴方も相変らず呑気な事を仰しやるのね」と窘めた。けれどもその眼元には笑の影が泛んでいた。

今まで三千代の陰に隠れてぼんやりしていた平岡の顔が、この時明らかに代助の心の瞳に映った。代助は急に薄暗がりから物に襲われた様な気がした。三千代はやはり、離れ難い黒い影を引き摺って歩いている女であつた。

「平岡君はどうしました」とわざと何気なく聞いた。すると三千代の口元が心持締つて見えた。

「相変らずですわ」

「まだ何にも見付らないんですか」

「その方はまあ安心なの。来月から新聞の方が大抵出来るらしいんです」

「そりや好かつた。些とも知らなかつた。そんなら当分それで好いじゃありませんか」

「ええ、まあ難有いわ」と三千代は低い声で真面目に云つた。代助は、その時三千代を大変可愛く感じた。引續いて、

「彼方あつちの方は差当り責められる様な事もないんですか」と聞いた。

「彼方の方って——」と少し逡巡たゆらつていた三千代は、急に顔を赧あからめた。

「私、実は今日それで御詫おわびに上つたのよ」と云いながら、一度俯向うつむいた顔を又上げた。

代助は少しでも氣不味きまずい様子を見せて、この上にも、女の優しい血潮を動かすに堪えなかった。同時に、わざと向うの意を迎える様な言葉を掛けて、相手を殊ことさら更に氣の毒がらせる結果を避けた。それで静かに三千代の云う所を聴いた。

先達せんだつての二百円は、代助から受取るとすぐ借錢の方へ回す筈であつたが、新らしく家を持つた為ため、色々入費が掛つたので、ついその方の用を、あのうちで幾分か弁じたのが始りであつた。あとはと思つていると、今度は毎日の活計くわしに追われ出した。自分ながら好い心持はしなかつたけれども、仕方なしに困るとは使い、困るとは使いして、とうとうあらまし亡なくしてしまつた。尤ももつとそうでもしなければ、夫婦は今日こんにちまでこうして暮らしては行けなかつたのである。今から考えてみると、一層いっそうの事無ければ無いなりに、どうかこうか工面も付いたかも知れないが、なまじい、手元に有つたものだから、苦し紛れに、急場の間に合わしてしまつたので、肝心の証書を入れた借錢の方は、いまだにそのままにしてある。これは寧ろ平岡の悪いのではない。全く自分の過あやまちである。

「私、本当に済まない事をしたと思つて、後悔しているのよ。けれども拝借するときには、決して貴方を瞞だまして嘘うそを吐く積りじゃなかったんだから、堪かん忍にんして頂ちやうだい戴だい」と三千代は甚だ苦しうに言訳をした。

「どうせ貴方に上げたんだから、どう使つたつて、誰も何とも云う訳はないでしょう。役にさえ立てばそれで好いじやありませんか」と代助は慰めた。そうして貴方という字をこゝとさらに重くかつ緩く響かせた。三千代はただ、

「私、それで漸く安心したわ」と云つただけであつた。

雨が頻しきりなので、帰るときには約束通り車を雇つた。寒いので、セルの上へ男の羽織を着せようとしたら、三千代は笑つて着なかつた。

十一

何時の間にか、人が紹ろの羽織を着て歩く様になつた。二三日、宅うちで調物をして庭先より外ほかに眺めなかつた代助は、冬帽を被かぶつて表へ出てみて、急に暑さを感じた。自分もセルを脱がなければならぬと思つて、五六町歩くうちに、裕あわせを着た人に二人出逢であつた。そうか

と思うと新らしい氷屋で書生が洋盃コップを手にして、冷たそうなものを飲んでいた。代助はその時誠太郎を思い出した。

近頃代助は前よりも誠太郎が好きになった。外の人間と話していると、人間の皮と話す様で齒痒はがゆくつてならなかった。けれども、顧みて自分を見ると、自分は人間中で、尤も相手を齒痒がらせる様に拵こしらえられていた。これも長年生存競争の因果に曝さらされた罰ばちかと思うと、余り難有ありがたい心持はしなかった。

この頃誠太郎はしきりに玉乗りの稽古けいこをしたがっているが、それは、全くこの間浅草の奥山へ一所に連れて行つた結果である。あの一箇な所はよく、嫂あによめの気性を受け継いでいる。然し兄の子だけあつて、一箇なうちに、何処どこか逼せまらない鷹揚おうような氣象がある。誠太郎の相手をしていると、向うの魂が遠慮なく此方こつちへ流れ込んで来るから愉快である。實際代助は、昼夜の区別なく、武装を解いた事のない精神に、包围されるのが苦痛であつた。

誠太郎はこの春から中学校へ行き出した。すると急に脊丈せただけが延びて来る様に思われた。もう一二年すると声が変わる。それから先どんな径路を取つて、生長するか分らないが、到底人間として、生存する為には、人間から嫌われると云う運命に到着するに違ない。その時、彼は穏やかに人の目に着かない服装なりをして、乞食こじきの如く、何物をか求めつつ、人の市

をうろついて歩くだろう。

代助は堀端へ出た。この間まで向うの土手にむら躑躅が、団々と紅白の模様を青い中に印していたのが、まるで跡形もなくなつて、のべつに草が生い茂っている高い傾斜の上に、大きな松が何十本となく並んで、何処までもつづいている。空は奇麗に晴れた。代助は電車に乗つて、宅へ行つて、嫂に調戲つて、誠太郎と遊ぼうと思つたが、急に厭になつて、この松を見ながら、草臥る所まで堀端を伝つて行く氣になつた。

新見付へ来ると、向うから来たり、此方から行つたりする電車が苦になり出したので、堀を横切つて、招魂社の横から番町へ出た。そこをぐるぐる回つて歩いていゝうちに、かく目的なしに歩いている事が、不意に馬鹿らしく思われた。目的があつて歩くものは賤民だと、彼は平生から信じていたのであるけれども、この場合に限つて、その賤民の方が偉い様な氣がした。全たく、又アンニユに襲われたと悟つて、歸りだした。神樂坂へかかると、ある商店で大きな蓄音器を吹かしていた。その音が甚しく金属性の刺激を帯びていて、大いに代助の頭にこたへた。

家の門を這入ると、今度は門野が、主人の留守を幸いと、大きな声で琵琶歌をうたつていた。それでも代助の足音を聞いて、びたりと已めた。

「いや、御早うがしたな」と云つて玄関へ出て来た。代助は何にも答えずに、帽子を其所へ掛けたまま、縁側から書斎へ這入つた。そうして、わざわざ障子を締め切つた。つづいて湯呑に茶を注いで持つて来た門野が、

「締めときますか。暑ありませんか」と聞いた。代助は袂から手帛を出して額を拭いていたが、やつぱり、

「締めて置いてくれ」と命令した。門野は妙な顔をして障子を締めて出て行つた。代助は暗くした室のなかに、十分ばかりぽかんとしていた。

彼は人の羨やむ程光沢の好い皮膚と、労働者に見出しがたい様に柔かな筋肉を有つた男であつた。彼は生れて以来、まだ大病と名のつくものを経験しなかつた位、健康に於て幸福を享けていた。彼はこれでこそ、生甲斐があると信じていたのだから、彼の健康は、彼に取つて、他人の倍以上に価値を有つていた。彼の頭は、彼の肉体と同じく確であつた。ただ始終論理に苦しめられていたのは事実である。それから時々、頭が中心が、大弓の的の様に、二重もしくは三重にかさなる様に感ずる事があつた。ことに、今日は朝からそんな心持がした。

代助が默然として、自己は何の為にこの世の中に生れて来たかを考えるのはこう云う

時であつた。彼は今まで何遍もこの大問題を捕^{とら}えて、彼の眼前に据え付けて見た。その動機は、單に哲學上の好奇心から來た事もあるし、又世間の現象が、余りに複雑な色彩^{もつ}を以て、彼の頭を染め付けようと焦^{あせ}るから來る事もあるし、又最後には今^{こんにち}日の如くアンニユイの結果として來る事もあるが、その都度彼は同じ結論に到着した。然しその結論は、この問題の解決ではなくつて、寧^{むし}ろその否定と異ならなかつた。彼の考によると、人間はある目的を以て、生れたものではなかつた。これと反對に、生れた人間に、始めてある目的が出來て來るのであつた。最初から客觀的にある目的を拵^{しら}えて、それを人間に附着するのは、その人間の自由な活動を、既に生れる時に奪つたと同じ事になる。だから人間の目的は、生れた本人が、本人自身に作つたものでなければならぬ。けれども、如何^{いか}な本人でも、これを随意に作る事は出來ない。自己存在の目的は、自己存在の經驗が、既にこれを天下に向つて發表したと同様だからである。

この根本義から出^{しゅつ}立^{たつ}した代助は、自己本来の活動を、自己本来の目的としていた。歩きたいから歩く。すると歩くのが目的になる。考えたいから考える。すると考えるのが目的になる。それ以外の目的を以て、歩いたり、考えたりするのは、歩行と思考の墮落になる如く、自己の活動以外に一種の目的を立てて、活動するのは活動の墮落になる。従つ

て自己全体の活動を挙げて、これを方便の具に使用するものは、自ら自己存在の目的を破壊したも同然である。

だから、代助は今日まで、自分の脳裏に願望、嗜欲しよくが起るたび毎に、これ等の願望嗜欲を遂行するのを自己の目的として存在していた。二個の相容れざる願望嗜欲が胸に闘う場合も同じ事であった。ただ矛盾から出る一目的の消耗しょうこうと解釈していた。これを煎じ詰めると、彼は普通に所謂無目的な行為を目的として活動していたのである。そうして、他を偽らざる点に於てそれを尤も道德的なものと心得ていた。

この主義を出来るだけ遂行する彼は、その遂行の途中で、われ知らず、自分のとうに棄却した問題に襲われて、自分は今何の為に、こんな事をしているかと考え出す事がある。彼が番町を散歩しながら、何故散歩しつあるかと疑ったのは正にこれである。

その時彼は自分ながら、自分の活力に充実していない事に気がつく。餓えたる行動は、一気に遂行する勇氣と、興味に乏しいから、自らその行動の意義を途中で疑う様になる。彼はこれをアンニユイと名けていた。アンニユイに罹ると、彼は論理の迷乱を引き起すものと信じていた。彼の行為の中途に於て、何の為と云う、冠履顛倒かんりてんとうの疑を起させるのは、アンニユイに外ならなかったからである。

彼は立て切った室の中で、一二度頭を抑えて振り動かしてみた。彼は昔から今日までの思索家の、^{しばしば}屢繰り返した無意義な疑義を、又脳裏に^{ねんてい}拈定するに堪えなかった。その姿のちらりと眼前に起った時、またかと云う具合に、すぐ切り棄ててしまった。同時に彼は自己の生活力の不足を^{はげ}劇しく感じた。従つて行為その物を目的として、円満に遂行する興味も有たなかった。彼はただ一人荒野の^{うち}中に立った。^{ぼうぜん}茫然としていた。

彼は高尚な生活欲の満足^{こいねが}を冀う男であつた。又ある意味に於て道義欲の満足を買おうとする男であつた。そうして、ある点へ来ると、この二つのものが火花を散らして切り結ぶ関門があると予想していた。それで生活欲を低い程度に留めて我慢していた。彼の室は普通の日本間であつた。これと云う程の大した装飾もなかった。彼に云わせると、額さえ気の利いたものは掛けてなかった。色彩として眼を惹く^ひ程に美しいのは、本棚に並べてある洋書に集められたと云う位であつた。彼は今この書物の中に、茫然として坐つた。良^{やや}あつて、これほど寐^{ねい}入つた自分の意識を強烈にするには、もう少し周囲の物をどうかしなればならぬと、思いながら、室の中をぐるぐる見廻した。それから、又ぼかんとして壁を眺めた。が、最後に、自分をこの薄弱な生活から救い得る方法は、ただ一つあると考えた。そうして口の内^{うち}で云つた。

「やつぱり、三千代さんに逢わなくちや不可^{いか}ん」

彼は足の進まない方角へ散歩に出たのを悔いた。もう一遍出直して、平岡の許^{もと}まで行こうかと思つている所へ、森川町から寺尾が来た。新らしい麦藁^{むぎわらぼう}帽を被つて、閑静な薄い羽織を着て、暑い暑いと云つて赤い顔を拭いた。

「何だつて、今時分来たんだ」と代助は愛想もなく云い放つた。彼は寺尾とは平生でも、この位な言葉で交際していたのである。

「今時分が丁度訪問に好い刻限だろう。君、又昼寐をしたな。どうも職業のない人間は、懦弱で不可^いん。君は一体何の為に生れて来たのだつたかね」と云つて、寺尾は麦藁帽で、しきりに胸のあたりへ風を送つた。時候はまだそれ程暑くないのだから、この所作は頗^{すこぶ}る愛^{あい}嬌^{きよう}を添えた。

「何の為に生れて来^きようと、余計な御世話だ。それより君こそ何しに来たんだ。又『此^{ここ}所^こ十日ばかりの間』じゃないか、金の相談ならもう御免だよ」と代助は遠慮なく先へ断つた。「君も随分礼義を知らない男だね」と寺尾は已^{やむ}を得ず答えた。けれども別段感情を害した様子も見えなかつた。実を云うと、この位な言葉は寺尾に取つて、少しも無礼とは思えなかつたのである。代助は黙つて、寺尾の顔を見ていた。それは、空^{むな}しい壁を見ているより

以上の何等の感動をも、代助に与えなかった。

寺尾は懷ふところから汚ない仮綴かりとじの書物を出した。

「これを訳さなかりやならないんだ」と云つた。代助は依然として黙っていた。

「食うに困らないと思つて、そう無精な顔をしなくつても好かろう。もう少し判然としてくれ。此方は生死の戦だ」と云つて、寺尾は小形の本を、とんとんと椅子いすの角で二返たた敲いた。

「何時いつまでに」

寺尾は、書物の頁ページをさらさらと繰つて見せたが、断然たる調子で、

「二週間」と答えた後で、「どうしてもこうでも、それまでに片付はなかりや、食えないんだから仕方がない」と説明した。

「偉い勢だね」と代助は冷かした。

「だから、本郷からわざわざ遣やつて来たんだ。なに、金は借りなくても好い。——貸せば猶なほ好いが——それより少し分らない所があるから、相談しようと思つて」

「面倒だな。僕は今日は頭が悪くつて、そんな事は遣やつていられないよ。好いい加減に訳して置けば構わないじゃないか。どうせ原稿料は頁でくれるんだろう」

「なんぼ、僕だつて、そう無責任な翻訳は出来ないだろうじゃないか。誤訳でも指摘されると後から面倒だあね」

「仕様がないな」と云つて、代助はやつぱり横着な態度を維持していた。すると、寺尾は、「おい」と云つた。「冗談じゃない、君の様に、のらくら遊んでる人は、たまにはその位な事でも、しなくつちや退屈で仕方がないだろう。なに、僕だつて、本の善く読める人の所へ行く気なら、わざわざ君の所まで来やしない。けれども、そんな人は君と違って、みんな忙しいんだからな」と少しも辟易へきえきした様子を見せなかった。代助は喧嘩けんかをするか、相談に応ずるか何方どっちかだと覺悟を極めた。彼の性質として、こう云う相手を輕蔑けいべつする事は出来るが、怒り付ける気は出せなかった。

「じやなるべく少しにしようじゃないか」と断つて置いて、符号マークの附けてある所だけを見た。代助はその書物の梗概こうがいさえ聞く勇氣がなかった。相談を受けた部分にも曖昧あいまいな所は沢山あつた。寺尾は、やがて、

「やあ、難有ありがとう」と云つて本を伏せた。

「分らない所はどうする」と代助が聞いた。

「なにどうかする。——誰に聞いたつて、そう善く分りやしまい。第一時間がないから已

を得ない」と、寺尾は、誤訳よりも生活費の方が大事件である如くに天から極めていた。

相談が済むと、寺尾は例によつて、文学談を持ち出した。不思議な事に、そうなると、

自己の翻訳とは違つて、いつもの通り非常に熱心になった。代助は現今の文学者の公けにする創作のうちにも、寺尾の翻訳と同じ意味のものが沢山あるだろうと考えて、寺尾の矛盾を可笑しく思った。けれども面倒だから、口へは出さなかつた。

寺尾の御蔭で代助はその日とうとう平岡へ行きはぐれてしまった。

晩食の時、丸善から小包が届いた。箸を措いて開けて見ると、余程前に外国へ注文し

た二三の新聞書であつた。代助はそれを腋の下に抱え込んで、書斎へ歸つた。一冊ずつ順々に取り上げて、暗いながら二三頁、捲る様に眼を通したが何処も彼の注意を惹く様な所はなかつた。最後の一冊に至つては、その名前さえ既に忘れていた。何れその中読む事にしようと思ふ考で、一所に纏めたまま、立つて、本棚の上に重ねて置いた。縁側から外を窺うと、綺麗な空が、高い色を失いかけて、隣の梧桐の一際濃く見える上に、薄い月が出ていた。

そこへ門野が大きな洋燈を持つて這入つて来た。それには絹縮の様に、豎に溝の入つた青い笠が掛けてあつた。門野はそれを洋卓の上に置いて、又縁側へ出たが、出掛けに、

「もう、そろそろ螢が出る時分ですな」と云った。代助は可笑な顔をして、

「まだ出やしまい」と答えた。すると門野は例の如く、

「そうでしょうか」と云う返事をしたが、すぐ真面目な調子で、「螢てえものは、昔は大分流行たもんだが、近來は余り文士方が騒がない様になりましたな。どう云うもんでしよう。螢だの鳥だのって、この頃じゃついぞ見た事がない位なもんだ」と云った。

「そうさ。どう云う訳だろう」と代助も空つとぼけて、真面目な挨拶をした。すると門野は、

「やつぱり、電気燈に圧倒されて、段々退却するんでしょう」と云い終つて、自から、えへへへと、洒落の結末をつけて、書生部屋へ歸つて行つた。代助もつづいて玄関まで出た。門野は振返た。

「また御出掛ですか。よござんす。洋燈は私が氣を付けますから。——小母さんが先刻から腹が痛いつて寐たんですが、何大した事はないでしょう。御緩り」

代助は門を出た。江戸川まで来ると、河の水がもう暗くなつていた。彼は固より平岡を訪ねる氣であつた。から何時もの様に川辺を伝わないで、すぐ橋を渡つて、金剛寺坂を上つた。

実を云うと、代助はそれから三千代にも平岡にも二三遍逢^あつていた。一遍は平岡から比較的長い手紙を受取つた時であつた。それには、第一に着京以来御世話になつて難有^{ありがた}いと云う礼が述べてあつた。それから、——その後色々朋友^{ほうゆう}や先輩の尽力^{かたじけの}を辱^はうしたが、近頃ある知人の周旋で、某新聞の経済部の主任記者にならぬかとの勧誘を受けた。自分も遣つてみたい様な気がする。然^{しか}し着京の当時君に御依頼をした事もあるから、無断では宜^{よろ}しくあるまいと思つて、一応御相談をすると云う意味が後に書いてあつた。代助は、その当時平岡から、兄の会社に周旋してくれと依頼されたのを、そのままにして、断わりもせず今日まで放つて置いた。ので、その返事を促されたのだと受取つた。一通の手紙で謝絶するのも、あまり冷淡過ぎると云う考もあつたので、翌日出向いて行つて、色々兄の方の事情を話して当分、此方は断念してくれる様に頼んだ。平岡はその時、僕も大方そうだろうと思つていたと云つて、妙な眼をして三千代の方を見た。

いま一遍は、愈^{いよいよ}新聞の方が極まつたから、一晚緩り君と飲みたい。何日^{いくか}に来てくれという平岡の端書が着いた時、折悪^{あし}く差^さ支^{さつかえ}が出来たからと云つて散歩の序^{ついで}に断わりに寄つたのである。その時平岡は座敷の真中に引繰り返つて寐^ふていた。昨夕^{ゆうべ}どこかの会へ出て、飲み過ぎした結果だと云つて、赤い眼をしきりに摩^{こす}つた。代助を見て、突然、人間はどう

しても君の様に独身でなけりや仕事は出来ない。僕も一人なら満洲へでも亜米利加へでも行くんだが大いに妻帯の不便を鳴らした。三千代は次の間で、こつそり仕事をしていた。

三遍目には、平岡の社へ出た留守を訪ねた。その時は用事も何もなかった。約三十分ばかり縁へ腰を掛けて話した。

それから以後はなるべく小石川の方面へ立ち回らない事にして今夜に至ったのである。

代助は竹早町へ上つて、それを向うへ突き抜けて、二三町行くと、平岡と云う軒燈のすぐ前へ来た。格子の外から声を掛けると、洋燈を持って下女が出た。が平岡は夫婦とも留守であつた。代助は出先も尋ねずに、すぐ引返して、電車へ乗って、本郷まで来て、本郷から又神田へ乗り換えて、そこで降りて、あるビヤ、ホールへ這入つて、麦酒をぐいぐい飲んだ。

翌日眼が覚めると、依然として腦の中心から、半径の違った円が、頭を二重に仕切っている様な心持がした。こう云う時に代助は、頭の内側と外側が、質の異なつた切り組み細工で出来上つているとしか感じ得られない癖になつていた。それで能く自分で自分の頭を振つてみて、二つのものを混ぜようと力めたものである。彼は今枕の上へ髪を着けたなり、

右の手を固めて、耳の上を二三度敲たたいた。

代助はかかる脳髓の異状を以て、かつて酒の咎とがに帰した事はなかった。彼は小供の時から酒に量を得た男であつた。いくら飲んでも、さ程平常を離れなかつた。のみならず、一度熟睡さえすれば、あとは身体からだに何の故障も認める事が出来なかつた。嘗かつて何かのはずみに、兄と競せり飲みをやつて、三合入の徳利とくりを十三本倒した事がある。その翌あくるひ日代助は平気な顔をして学校へ出た。兄は二日も頭が痛いと言つて苦り切つていた。そうして、これを年齢としの違だと云つた。

昨夕ゆうべ飲んだ麦酒ビールはこれに比べると愚おろかなものだと、代助は頭を敲きながら考えた。幸に、代助はいくら頭が二重になつても、脳の活動に狂くるいを受けた事がなかつた。時としては、ただ頭を使うのが臆おっくう劫おっくうになつた。けれども努力さえすれば、充分複雑な仕事に堪えるという自信があつた。だから、こんな異状を感じても、脳の組織の変化から、精神に悪い影響を与えるものとしては、悲観する余地がなかつた。始めて、こんな感覚があつた時は驚ろいた。二遍目は寧ろむし新奇な経験として喜んだ。この頃は、この経験が、多くの場合に、精神力の低落に伴う様になつた。内容の充実しない行為を敢てして、生活する時の徴候になつた。代助にはそこが不愉快だつた。

床の上に起き上がって、彼は又頭を振った。朝食の時、門野は今朝の新聞に出ていた蛇と驚の戦の事を話し掛けたが、代助は応じなかった。門野は又始まったなと思って、茶の間を出た。勝手の方で、

「小母さん、そう働らいちや悪いだろう。先生の膳は僕が洗って置くから、彼方へ行つて休んで御出」と婆さんを労つていた。代助は始めて婆さんの病気の事を思い出した。何か優しい言葉でも掛ける所であつたが、面倒だと思つて已めにした。

ナイフ食刀を置くや否や、代助はすぐ紅茶茶碗を持って書齋へ這入った。時計を見るともう九時過であつた。しばらく、庭を眺めながら、茶を啜り延ばしていると、門野が来て、「御宅から御迎が参りました」と云つた。代助は宅から迎を受ける覚がなかった。聞き返してみても、門野は車夫がとか何とか要領を得ない事を云うので、代助は頭を振り振り玄関へ出てみた。すると、そこに兄の車を引く勝と云うのがいた。ちゃんと、護謨輪の車を玄関へ横付にして、叮嚀に御辞義をした。

「勝、御迎つて何だい」と聞くと、勝は恐縮の態度で、

「奥様が車を持つて、迎に行つて来いって、御仰いました」

「何か急用でも出来たのかい」

勝は固より何事も知らなかった。

「御出になれば分るからつて——」と簡潔に答えて、言葉の尻を結ばなかった。

代助は奥へ這入った。婆さんと呼んで着物を出させようと思つたが、腹の痛むものを使うのが厭なので、自分で筆筒の抽出を掻き回して、急いで身支度をして、勝の車に乗つて出た。

その日は風が強く吹いた。勝は苦しうに、前の方に曲んで馳けた。乗っていた代助は、二重の頭がぐるぐる回転するほど、風に吹かれた。けれども、音も響もない車輪が美しく動いて、意識に乏しい自分を、半睡の状態で宙に運んで行く有様が愉快であつた。青山の家へ着く時分には、起きた頃とは違つて、気色が余程晴々して來た。

何か事が起つたのかと思つて、上り掛けに、書生部屋を覗いてみたら、直木と誠太郎がたつた二人で、白砂糖を振り掛けた苳を食つていた。

「やあ、御馳走だな」と云うと、直木は、すぐ居ずまいを直して、挨拶をした。誠太郎は唇の縁を濡らしたまま、突然、

「叔父さん、奥さんは何時貰うんですか」と聞いた。直木はにやにやしている。代助は一寸返答に窮した。已を得ず、

「今日は何故学校へ行かないんだ。そうして朝っ腹から苺なんぞを食って」と調戯う様に、叱る様に云った。

「だって今日は日曜じゃありませんか」と誠太郎は真面目になった。

「おや、日曜か」と代助は驚ろいた。

直木は代助の顔を見てとうとう笑い出した。代助も笑って、座敷へ来た。そこには誰も居なかった。替え立ての畳の上に、丸い紫檀の刳拔盆が一つ出ていて、中に置いた湯呑には、京都の浅井黙語の模様画が染め付けてあった。からんとした広い座敷へ朝の緑が庭から射し込んで、凡てが静かに見えた。戸外の風は急に落ちた様に思われた。

座敷を通り抜けて、兄の部屋の方へ来たら、人の影がした。

「あら、だって、それじゃ余まりだわ」と云う嫂の声が聞えた。代助は中へ這入った。中には兄と嫂と縫子がいた。兄は角帯に金鎖を巻き付けて、近頃流行る妙な紹の羽織を着て、此方を書いて立っていた。代助の姿を見て、

「そら来た。ね。だから一所に連れて行って御貰よ」と梅子に話しかけた。代助には何の意味だか固より分らなかった。すると、梅子が代助の方に向き直った。

「代さん、今日貴方、無論暇でしょう」と云った。

「ええ、まあ暇です」と代助は答えた。

「じゃ、一所に歌舞伎座へ行つて頂戴」
ちようだい

代助は嫂のこの言葉を聞いて、頭の中に、忽ち一種の滑稽こっけいを感じた。けれども今日は平常いつもの様に、嫂に調戯からかう勇氣がなかった。面倒だから、平気な顔をして、

「ええ宜しい、行きましよう」と機嫌よく答えた。すると梅子は、

「だって、貴方は、最早もとう、一遍觀たつて云うんじやありませんか」と聞き返した。

「一遍だろうが、二遍だろうが、些ちつとも構わない。行きましよう」と代助は梅子を見て微笑した。

「貴方も余つ程道楽もののね」と梅子が評した。代助は益滑稽ますますを感じた。

兄は用があると云つて、すぐ出て行つた。四時頃用が済んだら芝居の方へ回る約束なんだそうである。それまで自分と縫子だけで見ていたら好きそうなものだが、梅子はそれが厭だと云つた。そんなら直木を連れて行けと兄から注意された時、直木は紺こん紺がすりを着て、袴はかまを穿はいて、むずかしく坐つていて不可いないけと答えた。それで仕方がないから代助を迎いに遣やつたのだ、と、これは兄が出掛の説明であつた。代助は少々理窟りくつに合わないと思つたが、ただ、そうですかと答えた。そうして、嫂は幕の合間に話し相手が欲ほしいのと、それか

らいざと云う時に、色々用を云い付けたいものだから、わざわざ自分と呼び寄せたに違ないと解釈した。

梅子と縫子は長い時間を御化粧に費やした。代助は懇よく御化粧の監督者になって、両人の傍に附いていた。そうして時々、面白半分の冷かしも云った。縫子からは叔父さん随分だわを二三度繰り返された。

父は今朝早くから出て、家にいなかった。何処へ行つたのだから、嫂は知らないと言った。代助は別に知りたい気もなかった。ただ父のいないのが難有かつた。この間の会見以後、代助は父とはたつた二度程しか顔を合せなかつた。それも、ほんの十分か十五分に過ぎなかつた。話が込み入りそうになると、急に叮嚀な御辞義をして立つのを例にしていた。父は座敷の方へ出て来て、どうも代助は近頃少しも尻が落ち付かなくなつた。おれの顔さえ見れば逃げ仕度をすると言つて怒つた。と嫂は鏡の前で夏帯の尻を撫でながら代助に話した。

「ひどく、信用を落したもんだな」

代助はこう云つて、嫂と縫子の蝙蝠傘を提げて一足先へ玄関へ出た。車はそこに三挺並んでいた。

代助は風を恐れて鳥打帽を被^{かぶ}つていた。風は漸^{ようや}く歇^やんで、強い日が雲の隙間^{すきま}から頭の上を照らした。先へ行く梅子と縫子は傘を広げた。代助は時々手の甲を額の前に翳^{かぎ}した。

芝居の中では、嫂も縫子も非常に熱心な観客^{けんぱく}であつた。代助は二返目の所為^{せい}といい、この三四日来の脳の状態からと云い、そう一図に舞台ばかりに気を取られている訳にも行かなかつた。絶えず精神に重苦^{あつさ}しい暑^{あつさ}を感じるので、屢^{しばしば}団扇^{うちわ}を手にして、風を襟から頭へ送つていた。

幕の合間に縫子が代助の方を向いて時々妙な事を聞いた。何故あの人は盥^{たらひ}で酒を飲むんだとか、何故坊さんが急に大将になれるんだとか、大抵説明の出来ない質問のみであつた。梅子はそれを聞くとたんびに笑つていた。代助は不図^{にさんち}二三日前新聞で見た、ある文学者の劇評を思い出した。それには、日本の脚本が、あまりに突飛な筋に富んでいるので、楽に見物が出来ないと思つてあつた。代助はその時、役者の立場から考えて、何もそんな人に見て貰う必要はあるまいと思つた。作者に云うべき小言を、役者の方へ持つてくるのは、近松の作を知るために、越路^{こしじ}の浄瑠璃^{じやうるり}が聴きたいと云う愚物と同じ事だと云つて門野に話した。門野は依然として、そんなものでしょうかなと云つていた。

小供のうちから日本在来^{ざいらい}の芝居を見慣れた代助は、無論梅子と同じ様に、単純なる芸術

の鑑賞家であつた。そうして舞台に於ける芸術の意味を、役者の手腕に就てのみ用いべきものと狭義に解釈していた。だから梅子とは大いに話が合つた。時々顔を見合して、黒人の様な批評を加えて、互に感心していた。けれども、大体に於て、舞台にはもう厭が来ていた。幕の途中でも、双眼鏡で、彼方を見たり、此方を見たりしていた。双眼鏡の向う所には芸者が沢山いた。そのあるものは、先方でも眼鏡の先を此方へ向けていた。

代助の右隣には自分と同年輩の男が丸髷に結つた美しい細君を連れて来ていた。代助はその細君の横顔を見て、自分の近付のある芸者によく似ていると思つた。左隣には男連が四人ばかりいた。そうして、それが、悉く博士であつた。代助はその顔を一々覚えていた。その又隣に、広い所をたつた二人で専領しているものがあつた。その一人は、兄と同じ位な年恰好で、正しい洋服を着ていた。そうして金縁の眼鏡を掛けて、物を見るときには、顎を前へ出して、心持仰向く癖があつた。代助はこの男を見たとき、何所か見覚えのある様な気がした。が、ついに思い出そうと力めてもみなかつた。その伴侶は若い女であつた。代助はまだ二十になるまいと判定した。羽織を着ないで、普通よりは大きく廂を出して、多くは顎を襟元へびたりと着けて坐つていた。

代助は苦しいので、何返も席を立つて、後の廊下へ出て、狭い空を仰いだ。兄が来たら、

嫂と縫子を引き渡して早く帰りたい位に思った。一遍は縫子を連れて、其所等そこいらをぐるぐる運動して歩いた。仕舞には些ちと酒でも取り寄せて飲もうかと思った。

兄は日暮ひくれとすれすれに來た。大変遅かつたじやありませんかと云つた時、帶の間から、金時計を出して見せた。實際六時少し回つたばかりであつた。兄は例の如ごとく、平氣な顔をして、方々見回していた。が、飯を食う時、立つて廊下へ出たぎり、中々歸つて來なかつた。しばらくして、代助が不図ふと振り返つたら、一軒置いて隣りの金縁の眼鏡を掛けた男の所へ這入つて、話をしていた。若い女にも時々話しかける様であつた。然しかし女の方では笑い顔を一寸見せるだけで、すぐ舞台の方へ真面目に向き直つた。代助は嫂にその人の名を聞こうと思つたが、兄は人の集る所へさえ出れば、何所へでも斯かくの如く平氣に這入り込む程、世間の広い、又世間を自分の家の様いえに心得ている男であるから、氣にも掛けずに黙つていた。

すると幕の切れ目に、兄が入口まで歸つて來て、代助一寸来いと云いながら、代助をその金縁の男の席へ連れて行つて、愚弟だと紹介した。それから代助には、これが神戸の高木さんだと云つて引合した。金縁の紳士は、若い女を顧みて、私の姪めいですと云つた。女はしとやかに御辭義をした。その時兄が、佐川さんの令嬢だと口を添えた。代助は女の名を

聞いたとき、旨く掛けられたと腹の中で思った。が何事も知らぬものの如く装つて、好加減に話していた。すると嫂が一寸自分の方を振り向いた。

五六分して、代助は兄と共に自分の席に返った。佐川の娘を紹介されるまでは、兄の見え次第逃げる気であつたが、今ではそう不可なくなつた。余り現金に見えては、却つて好くない結果を引き起しそうな気がしたので、苦しいのを我慢して坐つていた。兄も芝居に就ては全たく興味がなさそうだったけれども、例の如く鷹揚に構えて、黒い頭を燻す程、葉巻をくゆらした。時々評をすると、縫子あの幕は綺麗だろう位の所であつた。梅子は平生の好奇心にも似ず、高木に就ても、佐川の娘に就ても、何等の質問を掛けず、一言の批評も加えなかつた。代助にはその澄した様子が却つて滑稽に思われた。彼は今日まで嫂の策略にかかつた事が時々あつた。けれども、只の一返も腹を立てた事はなかつた。今度の狂言も、平生ならば、退屈紛らしの遊戯程度に解釈して、笑つてしまつたかも知れない。そればかりではない。もし自分が結婚する気なら、却つて、この狂言を利用して、自ら人巧的に、御目出度喜劇を作り上げて、生涯自分を嘲けつて満足する事も出来た。然しこの姉までが、今の自分を、父や兄と共に謀して、漸々窮地に誘なつて行くかと思うと、さすがにこの所作をただの滑稽として、観察する訳には行かなかつた。代助はこの先、嫂がこ

の事件をどう発展させる気だろうと考えて、少々弱った。家のものの中で、嫂が一番こんな計画に興味をもっていたからである。もし嫂がこの方面に向って代助に肉薄すればする程、代助は漸々家族のものと疎遠にならなければならぬと云う恐れが、代助の頭の何処かに潜んでいた。

芝居の仕舞になつたのは十一時近くであつた。外へ出て見ると、風は全く歇んだが、月も星も見えない静かな晩を、電燈が少しばかり照らしていた。時間が遅いので茶屋では話をする暇もなかった。三人の迎は来ていたが、代助はつい車を逃えて置くのを忘れた。面倒だと思つて、嫂の勸を斥けて、茶屋の前から電車に乗った。数寄屋橋で乗り易え様と思つて、黒い路の中に、待ち合わしていると、小供を負つた神さんが、退儀そうに向うから近寄つて来た。電車は向う側を二三度通つた。代助と軌道の間には、土か石の積んだものが、高い土手の様に挟まつていた。代助は始めて間違つた所に立っている事を悟つた。「御神さん、電車へ乗るなら、此所じや不可ない。向側だ」と教えながら歩き出した。神さんは礼を云つて跟いて来た。代助は手探でもする様に、暗い所を好加減に歩いた。十四五間左の方へ濠際を目標に出たら、漸く停留所の柱が見付つた。神さんは其所で、神田橋の方へ向いて乗つた。代助はたった一人反対の赤坂行へ這入つた。

車の中では、眠くて寐^ねられない様な気がした。揺られながらも今夜の睡眠が苦になった。彼は大きい疲労して、白昼の凡てに、惰気を催おすにも拘^{かか}わらず、知られざる何物かの興奮の為に、静かな夜を恣^{ほし}にする事が出来ない事がよくあつた。彼の脳裏には、今日の日に、交^{かわ}る交^がる痕^{あと}を残した色彩が、時の前後と形の差別を忘れて、一度に散らついていた。そうして、それが何の色彩であるか、何の運動であるか慥^{たし}かに解^{わか}らなかつた。彼は眼を眠^{ねむ}つて、家へ帰つたら、又ウイスキーの力を借りようと覺悟した。

彼はこの取り留めのない花やかな色調の反照として、三千代の事を思い出さざるを得なかつた。そうして其所にわが安住の地を見出^{みい}した様な気がした。けれどもその安住の地は、明らかに、彼の眼に映じて出なかつた。ただ、かれの心の調子全体で、それを認めたただけであつた。従つて彼は三千代の顔や、容子^{ようす}や、言葉や、夫婦の關係や、病氣や、身分をひとまとめ^{ひとまとめ}にしたものを、わが情調にしっくり合う対象として、発見したに過ぎなかつた。

翌日代助は但馬^{たじま}にいる友人から長い手紙を受取つた。この友人は学校を卒業すると、すぐ国へ歸つたぎり、今日までついぞ東京へ出た事のない男であつた。当人は無論山の中で暮す気はなかつたんだが、親の命令で已^{やむ}を得ず、故郷に封じ込められてしまったのである。それでも一年ばかりの間は、もう一返親父を説き付けて、東京へ出る出ると云つて、うる

さい程手紙を寄こしたが、この頃は漸く断念したと見えて、大した不平がましい訴えもない様になった。家は所の旧家で、先祖から持ち伝えた山林を年々伐り出すのが、重なる事になってゐるよしであつた。今度の手紙には、彼の日常生活の模様が委しく書いてあつた。それから、一カ月前町長に挙げられて、年俸を三百円頂戴する身分になった事を、面白半分、殊更に真面目な句調で吹聴して来た。卒業してすぐ中学の教師になつても、この三倍は貰えると、自分と他の友人との比較がしてあつた。

この友人は国へ歸つてから、約一年ばかりして、京都在のある財産家から嫁を貰つた。それは無論親の云い付であつた。すると、少時して、直子供が生れた。女房の事は貰つた時より外に何も云つて来ないが、子供の生長には興味があると見えて、時々代助が可笑くなる様な報知をした。代助はそれを読むたびに、この子供に対して、満足しつつある友人の生活を想像した。そうして、この子供の為に、彼の細君に対する感想が、貰つた当時に比べて、どの位変化したかを疑つた。

友人は時々鮎の乾したのや、柿の乾したのを送つてくれた。代助はその返礼に大概は新しい西洋の文学書を遣つた。するとその返事には、それを面白く読んだ証拠になる様な批評がきつとあつた。けれども、それが長くは続かなかつた。仕舞には受取つたと云う札

状さえ寄こさなかった。此方^{こつち}からわざわざ問い合せると、書物は難有^{ありがた}く頂戴した。読んでから礼を云おうと思つて、つい遅くなつた。実はまだ読まない。白状すると、読む閑^{ひま}がないと云うより、読む気がしないのである。もう一層露骨に云えば、読んでも解らなくなつたのである。という返事が来た。代助はそれから書物を廃^やめて、その代りに新らしい玩^{おもち}具を買つて送る事にした。

代助は友人の手紙を封筒に入れて、自分と同じ傾向を有^もつていたこの旧友が、当時とはまるで反対の思想と行動とに支配されて、生活の音色を出していると云う事実を、切に感じた。そうして、命の絃^{いと}の震動から出る二人の響^{つまびら}を審かに比較した。

彼は理論家^{セオリスト}として、友人の結婚^{うけが}を肯^{うけ}つた。山の中に住んで、樹や谷を相手にしているものは、親の取り極めた通りの妻を迎えて、安全な結果を得るのが自然の通則と心得たからである。彼は同じ論法で、あらゆる意味の結婚が、都会人士には、不幸を持ち来^{きた}すものと断定した。その原因を云えば、都会は人間の展覧会に過ぎないからであつた。彼はこの前提からこの結論に達^たする為^{ため}にこう云う径路^{たじ}を辿つた。

彼は肉体と精神に於て美の類別を認める男であつた。そうして、あらゆる美の種類に接触する機会を得るのが、都会人士の権能であると考えた。あらゆる美の種類に接触して、

そのたび毎に、甲から乙に氣を移し、乙から丙に心を動かさぬものは、感受性に乏しい無鑑賞家であると断定した。彼はこれを自家の経験に徴して争うべからざる真理と信じた。その真理から出立して、都会的生活を送る凡ての男女は、両性間の引力に於て、悉く随縁臨機に、測りがたき変化を受けつつあるとの結論に到着した。それを引き延ばすと、既婚の一对は、双方ともに、流俗に所謂不義の念に冒されて、過去から生じた不幸を、始終嘗めなければならぬ事になった。代助は、感受性の尤も発達した、又接点の尤も自由な、都会人士の代表者として、芸妓を選んだ。彼等のあるものは、生涯に情夫を何人取り替えるか分らないではないか。普通の都会人は、より少ない程度に於て、みんな芸妓ではないか。代助は渝らざる愛を、今の世に口にするものを偽善家の第一位に置いた。

此所まで考えた時、代助の頭の中に、突然三千代の姿が浮んだ。その時代助はこの論理中に、或因数は数え込むのを忘れたのではなからうかと疑った。けれども、その因数はどうしても発見する事が出来なかった。すると、自分が三千代に対する場合も、この論理によって、ただ現在のものに過ぎなくなつた。彼の頭は正にこれを承認した。然し彼の心は、慥かにそうだと感ずる勇氣がなかった。

十二

代助は嫂あによめの肉薄を恐れた。又三千代の引力を恐れた。避暑にはまだ間あいだがあつた。凡ての娯楽には興味を失つた。読書にしても、自己の影を黒い文字もんじの上に認める事が出来なくなつた。落付いて考えれば、考えは蓮の糸を引く如くに出るが、出たものを纏めて見ると、人の恐ろしがるものばかりであつた。仕舞には、斯か様に考えなければならぬ自分が怖くなつた。代助は蒼白あおしろく見える自分の脳髓を、ミルクセーキの如く廻転させる為ために、しばらく旅行しようと決心した。始めは父の別荘に行く積りであつた。然し、これは東京から襲われる点に於て、牛込うしごめに居おると大した変りはないと思つた。代助は旅行案内を買つて来て、自分の行くべき先を調べてみた。が、自分の行くべき先は天下中何処どこにも無い様な気がした。しかし、無理にも何処かへ行こうとした。それには、支度を調えるに若くはないと極めた。代助は電車に乗つて、銀座まで来た。朗かに風の往来を渡る午後であつた。新橋の勧工場かんこうばを一回ひとまわりして、広い通りをぶらぶらと京橋の方へ下つた。その時代助の眼には、向う側の家が、芝居の書割の様に平たく見えた。青い空は、屋根の上にすぐ塗り付

けられていた。

代助は二三の唐物屋を冷かして、入用の品を調えた。その中に、比較的高い香水があつた。資生堂で練歯磨を買おうとしたら、若いものが、欲しくないと云うのに自製のもを出して、頻に勧めた。代助は顔をしかめて店を出た。紙包を腋の下に抱えたまま、銀座の外れまで遣つて来て、其所から大根河岸を回つて、鍛冶橋を丸の内へ志した。当もなく西の方へ歩きながら、これも簡便な旅行と云えるかも知れないと考えた揚句、草臥れて車をもつたが、何処にも見当らなかつたので又電車へ乗つて歸つた。

家の門を這入ると、玄関に誠太郎のらしい履が叮嚀に并べてあつた。門野に聞いたら、へえそうです、先方から待つて御出ですという答であつた。代助はすぐ書斎へ来て見た。誠太郎は、代助の坐る大きな椅子に腰を掛けて、洋卓の前で、アラスカ探險記を読んでゐた。洋卓の上には、蕎麦饅頭と茶盆が一所に乗つていた。

「誠太郎、何だい、人のいない留守に来て、御馳走だね」と云うと、誠太郎は、笑いながら、先ずアラスカ探險記をポケットへ押し込んで、席を立つた。

「其所にいるなら、いても構わないよ」と云つても、聞かなかつた。

代助は誠太郎を捕まえて、例の様に調戲い出した。誠太郎はこの間代助が歌舞伎座でし

た欠伸あくびの数を知っていた。そうして、

「叔父さんは何時いつ奥さんを貰うの」と、又先達せんだつてと同じ様な質問を掛けた。

この日誠太郎は、父の使に來たのであつた。その口上は、明日あしたの十一時までに一寸ちよつと來てくれと云うのであつた。代助はそうそう父や兄に呼び付けられるのが面倒であつた。誠太郎に向つて、半分怒つた様に、

「何だい、苛ひどいじゃないか。用も云わないで、無暗むやみに人を呼びつけるなんて」と云つた。

誠太郎はやつぱりにやにやしていた。代助はそれぎり話を外へそらしてしまつた。新聞に出ている相撲の勝負が、二人の題目の重なるものであつた。

晩食ばんめしを食つて行けと云うのを学校の下調があると云つて辞退して誠太郎は歸つた。歸る前に、

「それじゃ、叔父さん、明日は來ないんですか」と聞いた。代助は已を得ず、

「うむ。どうだか分らない。叔父さんは旅行するかも知れないからつて、歸つてそう云つてくれ」と云つた。

「何時」と誠太郎が聞き返したとき、代助は今日明日のうちに答えた。誠太郎はそれで納得して、玄關まで出て行つたが、沓脱くつぬぎへ下りながら振り返つて、突然、

「何処へいらつしやるの」と代助を見上げた。代助は、

「何処って、まだ分るもんか。ぐるぐる回るんだ」と云ったので、誠太郎は又にやにやし
ながら、格子こうしを出た。

代助はその夜すぐ立とうと思つて、グラッドストーンの中を門野に掃除さして、携帯品
を少し詰め込んだ。門野は少なからざる好奇心を以てもつ、代助の革靴かばんを眺めていたが、

「少し手伝いましょうか」と突立つたまま聞いた。代助は、

「なに、訳はない」と断わりながら、一旦詰め込んだ香水の壺びんを取り出して、封被ふうひを剥い
で、栓を抜いて、鼻に当てて嗅かいでみた。門野は少し愛想を尽つかした様な具合で、自分の部
屋へ引取つた。二三分すると又出て来て、

「先生、車をそう云つときますかな」と注意した。代助はグラッドストーンを前へ置いて、
顔を上げた。

「そう、少し待つてくれ給えたま」

庭を見ると、生垣の要目かなめの頂いただきに、まだ薄明るい日足がうろついていた。代助は外を覗のぞき
ながら、これから三十分のうちに行く先を極めようと考えた。何でも都合のよさそうな時
間に出る汽車に乗つて、その汽車の持つて行く所へ降りて、其所で明日まで暮らして、暮

らしているうちに、又新しい運命が、自分を攫^{さら}いに来るのを待つ積りであつた。旅費は無論充分でなかつた。代助の旅装に適した程の宿泊^{とまり}を続けるとすれば、一週間も保^もたない位であつた。けれども、そう云う点になると、代助は無頓着^{むとんじやく}であつた。愈^{いよいよ}となれば、家から金を取り寄せる氣でいた。それから、本来が四辺の風氣を換えるのを目的とする移動だから、贅^{ぜいたく}沢^{たく}の方面へは重きを置かない決心であつた。興に乗れば、荷持^{にもち}を雇つて、一日歩いて可^いいと覺悟した。

彼は又旅行案内を開いて、細かい数字を丹念に調べ出したが、少しも決定の運^{はこび}に近寄らないうちに、又三千代の方に頭が滑つて行つた。立つ前にもう一遍様子を見て、それから東京を出ようと云う氣が起つた。グラッドストーンは今夜中に始末を付けて、明日の朝早く提げて行かれる様にして置けば構わない事になった。代助は急ぎ足で玄関まで出た。その音を聞き付けて、門野も飛び出した。代助は不斷着のまま、掛^{かけ}釘^{くぎ}から帽子を取つていた。

「又御出掛ですか。何か御買物じやありませんか。私^{わたし}で可^よければ買つて来ましょう」と門野が驚ろいた様に云つた。

「今夜は已^やめだ」と云い放したまま、代助は外へ出た。外はもう暗かつた。美しい空に

星がぼつぼつ影を増して行く様に見えた。心持の好い風が袂たもとを吹いた。けれども長い足を大きく動かした代助は、二三町も歩かないうちに額ひたいぎわ際ぎわに汗を覺えた。彼は頭から鳥打を脱とった。黒い髪を夜露に打たして、時々帽子をわざと振って歩いた。

平岡の家の近所へ来ると、暗い人影が蝙蝠かわほりの如く静かに其所、此所ここに動いた。粗末な板塀すきまの隙間すきまから、洋燈ランブの灯が往来へ映った。三千代はその光の下で新聞を読んでいた。今頃新聞を読むのかと聞いたら、二返目だと答えた。

「そんなに閑ひまなんですか」と代助は座蒲団を敷居の上に移して、縁側へ半分身体からだを出しながら、障子へ倚よりかかった。

平岡は居なかつた。三千代は今湯から帰った所だと云つて、団扇うちわさえ膝ひざの傍に置いていた。平生いつもの頬に、心持暖い色を出して、もう帰るでしょうから緩ゆるくりしていらつしやいと、茶の間へ茶を入れに立つた。髪は西洋風に結いつていた。

平岡は三千代の云つた通りには中々帰らなかつた。何時でもこんなに遅いのかと尋ねたら、笑いながら、まあそんな所でしようと答えた。代助はその笑の中に一種の淋さみしさを認めて、眼を正して、三千代の顔を凝じつと見た。三千代は急に団扇を取つて袖そでの下を煽あおいだ。

代助は平岡の経済の事が氣に掛つた。正面から、この頃は生活費には不自由はあるまい

と尋ねてみた。三千代はそうですねと云つて、又前の様な笑い方をした。代助がすぐ返事をしなかつたものだから、

「貴方あなたには、そう見えて」と今度は向うから聞き直した。そうして、手に持った団扇を放り出して、湯から出たての綺麗な織ほそい指を、代助の前に広げて見せた。その指には代助の贈ゆびわつた指環も、他の指環も穿はめていなかった。自分の記念を何時でも胸に描えいていた代助には、三千代の意味がよく分つた。三千代は手を引き込めると同時に、ぽつと赤い顔をした。

「仕方がないんだから、堪かん忍にんして頂ちやうだい戴」と云つた。代助は憐あわれな心持がした。

代助はその夜九時頃平岡の家を辞した。辞する前、自分の紙入の中に有るものを出して、三千代に渡した。その時は、腹の中で多少の工夫を費やした。彼は先ず何気なく懷中物を胸の所で開けて、中にある紙幣を、勘定もせずに攫つかんで、これを上げるから御使なさいと無難作に三千代の前へ出した。三千代は、下女を憚はばかる様な低い声で、

「そんな事を」と、却かえつて両手をぴたりと身体へ付けてしまった。代助は然しかし自分の手を引き込めなかつた。

「指環を受取るなら、これを受取つても、同じ事でしよう。紙の指環だと思つて御貰いな

さい」

代助は笑いながら、こう云った。三千代はでも、余りだからとまだ躊躇した。代助は、平岡に知れると叱られるのかと聞いた。三千代は叱られるか、賞められるか、明らかに分らなかったたので、やはり愚図々々していた。代助は、叱られるなら、平岡に黙っていたら可かろうと注意した。三千代はまだ手を出さなかった。代助は無論出したものを引き込める訳に行かなかった。已を得ず、少し及び腰になつて、掌を三千代の胸の側まで持つて行つた。同時に自分の顔も一尺ばかりの距離に近寄せて、

「大丈夫だから、御取んなさい」と確りした低い調子で云った。三千代は顎を襟の中へ埋める様に後へ引いて、無言のまま右の手を前へ出した。紙幣はその上に落ちた。その時三千代は長い睫毛を二三度打ち合わせた。そうして、掌に落ちたものを帯の間に挟んだ。

「又来る。平岡君によろしく」と云つて、代助は表へ出た。町を横断して小路へ下ると、あたりは暗くなつた。代助は美しい夢を見た様に、暗い夜を切つて歩いた。彼は三十分と立たないうちに、吾家の門前に来た。けれども門を潜る気がしなかった。彼は高い星を戴いて、静かな屋敷町をぐるぐる徘徊した。自分では、夜半まで歩きつづけても疲れる事はなかうと思つた。とかくするうち、又自分の家の前へ出た。中は静かであつた。

門野と婆さんは茶の間で世間話をしていたらしい。

「大変遅うがしたな。明日は何時の汽車で御立ちですか」と玄関へ上るや否や問を掛けた。代助は、微笑しながら、

「明日も御已めだ」と答えて、自分の室へ這入った。そこには床がもう敷いてあった。代助は先刻栓を抜いた香水を取って、括枕の上に一滴垂らした。それでは何だか物足りなかった。壘を持ったまま、立つて室の四隅へ行つて、そこに一二滴ずつ振りかけた。斯様に打ち興じた後、白地の浴衣に着換えて、新しい小搔卷の下に安かな手足を横たえた。そうして、薔薇の香のする眠に就いた。

眼が覚めた時は、高い日が縁に黄金色の震動を射込んでいた。枕元には新聞が二枚揃えてあった。代助は、門野が何時、雨戸を引いて、何時新聞を持つて来たか、まるで知らなかった。代助は長い伸を一つして起き上った。風呂場で身体を拭いていると、門野が少し狼狽えた容子で遣つて来て、

「青山から御兄いさんが御見えになりました」と云った。代助は今直行く旨を答えて、奇麗に身体を拭き取った。座敷はまだ掃除が出来ているか、いないかであったが、自分で飛び出す必要もないと思つたから、急ぎもせずに、いつもの通り、髪を分けて剃を中て、悠

々と茶の間へ歸つた。そこではさすがにゆつくりと膳につく氣も出なかった。立ちながら紅茶を一杯啜^{すす}つて、タオルで一^{ちよつと}寸口髭^{くちひげ}を摩^{こす}つて、それを、其所へ放り出すと、すぐ客間へ出て、

「やあ兄さん」と挨拶^{あいさつ}をした。兄は例の如く、色の濃い葉巻の、火の消えたのを、指の股^{また}に挟んで、平然として代助の新聞を読んでいた。代助の顔を見るや否や、

「この室は大變好^{におい}い香がする様だが、御前の頭かい」と聞いた。

「僕の頭の見える前からでしょう」と答えて、昨夜の香水の事を話した。兄は、落ち付いて、

「ははあ、大分洒落^{しゃれ}た事をやるな」と云つた。

兄は滅多に代助の所へ来た事のない男であつた。たまに来れば必ず来なくなつてならない用事を持っていた。そうして、用を済ますとさつさと歸つて行つた。今日も何事が起つたに違ないと代助は考へた。そうして、それは昨日誠太郎を好加減に胡魔^{ごま}化して返した反響だろうと想像した。五六分雑談をしているうちに、兄はどうとうこう云い出した。

「昨夕^{ゆうべ}誠太郎が歸つて来て、叔父さんは明日から旅行するつて云う話だから、出て来た」

「ええ、実は今朝六時頃から出ようと思つてね」と代助は嘘^{うそ}の様な事を、至極冷静に答え

た。兄も真面目な顔をして、

「六時に立てる位な早起の男なら、今時分わざわざ青山から遣つて来やしない」と云つた。改めて用事を聞いてみると、やはり予想の通り肉薄の遂行に過ぎなかった。即ち今日高木と佐川の娘を呼んで午餐を振舞う筈だから、代助にも列席しろと云う父の命令であつた。兄の語る所によると、昨夕誠太郎の返事を聞いて、父は大いに機嫌を悪くした。梅子は氣を揉んで、代助の立たない前に逢つて、旅行を延ばさせると云い出した。兄はそれを留めたそうである。

「なに彼奴が今夜中に立つものか、今頃は革鞆の前へ坐つて考え込んでゐる位のものだ。明日になつてみる、放つて置いても遣つて来るからつて、己が姉さんを安心させたのだよ」と誠吾は落付払つていた。代助は少し忌々しくなつたので、

「じゃ、放つて置いて御覧なされば好いのに」と云つた。

「ところが女と云うものは、氣の短かいもので、御父さんに悪いからつて、今朝起きるや否や、己をせびるんだからね」と誠吾は可笑い様な顔もしなかつた。寧ろ迷惑そうに代助を眺めていた。代助は行くとも、行かないとも決答を与えなかつた。けれども兄に対しては、誠太郎同様に、要領を握らせないで返してしまふ勇氣も出なかつた。その上午餐を断

つて、旅行するにしても、もう自分の懷中を当にする訳には行かなかった。やはり、兄とか嫂あによめとか、もしくは父とか、いずれ反対派の誰かを痛めなければ、身動が取れない位地あにいた。そこで、即つかず離れずに、高木と佐川の娘の評判をした。高木には十年程前に一遍逢あつたぎりであつたが、妙なもので、何処どこかに見覺があつて、この間歌舞伎座で眼に着いた時は、はてなと思つた。これに反して、佐川の娘の方は、つい先達て、写真を手にしたばかりであるのに、実物に接しても、まるで聯想れんそうが浮ばなかつた。写真は奇体なもので、先まず人間を知つていて、その方から、写真の誰彼を極めるのは容易であるが、その逆の、写真から人間を定める方は中々むずかしい。これを哲学にすると、死から生を出すのは不可能だが、生から死に移るのは自然の順序であると云う真理に帰着する。

「私はそう考えた」と代助が云つた。兄はなるほど答えたが別段感心した様子もなかつた。葉巻の短かくなつて、口髭に火が付きそうなのを無暗くわに唧かえ易えて、

「それで、必ずしも今日旅行する必要もないんだろう」と聞いた。

代助はないと答えざるを得なかつた。

「じゃ、今日餐めしを食くひに来ていても好いいんだろう」

代助は又好いと答えない訳に行かなかつた。

「じゃ、己はこれから、一寸他所へ廻るから、間違のない様に来てくれ」と相変らず多忙に見えた。代助はもう度胸を据えたから、どうしても構わないという気で、先方に都合の好い返事を与えた。すると兄が突然、

「一体どうなんだ。あの女を貰う気はないのか。好いじゃないか貰ったって。そう撰り好みをする程女房に重きを置くと、何だか元禄時代の色男の様で可笑しいな。凡てあの時代の人間は男なんによ女に限らず非常に窮屈な恋をした様だが、そうでもなかったのかい。——まあ、どうしても好いから、なるべく年寄を怒らせない様に遣やつてくれ」と云って帰った。

代助は座敷へ戻つて、しばらく、兄の警句を咀嚼そしゃくしていた。自分も結婚に対しては、實際兄と同意見であるとしか考えられない。だから、結婚を勧める方でも、怒らないで放つて置くべきものだ、兄とは反対に、自分に都合の好い結論を得た。

兄の云う所によると、佐川の娘は、今度久し振に叔父に連れられて、見物旁上京かたがたしたので、叔父の商用が済み次第又連れられて国へ帰るのだそうである。父がその機会を利用して、相互の關係に、永遠の利害を結び付けようと企てたのか、又は先達での旅行先で、この機会をも自発的に拵こしらえて帰つて来たのか、どっちにしても代助はあまり研究の余地を認めなかった。自分はただこれ等の人と同じ食卓で、旨うまそうに午餐を味わつて見せれば、社

交上の義務は其所に終るものと考えた。もしそれより以上に、何等かの発展が必要になつた場合には、その時に至つて、始めて処置を付けるより外に道はないと思案した。

代助は婆さんばあを呼んで着物を出さした。面倒だと思つたが、敬意を表するために、紋付の夏羽織を着た。袴はかまは一重ひとえのがなかつたから、家に行つて、父か兄かの穿はく事に極めた。代助は神経質な割に、子供の時から習慣で、人中へ出るのを余り苦にしなかつた。宴会とか、招待とか、送別とかいう機会があると、大抵は都合して出席した。だから、ある方面に知名な人の顔は大分覚えていた。その中には伯はく爵しやくとか子爵とかいう貴公子も交つていた。彼はこんな人の仲間入をして、その仲間なりの交際つきあいに、損も得も感じなかつた。言語動作は何処へ出ても同じであつた。外部から見ると、其所が大変能く兄の誠吾に似ていた。だから、よく知らない人は、この兄弟の性質を、全く同一型に属するものと信じていた。

代助が青山に着いた時は、十一時五分前であつたが、御客はまだ来ていなかつた。兄もまだ帰らなかつた。嫂だけがちゃんと支度をして、座敷に坐つていた。代助の顔を見て、「あなたも、随分乱暴ね。人を出し抜いて旅行するなんて」と、いきなり遣り込めた。梅子の場合によると、論理ロジックを有ち得ない女であつた。この場合にも、自分が代助を出し抜

いた事にはまるで気が付いていない挨拶の仕方であつた。それが代助には愛嬌あいきょうに見えた。で、直すぐそこへ坐り込んで梅子の服装の品評を始めた。父は奥にいと聞いたが、わざと行かなかつた。強いられたとき、

「今に御客さんが来たら、僕が奥へ知らせに行く。その時挨拶をすれば好かろう」と云つて、やつぱり平常へいぜいの様な無駄口を叩たたいていた。けれども佐川の娘に関しては、一言いちごんも口を切らなかつた。梅子は何とかして、話を其所へ持つて行こうとした。代助には、それが明らかに見えた。だから、猶空なほとぼけて讎かたきを取つた。

そのうち待ち設けた御客が来たので、代助は約束通りすぐ父の所へ知らせに行つた。父は、案のじよう、

「そうか」とすぐ立ち上がったであつた。代助に小言を云う暇も何も無かつた。代助は座敷へ引き返して来て、袴を穿いて、それから応接間へ出た。客と主人とはそこで悉ことごとく顔を合わせた。父と高木とが第一に話を始めた。梅子は重に佐川の令嬢の相手になつた。そこへ兄が今朝の通りの服装なりで、のっそりと這入つて来た。

「いや、どうも遅くなりまして」と客の方に挨拶をしたが、席に就いたとき、代助を振り返つて、

「大分早かったね」と小さな声を掛けた。

食堂には応接室の次の間を使った。代助は戸の開いた間から、白い卓布の角の際立つた色を認めて、午餐は洋食だと心づいた。梅子是一寸席を立て、次の入口を覗きに行つた。それは父に、食卓の準備が出来上つた旨を知らせる為であつた。

「ではどうぞ」と父は立ち上がった。高木も会釈して立ち上がった。佐川の令嬢も叔父に繼いで立ち上がった。代助はその時、女の腰から下の、比較的細く長い事を発見した。食卓では、父と高木が、真中に向き合つた。高木の右に梅子が坐つて、父の左に令嬢が席を占めた。女同志が向き合つた如く、誠吾と代助も向き合つた。代助は五味台を中に、少し斜に反れた位地から令嬢の顔を眺める事になった。代助はその頬の肉と色が、著るしく後の窓から射す光線の影響を受けて、鼻の境に暗過ぎる影を作つた様に思つた。その代り耳に接した方は、明らかに薄紅であつた。殊に小さい耳が、日の光を透しているかの如くデリケートに見えた。皮膚とは反対に、令嬢は黒い鳶色の大きな眼を有していた。この二つの対照から華やかな特長を生ずる令嬢の顔の形は、寧ろ丸い方であつた。食卓は、人数が人数だけに、さ程大きくはなかつた。部屋の広さに比例して、寧ろ小さい過ぎる位であつたが、純白な卓布を、取り集めた花で綴つて、その中に肉刀と肉匙の色

が冴えて輝いた。

卓上の談話は重に平凡な世間話であつた。始のうちは、それさえ余り興味が乗らない様に見えた。父はこう云う場合には、よく自分の好きな書画骨董こつとうの話を持ち出すのを常としていた。そうして気が向けば、いくらでも、蔵から出して来て、客の前に陳べたものである。父の御蔭で、代助は多少この道に好悪を有てる様になつていた。兄も同様の原因から、画家の名前位は心得ていた。ただし、この方は掛物の前に立つて、はあ仇英きゆうえいだね、はあ応挙おうきよだねと云うだけであつた。面白い顔もしないから、面白い様にも見えなかつた。それから真偽の鑑定のために、虫眼鏡などを振り舞わさない所は、誠吾も代助も同じ事であつた。父の様に、こんな波は昔の人は描かないものだから、法になつていないなどという批評は、双方共に、未だ嘗て如何なる画がに対しても加えた事はなかつた。

父は乾いた会話に色彩を添えるため、やがて好きな方面の問題に触れてみた。ところが一二言で、高木はそう云う事にまるで無頓着な男であるという事が分つた。父は老巧の人だから、すぐ退却した。けれども双方に安全な領分に帰ると、双方共に談話の意味を感じなかつた。父は已を得ず、高木にどんな娯楽があるかを確めた。高木は特別に娯楽を持たない由を答えた。父は万事休すという体裁で、高木を誠吾と代助に託して、しばらく

談話の圏外に出た。誠吾は、何の苦もなく、神戸の宿屋から、楠なんこう公神社やら、手当り次第に話題を開拓して行つた。そうして、その中に自然令嬢の演ずべき役割を拵えた。令嬢はただ簡単に、必要な言葉だけを点じては逃げた。代助と高木とは、始め同志社を問題にした。それから亜米利加アメリカの大学の状況に移つた。最後にエマーソンやホーソーンの名が出た。代助は、高木にこう云う種類の知識があるという事を確めたけれども、ただ確めただけで、それより以上に深入もしなかつた。従つて文学談は単に二三の人名と書名に終つて、少しも発展しなかつた。

梅子は固もとより初から断えず口を動かしていた。その努力の重なるおもものは、無論自分の前にいる令嬢の遠慮と沈黙を打ち崩すにあつた。令嬢は礼義上から云つても、梅子の間断なき質問に応じない訳に行かなかつた。けれども積極的に自分から梅子の心を動かそうと力つとめた形迹けいせきは殆んどなかつた。ただ物を云うときに、少し首を横に曲げる癖があつた。それすら代助には媚こびを売るとは解釈出来なかつた。

令嬢は京都で教育を受けた。音楽は、始めは琴を習つたが、後にはピアノに易かえた。ヴァイオリンも少し稽古けいこしたが、この方は手の使い方がむずかしいので、まあ遣らないと同じである。芝居は滅多に行つた事がなかつた。

「先達ての歌舞伎座は如何いかでした」と梅子が聞いた時、令嬢は何とも答えなかった。代助にはそれが劇を解しないと云うより、劇を輕蔑けいべつしている様に取れた。それなのに、梅子はつづけて、同じ問題に就いて、甲の役者はどうだの、乙の役者は何だなんのと評し出した。代助は又嫂が論理を踏み外したと思った。仕方がないから、横合から、

「芝居は御嫌いでも、小説は御読みになるでしょう」と聞いて芝居の話を已めやさした。令嬢はその時始めて、一寸代助の方を見た。けれども答は案外に判然はつきりしていた。

「いえ小説も」

令嬢の答を待ち受けていた、主客はみんな声を出して笑った。高木は令嬢の為に説明の労を取った。その云う所によると、令嬢の教育を受けたミス何とか云う婦人の影響で、令嬢はある点では殆んど清教徒ピュリタンの様に仕込まれているのだそうであつた。だから余程時代おく後れたと、高木は説明のあとから批評さえ付け加えた。その時は無論誰も笑わなかつた。耶蘇教ヤソウに対して、あまり好意を有もつていない父は、

「それは結構だ」と賞めた。梅子は、そう云う教育の価値を全く解する事が出来なかつた。にも拘かわらず、

「本当にね」と趣味に適かなわない不得要領の言葉を使った。誠吾は梅子の言葉が、あまり重

い印象を先方に与えない様に、すぐ問題を易えた。

「じゃ英語は御上手でしょう」

令嬢はいいと云つて、心持顔を赤くした。

食事が済んでから、主客は又応接間に戻つて、話を始めたが、蠟燭ろうそくを継ぎ足した様に、新しい方へは急に火が移りそうにも見えなかった。梅子は立つて、ピアノの蓋ふたを開けて、

「何か一つ如何ですか」と云いながら令嬢を顧みた。令嬢は固より席を動かなかった。

「じゃ、代さん、皮切かわきりに何か御遣りおや」と今度は代助に云つた。代助は人に聞かせる程の上手でないのを自覺していた。けれども、そんな弁解をすると、問答が理窟臭りくつく、しつこくなるばかりだから、

「まあ、蓋を開けて御置なさい。今に遣るから」と答えたなり、何かなしに、無関係の事を話しつつづけていた。

一時間程して客は歸つた。四よつたり人は肩を揃そろえて玄關まで出た。奥へ這入はいる時、

「代助はまだ歸るんじやなかうな」と父が云つた。代助はみんなから一足後れて、鴨居かもいの上に両手が届く様な伸を一つした。それから、人のいない応接間と食堂を少しうろうろして座敷へ来て見ると、兄と嫂が向き合つて何か話をしていた。

「おい、すぐ帰つちや不可^{いけ}ない。御父さんが何か用があるそうだ。奥へ御出^{おいで}」と兄はわざとらしい真面目な調子で云った。梅子は薄笑いをしている。代助は黙って頭を掻^かいた。

代助は一人で父の室^{へや}へ行く勇氣がなかった。何とかかとか云つて、兄夫婦を引張つて行こうとした。それが旨く成功しないので、とうとう其所^{そこ}へ坐り込んでしまった。所へ小間使が来て、

「あの、若旦那様に一寸^{ちよつと}、奥までいらつしやる様に」と催促した。

「うん、今行く」と返事をして、それから、兄夫婦にこういう理窟^{りくつ}を述べた。——自分一人で父に逢うと、父がああ云う氣象の所へ持つて来て、自分がこんな図法^{ずぽう}螺^らだから、殊^{こと}によると大いに老^{としより}人を怒らしてしまうかも知れない。そうすると、兄夫婦だつて、後から面倒くさい調停^{てんてい}をしたり何かしなければならぬ。その方が却^{かえつ}て迷惑になる訳だから、骨^ほ惜^{ねおしみ}をせずに今一寸一所に行つてくれたら宜^よからう。

兄は議論^{ぎろん}が嫌^{きら}いな男なので、何んだ下らないと云わぬばかりの顔をしたが、

「じゃ、さあ行こう」と立ち上がった。梅子も笑いながらすぐに立つた。三人して廊下を渡つて父の室に行つて、何事も起らなかったかの如く着坐した。

そこでは、梅子が如才なく、代助の過去に父の小言が飛ばない様な手加減をした。そう

して談話の潮流を、なるべく今帰った来客の品評の方へ持つて行つた。梅子は佐川の令嬢を大変大人しそうな可い子だと賞めた。これには父も兄も代助も同意を表した。けれども兄は、もし亜米利加のミスの教育を受けたというのが本当なら、もう少しは西洋流にはきはきしそうなものだと言ふ疑を立てた。代助はその疑にも賛成した。父と嫂は黙っていた。そこで代助は、あの大人しさは、羞耻む性質の大人さだから、ミスの教育とは独立に、日本の男女の社交的関係から来たものだろうと説明した。父はそれもそうだと云つた。梅子は令嬢の教育地が京都だから、ああなんじやないかと推察した。兄は東京だつて、御前みた様なばかりはいないと云つた。この時父は厳正な顔をして灰吹を叩いた。次に、容色だつて十人並より可いじゃありませんかと梅子が云つた。これには父も兄も異議はなかつた。代助も賛成の旨を告白した。四人はそれから高木の品評に移つた。温健の好人物と云う事で、その方はすぐ片付いてしまった。不幸にして誰も令嬢の父母を知らなかつた。けれども、物堅い地味な人だと云うだけは、父が三人の前で保証した。父はそれを同県下の多額納税議員の某から確めたのだそうである。最後に、佐川家の財産に就ても話が出た。その時父は、ああ云うのは、普通の実業家より基礎が確りしていて安全だと云つた。

令嬢の資格が略定^{ほぼ}まった時、父は代助に向つて、

「大した異存もないだろう」と尋ねた。その語調と云い、意味と云い、どうするかね位の程度ではなかった。代助は、

「そうですな」とやつぱり^にえ切らない答をした。父はじつと代助を見ていたが、段々皺^{しわ}の多い額を曇らした。兄は仕方なしに、

「まあ、もう少し善く考えてみるが可い」と云つて、代助の為に余裕を付けてくれた。

十三

四日程してから、代助は又父の命令で、高木の出立^{しゅったつ}を新橋まで見送つた。その日は眠い所を無理に早く起きて、寐^ね足らない頭を風に吹かした所^せ為^いか、停車場^{ステーション}に着く頃、髪^{かみ}の毛の中に風邪を引いた様な気がした。待合所に這入るや否^{いな}や、梅子から顔色^{よく}が可^よくないと云う注意を受けた。代助は何にも答えずに、帽子を脱いで、時々濡^ぬれた頭を抑えた。仕舞には朝奇麗に分けた髪がもじやもじやになった。

プラットフォームで高木は突然代助に向つて、

「どうですこの汽車で、神戸まで遊びに行きませんか」と勧めた。代助はただ難有うと答えただけであった。愈汽車の出る間際に、梅子はわざと、窓際に近寄って、とくに令嬢の名を呼んで、

「近い内に又是非いらつしやい」と云った。令嬢は窓のなかで、叮嚀に会釈したが、窓の外へは別段の言葉も聞えなかった。汽車を見送って、又改札場を出た四人りは、それぎり離れ離れになった。梅子は代助を誘って青山へ連れて行こうとしたが、代助は頭を抑えて応じなかった。

車に乗ってすぐ牛込へ帰って、それなり書斎へ這入って、仰向に倒れた。門野は一寸その様子を覗きに来たが、代助の平生を知っているの、言葉も掛けず、椅子に引掛ける羽織だけを抱えて出て行つた。

代助は寐ながら、自分の近き未来をどうなるものだろうと考えた。こうして打遣つて置けば、是非共嫁を貰わなければならない。嫁はもう今までに大分断っている。この上断れば、愛想を尽かされるか、本当に怒り出されるか、何方かになるらしい。もし愛想を尽かされて、結婚勧誘をこれ限り断念して貰えれば、それに越した事はないが、怒られるのは甚だ迷惑である。と云つて、進まぬものを貰いましょうと云うのは今代人として馬

鹿気ている。代助はこのジレンマの間に ていかい 徊した。

彼は父と違って、当初からある計画を こし 拵らえて、自然をその計画通りに強いる古風な人ではなかった。彼は自然を以て もつ 人間の拵えた すべ 凡ての計画よりも偉大なものと信じていたからである。だから父が、自分の自然に逆らって、父の計画通りを強いるならば、それは、去られた妻が、離縁状を たて 楯に夫婦の関係を証拠立てようとする一般であると考えた。けれども、そんな理窟を、父に向って述べる気は、まるでなかった。父を りぜめ 理攻にする事は困難中の困難であった。その困難を冒したところで、代助に取っては何等の利益もなかった。その結果は父の不興を招くだけで、理由を云わずに結婚を拒絶するのと えら 撰む所はなかった。彼は父と兄と あによめ 嫂の三人の中で、父の人格に もつと 尤も疑を置いた。今度の結婚にしても、結婚その物が必ずしも父の ゆい 唯一の目的ではあるまいとまで推察した。けれども父の本意が何 こ 処にあるかは、固より明かに知る機会を与えられていなかった。彼は子として、父の心意を かよう 斯様に揣摩する事を、不徳義とは考えなかった。従って自分だけが、多くの親子のうちで、尤も不幸なものであると云う様な考は少しも起きなかった。ただこれがため、今日までの程度より以上に、父と自分の間が隔って来そうなのを不快に感じた。

彼は隔離の極端として、父子絶縁の状態を想像してみた。そうして そこ 其所に一種の苦痛を

認めた。けれども、その苦痛は堪え得られない程度のもではなかった。寧ろそれから生ずる財源の杜絶とぜつの方が恐ろしかった。

もし馬鈴薯ポテトが金剛石ダイヤモンドより大切になつたら、人間はもう駄目であると、代助は平生から

考えていた。向後父こうごの怒に触れて、万一金銭上の關係が絶えたとすれば、彼は厭いやでも金ダイヤ

剛石モンドを放り出して、馬鈴薯ポテトに噛かじり付かなければならない。そうしてその償つくないには自然の愛

が残るだけである。その愛の対象は他人の細君であつた。

彼は寐ながら、何時いつまでも考えた。けれども、彼の頭は何時までも何処へも到着する事

が出来なかつた。彼は自分の寿命を極める権利を持たぬ如ごとく、自分の未来をも極め得なかつた。

同時に、自分の寿命に、大抵の見当を付け得る如く、自分の未来にも多少の影を認

めた。そうして、徒いたずらにその影を捕捉しようと企てた。

その時代助の脳の活動は、夕闇を驚ろかす蝙蝠かわほりの様な幻像をちらりちらりと産み出す

に過ぎなかつた。その羽搏はばたきの光を追い掛けて寐ねているうちに、頭が床ゆかから浮き上がつて、

ふわふわする様に思われて来た。そうして、何時の間にか軽い眠に陥つた。

すると突然誰か耳の傍はたで半鐘を打つた。代助は火事と云う意識さえまだ起らない先に眼

を醒さました。けれども跳ね起きもせずに寐ねていた。彼の夢にこんな音の出るのは殆ほとんど普

通であつた。ある時はそれが正氣に返つた後までも響いていた。五六日前彼は、彼の家の大いに揺れる自覺と共に眠を破つた。その時彼は明らかに、彼の下に動く畳の様を、肩と腰と脊せの一部に感じた。彼は又夢に得た心臓の鼓動を、覺めた後まで持ち伝える事が屢しばしばあつた。そんな場合には聖徒セイントの如く、胸に手を当てて、眼を開けたまま、じつと天井を見詰めていた。

代助はこの時も半鐘の音が、じいんと耳の底で鳴り尽してしまうまで横になつて待つていた。それから起きた。茶の間へ来て見ると、自分の膳の上に簀すだれ垂が掛けて、火鉢の傍そばに据えてあつた。柱時計はもう十二時廻つていた。婆さんは、飯を済ました後と見えて、下女部屋で御櫃おほちの上に肱ひじを突いて居眠りをしていた。門野は何処へ行つたか影さえ見えなかつた。

代助は風呂場へ行つて、頭を濡らしたあと、独り茶の間の膳に就いた。そこで、淋さみしい食事を済して、再び書齋に戻つたが、久し振りに今日は少し書見をしようと云う心組であつた。

かねて読み掛けてある洋書を、葉しおりの挟みである所で開けて見ると、前後の關係をまるで忘れていた。代助の記憶に取つてこう云う現象は寧ろ珍らしかつた。彼は学校生活の時代

から一種の読書家であつた。卒業の後も、衣食の煩^{わづらい}なしに、購読の利益を適意に収め得る身分を誇りにしていた。一頁^{ページ}も眼を通さないで、日を送ることがあると、習慣上何となく荒廢の感を催おした。だから大抵な事故があつても、なるべく都合して、活字に親しんだ。ある時は読書そのものが、唯一なる自己の本領の様な気がした。

代助は今茫然^{ぼうぜん}として、烟草^{たばこ}を燻^{くゆ}らしながら、読み掛けた頁を二三枚あとへ繰つてみた。

そこにどんな議論があつて、それがどう続くのか、頭を拵^{ため}える為に一寸骨を折つた。その努力は舛^{はしけ}から棧^{さんばし}橋へ移る程樂ではなかつた。食い違つた断面の甲に迷^{まごつ}付いているものが、急に乙に移るべく余儀なくされた様であつた。代助はそれでも辛抱して、約二時間程眼を頁の上に曝^{さら}していた。が仕舞にとうとう堪え切れなくなつた。彼の読んでいるものは、活字の集合^{あつまり}として、ある意味を以て、彼の頭に映ずるには違ないが、彼の肉や血に廻^ける気色^{しき}は一向見えなかつた。彼は氷^{ひょう}囊^{のう}を隔てて、氷に食い付いた時の様に物足らなく思つた。

彼は書物を伏せた。そうして、こんな時に書物を読むのは無理だと思つた。同時にもう安息する事も出来なくなつたと考えた。彼の苦痛は何時ものアンニユイではなかつた。何も為^するのが慵^{ものう}いと云うのとは違つて、何か為^しなくてはいられない頭の状態であつた。

彼は立ち上がって、茶の間へ来て、畳である羽織を又引掛た。そうして玄関に脱ぎ棄てた下駄を穿^はいて馳^かけ出す様に門を出た。時は四時頃であつた。神楽坂を下りて、当もなぐ、眼に付いた第一の電車に乗った。車掌に行先を問われたとき、口から出任せの返事をした。紙入を開けたら、三千代に遣った旅行費の余りが、三折の深底の方にまだ這入つていた。代助は乗車券を買った後で、札^{さつ}の数を調べてみた。

彼はその晩を赤坂のある待合で暮らした。其所で面白い話を聞いた。ある若くて美しくい女が、さる男と関係して、その種を宿した所が、愈^{いよいよ}子を生む段になって、涙を零^{こぼ}して悲しがつた。後からその訳を聞いたら、こんな年で子供を生ませられるのは情ないからだと答えた。この女は愛を専^{もっぱ}らにする時機が余り短か過ぎて、親子の関係が容赦もなく、若い頭の上を襲つて来たのに、一種の無^{むじよう}定を感じたのであつた。それは無論堅^{かたぎ}気の女ではなかつた。代助は肉の美と、霊の愛にのみ己れを捧^{ささ}げて、その他を顧みぬ女の心理状態として、この話を甚だ興味あるものと思つた。

翌日になつて、代助はどうとう又三千代に逢いに行つた。その時彼は腹の中で、先^{せんだつ}達て置いて来た金の事を、三千代が平岡に話したろうか、話さなかつたろうか、もし話したとすればどんな結果を夫婦の上に生じたらうか、それが氣掛りだからと云う口実を拵^{しら}え

た。彼はこの氣掛が、自分を駆つて、凝と落ち付かれない様に、東西を引張回した揚句、遂に三千代の方に吹き付けるのだと解釈した。

代助は家を出る前に、昨夕着た肌着も単衣も悉く改めて氣を新にした。外は寒暖計の度盛の日を逐うて騰る頃であつた。歩いていると、湿っぽい梅雨が却つて待ち遠しい程熾んに日が照つた。代助は昨夕の反動で、この陽気な空氣の中に落ちる自分の黒い影が苦になつた。広い顰の夏帽を被りながら、早く雨季に入れば好いと云う心持があつた。その雨季はもう二三日の眼前に逼つていた。彼の頭はそれを予報するかの様に、どんよりと重かつた。

平岡の家の前へ来た時は、曇つた頭を厚く掩う髪の根元が息切れていた。代助は家に入る前に先ず帽子を脱いだ。格子には締りがしてあつた。物音を目的に裏へ回ると、三千代は下女と張物をしていた。物置の横へ立て掛けた張板の中途から、細い首を前へ出して、曲みながら、苦茶苦茶になつたものを丹念に引き伸ばしつつあつた手を留めて、代助を見た。一寸は何とも云わなかつた。代助も、しばらくは唯立っていた。漸くにして、

「又来ました」と云つた時、三千代は濡れた手を振つて、馳け込む様に勝手から上がった。同時に表へ回れと眼で合図をした。三千代は自分で沓脱へ下りて、格子の締を外しながら

ら、

「無用心だから」と云った。今まで日の透る澄んだ空気の下で、手を動かしていた所^せ為^いで、頬^ほの所^ほが熱^ほつて見えた。それが額際へ来て何時もの様に蒼白^{あおしろ}く変っている辺に、汗が少し煮染^{にじ}み出した。代助は格子の外から、三千代の極めて薄手な皮膚を眺めて、戸の開くのを静かに待った。三千代は、

「御待遠さま」と云つて、代助を誘^{いざな}う様に、一足横へ退いた。代助は三千代とすれすれになつて内へ這^{はい}入った。座敷へ来て見ると、平岡の机の前に、紫の座蒲団がちゃんと据えてあつた。代助はそれを見た時一寸厭な心持がした。土の和^なれない庭の色が黄色に光る所に、長い草が見苦しく生えた。

代助は又忙がしい所を、邪魔に来て済まないという様な尋常な云訳を述べながら、この無趣味な庭を眺めた。その時三千代をこんな家へ入れて置くのは實際気の毒だという気が起つた。三千代は水いじりで爪^{つま}先の少しふやけた手を膝^{ひざ}の上に重ねて、あまり退屈だから張物をしていた所だと云った。三千代の退屈という意味は、夫が始終外へ出ていて、単調な留守居の時間を無^{ぶり}聊^{りょう}に苦しむと云う事であつた。代助はわざと、

「結構な身分ですね」と冷かした。三千代は自分の荒涼な胸^{うち}の中を代助に訴える様子もな

かった。黙つて、次の間へ立つて行つた。用^{よう}筆^{だん}筒^すの環を響かして、赤い天^{ビロ}鷲^{ード}絨で張つた小さい箱を持つて出て来た。代助の前へ坐つて、それを開けた。中には昔し代助の遣つた指^{ゆび}環^わがちゃんと這入つていた。三千代は、ただ

「可^いいでしょう、ね」と代助に謝罪する様に云つて、すぐ又立つて次の間へ行つた。そうして、世の中を憚^{はば}かる様に、記念の指環をそこそこに用筆筒に仕舞つて元の座に戻つた。代助は指環に就ては何事も語らなかつた。庭の方を見て、

「そんなに閑^{ひま}なら、庭の草でも取つたら、どうです」と云つた。すると今度は三千代の方が黙つてしまつた。それが、少^{しば}時^{らく}続いた後で代助は又改^{あらた}めて聞いた。

「この間の事を平岡君に話したんですか」

三千代は低い声で、

「いいえ」と答えた。

「じゃ、未^まだ知らないんですか」と聞き返した。

その時三千代の説明には、話そうと思つたけれども、この頃平岡はついぞ落ち付いて宅^{うち}にいた事がないので、つい話しそびれて未だ知らせずにいると云う事であつた。代助は固より三千代の説明を嘘^{うそ}とは思わなかつた。けれども、五分の閑さえあれば夫に話される事

を、今日までそれなりに為であるのは、三千代の腹の中に、何だか話し悪い或蟠まりがあるからだと思わずにはいられなかった。自分は三千代を、平岡に対して、それだけ罪のある人にしてしまったと代助は考えた。けれどもそれはさ程に代助の良心を螫すには至らなかった。法律の制裁はいざ知らず、自然の制裁として、平岡もこの結果に対して明かに責めを分たなければならないと思つたからである。

代助は三千代に平岡の近来の模様を尋ねてみた。三千代は例によって多くを語る事を好まなかった。然し平岡の妻に対する仕打が結婚当時と変つてゐるのは明かであつた。代助は夫婦が東京へ歸つた当時既にそれを見抜いた。それから以後改まつて兩人の腹の中を聞いた事はないが、それが日毎に好くない方に、速度を加えて進行しつつあるのは殆んど争うべからざる事実と見えた。夫婦の間に、代助と云う第三者が点ぜられたがために、この疎隔が起つたとすれば、代助はこの方面に向つて、もっと注意深く働らいたかも知れなかった。けれども代助は自己の悟性に訴えて、そうは信ずる事が出来なかった。彼はこの結果の一部分を三千代の病氣に歸した。そうして、肉体上の關係が、夫の精神に反響を与えたものと断定した。又その一部分を子供の死亡に歸した。それから、他の一部分を平岡の遊蕩に歸した。又他の一部分を会社員としての平岡の失敗に歸した。最後に、残りの一

部分を、平岡の放埒ほうちやうから生じた経済状況に帰した。凡てを概括した上で、平岡は貰うべからざる人を貰い、三千代は嫁ぐ可べからざる人に嫁いだのだと解決した。代助は心うちの中で痛く自分が平岡の依頼に応じて、三千代を彼の為に周旋した事を後悔した。けれども自分が三千代の心を動かすが為に、平岡が妻さいから離れたとは、どうしても思い得なかった。

同時に代助の三千代に対する愛情は、この夫婦の現在の関係を、必須条件として募りつつある事もまた一方では否いなみ切れなかった。三千代が平岡に嫁ぐ前、代助と三千代の間柄は、どの位の程度まで進んでいたかは、しばらく措おくとしても、彼は現在の三千代には決して無頓着むとんじやくでいる訳には行かなかった。彼は病氣に冒された三千代をただの昔の三千代よりは氣の毒に思った。彼は小供を亡なくした三千代をただの昔の三千代よりは氣の毒に思った。彼は夫の愛を失いつつある三千代をただの昔の三千代よりは氣の毒に思った。彼は生活難に苦しみつつある三千代をただの昔の三千代よりは氣の毒に思った。但ただし、代助はこの夫婦の間を、正面から永久に引き放そうと試みる程大胆ではなかった。彼の愛はそう逆上してはいなかった。

三千代の眼まのあたり、苦しんでいるのは経済問題であつた。平岡が自力で給し得るだけの生活費を勝手の方へ回さない事は、三千代の口吻こうふんで慥たしかであつた。代助はこの点だけで

もまずどうかしなければなるまいと考えた。それで、

「一つ私が平岡君に逢^あつて、能^よく話してみよう」と云った。三千代は淋しい顔をして代助を見た。旨^{うま}く行けば結構だが、遣^やり損^{そく}なえば益^{ます}三千代の迷惑になるばかりだとは代助も承知していたので、強いてそうしようとも主張しかねた。三千代は又立つて次の間から一封の書状を持って来た。書状は薄青い状袋へ這^{はい}入っていた。北海道にいる父から三千代へ宛^{あて}たものであった。三千代は状袋の中から長い手紙を出して、代助に見せた。

手紙には向うの思わしくない事や、物価の高くて活計^{くわくし}にくい事や、親類も縁者もなくて心細い事や、東京の方へ出たいが都合はつくまいかと云う事や、——凡^{あわ}て憐^{あわ}れな事ばかり書いてあった。代助は叮^{てい}嚀^{ねい}に手紙を巻き返して、三千代に渡した。その時三千代は眼中に涙を溜^ためていた。

三千代の父はかつて多少の財産と称^とえらるべき田畠^{たはた}の所有者であった。日露戦争の当時、人の勧^{すす}めに応じて、株に手を出して全く遣^{そく}り損^{そく}なつてから、潔^{いさぎ}よく祖先の地を売り払って、北海道へ渡つたのである。その後の消息は、代助も今この手紙を見せられるまで一向知らなかった。親類はあれども無きが如しだとは三千代の兄が生きている時分よく代助に語つた言葉であった。果して三千代は、父と平岡ばかりを便^{たより}に生きていた。

「貴方は羨ましいのね」と瞬きながら云った。代助はそれを否定する勇氣に乏しかった。しばらくしてから又、

「何だつて、まだ奥さんを御貰いなさらないの」と聞いた。代助はこの問にも答える事が出来なかつた。

しばらく黙然として三千代の顔を見ているうちに、女の頬から血の色が次第に退いて行つて、普通よりは眼に付く程蒼白くなつた。その時代助は三千代と差向で、より長く坐っている事の危険に、始めて気が付いた。自然の情合から流れる相互の言葉が、無意識のうちに彼等を駆つて、準繩の埒を踏み超えさせるのは、今二三分の裡にあつた。代助は固よりそれより先へ進んでも、猶素知らぬ顔で引返し得る、会話の方を心得ていた。彼は西洋の小説を読むたびに、そのうちに出て来る男女の情話が、あまりに露骨で、あまりに放肆で、かつあまりに直線的に濃厚なのを平生から怪んでいた。原語で読めばとにかく、日本には訳し得ぬ趣味のものと考へていた。従つて彼は自分と三千代との關係を展览展示せる為に、舶来の台詞を用いる意志は毫もなかつた。少なくとも二人の間では、尋常の言葉で充分用が足りたのである。が、其所に、甲の位地から、知らぬ間に乙の位置に滑り込む危険が潜んでいた。代助は辛うじて、今一步と云う際とい所で、踏み留まつた。帰

る時、三千代は玄関まで送つて来て、

「淋しくつて不可^いないから、又来て頂^{ちやうだい}戴^い」と云つた。下女はまだ裏で張物をしていた。

表へ出た代助は、ふらふらと一丁程歩いた。好^いい所で切り上げたという意識があるべき筈^{はず}であるのに、彼の心にはそう云う満足が些^{ちつ}とも無かつた。と云つて、もつと三千代と対

坐^はしていて、自然の命ずるがままに、話し尽して帰れば可^よかつたという後悔もなかつた。

彼は、彼所^{あそこ}で切り上げても、五分十分の後切り上げても、必^{ひつぎよう}竟^{よう}は同じ事であつたと思

い出した。自分と三千代との現在の関係は、この前逢つた時、既に発展していたのだと思

い出した。否、その前逢つた時既に、と思ひ出した。代助は二人の過去を順次^{さかの}に遡^{さかの}ぼつて

みて、いずれの断面にも、二人の間に燃る愛の炎を見出^{みい}さない事はなかつた。必竟^{ひつぎよう}は、三千代が平岡に嫁ぐ前、既に自分に嫁いでいたのも同じ事だと考え詰めた時、彼は堪えがた

き重いものを、胸の中に投げ込まれた。彼はその重量の為に、足がふらついた。家に歸つた時、門野が、

「大變顔の色が悪い様ですな、どうかなさいましたか」と聞いた。代助は風呂場へ行つて、蒼い額から奇麗に汗を拭^ふき取つた。そうして、長く延び過ぎた髪を冷水に浸した。

それから二日程代助は全く外出しなかつた。三日目の午後、電車に乗つて、平岡を新聞

社に尋ねた。彼は平岡に逢つて、三千代の為ために充分話をする決心であつた。給仕に名刺を渡して、埃ほこりだらけの受付に待つてゐる間、彼はしばしば袂たもとから手帛ハンケチを出して、鼻を掩おおうた。やがて、二階の応接間へ案内された。其所は風通しの悪い、蒸し暑い、陰気な狭い部屋であつた。代助は此所ここで烟草たばこを一本吹かした。編輯室へんしゅうしつと書いた戸口が始終開いて、人が出たり這入たりした。代助の逢いに來た平岡もその戸口から現われた。先達て見た夏服を着て、相変らず奇麗な襟カラとカフスを掛けていた。忙しうちに、

「やあ、暫しばらく」と云つて代助の前に立つた。代助も相手に唆そそのかされた様に立ち上がった。二人は立ちながら一寸話をした。丁度編輯のいそがしい時で緩ゆるくりどうする事も出来なかつた。代助は改めて平岡の都合を聞いた。平岡はポケットから時計を出して見て、

「失敬だが、もう一時間程して来てくれないか」と云つた。代助は帽子を取つて、又暗い埃だらけの階段を下りた。表へ出ると、それでも涼しい風が吹いた。

代助はあてもなく、其所そこいらを逍遙ぶらづいた。そうして、愈いよいよ平岡と逢つたら、どんな風に話を切り出そうかと工夫した。代助の意は、三千代に刻下の安慰を、少しでも与えたい為ために外ほかならなかつた。けれども、それが為ために、却かえつて平岡の感情を害する事があるかも知れないと思つた。代助はその惡結果の極端として、平岡と自分の間に起り得る破裂をさえ予想

した。然し、その時はどんな具合にして、三千代を救おうかと云う成案はなかった。代助は三千代と相対づくで、自分等二人の間をあれ以上にどうかする勇氣を有たなかったと同時に、三千代のために、何かしなくてはいられなくなつたのである。だから、今日の会見は、理知の作用から出た安全の策と云うよりも、寧ろ情の旋風に捲き込まれた冒険の働きであつた。其所に平生の代助と異なる点があらわれていた。けれども、代助自身はそれに気が付いていなかった。一時間の後彼は又編輯室の入口に立つた。そうして、平岡と一所に新聞社の門を出た。

裏通りを三四丁来た所で、平岡が先へ立つて或家に這入つた。座敷の軒に釣葱が懸つて、狭い庭が水で一面に濡れていた。平岡は上衣を脱いで、すぐ胡坐をかけた。代助はさ程暑いとも思わなかった。団扇は手にしただけで済んだ。

会話は新聞社内の有様から始まつた。平岡は忙しい様で却つて楽な商売で好いと云つた。その語気には別に負惜みの様子も見えなかった。代助は、それは無責任だからだろうと調戲つた。平岡は真面目になつて、弁解をした。そうして、今日の新聞事業競争の烈しくて、機敏な頭を要するものはないと云う理由を説明した。

「なるほどただ筆が達者なだけじゃ仕様があるまいよ」と代助は別に感服した様子を見せ

なかった。すると、平岡はこう云った。

「僕は経済方面の係りだが、単にそれだけでも中々面白い事実が拳がっている。ちと、君の家の会社の内幕でも書いて御覧に入れようか」

代助は自分の平生の観察から、こんな事を云われて、驚ろく程ぼんやりしてはいなかった。

「書くのも面白いだろう。その代り公平に願いたいな」と云った。

「無論嘘は書かない積りだ」

「いえ、僕の兄の会社ばかりでなく、一列一体に筆誅ひつちゆうして貰いたいと云う意味だ」

平岡はこの時邪気のある笑い方をした。そうして、

「日糖事件だけじゃ物足りないからね」と奥歯に物の挟まった様に云った。代助は黙って酒を飲んだ。話はこの調子で段々はずみを失う様に見えた。すると平岡は、実業界の内状に関かん聯れんするとも思つたものか、何かの拍子に、ふと、日清戦争の当時、大倉組に起つた逸話を代助に吹聴ふいちようした。その時、大倉組は広島で、軍隊用の食料品として、何百頭かの牛を陸軍に納める筈ぬすになっていた。それを毎日何頭かずつ、納めて置いては、夜になると、そつと行つて偷ぬすみ出して来た。そうして、知らぬ顔をして、翌日あくるふ同じ牛を又納めた。

役人は毎日々々同じ牛を何遍も買っていた。が仕舞に気が付いて、一遍受取った牛には焼印を押した。ところがそれを知らずに、又偷み出した。のみならず、それを平気に翌日あくるひ連れて行つたので、とうとう露見してしまつたのだそうである。

代助はこの話を聞いた時、その実社会に触れている点に於ておい、現代的滑稽こっけいの標本だと思つた。平岡はそれから、幸徳秋水と云う社会主義の人を、政府がどんなに恐れているかと云う事を話した。幸徳秋水の家の前と後に巡査が二三人ずつ昼夜張番をしている。一時は天幕テントを張つて、その中から覗ねらつていた。秋水が外出すると、巡査が後を付ける。万一見失いでもしよものなら非常な事件になる。今本郷に現われた、今神田へ来たと、それからそれへと電話が掛つて東京市中大騒ぎである。新宿警察署では秋水一人の為に月々百円使っている。同じ仲間の飴屋あめやが、大道で飴細工こしらを拵こしらえていると、白服の巡査が、飴の前へ鼻を出して、邪魔になつて仕方がない。

これも代助の耳には、真面目な響を与えなかつた。

「やつぱり現代的滑稽の標本じゃないか」と平岡は先刻さつきの批評を繰り返しながら、代助を挑んだ。代助はそうさと笑つたが、この方面にはあまり興味がないのみならず、今日は平生つもの様に普通の世間話をする氣でないので、社会主義の事はそれなりにして置いた。先刻

平岡の呼ぼうと云う芸者を無理に已めさしたのもこれが為であつた。

「実は君に話したい事があるんだが」と代助は遂に云い出した。すると、平岡は急に様子を變えて、落ち付かない眼を代助の上に注いだ、卒然として、

「そりや、僕も疾うから、どうかする積りなんだけれども、今の所じや仕方がない。もう少し待つてくれたまえ。その代り君の兄さんや御父さんの事も、こうして書かずにいるんだから」と代助には意表な返事をした。代助は馬鹿々々しいと云うより、寧ろ一種の憎惡を感じた。

「君も大分變つたね」と冷かに云つた。

「君の變つた如く變つちまつた。こう摺れちや仕方がない。だから、もう少し待つてくれ給え」と答えて、平岡はわざとらしい笑ひ方をした。

代助は平岡の言語の如何に拘わらず、自分の云う事だけは云おうと極めた。なまじい、借金の催促に來たんじやないなどと弁明すると、又平岡がその裏を行くのが癪だから、向うの疳違は、疳違で構わないとして置いて、此方は此方の歩を進める態度に出た。けれども第一に困つたのは、平岡の勝手元の都合を、三千代の訴えによって知つたと切り出しては、三千代に迷惑が掛るかも知れない。と云つて、問題が其所に触れなければ、忠告

も助言も全く無益である。代助は仕方なしに迂回した。

「君は近來こう云う所へ大分頻繁に出はいりを見ると見えて、家のものとは、みんな御馴染だね」

「君の様に金回りが好くないから、そう豪遊も出来ないが、交際だから仕方がないよ」と云つて、平岡は器用な手付をして猪口を口へ着けた。

「余計な事だが、それで家の方の経済は、収支償なうのかい」と代助は思い切つて猛進した。

「うん。まあ、好い加減にやつてるさ」

こう云つた平岡は、急に調子を落して、極めて気のない返事をした。代助はそれぎり食ひ込めなくなつた。已を得ず、

「不断は今頃もう家へ歸っているんだろう。この間僕が訪ねた時は大分遅かつた様だが」と聞いた。すると、平岡はやはり問題を回避する様な語気で、

「まあ歸つたり、歸らなかつたりだ。職業がこういう不規則な性質だから、仕方がないさ」と、半ば自分を弁護するためらしく、曖昧に云つた。

「三千代さんは淋しいだろう」

「なに大丈夫だ。彼奴も大分変ったからね」と云つて、平岡は代助を見た。代助はその眸の内に危^{あや}しい恐れを感じた。ことによると、この夫婦の關係は元に戻せないと思つた。もしこの夫婦が自然の斧^{おの}で割ききりに割かれるとすると、自分の運命は取り歸しの付かない未来を眼の前に控えている。夫婦が離れば離れる程、自分と三千代はそれだけ接近しなければならぬからである。代助は即座の衝動の如くに云つた。――

「そんな事が、あろう筈がない。いくら、變つたつて、そりや唯^{ただ}年を取つただけの變化だ。なるべく歸つて三千代さんに安慰を与えて遣^やれ」

「君はそう思うか」と云いさま平岡はぐいと飲んだ。代助は、ただ、

「思ふかつて、誰だつてそう思わざるを得んじやないか」と半ば口から出任せに答えた。

「君は三千代を三年前の三千代と思つてゐるか。大分變つたよ。ああ、大分變つたよ」と平岡は又ぐいと飲んだ。代助は覺えず胸の動悸^{どうき}を感じた。

「同^{おん}なじだ、僕の見るところでは全く同じだ。少しも變つていやしない」

「だつて、僕は家へ歸つても面白くないから仕方がないじやないか」

「そんな筈はない」

平岡は眼を丸くして又代助を見た。代助は少し呼吸^{せま}が逼つた。けれども、罪あるものが

雷火に打たれた様な気は全たくなかった。彼は平生にも似ず論理に合わない事をただ衝動的に云った。然しそれは眼の前にいる平岡のためだと固く信じて疑わなかった。彼は平岡夫婦を三年前の夫婦にして、それを便に、自分を三千代から永く振り放そうとする最後の試みを、半ば無意識的に遣っただけであつた。自分と三千代の関係を、平岡から隠す為の糊塗策とは毫も考えていなかった。代助は平岡に対して、さ程に不信な言動を敢てするに、余りに高尚であると、優に自己を評価していた。しばらくしてから、代助は又平生の調子に歸つた。

「だって、君がそう外へばかり出ていれば、自然金も要る。従つて家の経済も旨く行かなくなる。段々家庭が面白くなるだけじゃないか」

平岡は、白襯衣の袖を腕の中途まで捲り上げて、

「家庭か。家庭もあまり下さったものじゃない。家庭を重く見るのは、君の様な独身者に限る様だね」と云つた。

この言葉を聞いたとき、代助は平岡が悪くなつた。あからさまに自分の腹の中を云うと、そんなに家庭が嫌なら、嫌でよし、その代り細君を奪つちまうぞと判然知らせたかつた。けれども二人の問答は、其所まで行くには、まだ中々間があつた。代助はもう一遍外の方

面から平岡の内部に触れて見た。

「君が東京へ来たてに、僕は君から説法されたね。何か遣れって」

「うん。そうして君の消極な哲学を聞かされて驚ろいた」

代助は実際平岡が驚ろいたろうと思った。その時の平岡は、熱病に罹^かつた人間の如く行^{アクション}に渴^{クシオン}いていた。彼は行^{アクション}為^{アクション}の結果として、富を冀^{こいねが}つていたか、もしくは名誉、もしくは権勢を冀^{こいねが}つていたか。それでなければ、活動としての行^{アクション}為^{アクション}その物を求めていたか。それは代助にも分らなかった。

「僕のように精神的に敗残した人間は、已を得ず、ああ云う消極な意見も出すが。——元来意見があつて、人がそれに則^{のつと}るのじゃない。人があつて、その人に適した様な意見が出て来るのだから、僕の説は僕に通用するだけだ。決して君の身の上を、あの説で、どうしようのこうしようのと云う訳じゃない。僕はあの時の君の意気に敬服している。君はあの時自分で云つた如く、全く活動の人だ。是非とも活動して貰^{もら}いたい」

「無論大いに遣る積りだ」

平岡の答はただこの一句ぎりであつた。代助は腹の中で首を傾けた。

「新聞で遣る積りかね」

平岡は一^{ちよつと}寸^{ちゆうちよ}躊躇した。が、やがて、判然^{はつきり}云い放った。――

「新聞にいるうちは、新聞で遣る積りだ」

「大いに要領を得ている。僕だつて君の一生涯の事を聞いているんじゃないから、返事はそれで沢山だ。然し新聞で君に面白い活動が出来るかね」

「出来る積りだ」と平岡は簡明な挨拶^{あいさつ}をした。

話は此所まで来ても、ただ抽象的に進んだだけであつた。代助は言葉の上でこそ、要領を得たが、平岡の本体を見届ける事は些^{ちつ}とも出来なかつた。代助は何となく責任のある政府委員か弁護士を相手にしている様な気がした。代助はこの時思い切つた政略的な御世辞を云つた。それには軍神広瀬中佐の例が出て来た。広瀬中佐は日露戦争のときに、閉塞^{へいそく}隊に加わつて斃^{たお}れたため、当時の人から偶像^{アイドル}視されて、とうとう軍神とまで崇^{あが}められた。けれども、四五年後の今日に至つて見ると、もう軍神広瀬中佐の名を口にするものも殆^{ほと}んどなくなつてしまつた。英雄^{ヒーロー}の流行^{はや}廃^やはこれ程急劇なものである。と云うのは、多くの場合に於て、英雄^{ヒーロー}とはその時代に極めて大切な人という事で、名前だけは偉そうだけれども、本来は甚だ實際的なものである。だからその大切な時機を通り越すと、世間はその資格を段々奪いにかかる。露西亞^{ロシア}と戦争の最中こそ、閉塞隊は大事だろうが、平和克復の

曉には、百の広瀬中佐も全くの凡人に過ぎない。世間は隣人に対して現金である如く、英雄ヒーローに対しても現金である。だから、こう云う偶像アイドルにもまた常に新陳代謝や生存競争が行われている。そう云う訳で、代助は英雄ヒーローなぞに担かつがれたい見は更にならない。が、もしここに野心があり覇気のある快男子があるとすれば、一時的の剣の力よりも、永久的の筆の力で、英雄ヒーローになった方が長持がする。新聞はその方面の代表的事業である。

代助は此所ここまで述べてみたが、元来が御世辞の上に、云う事があまり書生らしいので、自分の内心には多少滑稽に取れる位、気が乗らなかつた。平岡はその返事に、

「いや難ありがと有う」と云つただけであつた。別段腹を立てた様子も見えなかつたが、些とも感激していないのは、この返事でも明かであつた。

代助は少々平岡を低く見過ぎたのに耻はじ入つた。実はこの側から、彼の心を動かして、旨く油の乗つた所を、中途から転がして、元の家庭へ滑り込ませるのが、代助の計画であつた。代助はこの迂遠うえんで、又尤も困難の方法の出立しゅつたつてん点から、程遠からぬ所で、蹉跌さてつしてしまつた。

その夜代助は平岡と遂に愚図々々で分れた。会見の結果から云うと、何の為に平岡を新聞社に訪ねたのだから、自分にも分らなかつた。平岡の方から見れば、猶更なほさらそうであつた。

代助は必^{ひつぎよう}竟何しに新聞社まで出掛て来たのか、帰るまでついに問い詰めずに済んでしまった。

代助は翌日になつて独り書齋で、昨夕^{ゆうべ}の有様を何遍となく頭の中で繰り返した。二時間も一所に話しているうちに、自分が平岡に対して、比較的眞面目であつたのは、三千代を弁護した時だけであつた。けれどもその眞面目は、単に動機の眞面目で、口にした言葉はやはり好加減な出任せに過ぎなかつた。厳酷に云えば、嘘^{うそ}ばかりと云つても可^よかつた。自分で眞面目だと信じていた動機でさえ、必竟は自分の未来を救う手段である。平岡から見れば、固^{もと}より真摯^{しんし}なものとは云えなかつた。まして、その他の談話に至ると、始めから、平岡を現在の立場から、自分の望む所へ落とし込もうと、たくらんで掛つた、打算的のものであつた。従つて平岡をどうする事も出来なかつた。

もし思い切つて、三千代を引合に出して、自分の考え通りを、遠慮なく正面から述べ立てたら、もっと強い事が云えた。もっと平岡を動揺^{ゆすぶ}る事が出来た。もっと彼の肺腑^{はいふ}に入る事が出来た。に違ない。その代り遣り損えば、三千代に迷惑がかかつて来る。平岡と喧嘩^{けんか}になる。かも知れない。

代助は知らず知らずの間に、安全にして無能力な方針を取つて、平岡に接していた事を

腑^ふ甲^{がい}斐^いなく思^{おも}つた。もしこう云う態度で平岡に当りながら、一方では、三千代の運命を、全然平岡に委^{ゆだ}ねて置けない程の不安があるならば、それは論理の許さぬ矛盾を、厚顔に犯していたと云わなければならない。

代助は昔の人が、頭腦の不明^{ふめい}瞭^{りよう}な所から、実は利己本位の立場に居りながら、自らは固く人の為と信じて、泣いたり、感じたり、激したり、して、その結果遂に相手を、自分の思う通りに動かし得たのを羨^{うらや}ましく思^{おも}つた。自分の頭が、その位のぼんやりさ加減であつたら、昨^{ゆうべ}夕の会談にも、もう少し感激して、都合のいい効果を取める事が出来たかも知れない。彼は人から、ことに自分の父から、熱誠の足りない男だと云われていた。彼の解剖によると、事實はこうであつた。——人間は熱誠^{もつ}を以て當って然るべき程に、高尚な、真摯な、純粹な、動機や行為を常住に有するものではない。それよりも、ずっと下等なものである。その下等な動機や行為を、熱誠に取り扱うのは、無分別な幼稚な頭腦の所有者か、然らざれば、熱誠を銜^{てら}つて、己れを高くする山師に過ぎない。だから彼の冷淡は、人間としての進歩とは云えまいが、よりよく人間を解剖した結果には外ならなかつた。彼は普通自分の動機や行為を、よく吟味してみて、そのあまりに、狡^{ずる}黠^{くつ}くつて、不真面目で、大抵は虚偽を含んでいるのを知っているから、遂に熱誠な勢力を以てそれを遂行する氣に

なれなかつたのである。と、彼は断然信じていた。

此所で彼は一のジレンマに達した。彼は自分と三千代との関係を、直線的に自然の命ずる通り発展させるか、又は全然その反対に出でて、何も知らぬ昔に返るか。何方かにしなければ生活の意義を失つたものと等しいと考えた。その他のあらゆる中途半端の方法は、偽に始つて、偽に終るより外に道はない。悉く社会的に安全であつて、悉く自己に対して無能無力である。と考えた。

彼は三千代と自分の関係を、天意によつて、——彼はそれを天意としか考え得られなかつた。——醺^{はつきう}酵^{きう}させる事の社会的危険を承知していた。天意には叶^{かな}うが、人の掟^{おきて}に背く恋は、その恋の主の死によつて、始めて社会から認められるのが常であつた。彼は万一の悲劇を二人の間に描いて、覚えず慄^{りつぜん}然とした。

彼は又反対に、三千代と永遠の隔離を想像してみた。その時は天意に従う代りに、自己の意志に殉ずる人にならなければ済まなかつた。彼はその手段として、父や嫂^{あによめ}から勧められていた結婚に思い至つた。そうして、この結婚を肯^{うけが}う事が、凡^{すべ}ての関係を新^{あらた}にするものと考えた。

十四

自然の児になろうか、又意志の人になろうかと代助は迷った。彼は彼の主義として、弾力性のない硬張こわばった方針の下に、寒暑にさえすぐ反応を呈する自己を、器械の様に束縛するの愚を忌んだ。同時に彼は、彼の生活が、一大断案を受くべき危機に達している事を切に自覚した。

彼は結婚問題に就て、まあ能く考えてみると云われて歸ったぎり、未だに、それを本氣に考える閑ひまを作らなかつた。歸つた時、まあ今日も虎口こうを逃れて難有ありがたかつたと感謝したぎり、放り出してしまった。父からはまだ何とも催促されないが、この二三日は又青山へ呼び出されそうな氣がしてならなかつた。代助は固より呼び出されるまで何も考えずに居る氣であつた。呼び出されたら、父の顔色と相談の上、又何とか即席に返事を拵こしらえられる心組であつた。代助はあながち父を馬鹿にする了見ではなかつた。あらゆる返事は、こう云う具合に、相手と自分を商量して、臨機に湧わいて来るのが本当だと思つていた。

もし、三千代に対する自分の態度が、最後の一步前まで押し詰められた様な氣持がなかつたなら、代助は父に対して無論そう云う所置を取つたろう。けれども、代助は今相手の

顔色如何に拘わらず、手に持った賽を投げなければならなかった。上になった目が、平岡に都合が悪かろうと、父の氣に入らなかりうと、賽を投げる以上は、天の法則通りになるより外に仕方はなかった。賽を手に持つ以上は、又賽が投げられ可く作られたる以上は、賽の目を極めるものは自分以外にあるう筈はなかった。代助は、最後の權威は自己にあるものと、腹のうちで定めた。父も兄も嫂も平岡も、決断の地平線上には出て来なかった。彼はただ彼の運命に対してのみ卑怯であつた。この四五日は掌に載せた賽を眺め暮らした。今日もまだ握つていた。早く運命が戸外から来て、その手を軽く敲いてくれれば好いと思つた。が、一方では、まだ握つていられると云う意識が大層嬉しかった。

門野は時々書齋へ来た。来る度に代助は洋卓の前に凝としていた。

「些と散歩にでも御出になつたら如何です。そう御勉強じや身体に悪いでしょう」と云つた事が二度あつた。なるほど顔色が好くなかつた。夏向になつたので、門野が湯を毎日沸かしてくれた。代助は風呂場に行くたびに、長い間鏡を見た。髯の濃い男なので、少し延びると、自分には大層見苦しく見えた。触つて、ざらざらすると猶不愉快だった。

飯は依然として、普通の如く食つた。けれども運動の不足と、睡眠の不規則と、それから、脳の屈託とで、排泄機能に变化を起した。然し代助はそれを何とも思わなかつた。

生理状態は殆んど苦にする暇いとまのない位、一つ事をぐるぐる回って考えた。それが習慣になると、終局なく、ぐるぐる回っている方が、埒らちの外へ飛び出す努力よりも却かえって楽になった。

代助は最後の不決断の自己嫌悪けんおに陥った。已やむを得ないから、三千代と自分の関係を発展させる手段として、佐川の縁談を断ろうかとまで考えて、覺えず驚ろいた。然し三千代と自分の関係を絶つ手段として、結婚を許諾してみようかという気は、ぐるぐる回転しているうちに一度も出て来なかった。

縁談を断る方は単独にも何遍となく決定が出来た。ただ断った後、その反動として、自分をまともに三千代の上に浴せかけねば已やまぬ必然の勢力が来るに違ないと考えると、其そ所に至こつて、又恐ろしくなった。

代助は父からの催促を心待に待つていた。しかし父からは何の便たよりもなかった。三千代にもう一遍逢あおうかと思つた。けれども、それ程の勇氣も出なかった。

一番仕舞に、結婚は道德の形式に於おいて、自分と三千代を遮断しゃたんするが、道德の内容に於て、何等の影響を二人の上に及ぼしそうな云う考が、段々代助の腦裏に勢力を得て来た。既に平岡に嫁いだ三千代に対して、こんな関係が起り得るならば、この上自分に既

婚者の資格を与えたからと云つて、同様の關係が続かない訳には行かない。それを続かないと見るのはただ表向の沙汰で、心を束縛する事の出来ない形式は、いくら重ねても苦痛を増すばかりである。と云うのが代助の論法であつた。代助は縁談を断るより外に道はなくなつた。

こう決心した翌日、代助は久し振りに髪を刈つて髯を剃つた。梅雨に入つて二三日凄まじく降つた揚句なので、地面にも、木の枝にも、埃らしいものは悉くしつとりと静まつていた。日の色は以前より薄かつた。雲の切れ間から、落ちて来る光線は、下界の湿り気のために、半ば反射力を失つた様に柔らかに見えた。代助は床屋の鏡で、わが姿を映しながら、例の如くふつくらしした頬を撫でて、今日から愈積極的生活に入るのだと思つた。

青山へ来て見ると、玄関に車が二台程あつた。供待の車夫は蹴込に寄り懸つて眠つたまま、代助の通り過ぎるのを知らなかつた。座敷には梅子が新聞を膝の上へ乗せて、込み入つた庭の緑をぼんやり眺めていた。これもぼかんと眠むそうであつた。代助はいきなり梅子の前へ坐つた。

「御父さんは居ますか」

嫂は返事をする前に、一応代助の様子を、試験官の眼で見た。

「代さん、少し瘡やせた様じやありませんか」と云った。代助は又頬を撫でて、

「そんな事も無いだろう」と打ち消した。

「だって、色いろつや沢が悪いのよ」と梅子は眼を寄せて代助の顔を覗のぞき込んだ。

「庭せの所為だ。青葉が映るんだ」と庭の植込うえこみの方を見たが、「だから貴方あなただって、やつぱり蒼あおいですよ」と続けた。

「私わたし、この二三日具合が好くないんですもの」

「道理でばかんとしていると思つた。どうかしたんですか。風邪ですか」

「何だか知らないけれど生なまあくび欠ばかり出て」

梅子是这样答えて、すぐ新聞を膝から卸すと、手を鳴らして、小間使を呼んだ。代助は再び父の在、不在を確めた。梅子はその問をもう忘れていた。聞いてみると、玄関にあつた車は、父の客の乗つて来たものであつた。代助は長く懸からなければ、客の帰るまで待つと思つた。嫂は判然はつきりしないから、風呂場へ行つて、水で顔を拭ふいて来ると云つて立つた。下女が好い香においのする葛くずの粽ちまきを、深い皿に入れて持つて来た。代助は粽の尾をぶら下げ、頻しきりに嗅かいでみた。

梅子が涼しい眼付になつて風呂場から歸つた時、代助は粽の一つを振子の様に振りなが

ら、今度は、

「兄さんはどうしました」と聞いた。梅子はすぐこの陳腐な質問に答える義務がないかの如く、しばらく縁鼻えんばなに立つて、庭を眺めていたが、

「二三日にさんちの雨で、苔こけの色がすっかり出た事」と平生に似合わぬ観察をして、故もとの席に返った。そうして、

「兄さんがどうしましたって」と聞き直した。代助が先の質問を繰り返した時、嫂もつとは無頓着むとんじやくな調子で、

「どうしましたって、例の如くですわ」と答えた。

「相変らず、留守勝ですか」

「ええ、ええ、朝も晩も滅多に宅うちに居た事はありません」

「姉さんはそれで淋さむしくはないですか」

「今更改かへまつて、そんな事を聞いたって仕方がないじゃありませんか」と梅子は笑い出した。調戲かうかうんだと思つたのか、あんまり小供染じみていると思つたのか殆ほとんど取り合う気色はなかった。代助も平生の自分を振り返つてみて、真面目まじめにこんな質問を掛けた今の自分を、寧ろ奇体むしに思つた。今日まで兄と嫂の関係を長い間目撃していながら、ついぞ其所に

は気が付かなかつた。嫂もまた代助の気が付く程物足りない素振は見せた事がなかつた。

「世間の夫婦はそれで済んで行くものかな」と独ひとりごと言の様に云つたが、別に梅子の返事を

を予期する気でもなかつたので、代助は向うの顔も見ず、ただ畳の上に置いてある新聞に眼を落した。すると梅子は忽ちたちま、

「何ですって」と切り込む様に云つた。代助の眼が、その調子に驚ろいて、ふと自分の方に視線を移した時、

「だから、貴方あなたが奥さんおもらを御貰いなすつたら、始終宅にばかりいて、たんと可愛かあいがつて御上げなさいな」と云つた。代助は始めて相手が梅子であつて、自分が平生の代助でなかつた事を自覚した。それでなるべく不断の調子を出そうと力つとめた。

けれども、代助の精神は、結婚謝絶と、その謝絶に次いで起るべき、三千代と自分の關係にばかり注がれていた。従つて、いくら平生の自分に歸つて、梅子の相手になる積りでも、梅子の予期していない、変つた音色が、時々会話の中に、思わず知らず出て来た。

「代さん、貴方今日はどうかしているのね」と仕舞に梅子が云つた。代助は固もとより嫂の言葉を側面へ摺ずらして受ける法をいくらでも心得ていた。然るに、それを遣やるのが、輕薄の様で、又面倒な様で、今日は厭いやになつた。却つて真面目に、何処どこが変か教えてくれと頼ん

だ。梅子は代助の問が馬鹿氣ているので妙な顔をした。が、代助が益頼ますますむので、では云つて上げましようと前置をして、代助のどうかしている例を挙げ出した。梅子は勿論もちろんわざと真面目を装よそおつているものと代助を解釈した。その中に、

「だつて、兄さんが留守勝で、さぞ御淋おさむしいでしょうなんて、あんまり思遣おもいやりが好過よすぎる事を仰おつしやるからさ」と云う言葉があつた。代助は其所へ自分を挟んだ。

「いや、僕の知つた女に、そう云うのが一人あつて、実は甚だ氣の毒だから、つい他ほかの女の心持も聞いてみたくなつて、伺つたんで、決して冷ひやかした積りじやないんです」

「本当に？ そりや一寸ちよいと何てえ方なの」

「名前は云い悪いにくんです」

「じゃ、貴方がその旦那に忠告をして、奥さんをもつと可愛がるようにして御上になれば可いいのに」

代助は微笑した。

「姉さんも、そう思いますか」

「当り前ですわ」

「もしその夫が僕の忠告を聞かなかつたら、どうします」

「そりや、どうも仕様がないわ」

「放つて置くんですか」

「放つて置かなけりや、どうなさるの」

「じゃ、その細君は夫に対して細君の道を守る義務があるでしょうか」

「大變理責めなのね。そりや旦那の不親切の度合にも因^よるでしょう」

「もし、その細君に好きな人があったらどうです」

「知らないわ。馬鹿らしい。好きな人がある位なら、始めつから其方^{そっち}へ行つたら好いじゃありませんか」

代助は黙つて考えた。しばらくしてから、姉^{ねえ}さんと云つた。梅子はその深い調子に驚ろかされて、改ためて代助の顔を見た。代助は同じ調子で猶^{なお}云つた。

「僕は今度の縁談を断ろうと思う」

代助の巻^{まきたばこ}烟草を持つた手が少し顫^{ふる}えた。梅子は寧ろ表情を失つた顔付をして、謝絶の言葉を聞いた。代助は相手の様子に頓着なく進行した。

「僕は今まで結婚問題に就いて、貴方に何返となく迷惑を掛けた上に、今度もまた心配して貰っている。僕ももう三十だから、貴方の云う通り、大抵な所で、御勧め次第になつて

好いのですが、少し考があるから、この縁談もまあ已めにしたい希望です。御父さんにも、兄さんにも済まないが、仕方がない。何も当人が気に入らないと云う訳ではないが、断るんです。この間御父さんによく考えてみると云われて、大分考えてみたが、やっぱり断る方が好い様だから断ります。実は今日はその用で御父さんに逢いに来たんですが、今御客の様だから、序ついでと云つては失礼だが、貴方にも御話をして置きます」

梅子は代助の様子が真面目なので、何時いつもの如く無駄口も入れずに聞いていたが、聞き終った時、始めて自分の意見を述べた。それが極めて簡単なかつ極めて實際的な短かい句であつた。

「でも、御父さんはきつと御困りですよ」

「御父さんには僕が直じかに話すから構いません」

「でも、話がもう此所ここまで進んでいるんだから」

「話が何所どこまで進んでいようと、僕はまだ貰いますと云った事はありません」

「けれども判然はつきり貰わないとも仰しやらなかったでしょう」

「それを今云いに來た所です」

代助と梅子は向い合つたなり、しばらく黙つた。

代助の方では、もう云う可き事を云い尽くした様な気がした。少なくとも、これより進んで、梅子に自分を説明しようという考えはまるで無かった。梅子は語るべき事、聞くべき事を沢山持っていた。ただそれが咄嗟の間に、前の問答に繋がりが好く、口へ出て来なかったのである。

「貴方の知らない間に、縁談がどれ程進んだのか、私にも能く分らないけれど、誰にしたって、貴方が、そうきっぱり御断りなさろうとは思ひ掛けないんですもの」と梅子は漸くにして云った。

「何故です」と代助は冷かに落ち付いて聞いた。梅子は眉を動かした。

「何故ですって聞いたって、理窟じゃありませんよ」

「理窟でなくつても構わないから話して下さい」

「貴方の様にそう何遍断ったって、つまり同じ事じゃありませんか」と梅子は説明した。けれども、その意味がすぐ代助の頭には響かなかつた。不可解の眼を挙げて梅子を見た。梅子は始めて自分の本意を敷衍しに掛かった。

「つまり、貴方だって、何時か一度は、御奥さんを貰う積りなんでしょう。厭だつて、仕方がないじゃありませんか。そう何時までも我儘を云った日には、御父さんに済まない

だけですわ。だからね。どうせ誰を持って行っても気に入らない貴方なんだから、つまり誰を持たしたって同じだろ^{おんな}うって云う訳なんです。貴方にはどんな人を見せても駄目なんですよ。世の中に一人も気に入る様なものは生きてやしませんよ。だから、奥さんと云うものは、始めから気に入らないものと、諦^{あきら}めて貰うより外に仕方がないじゃありませんか。だから私達が一番好いと思うのを、黙^{もく}って貰えば、それで何所も彼所^{かしこ}も丸く治まっちゃうから、——だから、御父さんが、殊^{こと}によると、今度^{こんど}は、貴方に一から十まで相談して、何か為^なさらないかも知れませんよ。御父さんから見ればそれが当り前ですもの。それでも、為^しなくつちや、生きてる内に、貴方の奥さんの顔を見る事は出来ないじゃありませんか」

代助は落ち付いて嫂^{あによめ}の云う事を聴いていた。梅子の言葉が切れても、容易に口を動かさなかつた。若し^も反駁^{はんぱく}をする日には、話が段々込み入るばかりで、此方^{こちら}の思う所は決して梅子の耳へ通らないと考^{かん}えた。けれども向うの云い分^{うけが}を肯う気はまるでなかつた。實際問題として、双方が困る様になるばかりと信じたからである。それで、嫂に向つて、

「貴方の仰しやる所も、一理あるが、私にも私の考があるから、また打遣^{うちや}つて置いて下さい」と云つた。その調子には梅子の干渉を面倒がる気色が自然と見えた。すると梅子は黙つていなかつた。

「そりや代さんだつて、小供じやないから、一人前の考の御有な事は勿論ですわ。私なんぞの要らない差出口は御迷惑でしょうから、もう何にも申しますまい。然し御父さんの身になつて御覧なさい。月々の生活費は貴方の要ると云うだけ今でも出していらつしやるんだから、つまり貴方は書生時代よりも余計御父さんの厄介になつてゐる訳でしょう。そうして置いて、世話になる事は、元より世話になるが、年を取つて一人前になつたから、云う事は元の通りには聞かれないつて威張つたつて通用しないじやありませんか」

梅子は少し激したと見えて猶も云い募ろうとしたのを、代助が遮つた。

「だつて、女房を持てばこの上猶御父さんの厄介に為らなくつちや為らないでしょう」

「宜いじやありませんか、御父さんが、その方が好いと仰しやるんだから」

「じや、御父さんは、いくら僕の氣に入らない女房でも、是非持たせる決心なんですな」

「だつて、貴方に好いたのがあればですけども、そんなのは日本中探して歩いたつて無いんじゃないませんか」

「どうして、それが分ります」

梅子は張の強い眼を据えて、代助を見た。そうして、

「貴方はまるで代言人の様な事を仰しやるのね」と云つた。代助は蒼白あおしろくなつた額を嫂

の傍へ寄せた。

「姉さん、私は好いた女があるんです」と低い声で云い切った。

代助は今まで冗談にこんな事を梅子に向つて云つた事が能くあつた。梅子も始めはそれを本気に受けた。そつと手を廻して真相を探つてみたなどという滑稽もあつた。事実が分つて以後は、代助の所謂好いた女は、梅子に対して一向利目がなくなつた。代助がそれを云い出しても、まるで取り合ひなかつた。でなければ、茶化していた。代助の方でもそれで平氣であつた。然しこの場合だけは彼に取つて、全く特別であつた。顔付と云い、眼付と云い、声の低い底に籠る力と云い、此所まで押し逼つて来た前後の關係と云い、凡ての点から云つて、梅子をはつと思わせない訳に行かなかつた。嫂はこの短い句を、閃めく懐劍の如くに感じた。

代助は帯の間から時計を出して見た。父の所へ来ている客は中々帰りそうにもなかつた。空は又曇つて来た。代助は一旦引き上げて又改ためて、父と話を付けに出直す方が便宜だと考えた。

「僕は又来ます。出直して来て御父さんに御目に掛る方が好いでしょう」と立ちにかかつた。梅子はその間に回復した。梅子は飽くまで人の世話を焼く実意のあるだけに、物を中

途で投げる事の出来ない女であつた。抑える様に代助を引き留めて、女の名を聞いた。代助は固より答えなかつた。梅子は是非にと逼つた。代助はそれでも応じなかつた。すると梅子は何故その女を貰わないのかと聞き出した。代助は単純に貰えないから、貰わないのだと答えた。梅子は仕舞に涙を流した。他の^{ひと}尽力を出し抜いたと云つて恨んだ。何故始から打ち明けて話さないかと云つて責めた。かと思うと、気の毒だと云つて同情してくれた。けれども代助は三千代に就ては、遂に^{つい}何事も語らなかつた。梅子はどうとう我^がを折つた。代助の愈^{いよいよ}歸ると云う間際^{まぎわ}になつて、

「じゃ、貴方から直^{じか}に御父さんに御話なさるんですね。それまでは私は黙っていた方が好いでしょう」と聞いた。代助は黙つていて貰う方が好いか、話して貰う方が好いか、自分にも分らなかつた。

「そうですね」と躊躇^{ちゆうちよ}したが、「どうせ、断りに来るんだから」と云つて嫂の顔を見た。

「じゃ、若し話す方が都合が好きそうだったら話しましょう。もし又悪い様だったら、何にも云わずに置くから、貴方が始から御話なさい。それが宜^いいでしょう」と梅子は親切に云つてくれた。代助は、

「何分宜しく」と頼んで外へ出た。角へ来て、四谷から歩く積りで、わざと、塩町行の電車に乗った。練兵場の横を通るとき、重い雲が西で切れて、梅雨には珍らしい夕陽が、真赤になって広い原一面を照らしていた。それが向うを行く車の輪に中つて、輪が回る度に鋼鉄の如く光った。車は遠い原の中に小さく見えた。原は車の小さく見える程広がった。日は血の様に毒々しく照った。代助はこの光景を斜めに見ながら、風を切つて電車に持つて行かれた。重い頭の中がふらふらした。終点まで来た時は、精神が身体を冒したのか、精神の方が身体に冒されたのか、厭な心持がして早く電車を降りたかった。代助は雨の用心に持った蝙蝠傘を、杖の如く引き摺つて歩いた。

歩きながら、自分は今日、自ら進んで、自分の運命の半分を破壊したのも同じ事だと、心のうちに囁いた。今までは父や嫂を相手に、好い加減な間隔を取つて、柔らかに自我を通して来た。今度は愈本性を露わさなければ、それを通し切れなくなった。同時に、この方面に向つて、在来の満足を求め得る希望は少なくなった。けれども、まだ逆戻りをする余地はあつた。ただ、それには又父を胡魔化す必要が出て来るに違なかつた。代助は腹の中で今までの我を冷笑した。彼はどうしても、今日の告白を以て、自己の運命の半分を破壊したものと認めたかつた。そうして、それから受ける打撃の反動として、思い切つて三

千代の上に、掩おほつ被かぶさる様に烈はげしく働き掛けたかった。

彼はこの次父に逢あうときは、もう一步も後へ引けない様に、自分の方を拵こしらえて置きたかった。それで三千代と会見する前に、又父から呼び出される事を深く恐れた。彼は今日嫂あに、自分の意思を父に話す話さないの自由を与えたのを悔いた。今夜にも話されれば、明日したの朝呼したばれるかも知れない。すると今夜中に三千代に逢つて己れを語って置く必要が出来る。然し夜だから都合がよくないと思つた。

津守つのかみを下りた時、日は暮れ掛かった。士官学校の前を真直に濠端ほりばたへ出て、二三町来ると砂土原町さどはらちようへ曲がるべき所を、代助はわざと電車路みちに付いて歩いた。彼は例の如くに宅うちへ歸つて、一夜を安閑と、書齋の中で暮すに堪えなかつたのである。濠ほりを隔てて高い土手の松が、眼のつづく限り黒く並んでいる底の方を、電車がしきりに通つた。代助は軽い箱レールが、軌道レールの上を、苦もなく滑つて行つては、又滑つて帰る迅速な手際てぎわに、軽快の感じを得た。その代り自分と同じ路みちを容赦なく往来する外濠線ゆききの車を、常よりは騒々しく悪にくんだ。牛込見附うしごめみつけまで来た時、遠くの小石川の森に数点の灯影ひかげを認めた。代助は夕飯ゆうめしを食う考もなく、三千代のいる方角へ向いて歩いて行つた。

約二十分の後、彼は安藤坂を上つて、伝通院でんずういんの焼跡の前へ出た。大きな木が、左右か

ら被^{かぶ}さつてゐる間を左りへ抜けて、平岡の家の傍^{わら}まで来ると、板^{いた}塀^{べい}から例の如く灯が射^さしてゐた。代助は塀^{へい}の本^{もと}に身を寄せて、凝^{じつ}と様子を窺^{うかが}つた。しばらくは、何の音もなく、家のうちは全く静であつた。代助は門を潜^{くぐ}つて、格子^{こうし}の外から、頼むと声を掛けてみようかと思つた。すると、縁側^{すね}に近く、ぴしやりと脛^{すね}を叩^{たた}く音がした。それから、人が立つて、奥へ這^{はい}入^いつて行く気色であつた。やがて話声が聞えた。何の事か善く聴き取れなかつたが、声は慥^{たしか}に、平岡と三千代であつた。話声はしばらくで歇^やんでしまった。すると又足音が縁側まで近付いて、どさりと尻^{しり}を卸す音が手に取る様に聞えた。代助はそれなり塀^{へい}の傍を退いた。そうして元来た道とは反対の方角に歩き出した。

しばらくは、何処^{どこ}をどう歩いてゐるか夢中であつた。その間代助の頭には今見た光景ばかりが煎^いり付く様に踴^{おど}つてゐた。それが、少し衰えると、今度は自己の行為に対して、云うべからざる汚辱の意味を感じた。彼は何^{なん}の故^{ゆえ}に、斯^かかる下劣な真似をして、あたかも驚ろかされたかの如くに退却したのかを怪しんだ。彼は暗い小路に立つて、世界が今夜^{いま}に支配されつつある事を私^{ひそ}かに喜んだ。しかも五月雨^{さみだれ}の重い空氣に鎖^{とぎ}されて、歩けば歩く程、窒息する様な心持がした。神楽坂上へ出た時、急に眼がぎらぎらした。身を包む無数の人と、無数の光が頭を遠慮なく焼いた。代助は逃げる様に藁^{わら}店^{だな}を上^{あが}つた。

家へ帰ると、門野が例の如く慢然たる顔をして、

「大分遅うがしたな。御飯はもう御済みになりましたか」と聞いた。

代助は飯が欲しくなかつたので、要らない由よしを答えて、門野を追い帰す様に、書斎から退ひきぞけた。が、二三分立たない内に、又手を鳴らして呼び出した。

「宅うちから使は来やしなかつたかね」

「いいえ」

代助は、

「じゃ、宜しい」と云つたぎりであつた。門野は物足りなそうに入口に立っていたが、

「先生は、何ですか、御宅へ御出おいでになつたんじや無かつたんですか」

「何故」と代助はむずかしい顔をした。

「だって、御出掛になるとき、そんな御話でしたから」

代助は門野を相手にするのが面倒になつた。

「宅へは行つたさ。——宅から使が来なければそれで、好いじやないか」

門野は不得要領に、

「はあそうですか」と云い放して出て行つた。代助は、父があらゆる世界に対してよりも、

自分に対して、性急であるという事を知っているのです、ことによると、帰った後から直使^{すぐ}でも寄こしはしまいかと恐れて聞き糺^{ただ}したのであった。門野が書生部屋へ引き取ったあとで、明日は是非とも三千代に逢わなければならないと決心した。

その夜代助は寐^ねながら、どう云う手段で三千代に逢おうかと云う問題を考えた。手紙を車夫に持たせて宅^{うち}へ呼びに遣れば、来る事は来るだろうが、既に今日嫂との会談が済んだ以上は、明日にも、兄か嫂の為^{ため}に、向うから襲われなくても限らない。又平岡のうちへ行つて逢う事は代助に取つて一種の苦痛があつた。代助は已^{やむ}を得ず、自分にも三千代にも関係のない所で逢うより外に道はないと思つた。

夜半から強く雨が降り出した。釣^かつてある蚊帳^やが、却^{かえ}つて寒く見える位な音がどうどうと家を包んだ。代助はその音の中^{うち}に夜の明^よけるのを待った。

雨は翌日まで晴れなかった。代助は湿^ぬっぽい縁側に立つて、暗い空模様を眺めて、昨夕^{ゆうべ}の計画を又変えた。彼は三千代を普通の待合などへ呼んで、話をするのが不愉快であつた。已^あむなくんば、蒼^{あお}い空の下と思つていたが、この天気ではそれも覚束^{おぼつか}なかつた。と云つて、平岡の家へ出向く気は始めから無かつた。彼はどうしても、三千代を自分の宅へ連れて来るより外に道はないと極めた。門野が少し邪魔になるが、話のし具合では書生部屋に

洩れない様にも出来ると考えた。

午^{ひる}少し前までは、ぼんやり雨を眺めていた。午^{ひるめし}飯を済ますや否^{いな}や、護^{ゴム}謨^{かっぱ}の合羽を引き掛けて表へ出た。降る中を神楽坂下まで来て青山の宅へ電話を掛けた。明日此方^{こち}から行く積りであるからと、機先を制して置いた。電話口へは嫂が現れた。先^{せん}達^{だつ}ての事は、まだ父に話さないでいるから、もう一遍よく考え直して御覧なさらないかと云われた。代助は感謝の辞と共に号^{ベル}鈴を鳴らして談話を切った。次に平岡の新聞社の番号を呼んで、彼の出版社の有無を確めた。平岡は社に出ていると云う返事を得た。代助は雨を衝^ついて又坂を上った。花屋へ這入って、大きな白百合^{しろゆり}の花を沢山買つて、それを提げて、宅へ歸つた。花は濡^ぬれたまま、二つの花瓶^{かへい}に分けて挿^さした。まだ余っているのを、この間の鉢に水を張つて置いて、茎を短かく切つて、すばすば放り込んだ。それから、机に向つて、三千代へ手紙を書いた。文句は極めて短かいものであつた。ただ至急御目に掛けて、御話したい事があるから来てくれると云うだけであつた。

代助は手を打つて、門野を呼んだ。門野は鼻を鳴らして現れた。手紙を受取りながら、「大変好^にい香^{におい}ですな」と云つた。代助は、「車を持つて行つて、乗せて来るんだよ」と念を押した。門野は雨の中を乗りつけの帳場

まで出て行つた。

代助は、百合の花を眺めながら、部屋を掩う強い香の中に、残りなく自己を放擲した。彼はこの嗅覚の刺激のうちに、三千代の過去を分明に認めた。その過去には離すべからざる、わが昔の影が烟の如く這い纏わっていた。彼はしばらくして、

「今日始めて自然の昔に帰るんだ」と胸の中で云つた。こう云い得た時、彼は年頃にない安慰を総身に覺えた。何故もつと早く帰る事が出来なかつたのかと思つた。始から何故自然に抵抗したのかと思つた。彼は雨の中に、百合の中に、再現の昔のなかに、純一無雜に平和な生命を見出した。その生命の裏にも表にも、慾得はなかつた、利害はなかつた、自己を圧迫する道徳はなかつた。雲の様な自由と、水の如き自然とがあつた。そうして凡てが幸であつた。だから凡てが美しかつた。

やがて、夢から覺めた。この一刻の幸から生ずる永久の苦痛がその時卒然として、代助の頭を冒して来た。彼の唇は色を失つた。彼は默然として、我と吾手を眺めた。爪の甲の底に流れている血潮が、ぶるぶる顫える様に思われた。彼は立つて百合の花の傍へ行つた。唇が弁に着く程近く寄つて、強い香を眼の眩うまで嗅いだ。彼は花から花へ唇を移して、甘い香に咽せて、失心して室の中に倒れたかつた。彼はやがて、腕を組んで、書齋と

座敷の間を往つたり来たりした。彼の胸は始終鼓動を感じていた。彼は時々椅子の角や、洋卓デスクの前へ来て留まった。それから又歩き出した。彼の心の動揺は、彼をして長く一所に留まる事を許さなかつた。同時に彼は何物をか考える為に、無暗むやみな所に立ち留まらざるを得なかつた。

そのうちに時は段々移つた。代助は断えず置時計の針を見た。又覗く様に、軒から外の雨を見た。雨は依然として、空から真直に降っていた。空は前よりも稍暗ややなつた。重なる雲が一つ所で渦を捲まいて、次第に地面の上へ押し寄せるかと怪しまれた。その時雨に光る車を門から中へ引き込んだ。輪の音が、雨を圧して代助の耳に響いた時、彼は蒼白あおしろい頬に微笑を洩しながら、右の手を胸に当てた。

三千代は玄関から、門野に連れられて、廊下伝いに這入つて来た。銘仙の紺こん紺がすりに、唐草模様の一重帯を締めて、この前とはまるで違つた服装なりをしているので、一目見た代助には、新らしい感じがした。色は不断の通り好くなかつたが、座敷の入口で、代助と顔を合せた時、眼も眉も口もぴたりと活動を中止した様に固くなつた。敷居に立つている間は、足も動けなくなつたとしか受取れなかつた。三千代は固もとより手紙を見た時から、何事かを予期して来た。その予期のうちには恐れと、喜よろこびと、心配とがあつた。車から降りて、

座敷へ案内されるまで、三千代の顔はその予期の色をもつて漲みなぎつていた。三千代の表情はそこで、はたと留まった。代助の様子は三千代にそれだけの打衝シヨツクを与える程に強烈であつた。

代助は椅子の一つを指さした。三千代は命ぜられた通りに腰を掛けた。代助はその向うに席を占めた。二人は始めて相對した。然し良少やよしばら時は二人とも、口を開かなかつた。

「何か御用なの」と三千代は漸ようやくにして問うた。代助は、ただ、

「ええ」と云つた。二人はそれぎりで、又しばらく雨の音を聴いた。

「何か急な御用なの」と三千代が又尋ねた。代助は又、

「ええ」と云つた。双方共何時いつもの様に軽くは話し得なかつた。代助は酒の力を借りて、己れを語らなければならない様な自分を耻はじた。彼は打ち明けるときは、必ず平生の自分でなければならぬものと兼て覺悟をしていた。けれども、改たまつて、三千代に對してみると、始めて、一滴の酒精が恋しくなつた。ひそかに次の間へ立つて、例いつものウイスキーを洋盃コップで傾けようかと思つたが、遂ついにその決心に堪えなかつた。彼は青天白日の下もとに、尋常の態度で、相手に公言し得る事であれば自己の誠でないと信じたからである。酔よと云う牆壁しょうへきを築いて、その掩護えんごに乗じて、自己を大胆にするのは、卑怯ひきようで、残酷で、相

手に汚辱を与える様な気がしてならなかったからである。彼は社会の習慣に対しては、徳義的な態度を取る事が出来なくなつた。その代り三千代に対しては一点も不徳義な動機を蓄えぬ積りであつた。否、彼をして卑吝に陥らしむる余地がまるでない程に、代助は三千代を愛した。けれども、彼は三千代から何の用かを聞かれた時に、すぐ己れを傾ける事が出来なかつた。二度聞かれた時に猶躊躇した。三度目には、已を得ず、

「まあ、緩くり話しましょう」と云つて、巻烟草に火を点けた。三千代の顔は返事を延ばされる度に悪くなつた。

雨は依然として、長く、密に、物に音を立てて降つた。二人は雨の為に、雨の持ち来す音の為に、世間から切り離された。同じ家に住む門野からも婆さんからも切り離された。

二人は孤立のまま、白百合の香の中に封じ込められた。

「先刻表へ出て、あの花を買つて来ました」と代助は自分の周囲を顧みた。三千代の眼は代助に随いて室の中を一回した。その後で三千代は鼻から強く息を吸い込んだ。

「兄さんと貴方と清水町にいた時分の事を思い出そうと思つて、なるべく沢山買つて来ました」と代助が云つた。

「好い香です」と三千代は翻がえる様に綻びた大きな花弁を眺めていたが、それか

ら眼を放して代助に移した時、ぽうと頬を薄赤くした。

「あの時分の事を考えると」と半分云つて已めた。

「覚えていますか」

「覚えていますわ」

「貴方は派手な半襟を掛けて、銀杏返しに結っていましたね」

「だって、東京へ来立だつたんですもの。じき已めてしまったわ」

「この間百合の花を持つて来て下さった時も、銀杏返しじゃなかったですか」

「あら、気が付いて。あれは、あの時ぎりなのよ」

「あの時はあんな鬘まげに結いたくなつたんですか」

「ええ、気迷れきまぐに一寸結ちよいとつてみたかつたの」

「僕はあの鬘を見て、昔を思い出した」

「そう」と三千代は耻はずかしそうに肯うけがつた。

三千代が清水町にいた頃、代助と心安く口を聞く様になつてからの事だが、始めて国から出て来た当時の髪ほの風を代助から賞められた事があつた。その時三千代は笑つていたが、それを聞いた後でも、決して銀杏返しには結わなかつた。二人は今もこの事をよく記憶し

ていた。けれども双方共口へ出しては何も語らなかつた。

三千代の兄と云うのは寧ろ^{むし}豁^{かつたつ}達な気性で、懸隔てのない交際^{つきあい}振^{ぶり}から、友達には甚^{ひど}く愛されていた。ことに代助はその親友であつた。この兄は自分が豁達であるだけに、妹の大人しいのを可愛^{かあい}がつていた。国から連れて来て、一所に家を持ったのも、妹を教育しなければならぬと云う義務の念からではなくて、全く妹の未来に対する情合と、現在自分の傍に引き着けて置きたい欲望とからであつた。彼は三千代を呼ぶ前、既に代助に向つてその旨^{むね}を打ち明けた事があつた。その時代助は普通の青年の様に、多大の好奇心^{もつ}を以てこの計画を迎えた。

三千代が来てから後、兄と代助とは益親^{ますます}しくなつた。何方^{どっち}が友情の歩を進めたかは、代助自身にも分らなかつた。兄が死んだ後で、當時を振り返つてみる毎^{ごと}に、代助はこの親密^{うち}の裡に一種の意味を認めない訳に行かなかつた。兄は死ぬ時までそれを明言しなかつた。代助も敢て何事をも語らなかつた。かくして、相互の思わくは、相互の間の秘密として葬^{ほうむ}られてしまった。兄は存^{ぞん}生^{しょう}中にこの意味を私^{ひそ}に三千代に洩^{ひそ}らした事があるかどうか、其所^{そこ}は代助も知らなかつた。代助はただ三千代の挙止動作と言語談話からある特別な感じを得ただけであつた。

代助はその頃から趣味の人として、三千代の兄に臨んでいた。三千代の兄はその方面に於て、普通以上の感受性を持つていなかった。深い話になると、正直に分らないと自白して、余計な議論を避けた。何処からか arbiter 《アービター》 elegantiarum 《エレガンシアルム》と云う字を見付出して来て、それを代助の異名の様に濫用したのは、その頃の事であつた。三千代は隣りの部屋で黙つて兄と代助の話を聞いていた。仕舞にはとうとう arbiter 《アービター》 elegantiarum 《エレガンシアルム》と云う字を覚えた。ある時その意味を兄に尋ねて、驚ろかれた事があつた。

兄は趣味に関する妹の教育を、凡て代助に委任した如くに見えた。代助を待つて啓発されべき妹の頭脳に、接触の機会を出来るだけ与える様に力めた。代助も辞退はしなかった。後から顧みると、自ら進んでその任に當つたと思われる痕迹もあつた。三千代は固より喜んで彼の指導を受けた。三人はかくして、巴の如くに回転しつつ、月から月へと進んで行った。有意識か無意識か、巴の輪は回るに従つて次第に狭まって来た。遂に三巴が一所に寄つて、丸い円になろうとする少し前の所で、忽然その一つが欠けたため、残る二つは平衡を失つた。

代助と三千代は五年の昔を心置なく語り始めた。語るに従つて、現在の自己が遠退いて、

段々と当時の学生時代に返って来た。二人の距離は又元の様に近くなった。

「あの時兄さんが亡くならないで、未だ達者でいたら、今頃私はどうしているでしょう」と三千代は、その時を恋しがる様に云った。

「兄さんが達者でいたら、別の人になっっている訳ですか」

「別な人にはなりませんわ。貴方は？」

「僕も同じ事です」

三千代はその時、少し窘める様な調子で、

「あら嘘」と云った。代助は深い眼を三千代の上に据えて、

「僕は、あの時も今も、少しも違っていないやしないのです」と答えたまま、猶しばらくは眼を相手から離さなかった。三千代は忽ち視線を外らした。そうして、半ば独り言の様に、

「だって、あの時から、もう違っていらしたんですもの」と云った。

三千代の言葉は普通の談話としては余りに声が低過ぎた。代助は消えて行く影を踏まえる如くに、すぐその尾を捕えた。

「違やしません。貴方にはただそう見えるだけです。そう見えたって仕方がないが、それは僻目だ」

代助の方は通例よりも熱心に判然はつきりした声で自己を弁護する如くに云った。三千代の声は益低ますますかった。

「僻目でも何でも可よくつてよ」

代助は黙つて三千代の様子を窺うかがった。三千代は始めから、眼を伏せていた。代助にはその長い睫毛まつげの顫ふるえる様さまが能く見えた。

「僕の存在には貴方が必要だ。どうしても必要だ。僕はそれだけの事を貴方に話したい為にわざわざ貴方呼んだのです」

代助の言葉には、普通の愛人の用いる様な甘い文彩あやを含んでいなかった。彼の調子はその言葉と共に簡単に素朴であつた。寧ろ嚴肅の域に逼せまつていた。但ただ、それだけの事を語る為に、急用として、わざわざ三千代を呼んだ所が、玩具おもちゃの詩歌に類していた。けれども三千代は固より、こう云う意味での俗を離れた急用を理解し得る女であつた。その上世間の小説に出て来る青春時代の修辭には、多くの興味を持っていなかった。代助の言葉が、三千代の官能に華やかな何物をも与えなかったのは、事実であつた。三千代がそれに渴いていなかったのも事実であつた。代助の言葉は官能を通り越して、すぐ三千代の心に達した。三千代は顫える睫毛の間から、涙を頬の上に流した。

「僕はそれを貴方に承知して貰もらいたいのです。承知して下さい」

三千代は猶泣いた。代助に返事をするどころではなかった。袂たもとから手帛ハンケチを出して顔へ当てた。濃い眉の一部分と、額と生際はえぎわだけが代助の眼に残った。代助は椅子を三千代の方へ摺すり寄せた。

「承知して下さいでしょう」と耳の傍はたで云った。三千代は、まだ顔を蔽おほっていた。しゃくり上げながら、

「余あんまりだわ」と云う声が手帛の中で聞えた。それが代助の聴覚を電流の如くに冒した。代助は自分の告白が遅過ぎたと云う事を切に自覚した。打ち明けるならば三千代が平岡へ嫁ぐ前に打ち明けないければならない筈はずであつた。彼は涙と涙の間をぼつぼつ綴つづる三千代のこの一語を聞くに堪えなかった。

「僕は三四年前に、貴方にそう打ち明ければならなかったのです」と云つて、慚然ふぜんとして口を閉じた。三千代は急に手帛から顔を離した。瞼まぶたの赤くなつた眼を突然代助の上に睜みはつて、

「打ち明けて下さらなくっても可いから、何故」と云い掛けて、一寸ちよつと躊躇ちゆうちよしたが、思い切つて、「何故棄ててしまったんです」と云うや否や、又手帛ハンケチを顔に当てて又泣い

た。

「僕が悪い。勘忍かんにんして下さい」

代助は三千代の手頸てくびを執つて、手帛を顔から離そうとした。三千代は逆おうともしなかつた。手帛は膝ひざの上に落ちた。三千代はその膝の上を見たまま、微かすかな声で、

「残酷だわ」と云つた。小さい口元の肉が顫う様に動いた。

「残酷と云われても仕方がありません。その代り僕はそれだけの罰を受けています」

三千代は不思議な眼をして顔を上げたが、

「どうして」と聞いた。

「貴方が結婚して三年以上になるが、僕はまだ独身でいます」

「だって、それは貴方の御勝手じゃありませんか」

「勝手じゃありません。貰おうと思つても、貰えないのです。それから以後、宅うちのものから何遍結婚を勧められたか分りません。けれども、みんな断つてしまいました。今度もまた一人断りました。その結果僕と僕の父との間がどうなるか分りません。然しかしどうなつても構わない、断るんです。貴方が僕に復讐ふくしゅうしている間は断らなければならぬんです」

「復讐」と三千代は云つた。この二字を恐るるものの如くに眼を働かした。「私わたくしはこれで

も、嫁に行つてから、今日まで一日も早く、貴方が御結婚なされば可いと思わないで暮らした事はありません」と稍改^{やや}たまつた物の言い振であつた。然し代助はそれに耳を貸さなかつた。

「いや僕は貴方に何処^{どこ}までも復讐して貰いたいのです。それが本望なのです。今日こうやつて、貴方と呼んで、わざわざ自分の胸を打ち明けるのも、実は貴方から復讐されている一部分としか思やしません。僕はこれで社会的に罪を犯したと同じ事です。然し僕はそう生れて来た人間なのだから、罪を犯す方が、僕には自然なのです。世間に罪を得ても、貴方の前に懺悔^{ざんげ}する事が出来れば、それで沢山なんです。これ程嬉^{うれ}しい事はないと思つてゐるんです」

三千代は涙の中で始めて笑つた。けれども一言も口へは出さなかつた。代助は猶^{なほ}己れを語る隙^{ひま}を得た。――

「僕は今更こんな事を貴方に云うのは、残酷だと承知しています。それが貴方に残酷に聞こえれば聞こえる程僕は貴方に対して成功したと同様になるんだから仕方がない。その上僕はこんな残酷な事を打ち明けなければ、もう生きてゐる事が出来なくなつた。つまり我^わがまま儘^{あやま}です。だから詫^{あやま}るんです」

「残酷では御座いません。だから詫まるのはもう廃して頂戴」

三千代の調子は、この時急に判然はつきりした。沈んではいたが、前に比べると非常に落ち着いた。然ししばらくしてから、又

「ただ、もう少し早く云つて下さると」と云い掛けて涙ぐんだ。代助はその時こう聞いた。

「じゃ僕が生涯黙つていた方が、貴方には幸福だったんですか」

「そうじゃないのよ」と三千代は力を籠めて打ち消した。「私だって、貴方がそう云つて下さらなければ、生きていられなくなつたかも知れせんわ」

今度は代助の方が微笑した。

「それじゃ構わないでしょう」

「構わないより難有ありがたいわ。ただ――」

「ただ平岡に済まないと云うんでしよう」

三千代は不安らしく首肯うなずいた。代助はこう聞いた。――

「三千代さん、正直に云つて御覧。貴方は平岡を愛しているんですか」

三千代は答えなかった。見るうちに、顔の色が蒼あおくなった。眼も口も固くなった。凡すべて

が苦痛の表情であつた。代助は又聞いた。

「では、平岡は貴方を愛しているんですか」

三千代はやはり俯つ向いていた。代助は思い切つた判断を、自分の質問の上に与えようとして、既にその言葉が口まで出掛つた時、三千代は不意に顔を上げた。その顔には今見た不安も苦痛も殆んど消えていた。涙さえ大抵は乾いた。頬の色は固より蒼かったが、唇は確として、動く気色はなかつた。その間から、低く重い言葉が、繋がらない様に、一字ずつ出た。

「仕様がな。覚悟を極めましょう」

代助は背中から水を被つた様に顫えた。社会から逐い放たるべき二人の魂は、ただ二人対ひ合つて、互を穴の明く程眺めていた。そうして、凡てに逆つて、互を一所に持ち来たした力を互と怖れ戦いた。

しばらくすると、三千代は急に物に襲われた様に、手を顔に当てて泣き出した。代助は三千代の泣く様を見るに忍びなかつた。肱を突いて額を五指の裏に隠した。二人はこの態度を崩さずに、恋愛の彫刻の如く、凝としていた。

二人はこう凝としている中に、五十年を眼のあたりに縮めた程の精神の緊張を感じた。

そうしてその緊張と共に、二人が相並んで存在しておると云う自覚を失わなかった。彼等は愛の刑と愛の賚たまものとを同時に享うけて、同時に双方を切実に味わった。

しばらくして、三千代は手帛ハンケチを取つて、涙を奇麗に拭ふいたが、静かに、

「私もう歸つてよ」と云つた。代助は、

「御歸りなさい」と答えた。

雨は小降になつたが、代助は固より三千代を独り返す気はなかった。わざと車を雇わずに、自分で送つて出た。平岡の家まで附ついて行く所を、江戸川の橋の上で別れた。代助は橋の上に立つて、三千代が横町を曲るまで見送つていた。それから緩ゆるくり歩めくを回めぐらしながら、腹の中で、

「万事終る」と宣告した。

雨は夕方歇やんで、夜よに入いったら、雲がしきりに飛んだ。その中洗つた様な月が出た。代助は光を浴びる庭の濡葉ぬれはを長い間縁側から眺めていたが、仕舞に下駄はを穿はいて下へ降りた。固より広い庭でない上に立木の数が存外多いので、代助の歩く積せきはたと無かつた。代助はその真中に立つて、大きな空を仰いだ。やがて、座敷から、昼間買つた百合の花を取つて来て、自分の周囲まわりに蒔まき散らした。白い花卉が点々として月の光に冴さえた。あるものは、

木下闇こしたやみに仄めいた。代助は何をするともなくその間に曲かがんでいた。

寐ねる時になつて始めて再び座敷へ上がった。室の中は花の香においがまだ全く抜けていなかった。

十五

三千代に逢あつて、云うべき事を云つてしまつた代助は、逢あわない前に比べると、余程心の平和に接近し易やすくなつた。然しこれは彼の予期する通りに行つたまでで、別に意外の結果と云う程のものではなかつた。

会見の翌日彼は永らく手に持つていた賽さいを思い切つて投げた人の決心もつを以て起きた。彼は自分と三千代の運命に対して、昨日から一種の責任を帯びねば済まぬ身になつたと自覺した。しかもそれは自ら進んで求めた責任に違ひなかつた。従つて、それを自分の脊せに負うて、苦しいとは思えなかつた。その重みに押されるがため、却かえつて自然と足が前に出る様な氣がした。彼は自ら切り開いたこの運命の断片を頭に乘せて、父と決戦すべき準備を整えた。父の後には兄がいた、嫂あによめがいた。これ等と戦つた後には平岡がいた。これ等を切

り抜けても大きな社会があった。個人の自由と情実を毫も斟酌^{しんしゃく}してくれない器械の様な社会があった。代助にはこの社会が今全然暗黒に見えた。代助は凡てと戦う覚悟をした。彼は自分で自分の勇氣と胆力に驚ろいた。彼は今日まで、熱烈を厭^{いと}う、危きに近寄り得ぬ、勝負事を好まぬ、用心深い、太平の好紳士^{こうしんし}と自分を見倣^{みな}していた。徳義上重大な意味の卑怯^{ひきょう}はまだ犯した事がないけれども、臆病^{おくびょう}と云う自覚はどうしても彼の心から取り去る事が出来なかつた。

彼は通俗なある外国雑誌の購読者であつた。その中のある号で、Mountain 《マウンテン》 Accidents 《アクシデント》と題する一篇に遭つて、かつて心を駭^{おどろ}かした。それには高山を攀^よじ上る冒険者の、怪我過^{あやまち}が沢山に並べてあつた。登山の途中雪崩^{ゆきなだ}れに圧^おされて、行き方知れずになつたものの骨が、四十年後に氷河の先へ引懸^{がた}つて出た話や、四人の冒険者が懸崖^{けんがい}の半腹にある、真直に立つた大きな平岩を越すとき、肩から肩の上へ猿の様に重なり合つて、最上の一人の手が岩の鼻へ掛かるや否^{いな}や、岩が崩れて、腰の縄が切れて、上の三人が折り重なつて、真逆^{まっさかさま}様に四番目の男の傍^{そば}を遥^{はる}かの下に落ちて行つた話などが、幾何^{いくつ}となく載せてあつた間に、煉瓦の壁程急な山腹に蝙蝠^{こうもり}の様に吸い付いた人間を二三カ所点綴^{てんてつ}した挿画^{さしえ}があつた。その時代助はその絶壁の横にある白い空間のあなたに、広い

空や、遙かの谷を想像して、怖ろしさから来る眩暈めまいを、頭の中に再現せずにはいられなかった。

代助は今道徳界に於て、これ等の登攀とうはん者と同一な地位に立っていると云う事を知った。けれども自らその場に臨んでみると、怯ひるむ気は少しもなかった。怯ひるんで猶予ゆうよする方が彼に取つては幾倍の苦痛であつた。

彼は一日も早く父に逢つて話をしたかつた。万一の差支さしつかえを恐れて、三千代が来た翌日、又電話を掛けて都合を聞き合せた。父は留守だと云う返事を得た。次の日又問い合せたら、今度は差支があると云つて断られた。その次には此方こちらから知らせるまでは来るに及ばんという挨拶あいさつであつた。代助は命令通り控えていた。その間嫂たよりからも兄からも便たよりは一向なかつた。代助は始めは家のものが、自分に出来るだけ長い、反省再考の時間を与える為の策略ではあるまいかと推察して、平氣に構えていた。三度の食事うまも旨く食つた。夜も比較的安らかな夢を見た。雨の晴間には門野を連れて散歩を一二度した。然し宅うちからは使も手紙も来なかつた。代助は絶壁の途中で休息する時間の長過ぎるのに安からずなつた。仕舞に思い切つて、自分の方から青山へ出掛けて行つた。兄は例の如く留守ぐそであつた。嫂は代助を見て氣の毒そうな顔をした。が、例の事件に就ては何にも語らなかつた。代助の

来意を聞いて、では私が一寸奥へ行つて御父さんの御都合を伺つて来ましよう云つて立つた。梅子の態度は、父の怒りから代助を底う様にも見えた。又彼を疎外する様にも取れた。代助は両方の何れだろうかと煩つて待つていた。待ちながらも、どうせ覺悟の前だと何遍も口のうちに繰り返した。

奥から梅子が出て来るまでには、大分暇が掛つた。代助を見て、又氣の毒そうに、今日は御都合が悪いそうですよと云つた。代助は仕方なしに、何時来たら宜からうかと尋ねた。固より例の様な元氣はなく、悄然とした問い振りであつた。梅子は代助の様子に同情の念を起した調子で、二三日中にきつと自分が責任を以て都合の好い時日を知らせるから今日は帰れと云つた。代助が内玄関を出る時、梅子はわざと送つて来て、

「今度こそ能く考へていらつしやいよ」と注意した。代助は返事もせず、門を出た。

歸る途中も不愉快で堪らなかつた。この間三千代に逢つて以後、味わう事を知つた心の平和を、父や嫂の態度で幾分か破壊されたと云う心持が路々募つた。自分は自分の思う通りを父に告げる、父は父の考えを遠慮なく自分に洩らす、それで衝突する、衝突の結果はどうあらうとも潔よく自分で受ける。これが代助の予期であつた。父の仕打は彼の予期以外に面白くないものであつた。その仕打は父の人格を反射するだけそれだけ多く代助を

不愉快にした。

代助は途^{みち}すがら、何を苦んで、父との会見をさまでに急いだものかと思ひ出した。元來が父の要求に對する自分の返事に過ぎないのだから、便宜は寧^{むし}ろ、これを待ち受ける父の方にあるべき筈^{はず}であつた。その父がわざとらしく自分を避ける様にして、面会を延ばすならば、それは自己の問題を解決する時間が遅くなると云う不結果を生ずる外に何も起り様がない。代助は自分の未来に關する主要な部分は、もう既に片付けてしまつた積りでいた。彼は父から時日を指定して呼び出されるまでは、宅^{うち}の方の所置をそのままにして放つて置く事に極めた。

彼は家に歸つた。父に對しては只薄暗い不愉快の影が頭に残つていた。けれどもこの影は近き未来に於^{おい}て必ずその暗さを増してくるべき性質のものであつた。その他には眼前に運命の二つの潮流を認めた。一つは三千代と自分がこれから流れて行くべき方向を示していた。一つは平岡と自分を是非とも一所に捲^まき込むべき凄^{すさま}じいものであつた。代助はこの間三千代に逢つたなりで、片^{かた}片^{かた}の方は捨ててある。よしこれから三千代の顔を見るにしたらと云うで、——また長い間見ずにいる氣はなかつたが、——二人の向後^{こうご}取るべき方針に就て云えば、当分は一步も現在状態より踏み出す見は持たなかつた。この点に關して、

代助は我ながら明瞭な計画を拵えていなかった。平岡と自分とを運び去るべき将来に就ても、彼はただ何時、何事にでも用意ありと云うだけであつた。無論彼は機を見て、積極的に働らき掛ける心組はあつた。けれども具体的な案は一つも準備しなかつた。あらゆる場合に於て、彼の決して仕損じまいと誓つたのは、凡てを平岡に打ち明けると云う事であつた。従つて平岡と自分とで構成すべき運命の流は黒く恐ろしいものであつた。一つの心配はこの恐ろしい暴風の中から、如何にして三千代を救い得べきかの問題であつた。

最後に彼の周囲を人間のあらん限り包む社会に対しては、彼は何の考も纏めなかつた。事実として、社会は制裁の権を有していた。けれども動機行為の権は全く自己の天分から湧いて出るより外に道はないと信じた。かれはこの点に於て、社会と自分との間には全く交渉のないものと認めて進行する氣であつた。

代助は彼の小さな世界の中心に立つて、彼の世界を斯様に観て、一順その関係比例を頭の中で調べた上、

「善かろう」と云つて、又家を出た。そうして一二丁歩いて、乗り付けの帳場まで来て、奇麗で早そうな奴を掴んで飛び乗つた。何処へ行く当もないのを好加減な町を名指して二時間程ぐるぐる乗り廻して歸つた。

翌日も書齋の中で前日同様、自分の世界の中心に立つて、左右前後を一応隈なく見渡した後、

「宜しい」と云つて外へ出て、用もない所を今度は足に任せてぶらぶら歩いて歸つた。

三日目にも同じ事を繰り返した。が、今度は表へ出るや否や、すぐ江戸川を渡つて、三千代の所へ来た。三千代は二人の間に何事も起らなかったかの様に、

「何故それからいらつしやらなかったの」と聞いた。代助は寧ろその落ち付き払った態度に驚ろかされた。三千代はわざと平岡の机の前に据えてあつた蒲団を代助の前へ押し遣つて、

「何でそんなに、そわそわしていらつしやるの」と無理にその上に坐らした。

一時間ばかり話しているうちに、代助の頭は次第に穏やかになった。車へ乗つて、当もなく乗り回すより、三十分でも好いから、早く此所へ遊びに来れば可かつたと思ひ出した。歸るとき代助は、

「又来ます。大丈夫だから安心していらつしやい」と三千代を慰める様に云つた。三千代はただ微笑しただけであつた。

その夕方始めて父からの報知に接した。その時代助は婆さんの給仕で飯を食っていた。

茶碗を膳の上へ置いて、門野から手紙を受取つて読むと、明朝何時までに御出おいでの事という文句があつた。代助は、

「御役所風だね」と云いながら、わざと端書を門野に見せた。門野は、

「青山の御宅からですか」と叮嚀ていねいに眺めていたが、別に云う事がないものだから、表を引つ繰り返して、

「どうも何ですな。昔の人はやつぱり手蹟てが好い様ですな」と御世辞を置き去りにして出て行つた。婆さんは先刻さつきから暦の話をしきりに為していた。みずのえだのかのとだの、八朔くだの友引だの、爪つめを切る日だの普請ふしんをする日だのと頗すこぶる煩いものであつた。代助は固はつきより上うわの空で聞いていた。婆さんは又門野の職の事を頼んだ。拾五円でも宜いから何方どつかへ出して遣つてくれないかと云つた。代助は自分ながら、どんな返事をしたか分らない位気にも留めなかつた。ただ心のうちでは、門野どころか、この己おれが危あやしい位だと思つた。

食事を終るや否や、本郷から寺尾が来た。代助は門野の顔を見て暫しばらく考えていた。門野は無雜作に、

「断りますか」と聞いた。代助はこの間から珍らしくある会を一二回欠席した。来客も逢わないで済むと思う分は両度程謝絶した。

代助は思い切つて寺尾に逢つた。寺尾は何時もの様に、血眼ちまなこになつて、何か探してゐた。代助はその様子を見て、例の如く皮肉で持ち切る氣にもなれなかつた。翻訳だろうが焼き直しだろうが、生きているうちは何処までも遣る覺悟だから、寺尾の方がまだ自分より社会の兎うらしく見えた。自分がもし失脚して、彼と同様の地位に置かれたら、果してどの位の仕事に堪えるだろうと思つと、代助は自分に対して氣の毒になつた。そうして、自分が遠からず、彼よりも甚ひどく失脚するのは、殆ほとんど未済の事實の如く確だと諦あきらめていたから、彼は侮蔑ぶべつの眼を以て寺尾を迎える訳には行かなかつた。

寺尾は、この間の翻訳を漸ようやくの事で月末までに片付けたら、本屋の方で、都合が悪いから秋まで出版を見合わせると云い出したので、すぐ労力を金に換算する事が出来ずに、困つた結果遣つて来たのであつた。では書肆しよしと契約なしに手を着けたのかと聞くと、全くそうでもないらしい。と云つて、本屋の方がまるで約束を無視した様にも云わない。要するに曖昧あいまいであつた。ただ困つてゐる事だけは事實らしかつた。けれどもこう云う手違に慣れ抜いた寺尾は、別に徳義問題として誰にも不満を抱いてゐる様にも見えなかつた。失敬だとか怪しからんと云うのは、ただ口の先ばかりで、腹の中の屈托くつたくは、全然飯と肉に集注してゐるらしかつた。

代助は氣の毒になって、当座の經濟に幾分の補助を与えた。寺尾は感謝の意を表して歸った。歸る前に、実は本屋からも少しは前借はしたんだが、それは疾とくの昔に使つてしまつたんだと自白した。寺尾の歸つたあとで、代助はああ云うのも一種の人格だと思つた。ただこう樂くろしに活計くわくけいでいたつて決して為なれる訳のものじゃない。今の所謂いわゆる文壇が、ああ云う人格を必要と認めて、自然に産み出した程、今の文壇は悲しむべき状況の下に呻しん吟ぎんしているのではなからうかと考へて茫ぼん乎やりした。

代助はその晩自分の前途をひどく氣に掛けた。もし父から物質的に供給の道を鎖とぎされた時、彼は果して第二の寺尾になり得る決心があるだろうかを疑つた。もし筆を執つて寺尾の真似さえ出来なかつたなら、彼は当然餓死すべきである。もし筆を執らなかつたら、彼は何をする能力があるだろう。

彼は眼を開けて時々蚊張かやの外に置いてある洋燈ランプを眺めた。夜中に燐寸マッチを擦つて烟草たばこを吹かした。寐返ねがえりを何遍も打つた。固もとより寐苦しい程暑い晩ではなかつた。雨が又ざあざあと降つた。代助はこの雨の音で寐付くかと思うと、又雨の音で不意に眼を覺ました。夜は半醒はんせい半睡はんすいのうちに明け離れた。

定刻になつて、代助は出掛けた。足駄穿あしだばきで雨傘を提げて電車に乗つたが、一方の窓が

締め切つてある上に、革紐かわひもにぶら下がっている人が一杯なので、しばらくすると胸がむかついて、頭が重くなつた。睡眠不足が影響したらしく思われるので、手を窮屈に伸ばして、自分の後だけを開け放つた。雨は容赦なく襟から帽子に吹き付けた。二三分の後隣の人の迷惑そうな顔に気が付いて、又元の通りに硝子窓ガラスを上げた。硝子の表側には、弾はじけた雨の珠たまが溜たまつて、往来が多少歪ゆがんで見えた。代助は首から上を振ねじ曲まげて眼を外そと面に着けながら、幾たびか自分の眼を擦こすつた。然しかし何遍擦こつても、世界の恰かつ好こうが少し變つて来たと云う自覺が取れなかつた。硝子を通して斜ななめに遠方を透かして見るときは猶なほそういう感じがした。

弁慶橋で乗り換えてからは、人もまばらに、雨も小降りになつた。頭も樂に濡ぬれた世の中を眺める事が出来た。けれども機嫌の悪い父の顔が、色々な表情を以て彼の腦髓しげきを刺戟しげきした。想像の談話さえ明かに耳に響いた。

玄関を上つて、奥へ通る前に、例の如く一応嫂あによめに逢つた。嫂は、

「鬱陶うつとうしい御天氣じゃありませんか」と愛想よく自分で茶を汲くんでくれた。然し代助は飲む氣にもならなかつた。

「御父さんが待つて御出でしょうから、一寸行つて話をして来ましょう」と立ち掛けた。

嫂は不安らしい顔をして、

「代さん、成ろう事なら、年寄に心配を掛けない様になさいよ。御父さんだって、もう長い事はありませんから」と云った。代助は梅子の口から、こんな陰気な言葉を聞くのは始めてであつた。不意に穴倉へ落ちた様な心持がした。

父は烟草盆を前に控えて、俯向^{うつむ}いていた。代助の足音を聞いても顔を上げなかった。代助は父の前へ出て、叮嚀^{ていねい}に御辞儀をした。定めてむずかしい眼付をされると思ひの外、父は存外穏かなもので、

「降るのに御苦労だった」と労^{いた}わってくれた。

その時始めて気が付いて見ると、父の頬が何時の間にかぐつと瘡^こけていた。元来が肉の多い方だったので、この変化が代助には余計目立って見えた。代助は覚えず、

「どうか為^なさいましたか」と聞いた。

父は親らしい色を一寸顔に動かしただけで、別に代助の心配を物にする様子もなかったが、少^{しばらく}時話しているうちに、

「己^{おれ}も大分年を取つてな」と云い出した。その調子が何時^{いつ}もの父とは全く違っていたので、代助は最前嫂の云った事を愈^{いよいよ}重く見なければならなくなった。

父は年の所為^{せい}で健康の衰えたのを理由として、近々実業界を退く意志のある事を代助に洩らした。けれども今は日露戦争後の商工業膨張の反動を受けて、自分の経営にかかる事業が不景気の極端に達している最中だから、この難関を漕ぎ抜けた上でなくては、無責任の非難を免かれる事が出来ないので、当分^{やむ}已を得ずに辛抱しているより外に仕方がないのだと云う事情を委しく話した。代助は父の言葉を至極^{もつと}尤もだと思った。

父は普通の実業なるものの困難と危険と繁劇と、それ等から生ずる当事者の心の苦痛及び緊張の恐るべきを説いた。最後に地方の大地主の、一見地味であつて、その実自分等よりはずつと鞏固^{きようこ}の基礎を有している事を述べた。そうして、この比較を論拠として、新たに今度の結婚を成立させようと力めた。

「そう云う親類が一軒位あるのは、大変な便利で、かつこの際甚だ必要じゃないか」と云った。代助は、父としては寧ろ^{むし}露骨過ぎるこの政略的結婚の申し出^{いで}に対して、今更驚ろく程、始めから父を買い被^{かぶ}つてはいなかった。最後の会見に、父が従来の仮面を脱いで掛かったのを、寧ろ快よく感じた。彼自身も、こんな意味の結婚を敢^{あえ}てし得る程度の人間だと自ら見積^{みつもつ}ていた。

その上父に対して何時にない同情があつた。その顔、その声、その代助を動かそうとす

る努力、凡てに老後の憐れを認める事が出来た。代助はこれをも、父の策略とは受取り得なかつた。私はどうしても宜う御座いますから、貴方の御都合の好い様に御極めなさいと云いたかつた。

けれども三千代と最後の会見を遂げた今更、父の意に叶う様な当座の孝行は代助には出来かねた。彼は元来が何方付かずの男であつた。誰の命令も文字通りに拝承した事のない代りには、誰の意見にも露に抵抗した試がなかつた。解釈のしようでは、策士の態度とも取れ、優柔の生れ付とも思われる遣口であつた。彼自身さえ、この二つの非難の何れかを聞いた時、そうかも知れないと、腹の中で首を振らぬ訳には行かなかつた。然しその原因の大部分は策略でもなく、優柔でもなく、寧ろ彼に融通の利く兩つの眼が付いていて、双方を一時に見る便宜を有していたからであつた。かれはこの能力の為に、今日まで一匁に物に向つて突進する勇氣を挫かれた。即かず離れず現状に立ち竦んでいる事が屢あつた。この現状維持の外観が、思慮の欠乏から生ずるのでなくて、却つて明白な判断に本いて起ると云う事實は、彼が犯すべからざる敢為の氣象を以て、彼の信ずる所を断行した時に、彼自身にも始めて解つたのである。三千代の場合は、即ちその適例であつた。

彼は三千代の前に告白した己れを、父の前で白紙にしようとは想ひ到らなかつた。同時

に父に対しては、心しんから氣の毒であつた。平生の代助がこの際に執るべき方針は云わずして明らかであつた。三千代との關係を撤回する不便なしに、父に満足を与える為の結婚を承諾するに外ならなかつた。代助はかくして双方を調和する事が出来た。何方どっち付かずに真中へ立つて、煮え切らずに前進する事は容易であつた。けれども、今の彼は、不斷の彼とは趣を異にしていた。再び半身を埒らっがい外ぬきんに挺たつでて、余人と握手するのは既に遅かつた。彼は三千代に対する自己の責任をそれ程深く重いものと信じていた。彼の信念は半ば頭の判断から来た。半ば心の憧憬どうけいから来た。二つのものが大きな濤なみの如ごとくに彼を支配した。彼は平生の自分から生れ變つた様に父の前に立つた。

彼は平生の代助の如く、なるべく口数を利かずに控えていた。父から見れば何時もの代助と異なる所はなかつた。代助の方では却つて父の變つてゐるのに驚ろいた。実はこの間から幾度も会見を謝絶すいされたのも、自分が父の意志に背そむく恐があるから父の方でわざと、延ばしたものと推すいしていた。今日逢つたら、定めて苦い顔をされる事と覺悟を極めていた。ことによれば、頭から叱しかり飛ばされるかも知れないと思つた。代助には寧ろその方が都合が好かつた。三分の一は、父の暴怒に対する自己の反動を、心理的に利用して、きつぱり断ろうと云う下心さえあつた。代助は父の様子、父の言葉遣、父の主意、凡てが予期に反

して、自分の決心を鈍らせる傾向に出たのを心苦しく思った。けれども彼はこの心苦しさにさえ打ち勝つべき決心を蓄えた。

「貴方の仰しやる所は一々御尤もだと思ひますが、私には結婚を承諾する程の勇氣がありませんから、断るより外に仕方がなからうと思ひます」ととうとう云つてしまった。その時父はただ代助の顔を見ていた。良あつて、

「勇氣が要るのかい」と手に持つていた烟管を畳の上に放り出した。代助は膝頭を見詰めて黙つていた。

「当人が氣に入らないのかい」と父が又聞いた。代助は猶返事をしなかった。彼は今まで父に対して己れの四半分も打ち明けてはいなかった。その御蔭で父と平和の關係を漸く持つて来た。けれども三千代の事だけは始めから決して隠す氣はなかった。自分の頭の上に当然落ちかかるべき結果を、策で避ける卑怯が面白くなかったからである。彼はただ自白の期に達していないと考へた。従つて三千代の名はまるで口へは出さなかった。父は最後に、

「じゃ何でも御前の勝手にするさ」と云つて苦い顔をした。

代助も不愉快であつた。然し仕方がないから、礼をして父の前を退がろうとした。とき

に父は呼び留めて、

「己の方でも、もう御前の世話はせんから」と云った。座敷へ歸った時、梅子は待ち構えた様に、

「どうなすつて」と聞いた。代助は答え様もなかった。

十六

翌日あくるひ眼が覚めても代助の耳の底には父の最後の言葉が鳴っていた。彼は前後の事情か

ら、平生以上の重みをその内容に附着しなければならなかった。少なくとも、自分だけでは、父から受ける物質的の供給がもう絶えたものと覚悟する必要があつた。代助の尤も恐るる時期は近づいた。父の機嫌を取り戻すには、今度の結婚を断るにしても、あらゆる結婚に反対してはならなかった。あらゆる結婚に反対しても、父を首肯うなずかせるに足る程の理由を、明白に述べなければならなかった。代助に取つては二つのうち何れも不可能であつた。人生に対する自家のフィロソフィ哲学の根本に触れる問題に就いて、父を欺くあざむのは猶更不可能であつた。代助は昨日の会見を回顧して、凡てが進むべき方向に進んだとしか考え得な

かった。けれども恐ろしかった。自己が自己に自然な因果を發展させながら、その因果の重みを脊中せなかに負しよつて、高い絶壁の端まで押し出された様な心持であつた。

彼は第一の手段として、何か職業を求めなければならぬと思つた。けれども彼の頭の中には職業と云う文字があるだけで、職業その物は体を具そなえて現われて来なかつた。彼は今日まで如何いかなる職業にも興味を有もつていなかった結果として、如何なる職業を想い浮べてみても、ただその上を上滑りに滑つて行くだけで、中に踏み込んで内部から考える事は到底出来なかつた。彼には世間が平たい複雑な色分いろわけの如くに見えた。そうして彼自身は何等の色を帯びていないとしか考えられなかつた。

凡ての職業を見渡した後、彼の眼は漂泊者の上に来て、そこで留まつた。彼は明らかに自分の影を、犬と人の境を迷う乞食こじきの群の中に見出した。生活の墮落は精神の自由を殺す点に於おいて彼の尤も苦痛とする所であつた。彼は自分の肉体に、あらゆる醜穢しゆうえを塗り付けた後、自分の心の状態が如何に落魄らくはくするだろうと考えて、ぞつと身振みぶるいをした。

この落魄のうちに、彼は三千代を引張り廻さなければならなかつた。三千代は精神的に云つて、既に平岡の所有ではなかつた。代助は死に至るまで彼女かのおんなに対して責任を負う積りであつた。けれども相当の地位を有っている人の不実と、零落の極に達した人の親切

とは、結果に於て大した差違はないと今更ながら思われた。死ぬまで三千代に対して責任を負うと云うのは、負う目的があるというまでで、負った事実には決してなれなかった。代助は惘然^{もうぜん}として黒内障^{そこひ}に罹^{かか}った人の如くに自失した。

彼は又三千代を訪ねた。三千代は前日の如く静に落ち着いていた。微笑^{ほほえみ}と光輝^{かがやき}とに満ちていた。春風はゆたかに彼^{かの}女^{おんな}の眉^{まゆ}を吹いた。代助は三千代が己を挙げて自分に信賴している事を知った。その証拠を又眼^まのあたりに見た時、彼は愛憐^{あいれん}の情と氣の毒の念に堪えなかった。そうして自己を惡漢の如くに呵責^{かしゃく}した。思う事は全く云いそびれてしまった。帰るとき、

「又都合して宅^{うち}へ来ませんか」と云った。三千代はええと首肯^{うなず}いて微笑した。代助は身を切られる程酷^{つら}かった。

代助はこの間から三千代を訪問する毎^{ごと}に、不愉快ながら平岡の居ない時を扨^{えら}まなければならなかった。始めはそれをさ程にも思わなかったが、近頃では不愉快と云うよりも寧ろ、行き悪い度^{にく}が日毎に強くなつて来た。その上留守の訪問が重なれば、下女に不審を起させる恐れがあった。氣の所為^せか、茶を運ぶ時にも、妙に疑ぐり深い眼付をして、見られる様でならなかった。然し三千代は全く知らぬ顔をしていた。少なくとも上部^{うわべ}だけは平氣であ

った。

平岡との関係に就ては、無論詳しく尋ねる機会もなかった。たまに一言二言それとなく問を掛けてみても、三千代は寧ろ応じなかった。ただ代助の顔を見れば、見ているその間だけの嬉しさに溺れ尽すのが自然の傾向であるかの如くに思われた。前後を取り囲む黒い雲が、今にも逼つて来はしまいかと云う心配は、陰ではいざ知らず、代助の前には影さえ見せなかった。三千代は元來神経質の女であつた。昨今の態度は、どうしてもこの女の手際ではないと思うと、三千代の周囲の事情が、まだそれ程險惡に近づかない証拠になるよりも、自分の責任が一層重くなつたのだと解釈せざるを得なかった。

「すこし又話したい事があるから来て下さい」と前よりは稍真面目に云つて代助は三千代と別れた。

中二日置いて三千代が来るまで、代助の頭は何等の新しい路を開拓し得なかった。彼の頭の中には職業の二字が大きな楷書で焼き付けられていた。それを押し退けると、物質的供給の杜絶がしきりに踊り狂つた。それが影を隠すと、三千代の未来が凄じく荒れた。彼の頭には不安の旋風が吹き込んだ。三つのものが巴の如く瞬時の休みなく回転した。その結果として、彼の周囲が悉く回転しだした。彼は船に乗った人と一般であつた。回転す

る頭と、回転する世界の中に、依然として落ち付いていた。

青山の宅からは何の消息もなかった。代助は固よりそれを予期していなかった。彼は力めて門野を相手にして他愛ない雑談に耽つた。門野はこの暑さに自分の身体を持ち扱っている位、用のない男であつたから、頗る得意に代助の思う通り口を動かした。それでも話し草臥れると、

「先生、将棋はどうです」などと持ち掛けた。夕方には庭に水を打った。二人共跣足になつて、手桶を一杯ずつ持つて、無分別に其所等を濡らして歩いた。門野が隣の梧桐の天辺まで水にして御目かけると云つて、手桶の底を振り上げる拍子に、滑つて尻持を突いた。白粉草が垣根の傍で花を着けた。手水鉢の蔭に生えた秋海棠の葉が著るしく大きくなつた。梅雨は漸く晴れて、昼は雲の峰の世界となつた。強い日は大きな空を透き通す程焼いて、空一杯の熱を地上に射り付ける天気となつた。

代助は夜に入つて頭の上の星ばかり眺めていた。朝は書斎に這入つた。二三日は朝から蝉の聲が聞える様になつた。風呂場へ行つて、度々頭を冷した。すると門野がもう好い時分だと思つて、

「どうも非常な暑さですな」と云つて、這入つて来た。代助はこう云う上の空の生活を二

日程送った。三日目の日盛ひざかりに、彼は書齋の中から、ぎらぎらする空の色を見詰めて、上から吐き下すほのおの息を嗅いだ時に、非常に恐ろしくなった。それは彼の精神がこの猛烈なる氣候から永久の変化を受けつつあると考えた為であった。

三千代はこの暑あつさを冒して前日の約を履ふんだ。代助は女の声を聞き付けた時、自分で玄関まで飛び出した。三千代は傘をつぼめて、風呂敷包を抱えて、格子こうしの外に立っていた。不斷着のまま宅うちを出たと見えて、質素な白地の浴衣ゆかたの袂たもとから手帛ハンケチを出し掛けた所であった。代助はその姿を一目見た時、運命が三千代の未来を切り抜いて、意地悪く自分の眼の前に持つて来た様に感じた。われ知らず、笑いながら、

「馳かけおち落おちでもしそんな風じやありませんか」と云った。三千代は穩かに、

「でも買物をした序ついででないと上り悪いから」と真面目な答をして、代助の後に跟ついて奥まで這入はいりつて来た。代助はすぐ団扇うちわを出した。照り付けられた所せ為で三千代の頬が心持よく輝きらやいた。何時いつもの疲れた色は何処どこにも見えなかった。眼の中にも若い沢つやが宿とどっていた。

代助は生々したこの美しくしさに、自己の感覚を溺ならして、しばらくは何事も忘れてしまつた。が、やがて、この美しくしさを冥々めいめいの裡うちに打ち崩しつつあるものは自分であると考え出したら悲しくなった。彼は今日もこの美しくしさの一部分を曇くもらす為に三千代を呼んだに

違なかつた。

代助は幾度か己れを語る事を躊躇した。自分の前に、これ程幸福に見える若い女を、眉一筋にしろ心配の為に動かさせるのは、代助から云うと非常な不徳義であつた。もし三千代に対する義務の心が、彼の胸のうちに鋭どく働いていなかったなら、彼はそれから以後の事情を打ち明ける事の代りに、先達ての告白を再び同じ室のうちに繰り返して、単純なる愛の快感の下に、一切を放擲してしまつたかも知れなかつた。

代助は漸くにして思い切つた。

「その後貴方と平岡との関係は別に変りはありませんか」

三千代はこの問を受けた時でも、依然として幸福であつた。

「あつたつて、構わないわ」

「貴方はそれ程僕を信用しているんですか」

「信用していません、こうしていられないじゃありませんか」

代助は目映しそうに、熱い鏡の様な遠い空を眺めた。

「僕にはそれ程信用される資格がなさそうだ」と苦笑しながら答えたが、頭の中は焙炉の如く火照つていた。然し三千代は氣にも掛からなかつたと見えて、何故とも聞き返さな

った。ただ簡単に、

「まあ」とわざとらしく驚ろいて見せた。代助は真面目になった。

「僕は白状するが、実を云うと、平岡君より頼たよりにならない男なんです。買い被かぶつていられると困るから、みんな話してしまおうが」と前置をして、それから自分と父との今日までの関係を詳しく述べた上、

「僕の身分はこれから先どうなるか分らない。少なくとも当分は一人前じゃない。半人前にもなれない。だから」と云い淀よどんだ。

「だから、どうなさるんです」

「だから、僕の思う通り、貴方に対して責任が尽せないだろうと心配しているんです」

「責任つて、どんな責任なの。もつと判然はつきり仰おつしやらなくつちや解わからないわ」

代助は平生へいぜいから物質的狀況に重きを置くの結果、ただ貧苦が愛人の満足に価あたいしないと云う事だけを知っていた。だから富が三千代に対する責任の一つと考えたのみで、それより外に明らかな觀念はまるで持っていなかった。

「徳義上の責任じゃない、物質上の責任です」

「そんなものは欲しくないわ」

「欲しくないと云つたつて、是非必要になるんです。これから先僕が貴方とどんな新らしい關係に移つて行くにしても、物質上の供給が半分は解決者ですよ」

「解決者でも何でも、今更そんな事を氣にしたつて仕方がないわ」

「口ではそうも云えるが、いざと云う場合になると困るのは眼に見えています」
三千代は少し色を変えた。

「今貴方の御父様の御話を伺つてみると、こうなるのは始めから解つてるじゃありませんか。貴方だつて、その位な事は疾うから氣が付いていらつしやる筈だと思ひますわ」

代助は返事が出来なかつた。頭を抑えて、

「少し腦がどうかしているんだ」と独り言の様に云つた。三千代は少し涙ぐんだ。

「もし、それが氣になるなら、私の方はどうでも宜う御座んすから、御父様と仲直りをなすつて、今まで通り御交際になつたら好いじゃありませんか」

代助は急に三千代の手頸を握つてそれを振る様に力を入れて云つた。――

「そんな事を為る氣なら始めから心配をしやしない。ただ氣の毒だから貴方に詫るんです」
「詫まるなんて」と三千代は声を顫わしながら遮つた。「私が原因でそうなつたのに、貴方に詫まらしちや濟まないじゃありませんか」

三千代は声を立てて泣いた。代助は慰撫^{なだ}める様に、

「じゃ我慢しますか」と聞いた。

「我慢はしません。当り前ですもの」

「これから先まだ変化がありますよ」

「ある事は承知しています。どんな変化があつたつて構やしません。私はこの間から、――

――この間から私は、もしもの事があれば、死ぬ積りで覚悟を極めているんですもの」

代助は慄然^{りっぜん}として戦^{おの}いた。

「貴方はこれから先どうしたら好いと云う希望はありませんか」と聞いた。

「希望なんか無いわ。何でも貴方の云う通りになるわ」

「漂泊――」

「漂泊でも好いわ。死ぬと仰しやれば死ぬわ」

代助は又ぞつとした。

「このままでは」

「このままでも構わないわ」

「平岡君は全く気が付いていない様ですか」

「気が付いているかも知れません。けれども私もう度胸を据えているから大丈夫なのよ。だって何時^{いつ}殺されたって好いんですもの」

「そう死ぬの殺されるのと安っぽく云うものじゃない」

「だって、放って置いたって、永く生きられる身体^{からだ}じゃないじゃありませんか」

代助は硬くなって、竦^{すく}むが如く三千代を見詰めた。三千代は歇^{ヒステリ}私^リ的^的里^リの発作に襲われた様に思い切って泣いた。

一仕切^た経つと、発作は次第に収まった。後は例^{いつも}の通り静かな、しとやかな、奥行のある、美しい女になった。眉^{まゆ}のあたりが殊^{こと}に晴々しく見えた。その時代助は、

「僕が自分で平岡君に逢って解決を付けても宜う御座んすか」と聞いた。

「そんな事が出来て」と三千代は驚ろいた様であった。代助は、

「出来る積りです」と確^{しか}り答えた。

「じゃ、どうでも」と三千代が云った。

「そうしましょう。二人が平岡君を欺^{あざむ}いて事をするのは可^よくない様だ。無論事実を能^よく納得出来る様に話すだけです。そうして、僕の悪い所はちゃんと詫まる覚悟です。その結果は僕の思う様に行かないかも知れない。けれどもどう間違^{まちが}ったって、そんな無暗^{むやみ}な事は起

らない様にする積りです。こう中途半端にしていれば、御互も苦痛だし、平岡君に対しても悪い。ただ僕が思い切つてそうすると、あなたが、さぞ平岡君に面目なからうと思つてね。其所^{そこ}が御気の毒なんだが、然し面目ないと云えば、僕だつて面目ないんだから。自分の所為^{しよゐ}に對しては、如何^{いか}に面目なくつても、徳義上の責任を負うのが当然だとすれば、外に何等の利益がないとしても、御互の間に有^{あつ}た事だけは平岡君に話さなければならぬでしょう。その上今の場合はこれからの所置を付ける大事の自白^{なわさら}なんだから、猶更必要になると思います」

「能く解りましたわ。どうせ間違えば死ぬ積りなんですから」

「死ぬなんて。——よし死ぬにしたつて、これから先どの位間があるか——又そんな危険がある位なら、なんで平岡君に僕から話すもんですか」

三千代は又泣き出した。

「じゃ能く詫ります」

代助は日の傾くのを待つて三千代を帰した。然しこの前の時の様に送つては行かなかつた。一時間程書斎の中で蟬の声を聞いて暮した。三千代に逢つて自分の未来を打ち明けてから、気分がさっぱりした。平岡へ手紙を書いて、会見の都合を聞き合せ様として、筆を

持ってみたが、急に責任の重いのが苦になって、拜啓以後を書き続ける勇氣が出なかった。卒然、襯衣シャツ一枚になつて素足で庭へ飛び出した。三千代が帰る時は正体なく午睡ひるねをしていた門野が、

「まだ早いじゃありませんか。日が当たっていますぜ」と云いながら、坊主頭を両手で抑えて縁端えんばなにあらわれた。代助は返事もせず、庭の隅へ潜り込んで竹の落葉を前の方へ掃き出した。門野も己やむを得ず着物を脱いで下りて来た。

狭い庭だけれども、土が乾いているので、たつぷり濡らすには大分骨が折れた。代助は腕が痛いと言つて、好加減にして足を拭ふいて上つた。烟草たばこを吹いて、縁側に休んでいると、門野がその姿を見て、

「先生心臓の鼓動が少々狂やしませんか」と下から調戯からかつた。

晩には門野を連れて、神楽坂の縁日へ出掛けて、秋草を二鉢三鉢買つて来て、露の下りる軒の外へ並べて置いた。夜は深く空は高かった。星の色は濃く繁しげく光った。

代助はその晩わざと雨戸を引かずに寐ねた。無用心と云う恐れが彼の頭には全く無かった。彼は洋燈ランプを消して、蚊帳かやの中に独り寐転びながら、暗い所から暗い空を透かして見た。頭の中には昼の事が鮮かに輝いた。もう二三日のうちには最後の解決が出来ると思つて幾度

か胸を躍らせた。が、そのうち大いなる空と、大いなる夢のうちに、吾知らず吸収された。翌日の朝彼は思い切つて平岡に手紙を出した。ただ、内々で少し話したい事があるが、君の都合を知らせて貰いたい。此方は何時でも差支ない。と書いただけだが、彼はわざとそれを封書にした。状袋の糊を湿めして、赤い切手をとんと張つた時には、愈クライシスに証券を与えた様な気がした。彼は門野に云い付けて、この運命の使を郵便函に投げ込みました。手渡しにする時、少し手先が顫えたが、渡したあとでは却つて茫然として自失した。三年前三千代と平岡の間に立つて幹旋の勞を取つた事を追想するとまるで夢の様であつた。

翌日は平岡の返事を心待に待ち暮らした。その明る日も当にして終日宅にいた。三日四日と経つた。が、平岡からは何の便もなかつた。その中例月の通り、青山へ金を貰いに行くべき日が来た。代助の懷中は甚だ手薄になつた。代助はこの前父に逢つた時以後、もう宅からは補助を受けられないものと覚悟を極めていた。今更平氣な顔をして、のそのそ出掛て行く了見はまるでなかつた。何二カ月や三カ月は、書物か衣類を売り払つてもどうかすると腹の中で高を括つて落ち付いていた。事の落着次第緩くり職業を探すと云う分別もあつた。彼は平生から人のよく口癖にする、人間は容易な事で餓死するものじゃない、ど

うにかなって行くものだと云う半^{はん}諺^{ことわざ}の真理を、経験しない前から信じ出した。

五日目に暑^{あつさ}を冒して、電車へ乗って、平岡の社まで出掛けて行ってみて、平岡は二三日出社しないと云う事が分った。代助は表へ出て薄汚ない編^{へん}輯^{しゅうぎよく}局の窓を見上げながら、足を運ぶ前に、一応電話で聞き合すべき筈だったと思った。先達ての手紙は、果して平岡の手に渡ったかどうか、それさえ疑わしくなった。代助はわざと新聞社宛^{あて}でそれを出したからである。歸りに神田へ廻って、買いつけの古本屋に、売払いたい不用の書物があるから、見に来てくれると頼んだ。

その晩は水を打つ勇氣も失せて、ぼんやり、白い網襦衣を着た門野の姿を眺めていた。

「先生今日は御疲ですか」と門野がバケツを鳴らしながら云った。代助の胸は不安に圧^おさされて、明らかな返事も出なかった。夕食^{ゆうめし}のとき、飯の味は殆^{ほと}んどなかった。呑^のみ込む様に咽喉^{のど}を通して、箸^{はし}を投げた。門野を呼んで、

「君、平岡の所へ行つてね、先達ての手紙は御覧になりましたか。御覧になったら、御返事を願いますって、返事を聞いて来てくれたまえ」と頼んだ。猶要領を得ぬ恐がありそうなので、先達てこれこれの手紙を新聞社の方へ出して置いたのだと云う事まで説明して聞かした。

門野を出した後で、代助は縁側に出て、椅子いすに腰を掛けた。門野の帰った時は、洋燈ランペを吹き消して、暗い中に凝じつとしていた。門野は暗がりで、

「行つて参りました」と挨拶あいさつをした。「平岡さんは御居ででした。手紙は御覧になったそうです。明日の朝行くからという事です」

「そうかい、御苦労さま」と代助は答えた。

「実はもつと早く出るんだつたが、うちに病人が出来たんで遅くなつたから、宜よろしく云つてくれろと云われました」

「病人？」と代助は思わず問い返した。門野は暗い中で、

「ええ、何でも奥さんが御悪い様です」と答えた。門野の着ている白地の浴衣ゆかただけがぼんやり代助の眼に入いつた。夜の明りは二人の顔を照らすには余り不充分であつた。代助は掛けてといる籐椅子いすの肱ひじ掛かけを両手で握つた。

「余程悪いのか」と強く聞いた。

「どうですか、能く分りませんが。何でもそう軽そうでもない様でした。然しかし平岡さんが明日御出おいでになられる位なんだから、大した事じゃないでしょう」

代助は少し安心した。

「何だい。病気は」

「つい聞き落しましたがな」

二人の問答はそれで絶えた。門野は暗い廊下を引き返して、自分の部屋へ這入った。静かに聞いていると、しばらくして、洋燈ランブの蓋かきをホヤに打ぶつける音がした。門野は灯火あかりを点つけたと見えた。

代助は夜の中に猶凝なほとしていた。凝としていながら、胸がわくわくした。握っている肱掛あぶらに、手から膏あぶらが出た。代助は又手を鳴らして門野を呼び出した。門野のぼんやりした白地が又廊下のはずれに現われた。

「まだ暗闇ですな。洋燈ランブを点けますか」と聞いた。代助は洋燈を断つて、もう一度、三代の病氣を尋ねた。看護婦の有無やら、平岡の様子やら、新聞社を休んだのは、細君の病氣の為だか、どうだか、と云う点に至るまで、考えられるだけ問い尽した。けれども門野の答は必ひつきよう竟前と同じ事を繰り返すのみであつた。でなければ、好加減いかげんな当あたずつぽうに過ぎなかつた。それでも、代助には一人で黙っているよりも堪こたえ易やすかつた。

寐る前に門野が夜中投函やちゆうとうかんから手紙を一本出して来た。代助は暗い中でそれを受取つたまま、別に見ようとしなかつた。門野は、

「御宅からの様です、灯火あかりを持って来ましようか」と促うなががす如ごとくに注意した。

代助は始めて洋燈を書斎に入れさして、その下で、状袋の封を切った。手紙は梅子から自分に宛てた可なり長いものであった。――

「この間から奥さんの事で貴方もさぞ御迷惑なすつたろう。此方こつちでも御父様始め兄さんや、私は随分心配をしました。けれどもその甲斐かいもなく先達て御出の時、とうとう御父さんわたくしに断然御断りなすつた御様子、甚だ残念ながら、今では仕方がないと諦あきらめています。けれどもその節御父様は、もう御前の事は構わないから、その積りでいろと御怒りなされた由よし後で承りました。その後あなたが御出にならないのも、全くその為ためじゃなろうかと思つています。例月のものを上げる日にはどうかとも思いましたが、やはり御出にならないので、心配しています。御父さんは打遣うちやつて置けと仰おつしやいます。兄さんは例の通り呑気のんきで、困つたらその内来るだろう。その時親爺おやじによく詫あやまらせるが可いい。もし来ない様だったら、おれの方から行つてよく異見してやると云つています。けれども、結婚の事は三人とももう断念しているんですから、その点では御迷惑になる様な事はありません。尤も御父さんもつとは未だ怒つて御出の様子です。私の考では当分昔の通りになる事は、むずかしいと思ひます。それを考えると、貴方がいらつしやらない方が却かえつて貴方の為に宜いいかも知れません。

ただ心配になるのは月々上げる御金の事です。貴方の事だから、そう急に自分で御金を取る気遣はなかうと思うと、差し当り御困りになるのが眼の前に見える様で、御気の毒で堪りません。で、私の取計らいで例月分を送つて上げるから、御受取の上はこれで来月まで持ち応えていらつしやい。その内には御父さんの御機嫌も直るでしょう。又兄さんからも、そう云つて頂く積りです。私も好い折があれば、御託おわびをして上げます。それまでは今まで通り遠慮していらつしやる方が宜う御座います。……」

まだ後が大分あつたが、女の事だから、大抵は重複に過ぎなかつた。代助は中に這入つていた小切手を引き抜いて、手紙だけをもう一遍よく読み直した上、丁寧むしに元の如くに巻き収めて、無言の感謝を改めて嫂あによめに致した。梅子よりと書いた字は寧ろ拙せつであつた。手紙の体の言文一致なのは、かねて代助の勧めた通りを用いたのであつた。

代助は洋燈ランブの前にある封筒を、猶つくづくと眺めた。古い寿命が又一カ月延びた。晩おそかれ早かれ、自己を新たにする必要のある代助には、嫂の志は難有ありがたいにもせよ、却つて毒になるばかりであつた。ただ平岡と事を決する前は、麵麩パンの為に働らく事を肯うけがわぬ心を持つていたから、嫂の贈物が、この際糧食としてことに彼には貴たつとかつた。

その晩も蚊帳かやへ這入る前にふつと、洋燈ランブを消した。雨戸は門野が立てに來たから、故障

も云わずに、そのままにして置いた。硝子戸ガラスドだから、戸越しにも空は見えた。ただ昨夕ゆうべより暗かった。曇ったのかと思つて、わざわざ縁側まで出て、透かす様にして軒を仰ぐと、光るものが筋を引いて斜めに空を流れた。代助は又蚊帳を捲まくつて這入った。寐付うちわかれないので団扇うちわをはたはた云わせた。

家の事はさのみ氣に掛からなかった。職業もなるがままになれと度胸を据えた。ただ三千代の病氣と、その原因とその結果が、ひどく代助の頭を悩ました。それから平岡との会見の様子も、様々に想像してみた。それも一方ひとかたならず彼の脳髓を刺激した。平岡は明日の朝九時頃あんまり暑くならないうちに來るといふ伝言であつた。代助は固もとより、平岡に向つてどう切り出そうなどと形式的の文句を考える男ではなかった。話す事は始めから極めていて、話す順序はその時の模様次第だから、決して心配にはならなかったが、ただなるべく穩かに自分の思う事が向うに徹する様にしたかつた。それで過度の興奮を忌いんで、一夜の安静を切せつに冀こいつた。なるべく熟睡したいと心掛けて瞼まぶたを合せたが、生憎あやにく眼が冴さえて昨夕ゆうべよりは却つて寐苦しかつた。その内夏の夜がぼうと白み渡つて來た。代助は堪りかねて跳ね起はきた。跣足はだしで庭先へ飛び下りて冷たい露を存分に踏んだ。それから又縁側の籐椅とい子すに倚よつて、日の出を待つてゐるうちに、うとうとした。

門野が寐惚^{ねぼ}け眼^{まなこ}を擦りながら、雨戸を開けに出た時、代助ははつとして、この仮睡^{うたたね}から覺めた。世界の半面はもう赤い日に洗われていた。

「大変御早うがすな」と門野が驚ろいて云った。代助はすぐ風呂場へ行つて水を浴びた。朝飯は食わずに只紅茶を一杯飲んだ。新聞を見たが、殆んど何が書いてあるか解^{わか}らなかった。読むに従つて、読んだ事が群がって消えて行つた。ただ時計の針ばかりが氣になった。平岡が来るまでにはまだ二時間あまりあつた。代助はその間をどうして暮らそうかと思つた。凝^{じつ}としてはいられなかつた。けれども何をして手になかなかつた。せめてこの二時間ぐつと寐込んで、眼を開けて見ると、自分の前に平岡が来ている様にしかつた。

仕舞に何か用事を考え出そうとした。不図机の上に乗せてあつた梅子の封筒が眼に付いた。代助はこれだと思つて、強いて机の前に坐つて、嫂へ謝状を書いた。なるべく叮嚀^{ていねい}に書く積りであつたが、状袋へ入れて宛名まで認^{した}めてしまつて、時計を眺めると、たった十五分程しか経^たつていながつた。代助は席に着いたまま、安からぬ眼を空に据えて、頭の中で何か搜す様に見えた。が、急に起^たつた。

「平岡が来たら、すぐ帰るからつて、少し待たして置いてくれ」と門野に云い置いて表へ出た。強い日が正面から射竦^{いすく}める様な勢で、代助の顔を打った。代助は歩きながら絶えず

眼と眉を動かした。まゆ牛込見附うしごめつけを這入つて、飯田町を抜けて、九段坂下へ出て、昨日寄つた古本屋まで来て、

「昨日不要の本を取りに来てくれと頼んで置いたが、少し都合があつて見合せる事にしたから、その積りで」と断つた。帰りには、暑さが余り酷ひどかったので、電車で飯田橋へ回つて、それから揚場あげばを筋違すじかいに毘沙門前びしゃもんまえへ出た。

家の前には車が一台下りていた。玄関には靴が揃そろえてあつた。代助は門野の注意を待たないで、平岡の来ている事を悟つた。汗を拭ふいて、着物を洗い立ての浴衣に改めて、座敷へ出た。

「いや、御使で」と平岡が云つた。やはり洋服を着て、蒸される様に扇を使った。

「どうも暑い所を」と代助も自おのずから表立た言葉遣をしなければならなかつた。

二人はしばらく時候の話をした。代助はすぐ三千代の様子を聞いてみたかつた。然しそれがどう云うものか聞き悪にくかつた。その内通例の挨拶も済にんでしまった。話は呼び寄せた方から、切り出すのが順当であつた。

「三千代さんは病氣だつてね」

「うん。それで社の方も二三日休ませられた様な訳で。つい君の所へ返事を出すのも忘れ

てしまった」

「そりやどうでも構わないが、三千代さんはそれ程悪いのかい」

平岡は断然たる答を一言葉でなし得なかつた。そう急にどうのこうのという心配もない様だが、決して軽い方ではないという意味を手短かに述べた。

この前暑い盛りに、神楽坂へ買物に出た序に、代助の所へ寄つた明日の朝、三千代は平岡の社へ出掛ける世話をしていながら、突然夫の襟えり飾かざりを持つたまま卒倒した。平岡も驚ろいて、自分の支度はそのままに三千代を介抱した。十分の後三千代はもう大丈夫だから社へ出てくれと云い出した。口元には微笑の影さえ見えた。横にはなつていたが、心配する程の様子もないので、もし悪い様だったら医者を呼ぶ様に、必要があつたら社へ電話を掛ける様に云い置いて平岡は出勤した。その晩は遅く歸つた。三千代は心持が悪いといつて先へ寐ていた。どんな具合かと聞いても、判然はつきりした返事をしなかつた。翌日朝起きて見ると三千代の色いろつや沢が非常に可よくなかつた。平岡は寧ろ驚ろいて医者を迎えた。医者は三千代の心臓を診察して眉をひそめた。卒倒は貧血の為だと云つた。随分強い神経衰弱に罹かかつていると注意した。平岡はそれから社を休んだ。本人は大丈夫だから出てくれろと頼む様に云つたが、平岡は聞かなかつた。看護をしてから二日目の晩に、三千代が涙を流

して、是非詫あやまらなければならぬ事があるから、代助の所へ行つてその訳を聞いてくれると夫に告げた。平岡は始めてそれを聞いた時には、本当にしなかった。脳の加減が悪いのだろうと思つて、好し好しと氣休めを云つて慰めていた。三日目にも同じ願ねがが繰り返された。その時平岡は漸ようやく三千代の言葉に一種の意味を認めた。すると夕方になつて、門野が代助から出した手紙の返事を聞きにわざわざ小石川まで遣やつて来た。

「君の用事と三千代の云う事と何か関係があるのかい」と平岡は不思議そうに代助を見た。平岡の話は先刻さつきから深い感動を代助に与えていたが、突然この思わざる問に來た時、代助はぐつと詰とつた。平岡の問は實に意表に、無邪氣に、代助の胸に応えた。彼は何時いつになく少し赤面して俯向うつむいた。然し再顔ふたたびを上げた時は、平生の通り静かな惡びれない態度を回復していた。

「三千代さんの君に詫まる事と、僕の君に話したい事とは、恐らく大いなる関係があるだろう。或は同じ事おんなかも知れない。僕はどうしても、それを君に話さなければならぬ。話す義務があると思うから話すんだから、今日までの友誼ゆうぎに免じて、快よく僕に僕の義務を果さしてくれ給たまえ」

「何だい。改たまつて」と平岡は始めて眉を正した。

「いや前置をすると言訳らしくなって不可^{いけ}ないから、僕もなるべくなら率直に云ってしまいたいのだが、少し重大な事件だし、それに習慣に反^{きらい}した嫌もある^もので、若し中途で君に激されてしまうと、甚だ困るから、是非仕舞まで君に聞いて貰いたいと思つて」

「まあ何だい。その話と云うのは」

好奇心と共に平岡の顔が益^{ます}真面目^{まじめ}になつた。

「その代り、みんな話した後で、僕はどんな事を君から云われても、やはり大人しく仕舞まで聞く積りだ」

平岡は何にも云わなかつた。ただ眼鏡の奥から大きな眼を代助の上に据えた。外はぎらぎらする日が照り付けて、縁側まで射返したが、二人は殆^{ほと}んど暑さを度外に置いた。

代助は一段声を潜めた。そうして、平岡夫婦が東京へ来てから以来、自分と三千代との関係がどんな変化を受けて、今日に至つたかを、詳しく語り出した。平岡は堅く唇を結んで代助の一語一句に耳を傾けた。代助は凡^{すべ}てを語るに約一時間余を費やした。その間に平岡から四遍程極めて単^{たん}簡^{かん}な質問を受けた。

「ざつとこう云う経過だ」と説明の結末を付けた時、平岡はただ唸^{うな}る様に深い溜^{ため}息^{いき}を以て代助に答えた。代助は非常に酷^{つら}かつた。

「君の立場から見れば、僕は君を裏切りした様に当る。怪しからん友達だと思うだろう。そう思われても一言もない。済まない事になった」

「すると君は自分のした事を悪いと思ってるんだね」

「無論」

「悪いと思いながら今日まで歩を進めて来たんだね」と平岡は重ねて聞いた。語気は前よりも稍切迫していた。

「そうだ。だから、この事に対して、君の僕等に与えようとする制裁は潔よく受ける覚悟だ。今のはただ事実をそのままに話ただけで、君の処分の材料にする考だ」

平岡は答えなかった。しばらくしてから、代助の前へ顔を寄せて云った。

「僕の毀損された名誉が、回復出来る様な手段が、世の中にあり得ると、君は思っているのか」

今度は代助の方が答えなかった。

「法律や社会の制裁は僕には何にもならない」と平岡は又云った。

「すると君は当時者だけのうちで、名誉を回復する手段があるかと聞くんだね」

「そうさ」

「三千代さんの心機を一転して、君を元よりも倍以上に愛させる様にして、その上僕を蛇^だの様に悪^{にく}ませさえすれば幾分^{つくない}か償^なにはなる」

「それが君の手際^{てぎわ}で出来るかい」

「出来ない」と代助は云い切った。

「すると君は悪いと思つてゐる事を今日まで発展^なさして置いて、猶^{なお}その悪いと思う方針によつて、極端まで押して行こうとするのじゃないか」

「矛盾かも知れない。然^{しか}しそれは世間の掟^{おきて}と定めてある夫婦関係と、自然の事実として成り上がった夫婦関係とが一致しなかつたと云う矛盾なのだから仕方がない。僕は世間の掟として、三千代さんの夫たる君に詫^{あや}まる。然し僕の行為その物に対しては矛盾も何も犯していない積りだ」

「じゃ」と平岡は稍声を高めた。「じゃ、僕等二人は世間の掟^{かな}に叶う様な夫婦関係は結べないと云う意見だね」

代助は同情のある氣の毒そうな眼をして平岡を見た。平岡の険しい眉が少し解けた。

「平岡君。世間から云えば、これは男子の面目^{かか}に関わる大事件だ。だから君が自己の權利を維持^{ため}する為に、——故意に維持しようと思わないでも、暗にその心が働いて、自然と

激して来るのは已^{やむ}を得ないが、——けれども、こんな関係の起らない学校時代の君になつて、もう一遍僕の云う事をよく聞いてくれないか」

平岡は何とも云わなかつた。代助も一寸^{ちよつと}控えていた。烟草^{たばこ}を一^{ひとふき}吹吹いた後で、思い切つて、

「君は三千代さんを愛していなかつた」と静かに云つた。

「そりや」

「そりや余計な事だけれども、僕は云わなければならない。今度の事件に就て凡ての解決者はそれだろうと思う」

「君には責任がないのか」

「僕は三千代さんを愛している」

「他^{ひと}の妻^{さい}を愛する権利が君にあるか」

「仕方がない。三千代さんは公然君の所有だ。けれども物件じゃない人間だから、心まで所有する事は誰にも出来ない。本人以外にどんなものが出て来たつて、愛情の増減や方向を命令する訳には行かない。夫の権利は其所^{そこ}までは届きやしない。だから細君の愛を他^{ほか}へ移さない様にするのが、却つて夫の義務だろう」

「よし僕が君の期待する通り三千代を愛していなかった事が事実だとしても」と平岡は強いて己を抑える様に云った。拳こぶしを握にぎっていた。代助は相手の言葉の尽きるのを待った。

「君は三年前ぜんぜんの事を覚えているだろう」と平岡は又句を更かえた。

「三年前ぜんぜんは君が三千代さんと結婚した時だ」

「そうだ。その時の記憶が君の頭の中に残っているか」

代助の頭は急に三年前に飛び返った。当時の記憶が、闇を回めぐる松明たいまつの如ごとく輝いた。

「三千代を僕に周旋しようと云い出したものは君だ」

「貰もらいたいと云う意志を僕に打ち明けたものは君だ」

「それは僕だつて忘れやしない。今に至るまで君の厚意を感謝している」

平岡はこう云つて、しばらく冥めい想そうしていた。

「二人で、夜上野を抜けて谷中やなかへ下りる時だった。雨上りで谷中の下は道が悪かった。博

物館の前から話しつづけて、あの橋の所まで来た時、君は僕の為に泣いてくれた」

代助は黙然としていた。

「僕はその時程朋友ほうゆうを難有ありがたいと思つた事はない。嬉うれしくつてその晩は少しも寐ねられなかつた。月のある晩だったので、月の消えるまで起きていた」

「僕もあの時は愉快だった」と代助が夢の様に云った。それを平岡は打ち切る勢で遮った。

「君は何だつて、あの時僕の為に泣いてくれたのだ。なんだつて、僕の為に三千代を周旋しようと思つたのだ。今日の様な事を引き起す位なら、何故あの時、ふんと云つたなり放つて置いてくれなかつたのだ。僕は君からこれ程深刻な復讐を取られる程、君に向つて悪い事をした覚がないじゃないか」

平岡は声を顫わした。代助の蒼い額に汗の珠が溜つた。そうして訴える如くに云つた。

「平岡、僕は君より前から三千代さんを愛していたのだよ」

平岡は茫然として、代助の苦痛の色を眺めた。

「その時の僕は、今の僕でなかつた。君から話を聞いた時、僕の未来を犠牲にしても、君の望みを叶えるのが、友達の本分だと思つた。それが悪かつた。今位頭が熟していれば、まだ考え様があつたのだが、惜しい事に若かつたものだから、余りに自然を輕蔑し過ぎた。僕はあの時の事を思つては、非常な後悔の念に襲われている。自分の為ばかりじゃない。實際君の為に後悔している。僕が君に対して真に濟まないと思うのは、今度の事件より寧ろあの時僕がなまじいに遣り遂げた義侠心だ。君、どうぞ勘弁してくれ。僕はこの

通り自然に復讐かたきを取られて、君の前に手を突いて詫あやまっている」

代助は涙を膝ひざの上に零こぼした。平岡の眼鏡が曇った。

「どうも運命だから仕方がない」

平岡は呻うめ吟く様な声を出した。二人は漸く顔を見合せた。

「善後策に就て君の考があるなら聞こう」

「僕は君の前に詫こつちまつている人間だ。此方から先へそんな事を云い出す権利はない。君の考えから聞くのが順だ」と代助が云った。

「僕には何にもない」と平岡は頭を抑えていた。

「では云う。三千代さんをくれないか」と思い切った調子に出た。

平岡は頭から手を離して、肱ひじを棒の様に洋卓テーブルの上に倒した。同時に、

「うん遣ろう」と云った。そうして代助が返事をし得ないうちに、又繰り返した。

「遣る。遣るが、今は遣れない。僕は君の推察通りそれ程三千代を愛していなかったかも知れない。けれども悪にくんじやいなかった。三千代は今病氣だ。しかも余り軽い方じゃない。寐いている病人を君に遣るのは厭いやだ。病氣が癒なおるまで君に遣れないとすれば、それまでは僕が夫だから、夫として看護する責任がある」

「僕は君に詫つた。三千代さんも君に詫まつている。君から云えば二人とも、不埒な奴には相違ないが、——幾何詫まつても勘弁出来んかも知れないが、——何しろ病氣をして寐ているんだから」

「それは分つている。本人の病氣に付け込んで僕が意趣晴らしに、虐待するとでも思つてゐるんだろうが、僕だって、まさか」

代助は平岡の言葉を信じた。そうして腹の中で平岡に感謝した。平岡は次にこう云つた。「僕は今日の事がある以上は、世間的の夫の立場からして、もう君と交際する訳には行かない。今日限り絶交するからそう思つてくれたまえ」

「仕方がない」と代助は首を垂れた。

「三千代の病氣は今云う通り軽い方じゃない。この先どんな変化がないとも限らない。君も心配だろう。然し絶交した以上は已を得ない。僕の在不在に係わらず、宅へ出入りする事だけは遠慮して貰いたい」

「承知した」と代助はよろめく様に云つた。その頬は益蒼かつた。平岡は立ち上がった。

「君、もう五分ばかり坐つてくれ」と代助が頼んだ。平岡は席に着いたまま無言でいた。

「三千代さんの病氣は、急に危険な虞でもありそうなのかい」

「さあ」

「それだけ教えてくれないか」

「まあ、そう心配しないでも可いだろう」

平岡は暗い調子で、地に息を吐く様に答えた。代助は堪えられない思いがした。

「もしだね。もし万一の事がありそうだったら、その前にたった一遍だけで可いから、逢^あわしてくれないか。外には決して何も頼まない。ただそれだけだ。それだけをどうか承知してくれたまえ」

平岡は口を結んだなり、容易に返事をしなかった。代助は苦痛の遣り所がなくて、両手の掌^{たなごころ}を、垢^{あか}の縋^よれる程揉^もんだ。

「それはまあその時の場合にしよう」と平岡が重そうに答えた。

「じゃ、時々病人の様子を聞きに遣つても可いかね」

「それは困るよ。君と僕とは何にも関係がないんだから。僕はこれから先、君と交渉があれば、三千代を引き渡す時だけだと思つてゐるんだから」

代助は電流に感じた如く椅子^{いす}の上で飛び上がった。

「あつ。解^{わか}つた。三千代さんの死骸^{しかい}だけを僕に見せる積りなんだ。それは苛^{ひど}い。それは残

酷だ」

代助は洋卓^{テーブル}の縁^{ふち}を回って、平岡に近づいた。右の手で平岡の脊^せ広^{びろ}の肩を抑えて、前後に揺^ゆりながら、

「苛い、苛い」と云った。

平岡は代助の眼のうちに狂える恐ろしい光を見出^{みいだ}した。肩を揺られながら、立ち上がった。

「そんな事があるものか」と云って代助の手を抑えた。二人は魔に憑^つかれた様な顔をして互を見た。

「落ち付かなくつちや不可^{いけ}ない」と平岡が云った。

「落ち付いている」と代助が答えた。けれどもその言葉は喘^{あえ}ぐ息の間を苦しそうに洩^もれて出た。

暫^{しば}らくして発作の反動が来た。代助は己れを支うる力を用い尽した人の様に、又椅子に腰を卸した。そうして両手で顔を抑えた。

代助は夜の十時過になつて、こつそり家を出た。

「今から何方へ」と驚ろいた門野に、

「何一寸」と曖昧な答をして、寺町の通りまで来た。暑い時分の事なので、町はまだ宵

の口であつた。浴衣を着た人が幾人となく代助の前後を通つた。代助にはそれが唯動くも

のしか見えなかつた。左右の店は悉く明るかつた。代助は眩しうに、電気燈の少ない

横町へ曲つた。江戸川の縁へ出た時、暗い風が微かに吹いた。黒い桜の葉が少し動いた。

橋の上に立つて、欄干から下を見下していたものが二人あつた。金剛寺坂でも誰にも逢わ

なかつた。岩崎家の高い石垣が左右から細い坂道を塞いでいた。

平岡の住んでいる町は、猶静かであつた。大抵な家は灯影を洩らさなかつた。向うから

来た一台の空車の輪の音が胸を躍らす様に響いた。代助は平岡の家の塀際まで来て

留つた。身を寄せて中を窺うと、中は暗かつた。立て切つた門の上に、軒燈が空しく標札

を照らしていた。軒燈の硝子に守宮の影が斜めに映つた。

代助は今朝も此所へ来た。午からも町内を彷徨いた。下女が買物にでも出る所を捕ま

て、三千代の容体を聞こうかと思つた。然し下女は遂に出て来なかつた。平岡の影も見え

なかった。塀の傍そばに寄つて耳を澄ましても、それらしい人声は聞えなかった。医者を突き留めて、詳しい様子を探ろうと思つたが、医者らしい車は平岡の門前には留らなかつた。そのうち、強い日に射付けられた頭が、海のように動き始めた。立ち留まっていると、倒れそうになつた。歩き出すと、大地が大きな波紋を描いた。代助は苦しさを忍んで這う様はに家へ歸つた。夕食ゆうめしも食わずに倒れたなり動かずにいた。その時恐るべき日は漸く落ようやちて、夜が次第に星の色を濃くした。代助は暗さと涼しさのうちに始めて蘇よみがえ生つた。そうして頭を露に打たせながら、又三千代のいる所まで遣つて來たのである。

代助は三千代の門前を二三度行つたり來たりした。軒燈の下へ來るたびに立ち留まつて、耳を澄ました。五分乃至十分は凝じつとしていた。しかし家の中の様子はまるで分らなかつた。凡すべてが寂しんとしていた。

代助が軒燈の下へ來て立ち留まるたびに、守宮が軒燈の硝子にぴたりと身体からだを貼はり付けていた。黒い影は斜はすに映つたまま何時いつでも動かなかつた。

代助は守宮に氣が付く毎ごとに厭いやな心持がした。その動かない姿が妙に氣に掛つた。彼の精神は鋭さの余りから來る迷信に陥つた。三千代は危険だと想像した。三千代は今苦しみつつあると想像した。三千代は今死につつあると想像した。三千代は死ぬ前に、もう一遍自

分に逢いたがつて、死に切れずに息を偷ぬすんで生きていると想像した。代助は拳を固めて、割れる程平岡の門を敲たたかずにはいられなくなつた。忽たちまち自分は平岡のものに指さえ触れる権利がない人間だと云う事に気が付いた。代助は恐ろしさの余り馳かけ出した。静かな小路の中に、自分の足音だけが高く響いた。代助は馳かけながら猶恐ろしくなつた。足を緩ゆるめた時は、非常に呼息いきが苦しくなつた。

道端に石段があつた。代助は半ば夢中で其所へ腰を掛けたなり、額を手で抑えて、固くなつた。しばらくして、閉ふさいだ眼を開けて見ると、大きな黒い門があつた。門の上から太い松が生垣の外まで枝を張つていた。代助は寺の這入はいり口に休んでいた。

彼は立ち上がった。惘然もうぜんとして又歩き出した。少し来て、再び平岡の小路へ這入はいつた。夢の様に軒燈の前で立留まつた。守宮はまだ一つ所に映つていた。代助は深い溜息ためいきを洩らして遂に小石川を南側へ降りた。

その晩は火の様に、熱くて赤い旋風つむじの中に、頭が永久に回転した。代助は死力を尽して、旋風の中から逃れ出ようと争つた。けれども彼の頭は毫ごうも彼の命令に応じなかつた。木の葉の如ごとく、遲疑する様子もなく、くるりくるりと風ほのおに巻かれて行つた。

翌日あくるひは又燬やけ付く様に日が高く出た。外は猛烈な光で一面にいらいらし始めた。代助

は我慢して八時過に漸く起きた。起きるや否や眼がぐらついた。平生の如く水を浴びて、書齋へ這入って凝と竦んだ。

所へ門野が来て、御客さまですと知らせたなり、入口に立って、驚ろいた様に代助を見た。代助は返事をするのも退儀であつた。客は誰だと聞き返しもせず、手に支えたままの顔を、半分ばかり門野の方へ向き易えた。その時客の足音が縁側にして、案内も待たずに兄の誠吾が這入つて来た。

「やあ、此方へ」と席を勧めたのが代助にはようようであつた。誠吾は席に着くや否や、扇子を出して、上布の襟を開く様に、風を送つた。この暑さに脂肪が焼けて苦しいと見えて、荒い息遣をした。

「暑いな」と云つた。

「御宅でも別に御変りもありませんか」と代助は、さも疲れ果てた人の如くに尋ねた。二人は少時例の通りの世間話をした。代助の調子態度は固より尋常ではなかつた。けれども兄は決してどうしたとも聞かなかつた。話の切れ目へ来た時、

「今日は実は」と云いながら、懐へ手を入れて、一通の手紙を取り出した。

「実は御前に少し聞きたい事があつて来たんだがね」と封筒の裏を代助の方へ向けて、

「この男を知ってるかい」と聞いた。其所^{そこ}には平岡の宿所姓名が自筆で書いてあった。

「知ってます」と代助は殆^{ほと}んど器械的に答えた。

「元、御前の同級生だつて云うが、本当か」

「そうです」

「この男の細君も知ってるのかい」

「知っています」

兄は又扇を取り上げて、二三度はちぱちと鳴らした。それから、少し前へ乗り出す様に、声を一段落した。

「この男の細君と、御前が何か関係があるのかい」

代助は始めから万事を隠す気はなかった。けれどもこう単^{たん}簡^{かん}に聞かれたときに、どうしてこの複雑な経過を、一言^{いちげん}で答え得るだろうと思うと、返事は容易に口へは出なかった。兄は封筒の中から、手紙を取り出した。それを四五寸ばかり捲^まき返して、

「実は平岡と云う人が、こう云う手紙を御父さんの所へ宛^{あて}て寄こしたんだがね。——読んでみるか」と云つて、代助に渡した。代助は黙つて手紙を受取つて、読み始めた。兄は凝と代助の額の所を見詰めていた。

手紙は細かい字で書いてあつた。一行二行と読むうちに、読み終つた分が、代助の手先から長く垂れた。それが二尺余あまりになつても、まだ尽きる気色はなかつた。代助の眼はちらちらした。頭が鉄の様に重かつた。代助は強いても仕舞まで読み通さなければならぬと考へた。総身そうしんが名状しがたい圧迫を受けて、腋わきの下から汗が流れた。漸く結末へ来た時は、手に持った手紙を巻き納める勇氣もなかつた。手紙は広げられたまま洋卓テーブルの上に横わつた。

「其所そこに書いてある事は本当なのかい」と兄が低い声で聞いた。代助はただ、「本当です」と答へた。兄は打衝シヨックを受けた人の様に一寸扇の音を留とどめた。しばらくは二人とも口を聞き得なかつた。良やあつて兄が、

「まあ、どう云う了見で、そんな馬鹿な事をしたのだ」と呆あきれた調子で云つた。代助は依然として、口を開かなかつた。

「どんな女だつて、貰もらおうと思へば、いくらでも貰えるじゃないか」と兄がまた云つた。代助はそれでも猶黙つていた。三度目に兄がこう云つた。――

「御前だつて満更道楽をした事のない人間でもあるまい。こんな不始末を仕出かす位なら、今まで折角金を使った甲斐かいがないじゃないか」

代助は今更兄に向つて、自分の立場を説明する勇氣もなかった。彼はついこの間まで全く兄と同意見であつたのである。

「姉さんは泣いているぜ」と兄が云つた。

「そうですか」と代助は夢の様に答えた。

「御父さんは怒っている」

代助は答をしなかつた。ただ遠い所を見る眼をして、兄を眺めていた。

「御前は平生から能く分らない男だつた。それでも、いつか分る時機が来るだろうと思つて今日まで交際つていた。然し今度と云う今度は、全く分らない人間だと、おれも諦めてしまつた。世の中に分らない人間程危険なものはない。何を為るんだか、何を考へているんだか安心が出来ない。御前はそれが自分の勝手だから可からうが、御父さんやおれの社会上の地位を思つてみる。御前だつて家族の名誉と云う觀念は有っているだろう」

兄の言葉は、代助の耳を掠めて外へ零れた。彼はただ全身に苦痛を感じた。けれども兄の前に良心の鞭撻を蒙る程動揺してはいなかつた。凡てを都合よく弁解して、世間的の兄から、今更同情を得ようと云う芝居氣は固より起らなかつた。彼は彼の頭の中に、彼自身に正当な道を歩んだという自信があつた。彼はそれで満足であつた。その満足を理解し

てくれるものは三千代だけであつた。三千代以外には、父も兄も社会も人間も悉く敵であつた。彼等は赫々たる炎火の裡に、二人を包んで焼き殺そうとしている。代助は無言のまま、三千代と抱き合つて、この風の風に早く己れを焼き尽すのを、この上もない本望とした。彼は兄には何の答もしなかつた。重い頭を支えて石の様に動かなかつた。

「代助」と兄が呼んだ。「今日はおれは御父さんの使に來たのだ。御前はこの間から家へ寄り付かない様になつている。平生なら御父さんが呼び付けて聞き糺す所だけれども、今日は顔を見るのが厭だから、此方から行つて実否を確めて来いと云う訳で來たのだ。それで——もし本人に弁解があるなら弁解を聞かし。又弁解も何もない、平岡の云う所が一々根拠のある事実なら、——御父さんはこう云われるのだ。——もう生涯代助には逢わない。何処へ行つて、何をしようと当人の勝手だ。その代り、以來子としても取り扱わない。又親とも思つてくれるな。——尤もの事だ。そこで今御前の話を聞いてみると、平岡の手紙には嘘は一つも書いてないんだから仕方がない。その上御前は、この事に就て後悔もしなければ、謝罪もしない様に見受けられる。それじゃ、おれだつて、歸つて御父さんに取り成し様がない。御父さんから云われた通りをそのまま御前に伝えて歸るだけの事だ。好いか。御父さんの云われる事は分つたか」

「よく分りました」と代助は簡明に答えた。

「貴様は馬鹿だ」と兄が大きな声を出した。代助は俯向いたまま顔を上げなかった。

「愚図だ」と兄が又云った。「不断は人並以上に減らず口を敲く癖に、いざと云う場合には、まるで唾の様に黙っている。そうして、陰で親の名誉に関わる様な悪戯をしている。今日まで何の為に教育を受けたのだ」

兄は洋卓テーブルの上の手紙を取って自分で巻き始めた。静かな部屋の中に、半切はんぎれの音がかさかさ鳴った。兄はそれを元の如くに封筒に納めて懷中した。

「じゃ帰るよ」と今度は普通の調子で云った。代助は叮嚀ていねいに挨拶あいさつをした。兄は、
「おれも、もう逢わんから」と云い捨てて玄關に出た。

兄の去った後、代助はしばらく元のままじつと動かずにいた。門野が茶器を取り片付けに来た時、急に立ち上がって、

「門野さん。僕は一寸職業ちよつとを探して来る」と云うや否や、鳥打帽を被かぶって、傘も指さずに日盛りの表へ飛び出した。

代助は暑い中を馳けないうばかりに、急ぎ足に歩いた。日は代助の頭の上から真直に射下した。乾いた埃ほこりが、火の粉の様に彼の素足を包んだ。彼はじりじりと焦る心持がした。

「焦る焦る」と歩きながら口の内で云った。

飯田橋へ来て電車に乗った。電車は真直に走り出した。代助は車のなかで、

「ああ動く。世の中が動く」と傍はたの人に聞える様に云った。彼の頭は電車の速力を以て回転し出した。回転するに従つて火の様に焙ほてつて来た。これで半日乗り続けたら焼き尽す事が出来るだろうと思つた。

忽たちまち赤い郵便筒ゆうびんづつが眼に付いた。するとその赤い色が忽ち代助の頭の中に飛び込んで、

くるくると回転し始めた。傘屋の看板に、赤い蝙蝠傘こうもりがさを四つ重ねて高く釣るしてあつた。

傘の色が、又代助の頭に飛び込んで、くるくると渦を捲いた。四つ角に、大きい真赤な風船玉を売つてゐるものがあつた。電車が急に角を曲るとき、風船玉は追おっかけ懸て来て、代助の

頭に飛び付いた。小包郵便を載せた赤い車はつと電車と摺すれ違ふとき、又代助の頭の中

に吸い込まれた。烟草屋たばこやの暖簾のれんが赤かつた。売出しの旗も赤かつた。電柱が赤かつた。赤

ペンキの看板がそれから、それへと続いた。仕舞には世の中が真赤になった。そうして、

代助の頭を中心としてくるりくるりとほのおの息を吹いて回転した。代助は自分の頭が焼け尽きるまで電車に乗つて行ゆこうと決心した。

青空文庫情報

底本：「それから」新潮文庫、新潮社

1948（昭和23）年11月30日発行

2010（平成22）年8月25日136刷改版

2013（平成25）年2月15日141刷

初出：「東京朝日新聞」、「大阪朝日新聞」

1909（明治42）年6月27日～10月4日

入力：富田倫生

校正：松永佳代

2013年6月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

それから

夏目漱石

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>